仙台市文化財調査報告書第255集

中在家南遺跡
（第3・4次）
押口遺跡
（第3次）

発掘調査報告書

2002年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第255集

中在家南遺跡
（第3・4次）
押口遺跡
（第3次）

発掘調査報告書

2002年3月

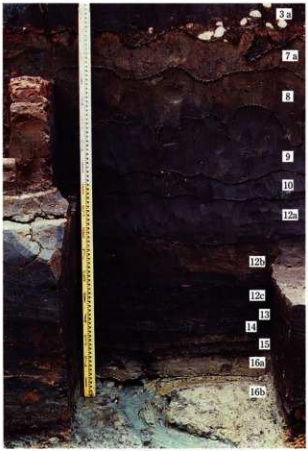
仙台市教育委員会

1　第３次調査区北部発見遺構（南より）－白線が基盤層と河川堆積層（16層）との境界－

2　第３次調査区の基盤層と河川堆積層との境界断面（西より）
－左側が基盤層、右側が泥土堆積以前の堆積層（16層）－

4　第４次調査区河川跡横断面（西より）－白色の堆積層が「十和田a火山灰」－

3　第４次調査区全景（西より）－左側下部の斜面が河川跡の南岸　樹根が残る－



5　第４次調査区河川跡土層断面（北壁中央）

Ⅱ　中在家南遺跡第４次調査区遺物出土状況

1　河川跡12層遺物出土状況ー東半部（北より）

2　河川跡12層遺物出土状況ー西半部（北より）

3　12層出土柄付き直柄平鍬L－61（南西より）

5　河川跡14・15層遺物出土状況（東より）

4　12層出土四脚盤L－41（南西より）

6　14層竪杵L－71・15層打棒L－77（南東より）

1　北区全景（東より）

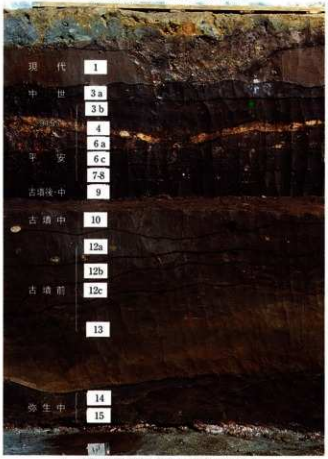
2　北区西部検出河川跡（南東より）

3　北区北壁西部土層断面（南西より）

4　北区河川跡堆積土層断面ー調査区西壁ー

5　南区９層下部～10層遺物出土状況（東より）

6　南区全景（南より）



7　南区河川跡堆積土層断面ー調査区北壁中央ー

1　器台形土師器（古墳時代前期：中在家南遺跡第４次調査）

6　漆器鉢（弥生時代中期：中在家南遺跡第４次調査）

2　斧膝柄（古墳時代前期：押口遺跡第３次調査）

3　一木二又鍬（古墳時代前期：押口遺跡第３次調査）

7　髪杵（弥生時代中期：中在家南遺跡第４次調査）

4　直柄平鍬（古墳時代前期：押口遺跡第３次調査）

5　四脚盤（古墳時代前期：中在家南遺跡第４次調査）

序　文

仙台市には約800ヵ所の遺跡があります。これらの遺跡では、発掘調査が行われる度に、仙台の地に暮らした先人の様々な足跡が明らかになり、わたしたちに悠久の歴史の追体験をさせてくれます。そして、教科書や歴史書の写真で見た世界が、足元の大地に眠っていたことに驚かされます。遺跡から発見された生の遺構や遺物に、数百・数千年前の時を隔てて接したとき、写真などとは異なる感動を得ることができます。このように私たちの生活に、豊かな歴史的感動を与えてくれる遺跡は、一度壊されたら二度と元に戻すことはできません。だからこそ、遺跡を先人の残した文化遺産として護り、あるいは活用できるようにして未来に伝えていくことは、わたしたちにとって大切なことと考えております。

今回発掘調査が行われた中在家南遺跡と押口遺跡からは、以前に行われた調査と同様に河川跡が発見されました。河川跡からは、木製品などをはじめとする多くの遺物が出土しており、その中には市内・県内で新発見の木製品も含まれております。これらの遺物は、考古学研究の貴重な資料となるばかりでなく、やがて展示に供された際には、歴史資料として仙台市内外の多くの方々に感動を与えてくれるものと期待されます。

仙台市教育委員会では、今後とも、各方面のご理解とご協力を得ながら、遺跡をはじめとする様々な文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力くださいました多くの方々に深く感謝申し上げるとともに、本書が研究者のみならず市民の皆様に活用されることを期待いたします。

平成14年3月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　言

1　本書は、宮城県仙台市若林区荒井所在の中在家南遺跡第３次・第４次調査、及び押口遺跡第３次調査の発掘調査報告書である。

2　両遺跡の発掘調査は、「仙台市荒井土地区画整理事業」に伴う仙台市関連事業として実施された。

3　本書の執筆・編集は、仙台市教育局文化財課の工藤信一郎・加藤徳明と協議のうえ工藤哲司が担当した。

4　出土木製品の樹種同定は東北大学理学部鈴木三男氏と農水省森林総合研究所能城修一氏にお願いした。

5　石器・石製品の石材の鑑定は、東北大学理学部石川賢一氏にお願いした。

6　調査と報告書の作成にあたり次の方々と機関のご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
東北大学文学部須藤　隆氏・愛媛大学法文学部田崎博之氏・古代の森研究舎吉川昌伸氏・同吉川純子氏

7　本調査に関わる資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

2　本文図版等で使用した方位は、全て真北で統一してある。

3　図中の座標値は、平面座標系Ｘを基準とし、単位はkmである。

4　標高値は、海抜高度（Ｔ．Ｐ）を示している。

5　調査及び報告の作成にあたり、下記の遺構略号を使用した。
ＳＢ：建物　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　ＳＸ：その他の遺構　Ｐ：ピット　ＳＲ：河川跡

6　遺構図における は、撹乱の範囲を示している。

7　土層断面図における網目は、灰白色火山灰を示している。

8　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、現在、「十和田ａ（To－ａ）」と同定されており降下年代は西暦915年初夏とされている。（町田：1981・1996）

9　河川跡の遺物出土状況図においては、出土遺物の位置を次の略号で示した。
土器：●　木製品：■　材：□　杭：○　石器・石製品：★

10　遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｃ：非ロクロ土師器　Ｄ：ロクロ使用土師器　Ｅ：須恵器　Ｆ：丸瓦
Ｇ：平瓦　Ｉ：陶器　Ｊ：磁器　Ｋ：石器　Ｌ：木製品・材・杭　Ｎ：金属製品　Ｏ：自然遺物

11　土師器内面の網目は黒色処理されていることを示している。

12　礫石器に関わる網目の範囲は、磨り面の範囲を示している。

13　本書では、完成品・未製品の木製品及び建築材を含む各種加工材及び杭材の総称として「木製品類」という呼称を用いた。

14　木製品類の分類は、中在家南遺跡・押口遺跡第１次調査報告書（仙台市文化財調査報告書第213集「中在家南遺跡他」仙台市教育委員会1996）に準拠した。

15　木製品・材・杭の実測図においては、表面の状況を下記のとおり表示してある。
割り面（割れ面）：　樹皮残存：　焦げ面：　破損・腐食部分：

16　木製品類の断面における弧線及び同心円は、年輪の方向を示しているが、年輪の間隔を示すものではない。

17　遺物観察表の（　）内の法量は、残存値を示している。

目　次

巻頭写真
序　　文
例言・凡例

第1章　中在家南遺跡と押口遺跡の概要
第1節　立地と環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 1
第2節　過去の調査概要 …… 5
1　中在家南遺跡と過去の調査成果 …… 5
2　押口遺跡と過去の調査成果 …… 7
第3節調査経過と調査要項 …… 7
1　調査に至る経緯と調査経過 …… 7
2　調査要項 …… 8

第2章　中在家南遺跡第3次調査の概要
第1節　発見遺構の概要と基本層位 …… 9
1　第3次調査区の位置 …… 9
2　基本層位 …… 9
3　発見遺構の概要 …… 10
第2節　河川跡の堆積土と出土遺物 …… 13
1　河川跡の基本層位 …… 13
2　主な層の状況と出土遺物 …… 20

第3章　中在家南遺跡第4次調査の概要
第1節　発見遺構の概要と基本層位 …… 23
1　第4次調査区の位置 …… 23
2　発見遺構の概要 …… 23
第2節　河川跡の堆積土と出土遺物 …… 27
1　河川跡の基本層位 …… 27
2　各層の状況と出土遺物 …… 27

第4章　押口遺跡第3次調査北区の概要
第1節　発見遺構の概要と基本層位 …… 57
1　北区の位置 …… 57
2　基本層位 …… 57
3　発見遺構の概要 …… 57

第2節　河川跡の堆積土と出土遺物 …… 65
1　河川跡の基本層位 …… 65
2　各層の堆積状況と出土遺物 …… 65

第5章　押口遺跡第3次調査南区の概要
第1節　発見遺構の概要と基本層位 …… 88
1　南区の位置 …… 88
2　発見遺構の概要 …… 88
第2節　河川跡の堆積土と出土遺物 …… 91
1　河川跡の基本層位 …… 91
2　各層の状況と出土遺物 …… 92

第6章　自然科学的分析
第1節　仙台市中在家南遺跡・押口遺跡出土木製品の樹種 …… 110
同定された樹種 …… 110
中在家遺跡群の利用木材の樹種組成 …… 117
第2節　弥生時代中期の漆器鉢の漆断面 …… 127

第7章　調査成果のまとめ
1　中在家南遺跡・押口遺跡の調査遺構 …… 128
2　中在家南遺跡・押口遺跡の出土遺物 …… 130

写真図版目次

図版1　中在家南遺跡第3次調査区　北半部1 …… 139
図版2　中在家南遺跡第3次調査区　北半部2 …… 140
図版3　中在家南遺跡第3次調査区　南半部1 …… 141
図版4　中在家南遺跡第3次調査区　南半部2 …… 142
図版5　中在家南遺跡第4次調査区1 …… 143
図版6　中在家南遺跡第4次調査区2 …… 144
図版7　中在家南遺跡第4次調査区3 …… 145
図版8　中在家南遺跡第4次調査区4 …… 146
図版9　中在家南遺跡第4次調査区5 …… 147
図版10　中在家南遺跡第4次調査区6 …… 148
図版11　中在家南遺跡第4次調査区7 …… 149
図版12　中在家南遺跡第4次調査区8 …… 150
図版13　押口遺跡第3次調査　北区1 …… 151
図版14　押口遺跡第3次調査　北区2 …… 152
図版15　押口遺跡第3次調査　北区3 …… 153
図版16　押口遺跡第3次調査　北区4 …… 154
図版17　押口遺跡第3次調査　北区5 …… 155
図版18　押口遺跡第3次調査　北区6 …… 156
図版19　押口遺跡第3次調査　北区7 …… 157
図版20　押口遺跡第3次調査　北区8 …… 158
図版21　押口遺跡第3次調査　南区1 …… 159
図版22　押口遺跡第3次調査　南区2 …… 160
図版23　押口遺跡第3次調査　南区3 …… 161
図版24　押口遺跡第3次調査　南区4 …… 162
図版25　押口遺跡第3次調査　南区5 …… 163
図版26　押口遺跡第3次調査　南区6 …… 164
図版27　中在家南遺跡第3次調査出土
弥生土器・土師器1 …… 165
図版28　中在家南遺跡第3次調査出土
土師器2・丸・鉛器・石器1 …… 166
図版29　中在家南遺跡第3次調査出土　石器2・杭 …… 167
図版30　中在家南遺跡第4次調査出土
弥生土器・土師器1 …… 168
図版31　中在家南遺跡第4次調査出土　土師器2 …… 169

図版32　中在家南遺跡第4次調査出土
土師器3・須恵器・瓦・陶磁器 ……170
図版33　中在家南遺跡第4次調査出土
石器・石製品・金属製品・土製品 ……171
図版34　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類1 ……172
図版35　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類2 ……173
図版36　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類3 ……174
図版37　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類4 ……175
図版38　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類5 ……176
図版39　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類6 ……177
図版40　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類7 ……178
図版41　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類8 ……179
図版42　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類9 ……180
図版43　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類10 ……181
図版44　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類11 ……182
図版45　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類12 ……183
図版46　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類13 ……184
図版47　押口遺跡北区出土　弥生土器・土師器1 ……185
図版48　押口遺跡北区出土　土師器2 ……186
図版49　押口遺跡北区出土　土師器3・須恵器・陶磁器 ……187
図版50　押口遺跡北区出土　石製品・金属製品 ……188
図版51　押口遺跡北区出土　木製品類1 ……189
図版52　押口遺跡北区出土　木製品類2 ……190
図版53　押口遺跡北区出土　木製品類3 ……191
図版54　押口遺跡北区出土　木製品類4 ……192
図版55　押口遺跡北区出土　木製品類5 ……193
図版56　押口遺跡北区出土　木製品類6 ……194
図版57　押口遺跡南区出土　弥生土器・土師器・須恵器 ……195
図版58　押口遺跡南区出土　木製品類1 ……196
図版59　押口遺跡南区出土　木製品類2 ……197
図版60　押口遺跡南区出土　木製品類3 ……198
図版61　押口遺跡南区出土　木製品類4 ……199
図版62　押口遺跡南区出土　木製品類5 ……200
図版63　押口遺跡南区出土　木製品類6 ……201

第1章　中在家南遺跡と押口遺跡の概要

第1節　立地と環境

1　地理的環境

仙台市の地形は、西側の山形県境から東側の太平洋に至るまで、山地・丘陵地帯、段丘地帯、平野地帯の大きく3地帯に分けられ、高位から低位の地形に変化する。西部は、東北地方の背梁をなす奥羽山脈から派生した標高300～100mほどの山地とその周辺の丘陵地帯となっている。山地・丘陵地帯からは、北から七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川が東流している。

広瀬川中流域とその背後の丘陵裾部は、標高200～20mに至るまで、古期から順に青葉山段丘・仙台台ノ原段丘・仙台上町段丘・仙台中町段丘・仙台下町段丘の3面の段丘地形が形成されている。宮城県庁から仙台駅付近を中心とする仙台市の旧市街地は、これらの段丘面に立地している。

山地・丘陵地帯及び段丘地帯の東側には、太平洋に至るまで、先の4河川とその支流の運搬物によって形成された沖積平野が広がる。この平野は、幅が10km前後あり、「仙台平野」または「宮城野海岸平野」と呼ばれ、扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形が複雑に入り組んで形成されている。また沿岸部には、現在の汀線に沿って、幅3kmの間に3列の浜堤と、その間に堤間湿地が確認されている。この浜堤の形成年代については、現汀線から約3km内陸の最奥部第Ⅰ浜堤列が5000～4500年前、約2km内陸の第Ⅱ浜堤列が2800～1600年前、約1km内陸の第Ⅲ浜堤列が1000～700年前頃と推定されている。

中在家南遺跡・押口遺跡の所在する荒井地区は、仙台市東部の標高3～5m前後の沖積平野に位置する。段丘の末端からは3～4km海岸に寄り、現汀線からは約4～5kmほど内陸に入っている。付近は広瀬川自然堤防から派生した発達の悪い自然堤防群が幅1kmの間に不規則に東西方向に並び、自然堤防間には狭隘な後背湿地や旧河道が分布する。自然堤防群の周辺には後背湿地性の低地が広範に広がり水田などとなっている。自然堤防と旧河道・後背湿地の比高差は50cm前後である。

2　歴史的環境

仙台市内においては、仙台台ノ原段丘（下末吉期相当）に形成された山田上ノ台遺跡・北前遺跡などで中期旧石器及び後期旧石器が層位的に発見されている。また、沖積地においても、富沢遺跡において現水田面の約5m下層から後期旧石器時代の石器と焚き火跡が当時の森林跡とともに発見されている。

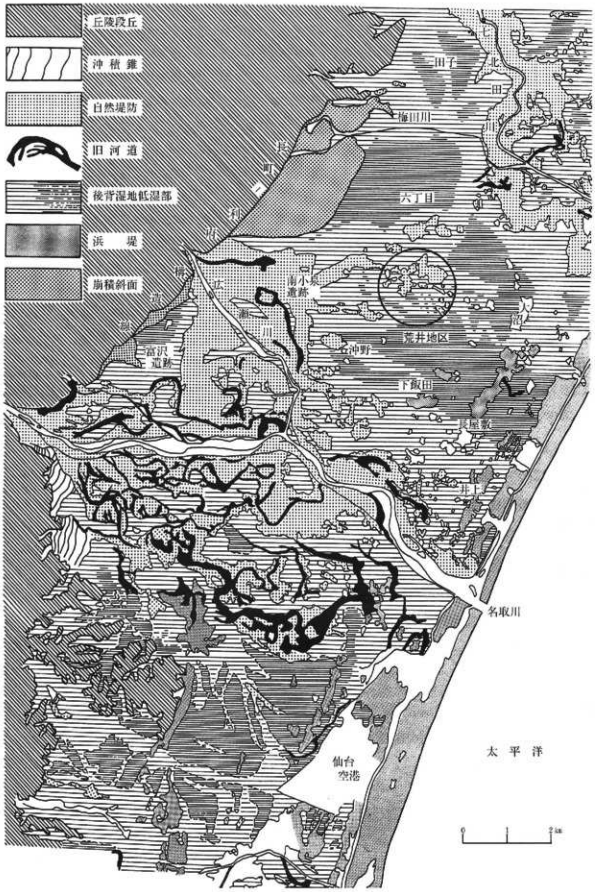
縄文時代は、草創期の遺跡としては、仙台市西部の段丘上の野川遺跡が知られているだけであるが、早期には丘陵部・段丘部に小規模な遺跡が散見されるようになり、沖積地の富沢遺跡や山口遺跡、下ノ内浦遺跡などで落し穴などの遺構や遺物が発見されている。前期になると、三神峯遺跡のような丘陵上に規模の大きな集落が形成されるが、沖積地においては遺物が発見されているだけで、遺構については不明である。中期は、名取川流域では山田上ノ台遺跡や上野遺跡、七北田川流域では高柳遺跡や沼遺跡などの遺跡が丘陵・段丘部に形成されるだけでなく、名取川下流域の自然堤防上には六反田遺跡・下ノ内遺跡等の遺跡が形成されるようになる。後期になると、低地の遺跡はいっそう増加・拡大するが、丘陵や段丘上の遺跡は相対的に縮小する傾向にある。晩期は、丘陵部・平野部とも遺跡は認められるが、低地では遺構の状況の明らかな遺跡はなく、集落の実態は不明である。荒井地区の縄文時代に関係する資料としては、中在家南遺跡から晩期の土器が1個体出土している。

弥生時代は、前期には南小泉遺跡・郡山遺跡・長嶋遺跡などで土器等が出土しているが、集落や水田の実態は不明である。中期になると富沢遺跡・高田B遺跡で大規模な水田跡が発見され、水田に伴う農具をはじめとする木製

第1図　中在家南遺跡・押口遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	中在家南遺跡	自然堤防・旧河道	弥生～近世	27	沖野城跡	自然堤防	中世
2	押口遺跡	自然堤防・旧河道	弥生～近世	28	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
3	中在家遺跡	自然堤防・後背湿地	平安？	29	中柵西遺跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
4	高屋敷遺跡	自然堤防	古墳	30	河原越遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
5	荒井畑中遺跡	自然堤防	平安？	31	神屋敷大日堂板碑群	浜堤	中世
6	荒井館跡	自然堤防	古墳・平安	32	笹屋敷板碑	浜堤	中世
7	下荒井遺跡	自然堤防	平安？	33	荒浜石場板碑群	浜堤	中世
8	長喜城館跡	自然堤防	中世	34	日辺遺跡	自然堤防	古墳
9	御蔵屋板碑	自然堤防	中世	35	日辺館跡	自然堤防	中世
10	荒井堀口板碑	自然堤防	中世	36	上屋敷遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
11	荒井矢取板碑	自然堤防	中世	37	上飯田三丁目板碑	自然堤防	中世
12	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良・平安	38	梅塚古墳	自然堤防	古墳（円墳？）
13	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安	39	今泉遺跡	自然堤防	縄文～平安・中世・近世
14	志波遺跡	自然堤防	奈良・平安	40	高田A遺跡	自然堤防	奈良・平安
15	谷地館跡	自然堤防	中世	41	高田B遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生・古墳～近世
16	北屋敷遺跡	自然堤防	平安・中世・近世	42	駱道遺跡	自然堤防	奈良・平安
17	姫蔵浦遺跡	自然堤防・後背湿地	中世	43	下飯田薬王寺板碑	自然堤防	中世
18	法領塚古墳	自然堤防	古墳（円墳）平安～近世	44	下飯田遺跡	浜堤	古墳・奈良・中世
19	若林城跡	自然堤防	古墳（円墳）平安～近世	45	藤田新田遺跡	浜堤	弥生・古墳・平安
20	南小泉遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳～近世	46	屋敷東遺跡	浜堤	古墳・奈良・平安
21	遠見塚古墳	自然堤防	古墳（前方後円墳）	47	下飯田薬師堂古墳	浜堤	古墳（円墳）
22	曽根弘明神古墳	自然堤防	古墳（円墳）	48	岡崎囲遺跡	浜堤	中世・近世
23	仙台東郊条里跡	後背湿地	奈良・平安	49	二木館跡	浜堤	中世
24	波分神社板碑群	自然堤防	中世	50	大塚山古墳	自然堤防	古墳（円墳）
25	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	51	落合観音堂古碑群	自然堤防	中世
26	神種遺跡	自然堤防	奈良・平安	52	中田畑中遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安

第1図　遺跡地名表



第2図　名取川下流域の地形分類図

品や石器などが出土し、稲作農耕を基軸とした社会が確立していたことがうかがわれる。後期には、宮沢遺跡で水田跡が発見されているほか、富沢遺跡周辺の丘陵・段丘部の上手内遺跡・原遺跡・八木山緑町遺跡で住居跡と考えられる竪穴が発見されている。また、自然堤防部でも下ノ内浦遺跡で土壙墓や土器棺墓が検出されている。荒井地区では、中在家南遺跡で弥生時代中期の集落に伴う遺物包含層と、土壙墓と土器棺墓からなる墓跡群が検出されたほか、河川跡から土器・石器・骨角器・木製品類が出土している。また押口遺跡の河川跡からも土器や木製品類が出土している。

古墳時代前期になると、丘陵・段丘部の燕沢遺跡・上手内遺跡や自然堤防の南小泉遺跡・戸ノ内遺跡・安久東遺跡・下ノ内遺跡・六反田遺跡などに集落が営まれるほか、藤田新田遺跡や、沼向遺跡には浜堤上にも遺跡が形成され、低地の開発の進展が認められる。古墳としては、戸ノ内遺跡・安久東遺跡・四郎丸館跡の方形周溝墓に続き、南小泉遺跡の中央に全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が築かれる。中期には南小泉遺跡に大規模な集落が営まれるほか、沖積地の各地の微高地上に集落が形成される。中期の古墳は、前半期は不明であるが、中期後半から6世紀中葉頃にかけては、富沢遺跡北側の段丘上に裏町古墳・金洗沢古墳・砂押古墳・二塚古墳・兜塚古墳が、南側の自然堤防上に春日社古墳・鳥居塚古墳や大野田古墳群中の古墳が次々に造営される。荒井地区周辺では若林城跡内で墳輪を有する古墳が発見される。終末期には南小泉遺跡の西に隣接して、横穴式石室の法領塚古墳が造営されるほか、富沢遺跡の北側などの丘陵斜面には横穴群が形成される。古墳時代の土器は、土師器については主に関東地方の強い影響のもとに成立・展開している。須恵器は、仙台市北部の台原丘陵の大蓮寺窯跡において、5世紀段階の徴内の技術をそのまま移転して生産を行った窯跡が発見されている。中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡からは、古墳時代前期から後期までの土師器や木製品類が出土している。

飛鳥時代の後半に当たる7世紀の後半には、郡山遺跡に全国的にも古い段階の地方官衙（郡山遺跡Ⅰ期官衙）が造営される。官衙は7世紀末から8世紀初頭には多賀城以前の陸奥国府として改変（Ⅱ期官衙及び付属寺院等）が行われている。

奈良・平安時代には、段丘面や沖積地の自然堤防・浜堤などの各地に集落が展開する。特に南小泉遺跡及びその周辺は大集落として発展し、各地で住居跡が発見されている。この南小泉遺跡北側の「宮城野」の地には陸奥国分寺・同尼寺が建立され、周辺一帯が陸奥国の中心として栄えていたことがうかがわれる。また、南小泉遺跡から荒井地区にかけては、仙台東郊条里跡と呼ばれる条里型の土地割が近年まで残っていた。

荒井地区周辺の中世遺跡としては、沖野城跡・今泉遺跡（今泉城跡）・二木館跡・日辺館跡などの城館がある。荒井地区内でも中世陶器が採集され、また、荒井館跡や長喜城館跡という遺跡が存在するが、中世の城館や集落の実態については不明である。自然堤防部周辺を除く広範囲な後背湿地の本格的開発は、藤田新田・笹新田（笹屋敷）などの地名に残っているように、近世以降におけるの新田開発よるものと思われる。中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡からは平安時代以降の土器・木製品類のほか、中世・近世の水田跡が検出されている。

近世以降、荒井地区一帯は、昭和20年代までは仙台市東部の田園地帯として、自然堤防上は堀と屋敷林に囲まれた集落と畑地に、後背湿地や旧河道は水田となっていた。しかし昭和30年代以降になると仙台市の発展とともに、周辺部の水田は耕地整備されたのに対して、自然堤防上の畑地は蜜食的に宅地化が進行する状況であった。無計画な宅地化を是正すべく昭和50年代から同地区の土地区画整理計画が立案され、昭和61年から区画整理事業が着手された。土地区画整理事業に関連して、昭和63年から平成5年までは、工事に関係する遺跡の道路部分の事前調査が実施された。以後、現在に至るまで土地区画整理事業が進行中である。

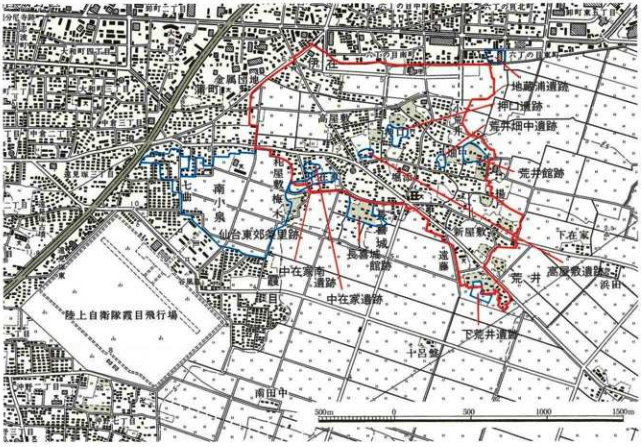
第２節　過去の調査概要

１　中在家南遺跡と過去の調査成果

中在家南遺跡は、仙台市荒井土地区画整理事業に伴う事前の分布調査によって1988年に発見された遺跡である。遺跡は、緩やかに蛇行しながら東西方向にのびる旧河道（以下本文中では「河川跡」と表現）と、その南北両側の自然堤防に渡って分布している。遺物が採集されたことから遺跡として認知されているのは東西約350m・南北約100mの範囲で、水田となっている河川跡の幅は約35m、北側の自然堤防の幅は20～40m、南側の自然堤防の幅は50m前後である。土地区画整理事業が実施される前は、河川跡は水田として、自然堤防部は畑地ないし宅地として土地利用されていた。自然堤防部の標高は5.5～5.3mで、河川跡との比高差は50cm前後である。

中在家南遺跡の河川跡は、遺跡の東側で北東方向に折れて押口遺跡で発見された河川跡に繋がることが、地形図及び両遺跡の河川跡堆積土層の類似性から推察されている。また遺跡の西側は北側に折れて河川上流へと繋がるものと考えられる（仙台市教育委員会：1996）。

中在家南遺跡においては、これまでに２次11地点の発掘調査が行われている。（第１表）その結果、自然堤防上では、西部においては弥生時代中期（桝形囲式期）の遺物包含層とこれを切る古墳時代前期の方形周溝墓群などが検出され、中央部では古墳時代ないし平安時代の竪穴住居跡と時期不明の掘立柱建物跡が、東部においては土壙墓と土器棺墓によって構成される弥生時代中期の墓地が検出されている。（第５図）また、河川跡は、幅が25m・深さは約2.5mあり、泥炭質の土壌を主体とする堆積層中からは、弥生時代中期から中世までの木製品をはじめ、土師器・須恵器・弥生土器（中期桝形囲式中心、前期土器1点出土）・弥生時代の石器・弥生時代の骨角器など豊富な遺物が出土している。



第３図　仙台市荒井土地区画整理事業の範囲（赤線内）と関連遺跡

中在家南遺跡の基本層は、自然堤防部が４層に大別され、河川跡の共通する堆積土は大別16層、細別24層に分けられている。河川跡の各土層の性格と時期は次のとおり認識されている。

＜自然堤防部基本層＞

Ⅰ層　表土層（現畑耕作土層－河川跡では水田耕作土層となり1層と表示）

Ⅱ層　弥生時代遺物包含層（中在家南遺跡の自然堤防部の西部に分布：第３・４次調査区には分布していない）

Ⅲ層　遺構の検出される地盤形成層の上部（水平に堆積する複数の地層からなる：上部層で縄文晩期土器出土）

Ⅳ層　地盤を形成する地層の下部（不整に堆積する複数の地層からなる）

第４図　中在家南遺跡・押口遺跡と河川跡の流路（１/8000）

第１表　中在家南・押口遺跡の発掘調査概要一覧表

遺跡名	調査次数	調査原因	調査年	調査区	調査面積	調査場所	主な発見遺構	主な出土遺物
中在家南遺跡	１次	区画整理	1988	Ⅰ区	640㎡	自然堤防（中央部）	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑	土師器
			1988～89	Ⅱ区	570㎡	旧河道　（中央部）	水田跡・杭列	土師器・弥生土器・木製品類（弥生～中世）
			1989	Ⅱ区	95㎡	自然堤防（中央部）	竪穴住居跡・土坑・溝跡	土師器・石製模造品
			1989	Ⅳ区	583㎡	自然堤防（東部）	土壙墓と土器棺墓（弥生時代）・溝跡	弥生土器・石器
			1989	Ⅴ区	160㎡	自然堤防（中央部）	方形周溝墓・土坑	土師器・弥生土器・石器
			1992	Ⅵ区	420㎡	旧河道　（中央部）	水田跡・水田水路・杭列	土師器・弥生土器・木製品類（弥生～中世）
			1992	Ⅶ区	270㎡	自然堤防（西部）	方形周溝墓・祠跡・遺物包含層（弥生時代）	土師器・弥生土器・石器
			1993	Ⅷ区	195㎡	旧河道　（西部）	水田跡	土師器・弥生土器・石器・骨角器・木製品類
			1993	Ⅸ区	475㎡	旧河道　（西部）	土坑	土師器・弥生土器・石器・骨角器・木製品類
	２次	住宅建築	1996		170㎡	自然堤防（西部）	方形周溝墓・溝跡	土師器・弥生土器・石器
	３次	区画整理	1999		300㎡	自然堤防（中央部）	掘立柱建物跡・溝跡・土坑	土師器・弥生土器・石器
	４次	区画整理	2000		110㎡	旧河道　（中央部）	水田跡	土師器・木製品類
押口遺跡	１次	区画整理	1990	Ⅰ区	960㎡	旧河道　（南部）	水田跡・水路	土師器・須恵器・弥生土器・木製品類
				Ⅱ区		旧河道　（中央部）	水田跡・杭列	土師器・須恵器・弥生土器・木製品類
				Ⅲ区		自然堤防（西部）	水田跡・溝跡	
	２次	住宅建築	1996		110㎡	自然堤防（北部）	土坑・旧水路	石製模造品・管玉
	３次	区画整理	2000	北区	116㎡	旧河道　（北部）	水田跡・溝跡・土坑	土師器・石製模造品・木製品類
				南区	100㎡		水田跡・溝跡	土師器・須恵器・木製品類

※１　区画整理はいずれも仙台市荒井土地区画整理事業　　※２　旧河道＝河川跡

＜河川跡堆積層＞

1層	現水田耕作土	8層	平安時代堆積層	12c層	古墳時代前期堆積層
2層	近世水田耕作土	9a層	古墳時代後期	13層	古墳時代前期堆積層
3a層	中世水田耕作土	9b層	古墳時代中期堆積層	14層	弥生時代中期堆積層
3b層	平安時代堆積層	9c層	古墳時代中期堆積層	15a層	弥生時代中期堆積層
4層	灰白色火山灰（915年降下）	10層	古墳時代中期堆積層	15b層	弥生時代中期堆積層
5層	平安時代堆積層	11層	古墳時代中期堆積層	15c層	弥生時代中期堆積層
6層	平安時代堆積層	12a層	古墳時代前期堆積層	15d層	弥生時代中期堆積層
7層	平安時代堆積層	12b層	古墳時代前期堆積層	16層	弥生時代前期堆積層

（仙台市教育委員会：1996・1997）

2　押口遺跡と過去の調査成果

押口遺跡は、1988年に土地区画整理事業に伴う試掘調査が実施される以前は、現在押口遺跡の中央を東西方向に通っている用水路の北側の微高地（自然堤防）部分が、東西約130m・南北約80mの範囲で遺物散布地として遺跡に登録されているだけであった。試掘調査の際に、遺跡の南側の水田にかかる道路予定地を調査したところ、河川跡と考えられる遺物包含層が発見されたので、この水田部分の東西約40m・南北約70mの範囲が遺跡に追加登録された。

遺跡の標高は、北側の自然堤防と考えられる微高地部分が4.9～4.7m、水田となっている河川跡部分が4.5mほどである。土地区画整理実施以前は、微高地は宅地及び畑地となっていた。

押口遺跡は、過去2次の調査が行われている。第1次調査は土地区画整理に伴い遺跡に係る道路部分で、河川跡を横断するような調査が行われた。河川跡は、幅約20mで、深さは2.5mである。河川跡底面のレベルは中在家南遺跡の河川跡とほぼ同じである。堆積土は泥炭質の土壌を主体とし、大別層の特徴は中在家南遺跡の河川跡堆積土層と概ね一致し16層に分けられた。堆積土中からは、中在家南遺跡同様に弥生時代中期から中世までの木製品を中心とする多数の遺物が出土しているが、弥生時代の遺物は、量的には減少し、保存状態も悪くなっており、この時期には遺跡の中心から離れていたことが伺われる。これに対して、古墳時代前期（12層）の遺物は中在家南遺跡に引けを取らず、多数の木製品や土師器などが出土している。第1次調査においては、河川跡南岸の上面部の一部も調査されているが、この部分では近世以降と考えられる水田跡や溝跡及び時期不明の土坑が検出されているだけで、河川跡からの出土遺物と関係する遺構は発見されていない。

微高地の調査は第2次調査の際に実施され、土坑と石製模造品・管玉などが発見されているが、これらの遺構や遺物に関係する遺跡の実態は明らかでない。

第3節　調査経過と調査要項

1　調査に至る経緯と調査経過

荒井地区では、1986年に仙台市により土地区画整理事業が着手された。1987年に仙台市の開発部局と教育委員会が土地区画整理事業地内の遺跡の取扱いを協議し、翌年から遺跡の事前調査に着手した。仙台市荒井土地区画整理事業地内においては、周知の遺跡のほかにも未知の遺跡の存在も予想されたので、あらためて表面の分布調査と、試掘調査を実施した。その結果、新に荒井畑中遺跡・高屋敷遺跡・中在家南遺跡が発見され、押口遺跡の登録範囲が拡大された。遺跡の区画街路に関わる部分については、各遺跡の第1次として調査が実施された。

その後、区画整理事業地内の各区画内における個人住宅及び共同住宅の建築に関わる調査が、中在家南遺跡および押口遺跡で各1回実施されている（仙台市教育委員会：1997）。

区画整理事業に関しては、街路部の調査終了後、開発部局から保留地の販売に関わる土壌改良を行うために、事前調査の実施が要請された。この要請に基づき、開発部局と協議の結果、1996年に高屋敷遺跡の第2次調査が行われ（仙台市教育委員会：1997）、さらに本報告書に関わる中在家南遺跡第3次調査が1999年に、中在家南遺跡第4次調査と押口遺跡第3次調査が2000年に実施された。

2　調査要項

1）遺　跡　名　①中在家南遺跡第3次調査
②中在家南遺跡第4次調査
③押口遺跡　第3次調査

2）所　在　地　①中在家南遺跡第3次調査区　仙台市若林区荒井字中在家23
②中在家南遺跡第4次調査区　仙台市若林区荒井字中在家33・35
③押口遺跡　第3次調査区　仙台市若林区荒井字押口30・33・34・35

3）調査理由　土地区整理事業に伴う土壌改良工事

4）調査面積　①中在家南遺跡第3次調査区　300㎡
②中在家南遺跡第4次調査区　110㎡
③押口遺跡　第3次調査区　216㎡（北区116㎡・南区100㎡）

5）調査期間　①中在家南遺跡第3次調査区　平成11年7月8日～平成11年8月23日
②中在家南遺跡第4次調査区　平成12年5月30日～平成12年7月31日
③押口遺跡　第3次調査区　平成12年8月1日～平成12年10月30日

6）調査主体　仙台市教育委員会

7）調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査第一係
課長　大越　裕光　主幹兼調査第一係長　田中　則和
調査担当職員　工藤哲司　工藤信一郎（平成11年度）　加藤徳明（平成12年度）

8）調査参加者　青木　吉次　赤間　淳子　浅見　曜子　安部　文子　阿部みのる　伊藤　清子
伊深みつ子　上野　美子　遠藤　清子　大内さくえ　小野さよ子　小畑　和子
小野寺達重　小沼ちえ子　加嶋みえ子　菊地　和江　後藤　靖子　小林　国子
今田　郁枝　斎藤　慶子　酒井　正雄　佐々木瑞枝　佐藤　愛子　佐藤すみ子
佐藤てる子　佐藤八重子　庄子　弘子　須賀　栄子　菅井　君子　菅井　民子
鈴木美代子　高橋　美香　竹森　光子　只野　宗一　田中さと子　千田タイチ
鳥中真知子　深瀬　敬子　丸山喜恵子　丸山　初江　三浦　貢　水戸　智
山下　秀子　山田千代子　横尾由紀子　吉田純絽子　渡辺　純子

9）整理参加者　相沢せい子　安部　文子　有路　尚子　伊藤　清子　大泉　照美　大越ふさ子
栖沢千佳子　今野　順子　佐藤　愛子　佐藤とき子　庄子　弘子　杉松比佐子
陶谷　栄子　高橋　朝子　津谷　貞子　澤瀬　嵐子　星　芳子　若生恵美子
渡辺　純子

10）調査指導　須藤　隆（東北大学文学部）　鈴木　三男（東北大学理学部）

第２章　中在家南遺跡第３次調査の概要

第１節　発見遺構の概要と基本層位

１　第３次調査区の位置

第３次調査区は、中在家南遺跡の中央よりやや東側に寄った所の自然堤防上から、その南側に沿った河川跡にかけて位置する。現在は盛土整地されているが、区画整理以前の自然堤防の標高は5.3～4.8m前後あり、畑地として利用されていた。自然堤防より60cm前後低い河川跡部分は水田となっていた。

過去の調査区との位置関係は、第１次調査Ⅰ区南部からⅡ区北部にかけての地区の東側にあたる。Ⅰ区は自然堤防に配置された調査区で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが発見され、溝跡の幾つかは３次調査区へ延びていると推定される。Ⅱ区は、区画整理実施以前の水田及び河川跡にかかる調査区である。Ⅱ区河川跡の北岸部では、古墳時代中期に祭祀に関係して使用されたと考えられる土師器が出土している。また、第３次調査区は、第１次調査Ⅵ区西半の北側に位置し、Ⅱ区の延長として検出された河川跡の北岸部にあたる。第4次調査区は、Ⅵ区を挟んでその南側に位置する。（第５図）Ⅱ区・Ⅵ区の河川跡では、河川跡内堆積土の基本層２層において近世頃の水田の畦畔痕跡が、３ａ層では中世頃の水田の畦畔痕跡と杭列を伴う水路跡が検出されている。３ｂ層から15層までの各堆積層からは木製品や土器をはじめとする多数の遺物が出土している。

このような、地形環境及びこれまでの調査区との関係にある第３次調査区は、南北に２分割して前後半に分けて調査を行なった。先に行なった北半部の調査区は、主に自然堤防部にあたり、掘立柱建物跡・溝跡・土坑などの遺構が発見されている。後から行なった南半部の調査区では、河川跡（ＳＲ－１）の北岸部が検出された。

２　基本層位

第３次調査区の、自然堤防部から河川跡にわたる基本層位は、大別すると、①表土層（盛土層及びⅠ層）・②河川跡堆積土新層（河川堆積土上部＝２～15層）・③河川跡堆積土古層（河川堆積土下部＝16層群）・④基盤層群（Ⅲ層：Ⅱ層は、第１次調査の、Ⅵ区の周辺において、表土層と基盤層群の間に分布する弥生時代中期の遺物包含層に付けられた番号であることから、前回の調査層位と整合性を持たせるために、基盤層はⅢ層とした。）の４層に分けられる。

１）表　土　層（盛土層及びⅠ＝１層）

現表土層は、区画整理の際の盛土からなり、自然堤防部で10～20cm・水田部で70cm前後ある。区画整理による盛土以前の表土層は、調査区北側の自然堤防部では暗褐色のシルト質粘土からなる畑耕作土で、調査区南側の河川跡部分は、灰色粘土からなる水田耕作土層である。

２）河川跡堆積土新層（河川跡堆積土上部＝２～15層）

当該河川跡が流路の変更等何らかの事情によって、それまでの流水量が減少し、水流が停滞するようになった結果、黒色を基調とする泥土または泥炭質土壌が堆積することにより形成された堆積層である。この黒色土層は、中在家南遺跡及び押口遺跡の河川跡で概ね類似した堆積状況を示す。両遺跡の調査により、２層～15層に大別されている土層のうち、本調査区では、３ａ・６・９・10・12・14・15層の各層が確認された。詳細は次節で述べる。なお、河川跡堆積土新層（河川堆積土上部）については、今後は単に「河川跡」と呼ぶこととする。

3）　河川跡堆積土古層（河川跡堆積土下部＝16層群）

黒褐色泥炭質ないし粘土質土壌を主とする河川跡堆積土新層が堆積する以前の、河川に一定の水量があり、水流による浸食・堆積作用が盛んであった段階に堆積したと考えられる黄褐色からにぶい黄色系のシルトないし砂質土壌の堆積層を16層とした。16層は、第7図のように細分可能である。各層は河川跡堆積土新層が堆積以前の河川中心に向かって下がるように斜めに堆積している。細別層を観察すると砂層や粘土層などを縞状に挟んで堆積しており、水流の影響下に堆積したことが伺われる。

第1次調査Ⅱ区の、15層に近い16層中からは、弥生時代前期の土器が出土している。

4）基盤層群

自然堤防の北半側は、平面的には16層と類似する土壌であるが、断面を観察すると、第7図及び巻頭写真Ⅰ－2のように、河川跡の堆積土とは異なる水平の堆積層の重なりが認められる。これらの水平堆積層群は、河川形成以前からのこの地域の基盤層として堆積した地層と考えられる。基盤層は、にぶい黄褐色ないしにぶい黄橙色のシルトおよび粘土層を主体とし、下部の層はグライ化している。

第1次調査Ⅰ区の、基盤層上部からは、縄文時代晩期末の土器が出土している。

3　発見遺構の概要

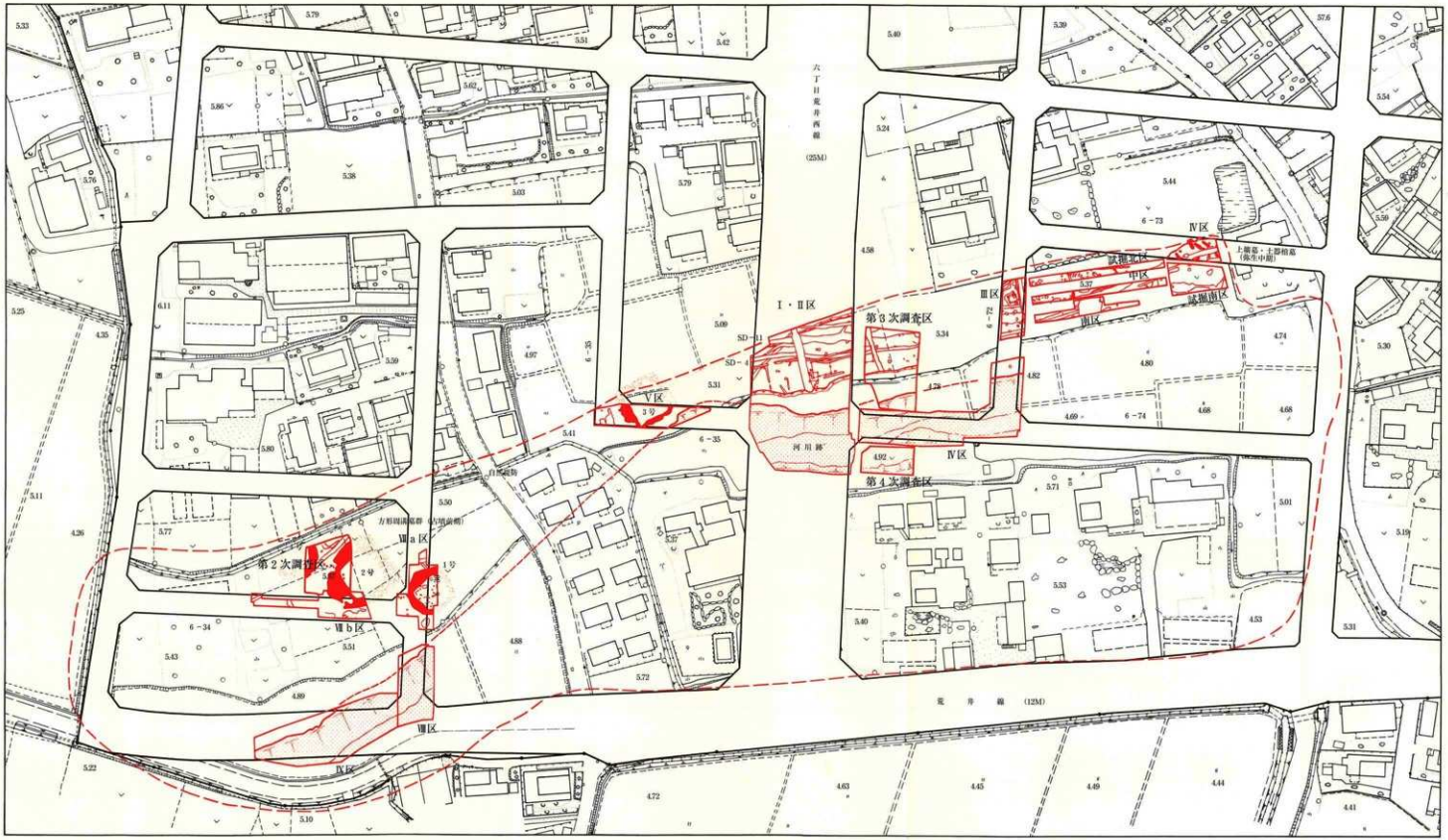
第3次調査区は、自然堤防から河川跡にかかる調査区で、ＳＫ－3土坑の南側の段差から北側は畑地となっていた自然堤防部にあたる。段差から南側は、水田となっていた自然堤防斜面ないし河川跡堆積土上面にあたる。北側の自然堤防部では、掘立柱建物跡1棟・溝跡3条・土坑4基・ピット11個が発見されている。また、検出された自然堤防部の上面では、基盤層と河川跡堆積土古層（16層）との境界が検出されている。河川跡（河川跡堆積土新層）の上端から段差までは約7m、基盤層と河川跡堆積土古層との境界までは約10mあり、三者は互いにほぼ平行して東西にのびている。南側の水田となっていた自然堤防斜面から河川跡上面にかけては、近・現代の水田耕作による削平が行われ、自然堤防部分も水田耕作による侵食を受けている。

1）掘立柱建物跡

ＳＢ－1掘立柱建物跡　調査区の西壁際中央付近で検出された。遺構の西部は調査区の外にのびているが、第1次調査区のⅡ区でこの遺構に続く遺構は検出されていないので、西側には1間だけのびる東西2間×南北2間程度の建物と考えられる。ＳＤ－1溝跡に切られている。東辺の総長は386cm（柱間寸法は北から205cm・181cm）である。南辺の検出部の柱間は、232cmである。柱穴の掘り方は、直径25～30cmの円形で、検出面からの深さは30cm前後である。柱痕跡は不明であったが、Ｐ9の底面に直径10cmの円形の落ち込みが認められることから、直径10cm程度の柱であった可能性が考えられる。柱穴の堆積土は、黒褐色ないし黒色の粘土質シルトで、地山（基盤層Ⅲ層）を起源とする黄色系の土壌のブロックを含んでいる。柱穴からの出土遺物はない。

2）溝　跡

ＳＤ－1溝跡　調査区の北西角から南東方向にのびて検出された。南端は水田との境目の段差部で途切れる。ＳＢ－1掘立柱建物跡、ＳＤ－2・3溝跡を切る。方向はＮ－20°－Ｗである。幅は上面で150～95cm、深さは20cm前後で、断面形は緩やかな舟底形を呈する。底面のレベル差はほとんどない。堆積土は、黒褐色のシルト質粘土1層で、自然堆積層と理解される。ＳＤ－1からは、土師器甕（第10図1）をはじめ、ロクロ土師器・非ロクロ土師器・古代の平瓦片などが出土している。しかし、遺構の年代については、ＳＤ－1溝跡に切られるＳＤ－2溝跡が、位置



第５図　中在家南遺跡と調査区配置図

と方向から第１次調査Ｉ区で検出されたＳＤ－11溝跡に続くと推定され、Ｉ区ＳＤ－11溝跡の底面より缶詰缶が出土していることから、近・現代に掘削された溝と考えられる。したがって、ＳＤ－１溝跡から多くの土器片等の遺物が出土しているが、これらの出土遺物は、遺構の時期と関係のない流入品とみられる。

ＳＤ－２溝跡　調査区の北部をＮ－83°－Ｅの方向で東西にのびる。ＳＫ－１土坑を切り、ＳＤ－１溝跡に切られる。検出部分では、遺構の重複や耕作の掘削深度の差によって残存状況が異なり、上面幅は一定していないが、最大で2.7mある。これに対して底面幅は１～1.2m前後である。深さは30～40cm 程で、断面形は逆台形を呈する。底面のレベルは、西側が東側に比べて10cmほど低くなっている。堆積土は断面実測をした地点で４層に細分されたが、いずれも自然堆積層と観察される。堆積土中からは、第10図にも図示したとおり多数の遺物が出土しているが、遺構の年代については、上述したように、この溝の延長線上にあると推定される第1次調査Ｉ区ＳＤ－11溝跡の底面から缶詰缶が出土しているので、近・現代のものと考えられる

ＳＤ－３溝跡　調査区中央北側を、Ｎ－82°－Ｅの方向で東西にのびる。ＳＤ－１溝跡・Ｐ１に切られる。幅は西部で90cm前後、東部で50cm前後である。断面形は、浅いＵ字形を呈し、深さは西部で約18cm、東部で約８cmである。底面のレベルは西部が約20cm 程低い。堆積土は2層に分けられるが、どちらも黒褐色のシルト質粘土層で、浅黄色土のブロックを含んでいる。遺物は、土師器片及び弥生土器と見られる縄文の付された土器片が少量出土しているが、いずれも摩滅した小破片であることから遺構の時期とは関係ないものとみられる。

３）土　坑

ＳＫ－１土坑　調査区の北東角で検出され、調査区外にものびている。ＳＤ－２溝跡に切られている。検出部分は平面形が隅丸方形ないし隅丸長方形の土坑の南西角付近にあたる。検出部で東西144cm・南北116cmを計る。深さは、５cm前後で、底面には緩やかな凹凸が認められる。堆積土は、灰黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は、堆積土中からロクロ土師器の甕（第12図１）とロクロ土師器片２点が出土している。

ＳＫ－２土坑　調査区の中央で検出された。平面形は略円形を呈し、南北軸長80cm、東西軸長73cmを計る、深さは16cmで断面形は浅いＵ字形である。堆積土は、上部が黒褐色のシルト質粘土、下部がにぶい黄褐色の粘土質シルト層である。遺物は、堆積土中から摩滅した土師器片が十数点出土している。

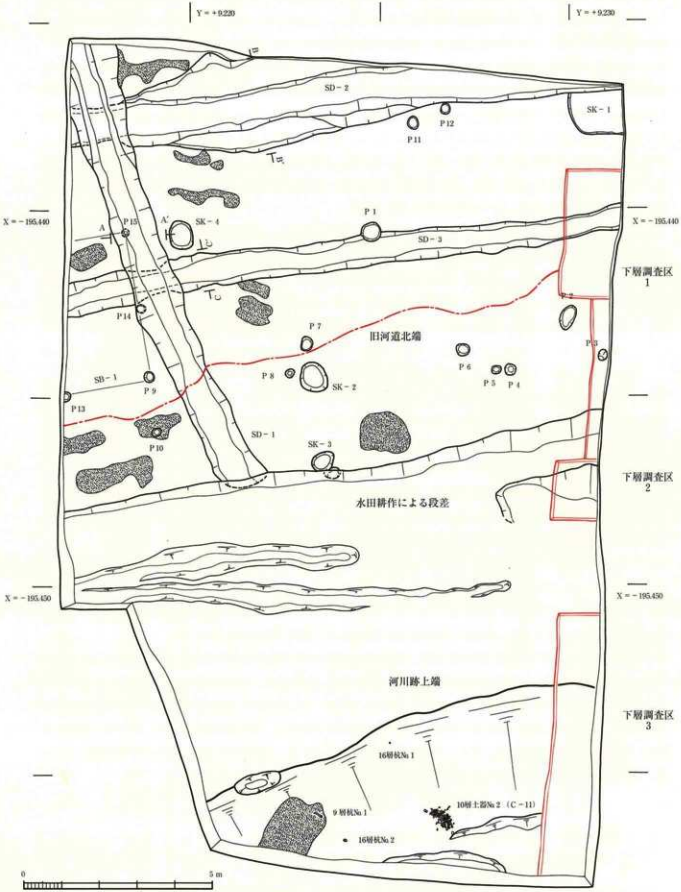
ＳＫ－３土坑　調査区中央のＳＫ－２土坑の南側で検出された。南端の上部を水田耕作により形成された段差により削平されている。残存部の平面形は楕円形を呈し、東西長軸62cm、南北短軸52cmを計る。深さは20cmで断面形は浅いＵ字形である。堆積土は、４層に分けられる。下部はブロック状の堆積土であるが、上部は比較的均一な土壌で、自然堆積層と観察される。遺物は、堆積土中から摩滅した土器片が数点出土している。

ＳＫ－４土坑　調査区の北西部で検出された。平面形は楕円形に近い隅丸長方形をを呈し、南北長軸73cm、東西短軸59cmを計る。深さは10cm前後で断面形は浅いＵ字形である。堆積土は、上部の黒褐色シルト質粘土と、下部の褐灰色シルト質粘土の２層に分けられる。検出面（堆積土１層中）で、非ロクロ土師器の甕（第12図２）が潰れた状態で出土した。この土器は、体部がやや膨らんだ壺の体部上半の破片で、口縁部は厚みがあり、緩やかに外反している。調整は、体部外面上部がハケメ、下部がナデ、内面はヘラナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ調整されている。そのほか堆積土中から摩滅した土器片が数点出土している。

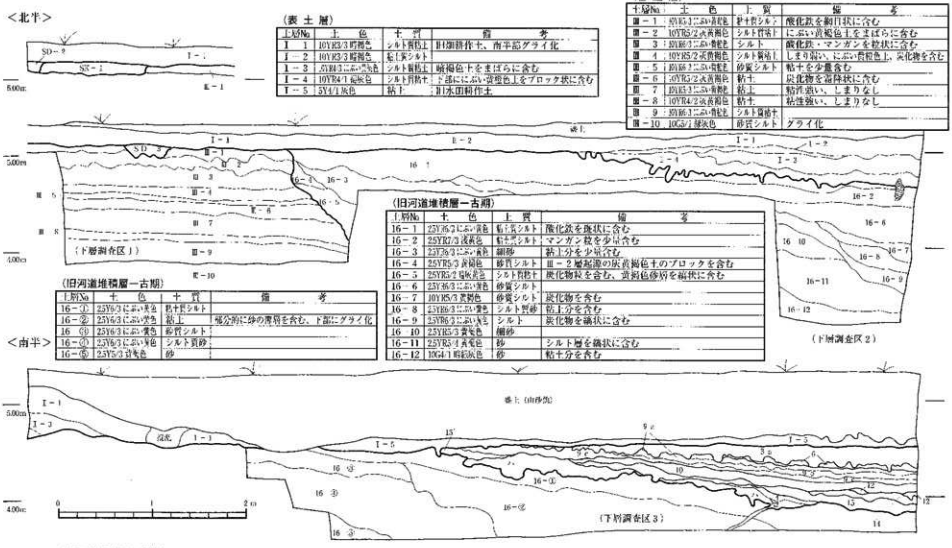
第２節　河川跡の堆積土と出土遺物

１　河川跡の基本層位

第３次調査区河川跡（河川跡堆積土新層＝河川堆積土上部）は、調査区の南辺部で北岸部が検出された。検出さ



第６図　中在家南遺跡第４次調査区遺構配置図



（表土層）

土層No.	土色	土質	備考
I－1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	旧畑耕作土、南半部グライ化
I－2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
I－3	5YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土をまばらに含む
I－4	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	下部ににぶい黄褐色土をブロック状に含む
I－5	5Y4/1 灰色	粘土	旧水田耕作土

（基盤層）

土層No.	土色	土質	備考
II－1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑目状に含む
II－2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土をまばらに含む
II－3	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガンを粒状に含む
II－4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	しまり弱い、にぶい黄褐色土、炭化物を含む
II－5	10YR6/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	粘土を少量含む
II－6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を高体状に含む
II－7	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	粘性強い、しまりなし
II－8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	粘性強い、しまりなし
II－9	10YR6/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
II－10	10GY5/1 緑灰色	砂質シルト	グライ化

（旧河道堆積層－古期）

土層No.	土色	土質	備考
16－1	25YR6/3 にぶい黄色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む
16－2	25YR7/3 浅黄色	粘土質シルト	マンガン粒を少量含む
16－3	25YR6/3 にぶい黄色	細砂	粘土分を少量含む
16－4	25YR5/3 黄褐色	砂質シルト	II－2層起源の灰黄褐色土のブロックを含む
16－5	25YR5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	炭化物粒を含む、黄褐色砂層を縞状に含む
16－6	25YR6/3 にぶい黄色	砂質シルト	
16－7	10YR5/3 黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む
16－8	25YR6/3 にぶい黄色	シルト質砂	粘土分を含む
16－9	25YR6/3 にぶい黄色	シルト	炭化物を縞状に含む
16－10	25YR5/3 黄褐色	細砂	
16－11	25YR5/4 黄褐色	砂	シルト層を縞状に含む
16－12	10GY4/1 暗緑灰色	砂	粘土分を含む

（旧河道堆積層－古期）

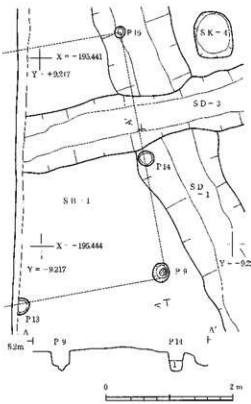
土層No.	土色	土質	備考
16－①	25Y6/3 にぶい黄色	粘土質シルト	
16－②	25Y6/3 にぶい黄色	粘土	部分的に砂の薄層を含む、下部にグライ化
16－③	25Y6/3 にぶい黄色	砂質シルト	
16－④	25Y6/3 にぶい黄色	シルト質砂	
16－⑤	25Y5/3 黄褐色	砂	

（旧河道堆積層－新期）

土層No.	土色	土質	備考
3 a	10YR3/1 黒褐色	粘土	水田耕作土、下部に黒色粘土・灰白色火山灰のブロックを多く含む
6	7.5YR3/1 黒褐色	粘土	粘性強い、しまりなし
9 a	10YR1/7 黒色	粘土	本分解の植物遺体を鍋細状に少量含む
9 b	10YR3/1 黒褐色	粘土	中程に黒色の泥炭質粘土層を縞状に含む
9 c	10YR1/7 黒色	粘土	本分解の植物遺体を多く含む
10	10YR2/1 黒色	粘土	黒褐色粘土を表分的に縞状に含む、下部に本分解の植物遺体を多く含む

土層No.	土色	土質	備考
12	5Y2/1 黒褐色	粘土	本分解の植物遺体・流木片を含む
14	10YR1/7 黒色	泥炭質粘土	岸面下部に分布
15	2.5Y2/1 黒色	粘土	下部には本分解の植物遺体を含む、16層起源の浅黄色土を少量含む
イ	10YR2/1 黒色	粘土	本分解の植物遺体を含む、16層起源の浅黄色土を粒状に含む
ロ	10YR1/7 黒色	泥炭質粘土	一部地面れに入り込んでいる
ハ	2.5Y4/1 黄灰色	シルト質粘土	黒色土及び浅黄色土をブロック状に多く含む

第7図　中在家南遺跡第3次調査区東壁断面図



第8図　SB－1掘立柱建物跡

P14

上層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR2/1黒褐	粘土質シルト	灰黄色土をブロック状に含む、底面に酸化鉄集積

ピット観察表

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
掘方形状	円　形	楕　円	円　形	円　形	隅丸方形	不整形
掘方規模	52×52cm	38×66cm	24×29cm	27×29cm	21×22cm	35×31cm
深　さ	25cm	6 cm	13cm	28cm	14cm	4 cm
柱痕形状						
柱痕規模						

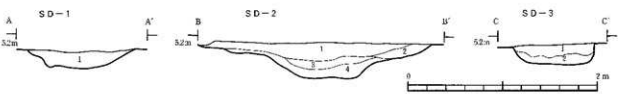
ピットNo.	P7	P8	P9	P10	P11	P12
掘方形状	隅丸方形	円　形	円　形	円　形	円　形	楕　円
掘方規模	30×36cm	23×21cm	25×30cm	27×21cm	24×31cm	23×28cm
深　さ	7 cm	27cm	29cm	19cm	4 cm	4 cm
柱痕形状		円　形	円？			
柱痕規模		11×9 cm	(9×12cm)			

ピットNo.	P13	P14	P15
掘方形状	円　形	円　形	円　形
掘方規模	(20)×24cm	24×23cm	16×19cm
深　さ	31cm	39cm	39cm
柱痕形状			
柱痕規模			

ピット土層注記表

ピットNo.	上　色	土　質	備　考
1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	浅黄色土と黒褐色土のブロックを含む
2	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	黒色土と浅黄色シルト質粘土の大型ブロックの混合層
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	浅黄色土と黒色土のブロックを多量に含む
4	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	浅黄色土と黒色土のブロックを少量含む
5	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	浅黄色土のハブロックを多く含む
6	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	浅黄色土のブロックを多量に含む
7	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を少量含む
8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	浅黄色土のブロックを多量に含む
柱痕跡	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を少量含む

ピットNo.	上　色	土　質	備　考
9	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	黒色土及び黄色土のブロックを多く含む
10	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土を粒状及びブロック状に含む
11	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	黄褐色土のハブロックを少量含む
12	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	浅黄色土のブロックを少量含む
13	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
14	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	灰黄色土をブロック状に含む
15	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む



SD－1

土層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄色の粘土質シルトのブロックをまばらに含む

SD－2

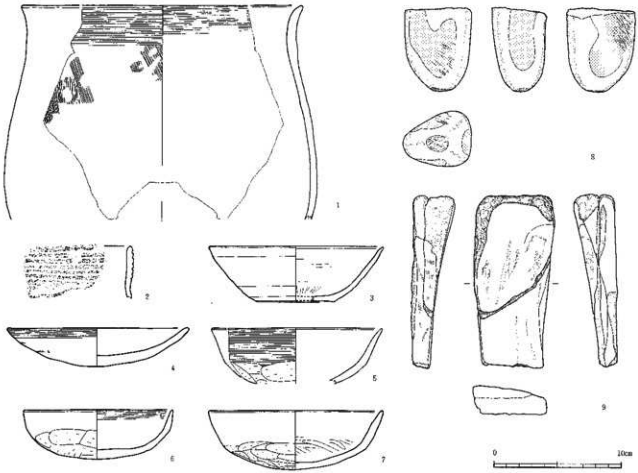
上層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	上部に酸化鉄が集積する
2	10YR2/1 黒色	粘土	均質の土壌で南岸上部に分布
3	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土の小ブロックを少量含む
4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土を斑口状に含む

SD－3

土層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	浅黄色シルトをブロック状に含む
2	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	浅黄色シルト質粘土とのブロック状の混合層

第9図　溝跡断面図

れた部分の幅は、東壁付近で約5m程である。検出面から調査した河川跡最深部までの深さは、南東角付近で約70cmである。河川跡底面には達しておらず、第1次調査の結果から、河川跡の深さの三分の一程度まで調査が行われたものと推定される。検出された河岸部は、16層が河岸面となっており、傾斜角度は12～13°で、比較的緩やかな斜面となっている。河岸面には、部分的に大小の凹凸が認められる。



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）　特	徴　（内　面）	写真図版
1	C－3	3次		SD－1	埋土		土師器	甕	16.9	22		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	28－1
2	B－1	3次		SD－2	埋土		陽土・須	高坏				平行沈線文		27－1
3	D－1	3次		SD－2	埋土上部		土師器	坏	4.4	(13.6)	(6.0)	底部回転糸切り	ヘラミガキ	28－7
4	C－4	3次		SD－2	埋土上層		土師器	坏	3.0	(14.2)	－	ヨコナデ・ナデ	ナデ	27－11
5	C－1	3次		SD－2	埋土上層		土師器	坏	(4.4)	13.4	－	ヨコナデ・ヘラケズリ		
6	C－2	3次		SD－2	埋土中～下層		土師器	坏	3.9	(11.8)	－	ヘラケズリ	ヨコナデ	27－9
7	C－3	3次		SD－2	埋土中～下層		土師器	坏	4.7	(13.8)	－	ヘラケズリ	ヘラミガキ・樹脂付着	27－10

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特　徴	写真図版
8	K－2	3次		SD－2	埋土		石器・砥石？	(6.5)	5.3	4.3	216.9	凝灰岩	29－1
9	K－1	3次		SD－2	埋土中～下層		砥石	13.5	5.9	3.2	293.3	砂岩	28－11

第10図　第3次調査区清跡出土遺物

検出された河川跡は、上記のように河岸上部にあたるため、第1次調査における基本層位と整合する部分と欠落している部分とがある。第1次調査の基本層位と対比しながら、本区の河川跡の基本層位を見ると、次ぎのとおりである。(以下、本調査区に存在する層は太字、存在しない基本層は細字)

2　層　河川跡に形成された近世の水田耕作土層であるが、近・現代の水田耕作による削平を受け、本調査区には残存していない。

3 a 層　黒褐色の粘土層で、層厚は南部で20cm前後あり、底面の凹凸が著しく、深いところでは9層まで撹拌が達している。層下部には灰白色火山灰（4層）のブロックを多く含んでいる。中世頃の水田耕作土層。

3 b 層　本調査区では、3 a 層水田跡の耕作土の母材として起耕されたために残存していないが、3 a 層の下部に3 b 層が起源と考えられる黒色粘土のブロックが含まれている。第1次調査では、3 b 層から8層までは平安時代の堆積層と位置付けられている。

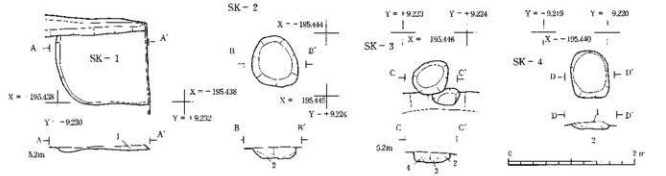
4　層　通称「灰白色火山灰」と呼ばれる火山灰の自然堆積である。この火山灰は、「十和田 a」火山灰にあた

り、降下年代は西暦915年初夏とされている堆積層である。３ｂ層同様に、３ａ層水田跡のために残存していないが、３ａ層の下部にブロック状に含まれている。

5　層　黒色の泥炭質土壌を基調としているが、本調査区には分布していない。

6　層　河川中央付近では、暗褐色ないし黒褐色の泥炭質土壌を基調として厚く堆積するが、本調査区は、河川跡の岸面上部にあたるため、黒褐色の粘土層として５cm前後の厚さで南端部分で検出された。

7－8層　本調査区の河川跡では、前記のとおり河岸上部にあたるために、両層に相当する堆積層は検出されなかった。



SK－1

土層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR4/2灰黄褐色	シルト質土	にぶい黄褐色土、黒褐色土のブロックを多く含む

SK－2

土層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR3/1黒褐色	シルト質土	浅黄色シルトを粒状及び斑状に含む
2	10YR4/4にぶい黄色	砂・粘シルト	灰黄色及び黒褐色土をブロック状に含む

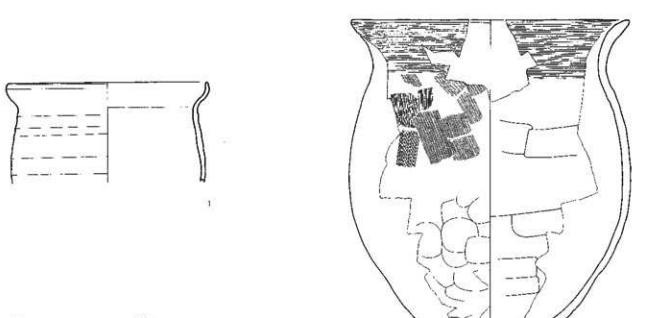
SK－3

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄色土を粒状に含む
2	10YR4/1褐灰色	シルト質土	にぶい黄色土を斑状に含む
3	10YR2/1黒色	シルト質粘土	炭を含む。にぶい黄色土のブロックを少量含む
4	10YR3/1黒褐色	粘土	にぶい黄色土をブロック状に多く含む

SK－4

土層No.	上　色	土　質	備　考
1	10YR3/1黒褐色	シルト質土	にぶい黄色土を斑状に少量含む
2	10YR4/1褐灰色	シルト質土	灰黄褐色土のブロックを多く含む

第11図　土坑実測図



（残存率）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	成形	（外　面）特　徴	（内　面）	写真図版
1	D－2	3次		SK－1	堆土		土師器	甕	(8.0)	(15.6)		磨滅・ロクロ	磨滅	28－8
2	C－6	3次		SK－4			土師器	甕	(24.9)	(21.8)	－	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	27－8

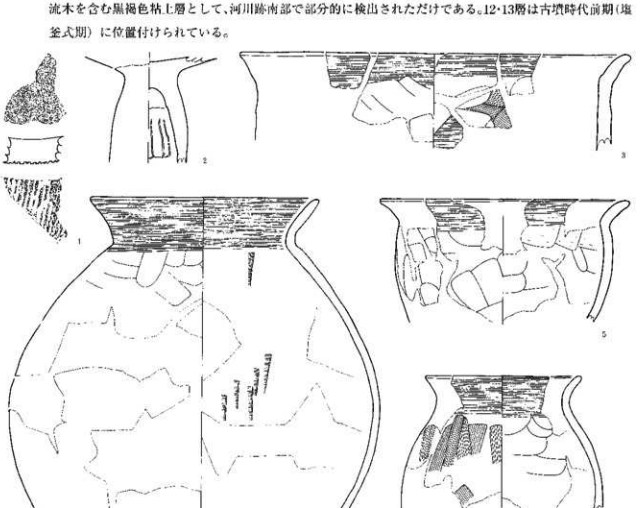
第12図　第３次調査土坑出土遺物

9　層　9層対応層は、調査区南部では20cm前後あり、3層に細分された。黒褐色の粘土層を未分解の植物遺体を含む黒色の粘土層が挟むように堆積している。第1次調査における9層の年代については、9層上部は古墳時代後期（住社式期）頃、9層中～下部は古墳時代中期（南小泉式期）頃に位置付けられている。

10　層　9層と比べるとやや明るい粘土層を指標とする。本調査区では黒色の粘土層として比較的広く分布している。層厚は10cm前後である。10・11層は古墳時代中期（南小泉式期）頃に位置付けられている。

11　層　黒色の粘土層を指標とするしているが、本調査区では当該層は検出されなかった。

12　層　オリーブ色の粘土や、樹木片を初めとする植物遺体を多量に含む層であるが、本調査区では植物遺体や流木を含む黒褐色粘土層として、河川跡南部で部分的に検出されただけである。12・13層は古墳時代前期（塩釜式期）に位置付けられている。



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺物層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特徴	写真図版
1	G－1	3次		SR－1	3層		平瓦			2.0		凹面布目、凸面平行叩き	28－9

（残存値）

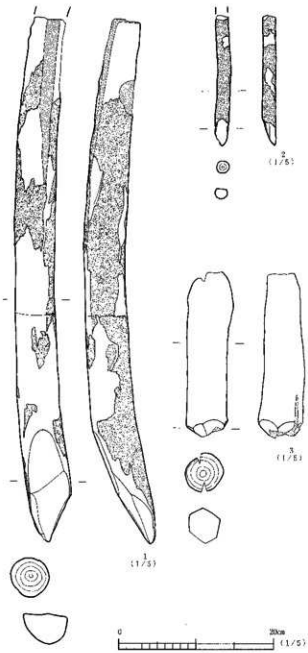
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺物層	取上番号	種別	器種	口径	底径	（外面）特徴	（内面）特徴	写真図版
2	C－10	3次		SR－1	9層		土師器	高杯	(8.7)	－	6.0		28－3
3	C－9	2次		SR－1	9層		土師器	甕	(7.5)	(30.4)	－	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	28－6
4	C－11	3次		SR－1	9層	No.2	土師器	甕	32.6	18.0	8.0	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	28－4
5	C－7	3次		SR－1	9層	No.1	土師器	甕	(9.7)	(19.6)	－	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ	28－2
6	C－8	3次		SR－1	9層	No.1	土師器	甕	(11.4)	(12.2)	－	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	28－3

第13図　第3次調査区河川跡3層～9層出土遺物

13　層　オリーブ黒色を基調とする粘土層であるが、本調査区には分布していない。

14　層　砂と樹木片などの植物遺体を多く含む黒色の堆積層を基調とする。本調査区では、砂は含まれていないが、対応すると考えられる黒色の泥炭質粘土層が河川跡の南端付近に部分的に分布する。第1次調査では、14・15層は弥生時代中期中頃（桝形囲式期）に位置付けられている。

15　層　植物遺体を多量に含むオリーブ黒色の粘土層を基調とするが、本調査区では黒色の粘土層として分布し、16層起源の浅黄色土を含んでいる。



2　主な層の状況と出土遺物

中在家南遺跡第3次調査区の河川跡は、河岸上部の調査であったために、第1次調査における河川跡のように木製品を主とする多くの遺物は出土していない。

①　3層出土遺物

3層からは、ロクロ土師器・非ロクロ土師器・須恵器・瓦などの細片が多数出土している。土師器は摩滅が著しい。遺構の時期と直接関るものではなく、自然堤防部からの流入と耕作による下層からの巻き上げにより同層に混入したものと考えられる。

②　6層出土遺物

6層からは非ロクロ土師器とみられる土器片が1点出土しているだけである。

③　9層出土遺物

9層では、河岸上部の9c層に相当する部分から、非ロクロ土師器が3点（第13図4・5・6：C－7・8、C－11）潰れた状態で接近して出土した（図版3－2・3）。C－7・8は2個体がまとまって出土した（図版3－3手前）が、保存状態は悪く、体部下半は欠損している。C－11は潰れた状態であるが、ほぼ1個体分の破片が出土している（図版3－2）。

C－7は、体部径より口径の大きな甕で、口縁は厚く、強く外反している。体部内外面はヘラナデ調整、口縁部はヨコナデ調整されている。

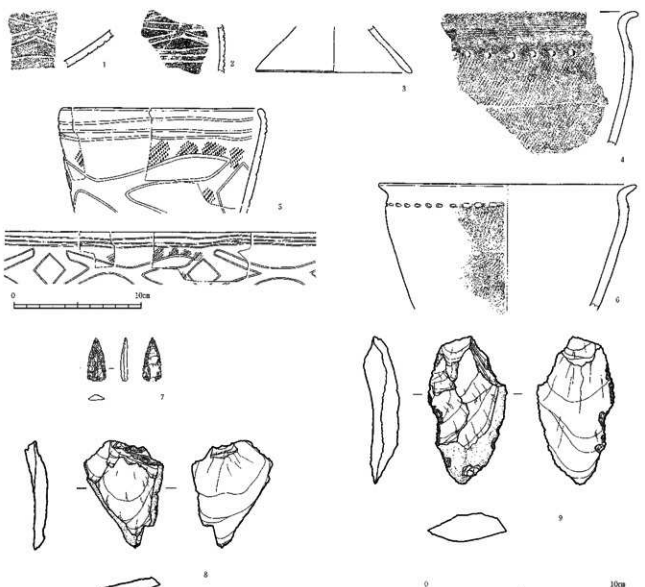
C－8は、体部が球形に近い脹らみを持つ甕で、厚みのある口縁部は、緩やかに外反している。体部は外面がハケメ調整、内面がヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデ調整されている。

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－3	3次		SR－1	9層	No.1	杭・丸杭	69.0	5.8	5.8	先端加工、2面2段		芯持丸	29－7
2	L－1	3次		SR－1	16層	No.1	杭・丸杭	17.3	1.7	1.7	先端加工、1面1段		芯持丸	29－5
3	L－2	3次		SR－1	16層	No.2	杭・丸杭	21.8	5.9	5.8	先端加工、6面？1段		芯持丸	29－6

第14図　第3次調査区河川跡出土杭

Ｃ－11は、体部が均整のとれた球形の甕で、口縁部は外反している。体部は外面が主にナデ調整、内面がヘラナデ調整され、口縁部はヨコナデ調整されている。

９層からは、このほかに体部が直立気味に立ち、口縁部が短く外傾する甕の破片（第13図３：Ｃ－９）や、筒部の中央が脹らむ高杯脚部破片（第13図２：Ｃ－10）のほか、多数の土師器と数点の弥生土器片が出土している。図化した土師器については、中在家南遺跡第1次調査の９ｂ・９ｃ層出土土師器の考察結果と同様に、南小泉式期の範疇に位置付けることが可能と思われる。



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）特	徴	（内　面）	写真図版
1	Ｂ－２	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	高杯				層波文・植物集団軽文	ヘラミガキ		27－２
2	Ｂ－５	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	鉢				層波文	ヘラミガキ		27－３
3	Ｂ－４	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	鉢	(3.7)	12.4		ミガキ	ヘラミガキ		27－４
4	Ｂ－６	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	甕				口縁部縄文・列点文			27－６
5	Ｂ－３	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	鉢	(7.9)	15.8		平行沈線文・鋸形文・羽形文			27－５
6	Ｂ－７	３次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	甕	(10.0)	10.4		列点文	ヘラミガキ		27－７

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特　徴		写真図版
7	Ｋ－３	３次		ＳＲ－１	15層		石器・石鏃	2.3	1.0	0.4	0.7	茎欠損、	珪化凝灰岩	29－３
8	Ｋ－５	３次		ＳＲ－１	15層		石器・不定形石器	5.4	4.1	0.9	16.2		珪化凝灰岩	29－４
9	Ｋ－４	３次		ＳＲ－１	15層		石器・不定形石器	7.7	4.1	1.5	38.7		流紋岩	29－２

第15図　第３次調査区河川跡15層出土遺物

七師器の他には、９層で杭が１点（第６図）検出されている。現存長が69cmの樹皮付の丸杭で、先端は２面から２段の加工がされて、鋭角的に尖っている（第14図１：Ｌ－３）。打ち込み面は不明である。

④　10層出土遺物

10層は、土層の分布状況に比較して遺物は少なく、土師器及び弥生土器片が少数出土しているだけである。図化した遺物はない。

⑤　15層出土遺物

15層からは、弥生土器片と石器が比較的多く出土している（第15図）。弥生土器には、肩部に張りをもち口縁部が強く外反する粗製の甕（Ｂ－６・７）、体部から口縁部まで直立ぎみに外傾して立ちあがり、口縁部がわずかに内湾する鉢（Ｂ－３）、刷毛目（連弧文または連続山形文・赤澤靖章：1996「中在家南遺跡出土の弥生土器について」『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集）の付された小型鉢（Ｂ－５）、同じく層波文の付された高杯の杯部の破片（Ｂ－２）、無文の壺（Ｂ－４）などがある。Ｂ－２・４・５・６・７については、中在家南遺跡第Ⅰ次調査のⅢ・Ⅸ区出土の14・15層の弥生土器に類例が求められ、弥生時代中期中葉の桝形囲式に位置付けられる。

Ｂ－３の鉢は、鉢としては大きいが、壺などの含めると小型の部類に属するにもかかわらず、文様帯の幅は比較的広く、大きな割付によって菱形文とＸ字文が交互に各２単位描かれている。文様を描く沈線の幅もＢ－２・５をはじめ第Ⅰ次調査のⅢ・Ⅸ区出土の桝形囲式土器に比べるとやや広い。このような模様の鉢については、前回の調査資料には類例がなく、他の14・15層出土土器と同様に桝形囲式土器の範疇で考えられるものか、模様の幅が広く単位が大きいこと、沈線がやや太いことなど古相の特徴を持つことから他の土器と区別して考えるべきか検討を要する。

石器は、石鏃１点（Ｋ－３）、スクレイパー１点（Ｋ－４）、微細剥離痕のある剥片（Ｋ－５）のほか、剥片が８点出土している。

⑥　16層上面検出杭

河川跡（堆積土新層）底面にあたる16層上面において、２本の杭（第６図・第14図２・３：Ｌ－１・２）が検出された。Ｌ－１は直径1.7cm、現存長17.3cmの細い丸杭である。先端には１面から１段の加工がなされて尖っている。Ｌ－２は、直径5.8cmの丸杭である。先端には規則的に６方向から各１段の加工が施されているが、先端面は鈍角である。打ち込み層位は不明である。

第３章　中在家南遺跡第4次調査の概要

第１節　発見遺構の概要と基本層位

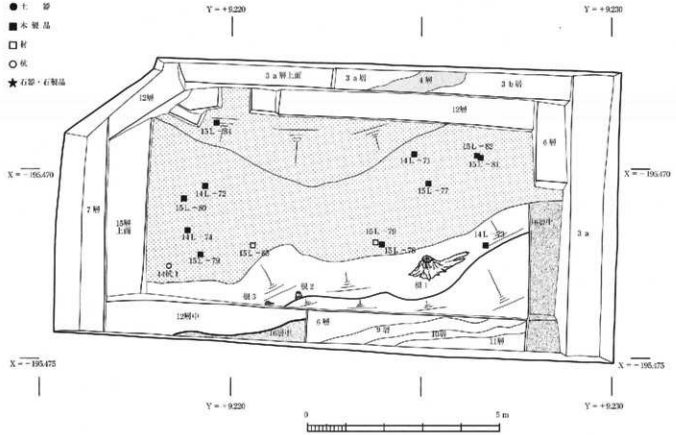
１　第４次調査区の位置

第４次調査区は、中在家南遺跡の中央よりやや東側に位置する。区画整理以前の標高は、4.9m前後で、水田に盛土をして畑とされていた。他の調査区との関係は、第１次調査Ⅰ区南部の東側、Ⅵ区西部の南側にあたる。また、Ⅵ区を挟んで第３次調査区の南側にあたる。第４次調査区のほぼ全体が、Ⅰ区・Ⅵ区で検出された河川跡の南半部の中に入っている。（第５図）

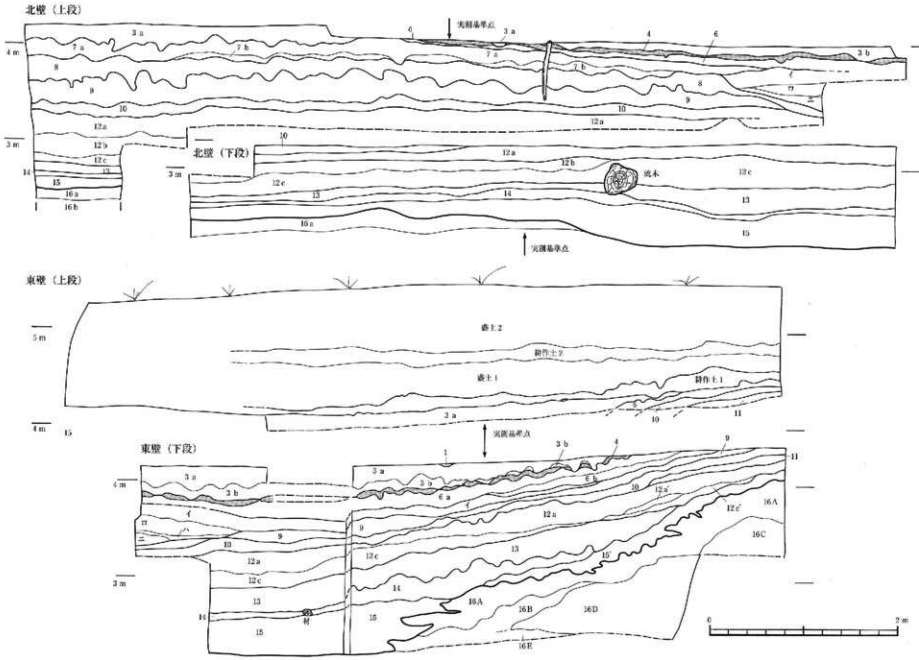
第１次調査Ⅱ区・Ⅵ区の河川跡においては、２層で近世頃の水田の畦畔痕跡が、３ａ層で中世の水田跡の畦畔痕跡と杭列を伴う水路跡が検出されている。また３ａ層以下の河川跡堆積層中から木製品等の多数の遺物が出土している。

２　発見遺構の概要

前記のとおり、第４次調査区は河川跡（ＳＲ－１）内に位置する調査区であり、河川跡の南岸下半部から河川跡底面南半部が検出された。河川跡の堆積土で検出された遺構としては、３ａ層を耕作土とする水田跡がある。また、杭が何本かあるが、これについては、杭の検出された各河川堆積土層の概要と併せて記述する。



第16図　中在家南遺跡第４次調査区平面図及び14層・15層遺物出土位置図



第17図　中在家南遺跡第４次調査区断面図

第17図土層注記

土層No.	土色	土質	備考
盛土２	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色土・暗灰色土のブロックを含む、上部に山砂を含む
耕作土２	10YR4/1 褐灰色	シルト	盛土１の後の耕作土（畑地）
盛土１	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	灰黄色土のブロックを多く含む、ブロック状の土層
耕作土１	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	旧水田耕作土
３ａ	10YR2/2 黒褐色	粘土	下部に黒色泥炭・灰白色火山灰のブロックを含む、水田耕作土
３ｂ	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	一部に暗褐色の泥炭を含む
４	10YR8/2 灰白色	火山灰	いわゆる「灰白色火山灰」(915年降下)
６ａ	7.5YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	黒色の泥炭を縞状に含む
６ｂ	10YR3/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
７ａ	5Y3/2 オリーブ黒色	粘土	黒色土粒・白色土粒を少量含む
７ｂ	5Y4/2 灰オリーブ色	粘土	しまりなく粘性弱い
イ	2.5Y2/1 黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
ロ	2.5Y3/1 黒褐色	泥炭質粘土	
ハ	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	
ニ	10YR2/2 黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
８	5Y3/2 オリーブ黒色	粘土	粘性強くしまりなし、灰オリーブ色粘土・黒色粘土を互層状に含む
９	10YR1.7/1 黒色	粘土	南岸部は黒色の泥炭に変化
10	10YR2/3 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む

土層No.	土色	土質	備考
11	10YR2/1 黒色	泥炭質粘土	南岸部にのみ分布
12ａ	10YR2/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体（草本類）を多く含む
12ａ'	10YR3/2 黒褐色	泥炭	
12ｂ	10YR2/3 黒褐色	粘土	黄褐色土粒を多く含む
12ｃ	10YR2/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
12ｃ'	10YR3/2 黒褐色	泥炭	
13	2.5Y3/2 黒褐色	砂質粘土	木片・ドングリ・クルミを多量に含む、北側にオリーブ黒色[illegible]
14	2.5Y2/1 黒色	粘土	植物遺体を含む、層の下部に砂を多く含む
15	5Y2/2 オリーブ黒色	粘土	木片を多量に含む
15'	10Y3/1 オリーブ黒色	砂質粘土	植物遺体を少量含む
16ａ	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	粘土	砂を少量含む
16ｂ	10GY4/1 暗緑灰色	粗砂	小礫（径１～３cm）を含む、自然木を含む
16Ａ	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂	
16Ｂ	7.5GY4/1 暗緑灰色	砂	同色の粘土をまばらに含む
16Ｃ	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土	砂を少量含む
16Ｄ	10GY5/1 緑灰色	粗砂	
16Ｅ	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土	炭化物粒を少量含む

１）河川跡の状況

本調査区は、１次調査Ⅱ区からⅥ区にかけて東西方向に流れる、推定幅約25mの河川跡の中央から南岸にあたり、表土を除去した段階で、河川跡の堆積土が検出された。調査は、調査区内を階段状に掘り下げて、河川跡（河川堆積土新層）の底面を検出するまで行った。（第16図）その結果、調査区の南壁側で河川堆積土古層（河川跡堆積土下部＝16層）を壁面とする河川跡の南岸斜面と、河川跡底面の南半部が検出された。河川跡の検出面（３ａ層上面）から底面までの深さは約２ｍである。

岸面の上端は、調査区南東角部では、河川跡検出面から約40cm掘り下げた面で検出された。検出された岸面の上部１/３は12～13°の比較的緩やかな斜面であるが、下部２/３は20°前後のやや急な斜面に変化する。

底面は、小礫を含む粗砂層で、湧水がある。調査区の北側の底面は砂層が十数cm高くなっているが、Ⅱ区・Ⅵ区の調査状況から推察すると、このまま河川跡北岸に立ち上がるのではなく、水流によって形成された河川跡底面の微起伏と判断される。河川跡南岸下端と、北側の底面の盛り上がり部分に挟まれた低地部分は幅が２～４ｍある。なお、河川跡南岸斜面の中位に沿って、樹木の幹と根の境付近の遺存体が、生育していた当時の状況のまま検出されている（第16図根１～３）。

２）３ａ層水田跡

盛土のうえ畑にされる以前の水田耕作土を除去すると、第18図及び図版７－２のような、河川跡の流路方向に一致して東西にのびる土層の帯が検出された。このうち調査区の北側に位置する３ａ'１層は、ブロック状の堆積土で、層下部から３ｂ層及び４層の灰白色火山灰層が良好な保存状態で検出されることから、３ａ層水田跡に伴う畦畔の盛り土の一部と考えられる。３ａ'１層の幅は、36～73cmである。約10mにわたって検出されている。３ａ'１層の両側には、分解度の低い土層（３ａ'２層・３ａ'３層）が平行して分布している。３ａ'２層は、３ａ層上部のように十分に攪拌されて均一な耕作土層になっていないことから、上部に畦畔が形成され、継続的に耕作の影響を受けていなかった可能性がある。したがって３ａ層水田の畦畔は３ａ'１層の幅よりも広く、３ａ'２層の幅を含む広さの畦畔であった可能性が考えられる。また、３ａ'３層については、第1次調査Ⅵ区の３ａ層水田跡に伴う水路の延長線上に位置していることから、溝の堆積土の一部である可能性がある。

調査区南側の河岸部は、１層水田の耕作のため３ａ層は残存しておらず、４層以下の土層の立ち上がりが平面的に検出された。この下層の分布ライン付近では、畦畔の存在を示す遺構・土層が検出されていない。したがってこのライン上に、３ａ層水田の畦畔が存在したかどうかは明らかでない。

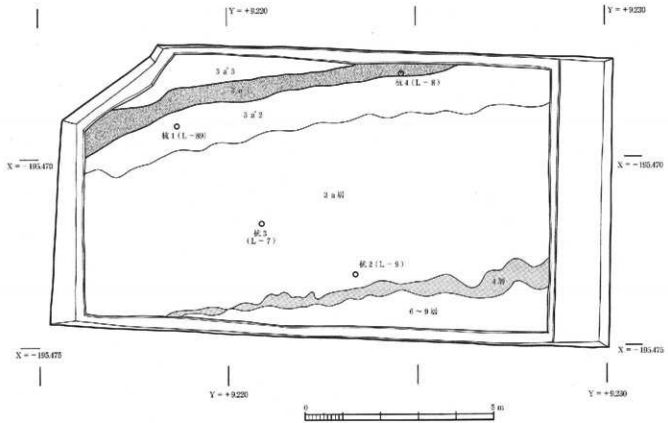
３ａ層上面では、３本の杭が検出されている。（第18図杭１～３）各杭は3.5～３ｍの間隔で直線的に並んでいるが、調査区北側で検出された畦畔痕跡の方向には直交せず、斜めになって分布している。打ち込み面も明らかでなく、３ａ層水田跡との関係も不明である。

３ａ層からは、多量の土師器・須恵器片が出土しているが、３ａ層水田跡と直接関係すると考えられる遺物としては、無釉陶器の甕片（Ｉ－２・３）と施釉陶器の碗の破片（Ｉ－４）、及び中国青磁の碗の破片（Ｊ－２）がある。

Ｉ－２は常滑産の甕の体部片で外面には格子の叩きとナデの痕跡が認められる（第20図６）。Ｉ－３は、常滑産の甕口縁部の破片で、口縁端部が上下両方向に短く折れていることから14世紀前半頃のものと考えられる（図版32－10）。Ｉ－４は、瀬戸美濃産と考えられるの碗で、灰白色の胎土にわずかに白濁した釉薬が施され、釉薬には貫入が認められる（図版32－12）。Ｉ－４については16～17世紀頃の製品と考えられる。16～17世紀という年代の遺物は、３ａ層出土遺物としてはこれまで出土した遺物の中では最も新しく、３ａ層水田跡の下限が中世末から近世初め頃になる可能性が考えられる。Ｊ－２は外面に蓮弁文の付された碗の破片で、13～14世紀代のものと考えられる（図版32－11）。

木製品は、火鑽臼（第21図２：Ｌ－５）の端部破片と、曲物の側板と考えられる薄い柾目板の破片（第21図４：Ｌ－９）が出土している。材には、側面に加工のある角材（第21図６：Ｌ－６）がある。

３ａ層検出の杭は、杭１が先端に１面多段の加工のある割杭、杭２が先端に５面多段の加工のある芯持ち丸杭、杭３（第21図10：Ｌ－７）が先端に３面多段の加工のある大型の角杭で、現存長199.8cm・幅17.3cm・厚さ11.2cm を測る。



土層No.	土色	土質	備考
3ａ	10YR2/2 黒褐色	粘土	下部に黒色泥炭・灰白色火山灰のブロックを含む水田耕作土
3ａ'1	10YR2/1 黒色	粘土	灰白色火山灰（径１～３cm）及びに赤い黒褐色シルト（７層）のブロックをまばらに含む。下部から灰白色火山灰堆積の積入土

土層No.	土色	土質	備考
3ａ'2	10YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	３ｂ層起源の泥炭のブロックを多量に含む
3ａ'3	10YR2/1 黒色	粘土	径１cm の枝や未分解の植物遺体を少量含む
4	10YR8/2 灰白色	火山灰	いわゆる「灰白色火山灰」

第18図　河川跡３層水田跡

第２節　河川跡の堆積土と出土遺物

１　河川跡の基本層位

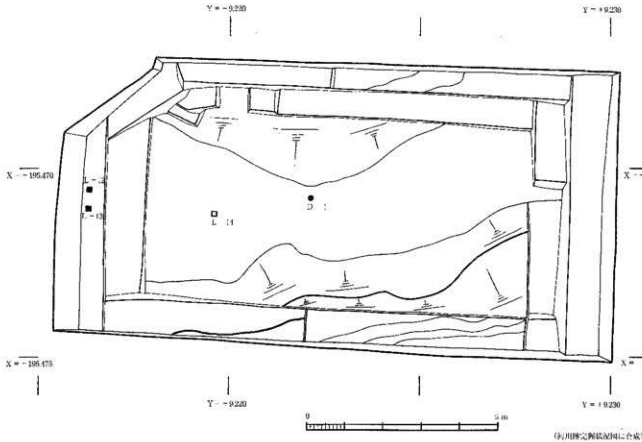
中在家南遺跡第４次調査区において検出された河川跡の、３ａ層水田耕作土層より下の堆積土（河川堆積土新旧）は、前回の調査成果をもとに、３ｂ層・４層・6a層・６ｂ層・７ａ層・７ｂ層・８層・９層・10層・11層・12ａ層・12ｂ層・12ｃ層・13層・14層・15層に分けられ、いくつかの層はさらに細分された（第17図）。７層と８層の間には、調査区東半の河川跡中央部分の凹地にだけ分布し、これまでの堆積層と対比できない層（第17図イ～ニ層）も確認された。河川跡の南側では16層（河川堆積土古層）が河岸面となっている。各層と出土遺物の概要は、次ぎのとおりである。

２　各層の堆積状況と出土遺物

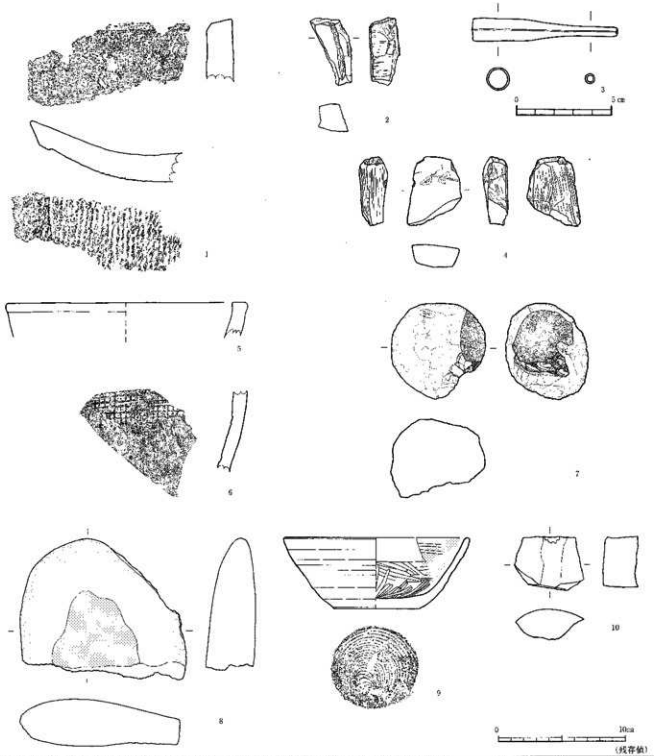
１）３ｂ層と出土遺物

３ｂ層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、部分的に暗褐色の泥炭を含む。層上部は３ａ層水田の耕作により削平を受けているが、河川跡の中央よりの部分では15cmほどの厚さで残っている。河岸上部に移行するにしたがって３ａ層水田の耕作の影響によって残存状況が悪くなっている。

出土遺物は、少量の土師器片と古代瓦１点の他、縁辺部が摩滅した板材（第21図３：Ｌ－11）などがある。これらの遺物と、３ｂ層の堆積時期との直接の関係は不明である。



第19図　河川跡６層遺物出土位置図



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特徴	写真図版
1	G－2	4次		SR－1	1層		平瓦					凹面布目、凸面縄叩き	32－7
2	K－7	4次		SR－1	1層		弧石	5.4	2.3	1.8	35.2	珪化凝灰岩	33－2
3	N－1	4次		SR－1	1層		鑓管	7.6	1.2 0.3		10.3	吸口金具	33－7
4	K－6	4次		SR－1	1層		弧石	5.4	3.8	1.9	54.1	珪化凝灰岩	33－1
5	I－1	4次		SR－1	2層		陶器	(2.7)	(18.8)			瓦質陶器	32－8
6	I－2	4次		SR－1	3a層		陶器・鷹					常滑産	32－9
7	K－10	4次		SR－1	3a層		石器・叩石	6.5	7.5	5.7	415.3	安山岩	33－5
8	K－8	4次		SR－1	6層		砥石	10.2	12.6	3.7	740	磨一面、全面焼け、	玄武岩	33－3
10	K－9	4次		SR－1	8層		石器・石斧	4.1	5.2	2.4	82.2	光沢あり、	珪化凝灰岩	33－4

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）	特徴	（内面）	写真図版
9	D－3	4次		SR－1	6層	No.1	土師器	坏	5.7	14.6	6.6	底部回転糸切り	黒色処理、ヘラミガキ		32－5

第20図　第4次調査区河川跡1層～8層出土遺物

2）4　層

4層は、西暦915年に降下したとされる「十和田a火山灰」層である。3a層水田跡の耕作による撹乱を受けて上面に凹凸が生じているが、河川跡のほぼ全面で検出された。畦畔下部など、保存状態の良好な部分では6～5cmの厚さで堆積している（図版7－4）。

出土遺物はない。

3）6a層・6b層と出土遺物

6層は、河川跡中央部の、黒褐色泥炭質粘土層からなり、植物が未分解のまま残存している部分（6a層）と、河岸部の黒褐色の粘土層となっている部分（6b層）とに分けられる。6層の大部分は6a層が占めている。その境は明確なものではなく漸移的である。6層の層厚は、調査区東部の河川跡中央部分では18cm前後あるが、西部に移行するにしたがって徐々に薄くなる。調査区西端付近では、薄くなった6層が3a層水田跡の掘削による影響を受けて残存していない部分もある。

遺物は、ロクロ土師器杯（D－3）、砥石（K－8）、木製品（L－12）、材（L－13・14・15）のほか、少量の土師器片と須恵器片が1点出土している。木製品や土師器杯は、河川跡の流路中央よりのところから散在的に出土している（第19図）。土師器杯D－3は、大きな底部から、やや内湾気味に外傾して体部から口縁部にいたる器形で、底部外面は回転糸切り無調整である。砥石は、扁平な円礫をそのまま使用している。片側の緩やかな凸面の中央部を砥面としている。中央付近から割れ、全面が焼け焦げている。

木製品L－12（第22図1）は、長方形の孔の開いた扁平な角材と、この孔に挿入された端部が頭状に肥大するように加工された板材とが組み合わされているもので、挿入された板材にも方形の孔が穿たれている。（図版7－6）他の複数の材と組み合わされて使用されたと推定されるが、その用途は不明である。材L－13は、現存長39.7cm・幅4.4cm・厚さ3.0cmの扁平な角材で、幅の広い面に長方形の孔が2箇所に空けられている。建築材の可能性が考えられる。材L－14は、現存長44.5cm・幅8.1cm・厚さ5.9cmの角材で、片側の端部に加工痕がある。材L－15は、残存長14.4cm・残存幅3.9cm・厚さ0.9cmの板目材で、側辺に小さな円孔が約8cmの間隔で2ヵ所に穿たれている。

4）7a層・7b層と出土遺物

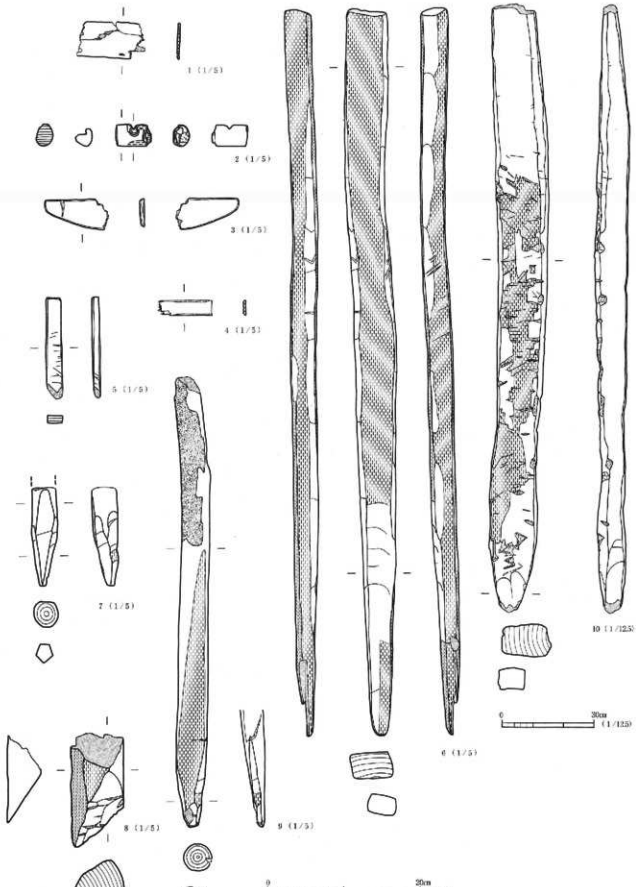
7a層はオリーブ黒色の粘土、7b層は灰オリーブ色の粘土層で、ともに河川跡の北側（調査区北西側）に分布している（図版8－1）。6層と異なり、未分解の植物遺体は観察されなくなり、泥土の堆積層に変化する。層厚は、7a層が15～20cm前後、7b層が5～10cmである。

遺物は、層厚の割りに少なく、摩滅した土師器片数点と、先端に加工痕のある丸材（L－16）と半裁丸材（L－17）が各1点出土しているだけである。

7層と8層の堆積の間には、この段階の河川の最深部に沿った流路が形成され、この流路の両地にはイ・ロ・ハ・ニの、基本層とは異なる土層が堆積している。この層には未分解の植物遺体が含まれている。

5）8層と出土遺物

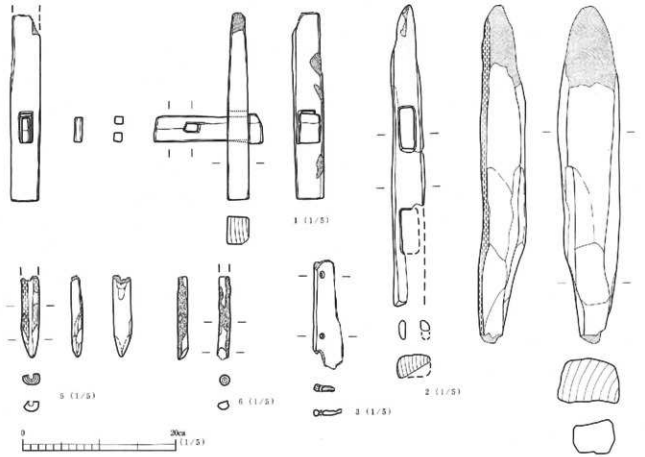
8層はオリーブ黒色の粘土層で、黒色粘土層を斑状に含んでいる。分布範囲は、7層の範囲とほぼ一致しており、この段階の河川跡流路最低面の北側に限られている（図版8－2）。層厚は15～30cm前後あり、比較的厚く堆積している。層底面には凹凸が著しい。出土遺物は少なく、土師器片1点と石斧の破片（第20図10）及び礫が1点出土しているだけである。



第21図　第4次調査区河川跡2層～3b層出土木製品類

第21図　観察表

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－4	4次		SR－1	2層		杭・板材	4.8	9.0	0.3	動物餌板？		板目	34－1
2	L－5	4次		SR－1	3ａ層		木・火熱日	2.9	4.7	2.1	端部辺に切断有り	スギ	芯無丸	34－2
3	L－11	4次		SR－1	3ｂ層		木・不明	4.1	8.9	0.6		セミ属	板目	34－4
4	L－9	4次		SR－1	3ａ層		杭・板材	2.0	7.0	0.3	動物餌板？		柾目	34－3
5	L－10	4次		SR－1	3ａ層		杭・角材	13.5	2.1	1.0	片端折れ		芯無角	34－5
6	L－6	4次		SR－1	3ａ層		杭・角材	96.0	5.7	3.6	横面に加工有り		芯無角	34－6
7	L－90	4次		SR－1	3層	統・№2	杭・丸伐	13.1	3.4	3.3	先端加工、５面多段		芯待丸	34－9
8	L－89	4次		SR－1	3ａ層	統・№1	杭・潜伏	15.1	7.0	4.4	先端加工、１面多段		芯無角	34－10
9	L－8	4次		SR－1	3ａ層	統・№4	杭・丸伐	39.5	4.0	3.6	先端加工、３面多段、皮皮付着		芯待丸	34－8
10	L－7	4次		SR－1	3ａ層	統・№3	杭・角伐	199.8	17.3	11.2	先端加工、３面多段		芯無角	34－7



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－12	4次		SR－1	6層	木・№1	木・不明	24.8			組み合わせ木製品（２材）	コナラ属	芯無角	35－1
2	L－13	4次		SR－1	6層	木・№2	材・角材	39.7	4.4	3.0	端部材？、方孔２ヶ所		芯無角	35－2
3	L－15	4次		SR－1	6層		材・板材	14.4	3.9	0.9	幅面に円孔２ヶ所		板目	35－3
4	L－14	4次		SR－1	6層	材・№1	材・角材	44.5	8.1	5.9	片端一部に加工有り		芯無角	35－4
5	L－17	4次		SR－1	7ｂ層		材・半截丸材	10.8	2.3	1.5	先端加工、４面１段		芯待丸	35－5
6	L－16	4次		SR－1	7ｂ層		材・丸材	11.6	1.5	1.4	先端加工、１面１段		芯待丸	35－6

第22図　第４次調査区河川跡６層～７ｂ層出土木製品類

6）9　層

9層は黒色の粘土層で、河川跡の南部ほど未分解の植物遺体の含有量が多くなる。検出された河川跡の河岸部から底面までほぼ全面に分布している。河川跡中央付近では30cm 前後の厚さで堆積し、河岸部に寄るにしたがって徐々に薄くなっている。河川跡の南側に位置する第4次調査区では、9層の細分はできなかった。

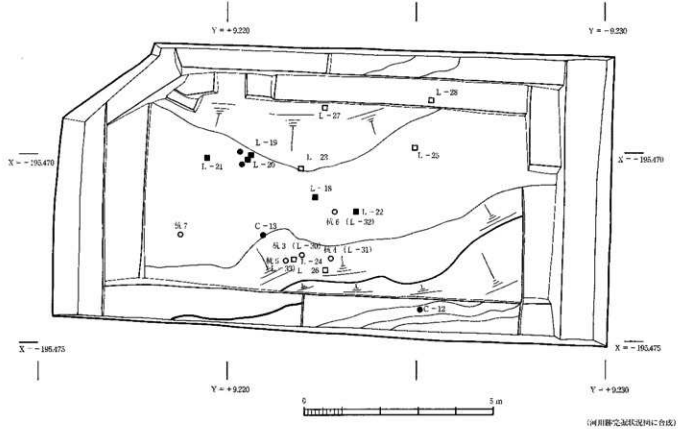
河川跡南岸に位置する本調査区の9層からは、層厚が厚い割りに遺物は出土していない。本調査区と反対側の河川跡北岸に位置する第1次調査Ⅱ区や、Ⅵ区及び第3次調査区の9層から、土師器や石製模造品などの豊富な遺物が出土している状況とは様相を異にしている。

7）10層と出土遺物

この段階まで下がると河川跡の南岸は、調査区南東部から北西部に向かって緩やかな斜面となっている（図版8－3）。10層は、黒褐色の粘土層で、樹木片を含む未分解の植物遺体を多く含んでいる。河川跡の全面に分布し、層厚は10～15cm 前後で、河岸部から河底部まで比較的平均な層厚で堆積している。

10層からは、周辺の第1次調査Ⅱ区やⅥ区同様に、土師器・須恵器・木製品・材など多数の遺物が出土している（第23図）。また、この層中から杭が5点検出されているが、相互の関係及び機能は明らかでない。

土師器は、南岸上部で甕が1個体（C－12）と南岸下部から杯（C－13）のほか多数の破片が出土している。甕C－12（第24図1）は、底部から体部下半まで外傾しながら立ち上がり、体部上半は半球形を呈し、頸部がくびれて口縁は外傾する。外面の調整は、体部はハケメのち中央部がケズリ調整、口縁部はハケメ調整のち端部がヨコナデ調整されている。器形と調整を見ると、10層から出土している他の土師器よりも古い特徴が認められ、塩釜式期に所属することが考えられる。古いものの流入か、取上げ層位の誤認の可能性がある。杯C－13（第24図2）は、



（河川跡完掘状況図に合成）

第23図　河川跡10層遺物出土位置図

口縁部をわずかに欠損するがほぼ完全な形で残存している。扁平な半球形の杯で、口縁部がわずかに内湾している。調整は、外面体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ調整され、内面はヨコナデのち放射状にヘラミガキされている。第1次調査Ⅱ区・Ⅵ区出土品にも類似品があり、南小泉式期の範疇に位置付けることができる。

須恵器E－3（第24図3）は、鬲の口縁部破片と考えられるものである。口唇部は平坦で、外方に傾斜している。口唇から少し下がった外面には断面形三角の隆帯が巡っている。

木製品には横鍬2点（L－19・20）・ナスビ型平鍬1点（L－21）・竪杵1点（L－22）・丸棒1点（L－18）がある（第25図）。横鍬L－19は、全長14.5cm・幅約51.5cmあり、後面に流線型の着柄隆起が作られ、柄穴は円形である。L－20も横鍬の破片で、着柄隆起は剥がれているが、流線型を呈すると観察され、柄穴は円形である。

ナスビ型平鍬L－21は、身部の上部から着柄軸の下半部の破片である。軸部から身部上部にかけては八字状に広がり、ナスビのヘタにあたる部分は小さな突起状に造り出されている。身部の後面中軸上には緩やかな稜線が形成されている。

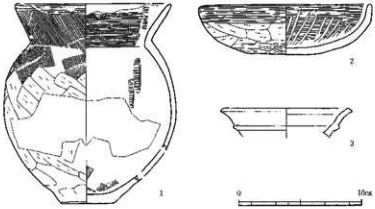
竪杵L－22は、2つの流線型の狭端側を合わせたような形態の製品で、搗き部の片側が出土している。残存長39.2cm・最大径9.0cmを測る。芯去り材を加工して丸く作っている。

丸棒L－18は、残存長28.6cm・最大径2.8cmある。芯去り材を加工して作られたもので、片側は徐々に細くなるように加工され、他端は折れている。柄の部類の可能性がある。

材には、建築材1点（L－24）・板材2点（L－23・27・29・91）・丸材3点（L－25・26・28）などがある（第26図）。建築材L－24は梯子板で、現存長が132.5cmあり、4段の踏み段が残る。下端部は下段の踏み面から約37cmあり、先端は舌状に円く尖っている。各段の間隔は30～35cmである。残存部の上端は、ここで端部となるのか、さらにのびるのかは、背面が欠損しているので明らかでない。

板材L－23は、幅約4.5cmの板目板で、約8cmの間隔で孔があけられている。板材L－27は、幅広のナナメの木取り板材で、4個の孔があけられている。板材L－29は、残存長12.5cm・幅4.8cm・厚さ1.4cmの板目板で、折れた木口に円孔の痕跡が残っている。L－91は、残存長約10cm・残存幅5.8cm・厚さ0.9cmの板目板で、残存する側面と木口面が鈍角に加工されている。木口近くと側面の近くの2ヵ所に円孔のあけられていた痕跡が残っている。

丸材L－25は、直径5cmの丸木で、片方の端部に1面から斜めの切断痕がある。丸材L－26は、直径5cm前後の樹皮付きの丸木で、片方の端部に多方向からの加工がなされて尖っている。丸材L－28は、長さ約123cm・直径約3cmの丸木で、片方の端部がやや肥大している。両方の端部は、加工されたように滑らかに丸くなっている。柄として使用されていた可能性がある。

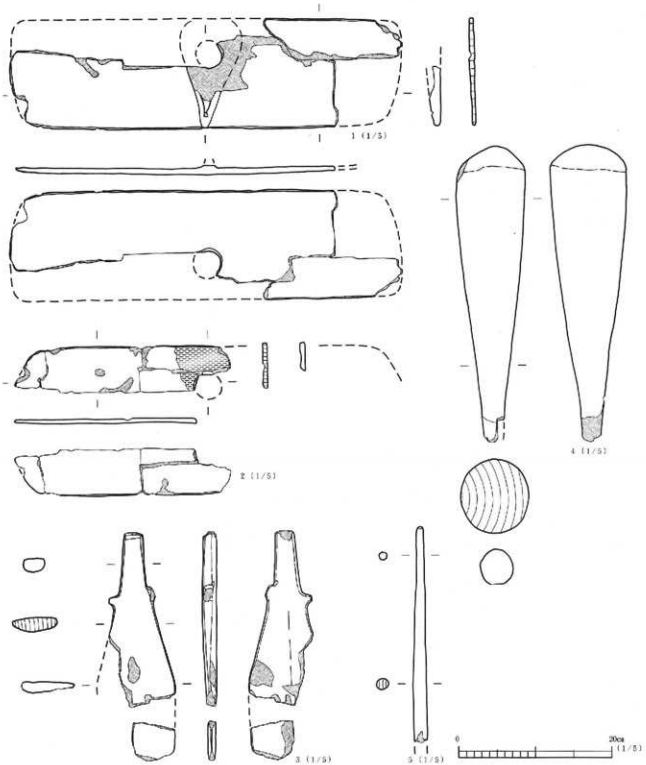


杭は、調査区中央付近の南岸寄りから5本検出されている（第27図）。相互の関係は不明であるが、比較的大型の杭が多い。杭－3（L－30）は、芯無しの割杭で、全面に割面があり、先端が部分的に加工されている。杭－4（L－31）は、芯持ちの丸杭で、広端部の全周の3分の2ほどに加工を施し、尖らせている。杭－5（L－33）

（残存値）

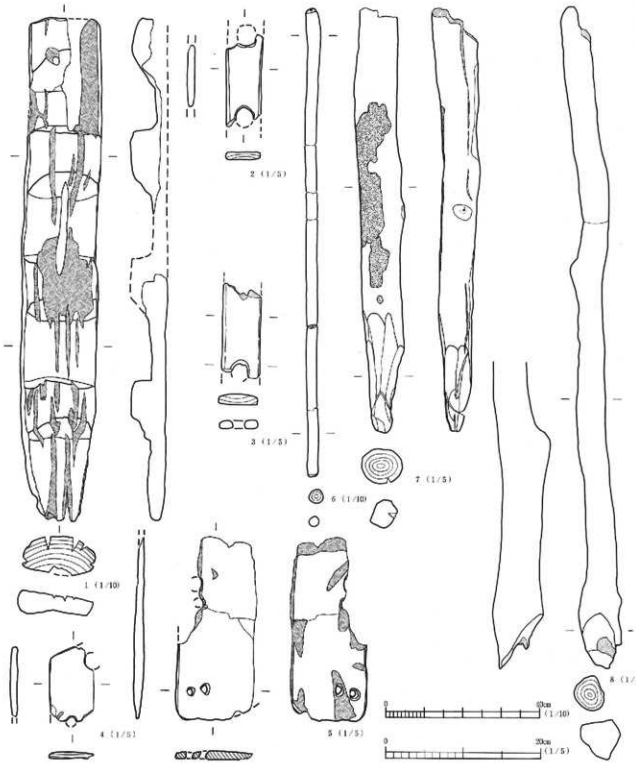
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）特徴	（内面）	写真図版
1	C－12	4次		SR－1	10層	No.1	土師器	甕	16.3	(12.6)	4.2	ハケメ・ヘラケズリ	ハケメ・ヘラナデ	30－6
2	C－13	4次		SR－1	10層	No.4	土師器	坏	4.1	14.0	－	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ	30－5
3	E－3	4次		SR－1	10層		須恵器	鬲？	3.4	10.1				32－6

第24図　第4次調査区河川跡10層出土遺物



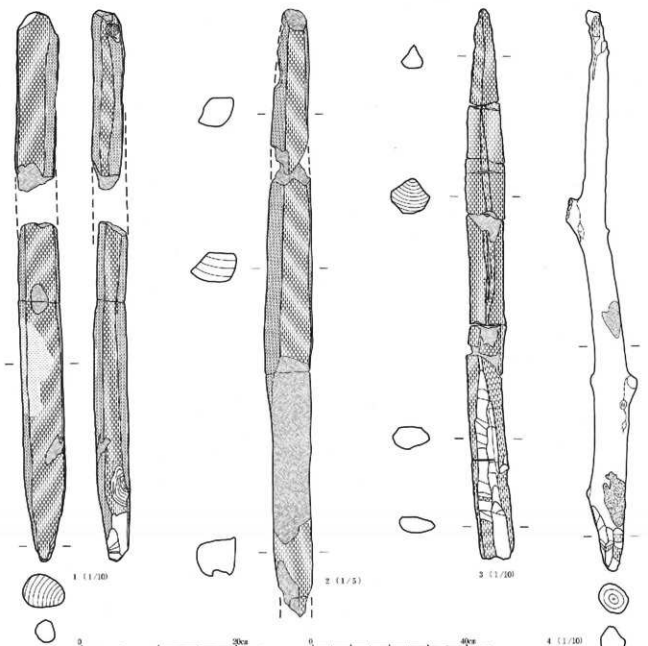
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－19	4次		SR－1	10層	木・Na 2	木・横鍬	14.5	51.5	1.4	着柄隆起流線形、柄孔円形	クスギ芯	柾目	35－7
2	L－20	4次		SR－1	10層	木・Na 4	材・横鍬？	6.1	28.4	0.6	端部辺	クスギ芯	柾目	36－1
3	L－21	4次		SR－1	10層	木・Na 6	木・ナスビ形半壁	23.1	7.0	1.9	上下両端欠損	クスギ芯	柾目	36－2
4	L－22	4次		SR－1	10層	木・Na 7	木・竪杵	39.2	砧部杵 9.0×9.8		片側欠損	クスギ芯	芯無丸	36－4
5	L－18	4次		SR－1	10層	木・Na 1	木・丸棒	28.6	長柄 1.8	短柄 1.4	片端割れ	スギ	芯無丸	36－3

第25図　第4次調査区河川跡10層出土木製品類1



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構種別	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－24	4次		SR－1	10層	材・No16	材・梯子	132.5	20.0	9.0	4段残存	クリ	板目	37－1
2	L－23	4次		SR－1	10層	材・No.1	材・板材	12.3	4.7	1.0	円孔有り		板目	36－6
3	L－29	4次		SR－1	10層		材・板材	12.6	4.9	1.4	円孔有り、側面丸		板目	36－7
4	L－91	4次		SR－1	10層	材・No.13	材・板材	10.1	5.9	0.9	円孔有り		板目	36－8
5	L－27	4次		SR－1	10層	材・No12	材・板材	24.2	10.1	1.1	円孔有り		ナナメ	36－5
6	L－28	4次		SR－1	10層	材・No13	材・丸材	123.5	3.8	3.5	両端摩滅		芯持丸	37－2
7	L－26	4次		SR－1	10層	材・No17	材・丸材	56.2	5.8	4.5	先端加工、多面１段、樹皮付着		芯持丸	37－4
8	L－25	4次		SR－1	10層	材・No14	材・丸材	87.2	5.4	6.7	先端加工、１面多段		芯持丸	37－3

第26図　第４次調査区河川跡10層出土木製品類２



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－30	4次		SR－1	10層	残・No.3	杭・割杭	(315.5)	11.0	9.0	先端加工、1面多段		芯無	37－6
2	L－32	4次		SR－1	10層	残・No.6	杭・角杭	180.2	6.3	4.5	先端加工、不明		芯無角	37－7
3	L－33	4次		SR－1	10層	残・No.5	杭・割杭	144.7	10.5	9.1	先端加工、不明、樋画加工有り		芯無	37－5
4	L－31	4次		SR－1	10層	残・No.4	杭・丸杭	147.3	12.0	7.9	先端加工、多面多段、樹皮付着		芯持丸	37－8

第27図　第4次調査区河川跡10層出土木製品類3

は、複雑な割面からなる割杭である。太さは不均一で中央部に比べると両端は細くなっている。下端側に加工痕が存在しているが、先端を尖らせようとしたものか、割面の調整であるのか不明である。杭－6（L－32）は、芯無の角杭で、4面は割面からなる。先端部は欠損しているが、残存部分でも加工は観察されない。杭－7は、取上げ

時に崩壊した。

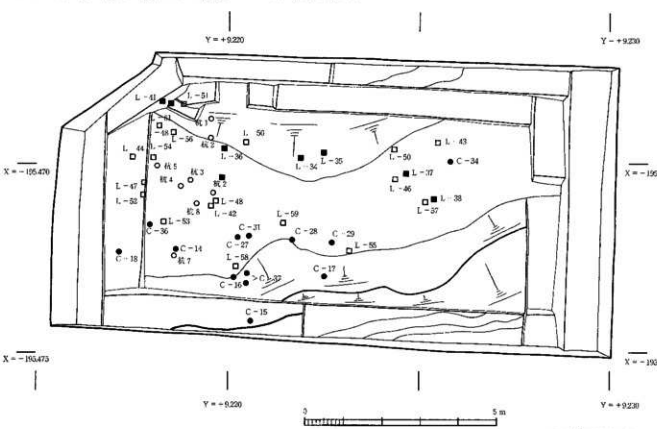
8）11　層

11層は、黒色の泥炭質粘土層で、河川跡南岸の上部に分布している。河川中央部では確認することができなかった。層厚は5cm前後である。出土遺物はない。

9）12a層・12b層・12c層と出土遺物

12層は12a層・12b層・12c層に細別された。12a層は黒褐色の粘土層で、草本類の植物遺体を多く含む。12b層は、同じく黒褐色の粘土層で、黄褐色土粒を多く含んでいる。12c層も黒褐色の粘土層で、未分解の植物遺体を多く含んでいる。12a層と12c層は、河岸上部で泥炭質の土壌に変化する部分があり、それぞれ12a'層と12c'層と命名して区別した。12a層は河川跡のほぼ全域に分布し、層厚は10～25cmである。12b層は、調査区東部で12c層で検出された流木（倒木？）群より西側の河川中央部を中心に分布している。層厚は10～25cmである。12c層は、河川跡のほぼ全面に分布しているが前記の流木（倒木？）群より東側で厚く、西側でやや薄く堆積している。層厚は10～15cmである。12層は、各細別層を合わせると、平均して30～50cmの厚さで堆積している。

12層中からは、第28図及び図版9のとおり多量の遺物が、河川跡のほぼ全面から出土している。特に南岸斜面からは、多くの土師器が出土している。これらの遺物については、12層の掘り下げ段階で細別層位の確認できた遺物と、区別できないで取上げた遺物がある。ここではこれらの遺物について、一括して12層出土遺物として解説する。出土遺物には土師器・石製品・木製品・土製品がある。また、調査区西部の河川跡底面部分からは杭も多数検出されている。杭の相互の関係および機能については不明である。



第28図　河川跡12層遺物出土位置図

土師器には、小型手捏ね土器（C－14・15・24）・鉢（C－19・20・21・25）・器台形（C－16・17・18・22・23）・小型壺（C－26・27・29）・大型壺（C－30・31・32・33）・小型甕（C－35・37・38）・大型甕（C－34・39）・甕または壺の体部下半などをはじめ多くの破片資料が出土している（第29・30図）。小型手捏ね土器には、やや広めの台状の低部から口縁部までやや外傾して立ち上がるもの（C－15）と、小さめの底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部が直立して短く立つもの（C－14・(24)）がある。調整は、ナデのみによるものと、ハケメ調整のあるものがある。

鉢は、器高の2分の1くらいの位置に口縁部と体部の境があり、この部分が括れ、口縁部が外傾するものである。口径の割に器高が高く、口縁が直立気味に立つもの（C－19・21）と、口径に比べて器高が低く、口縁部が外反するもの（C－20・(25)）がある。後者には口縁部の外面中ほどに軽い段が形成されているものもある。

器台形土器は、外面がヘラミガキ調整された精製品（C－17・22・23）と、ナデ調整の粗製品（C－16・18）がある。精製の脚部は、高さが低く裾部が広がり、三方の透かしが2段あるもの（C－17）と、脚部の高さが前者より高く、中ほどに三方の透かしがあるもの（C－22・23）がある。精製の受け部は、小さなもので、わずかに内湾気味に外傾するものが出土している。粗製の器台は、内面がヨコナデ調整の小さな受け部のもの（C－16）と、脚部の下半部が内湾気味に立ち、脚部中央よりやや上に三方からの透かしがある異形のもの（C－17）がある。後者の受け部は内側に強く折り曲げられ、上端部は皿状ではなく、中央に貫通孔の開いた緩い凸面となっている。

壺は、器高が10cm以下の小型のもの（C－26・27・29）と、それ以上の器高がある大型のもの（C－30・31・32・33）がある。小型のものは、体部の上部に体部最大径があり、口縁部が外傾するもの（C－26・29）と、体部中央に体部最大径があるもの（C－27）がある。前者のうちC－29には、体部の下部に小さな円孔があけられている。大型の壺は、体部が残存しているものは球形を呈し、丁寧にヘラミガキ調整されている。頸部から口縁部にかけては、外反して立ち上がり、口縁部は粘土が折り返しないし貼り付けられて帯状に厚くなっている。口縁端部は尖り気味のもの（C－31・32）と、平坦に仕上げられたもの（C－33）がある。

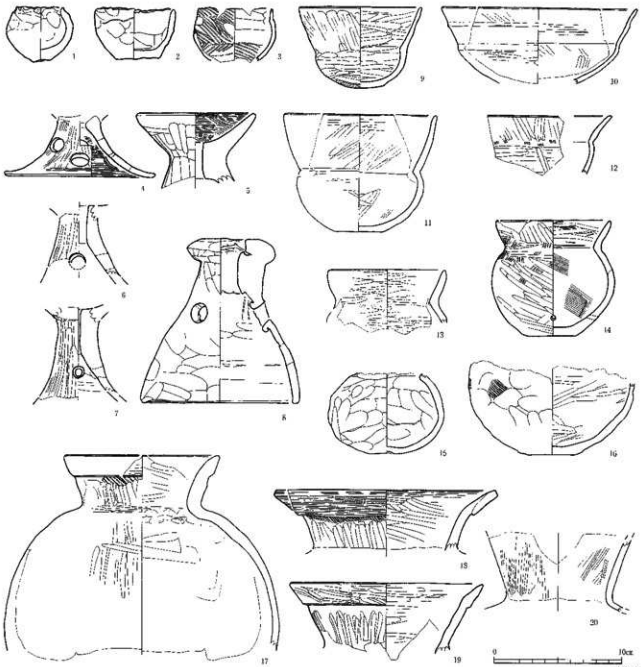
甕は、やや扁平な球形の体部に強く外反する口縁が付くものであるが、器高が17cm以下のやや小型のもの（C－35・37・38）と、20cmを超える大型のもの（C－34・39）とがある。小型の甕は、外面の調整がケズリとナデによるもの（C－35）、ハケメとケズリによるもの（C－37）、体部はハケメだけで調整されているが、肩部付近に横方向のハケメ調整の見られるもの（C－38）などがある。大型の甕は、体部調整は間隔の広狭はあるが基本的に斜方向のハケメ調整がなされている。口縁部は、口唇部が平坦で、ハケメ調整によるもの（C－34）と、口唇部が丸く、ヨコナデ調整によるもの（C－39）とがある。

12層出土土師器については、細かな時期差はあると思われるが、大きくとらえると第1次調査の成果と同様に、古墳時代前期の塩釜式に位置付けられるものと考えられる。

石製品としては、両方の面に、磨り面と小さな凹みのある略方形の扁平な礫が1点出土している（第31図）。

木製品類には農具をはじめとする各種木製品と、材・杭がある。

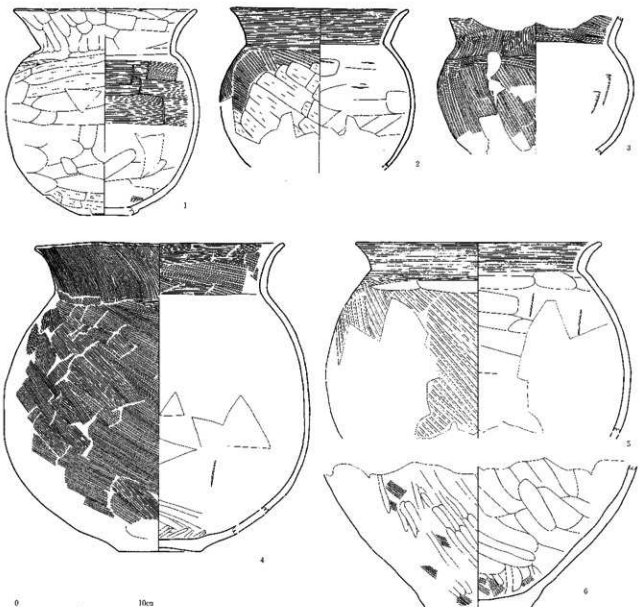
木製品には、直柄平鍬（L－61）・曲柄二又鍬（L－38）・鍬膝柄（L－34）・鎌柄（L－40）・四脚盤（L－41）・ヘラ状木製品（L－37）・その他用途不明品4点（L－35・36・39・45）がある（第32・33図）。直柄平鍬（L－61）は、柄が装着された状態で出土した。鍬身部の全長は31.8cmである。両側面を欠損しているので幅は不明であるが、21cm前後と推定される。残存部の形状から、平面は、将棋の駒の頭部を切り取ったような形態を呈するものと考えられる。刃部先端は僅かに丸みがあるが、ほぼ直線的に作られていたと思われる。頭部には着柄隆起を挟んだ両側に縦長の方孔があけられている。後面には、上端から刃部に向かって、全長の1/2強の着柄隆起が作り出されている。柄孔は、身部長方向がやや長い円形である。柄は、直径2.5～3cmの芯無し削り出し丸材で、茎部（握り部）側を欠損しているが、先端から約70cm残存している。鍬木体と柄の装着角度は、約67°である。



（現存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）特	徴	（内面）特	写真図版
1	C－14	4次		SR－1	12層	No.13	土師器	小型土器	4.2	3.7	1.4	ナデ		ナデ	30－7
2	C－15	4次		SR－1	12層	No.15	土師器	小型土器	4.1	6.0	3.3	ナデ		ナデ	30－8
3	C－24	4次		SR－1	12層		土師器	小型土器	(4.4)	5.9		ハケメ		ハケメ・ナデ	30－9
4	C－17	4次		SR－1	12層	No.14	土師器	器台	(4.5)	－	11.8	段三方透し・ヘラミガキ		ヨコナデ	30－14
5	C－16	4次		SR－1	12層	No.4	土師器	器台	(6.0)	9.4	－	ヘラミガキ		ヨコナデ	31－2
6	C－23	4次		SR－1	12層		土師器	器台	(5.6)			三方透し・ヘラミガキ		ナデ	30－15
7	C－22	4次		SR－1	12層		土師器	器台	(7.0)	－		三方透し・ヘラミガキ		ナデ	30－13
8	C－18	4次		SR－1	12層	No.1	土師器	器台形	13.1	－	12.2	三方透し・ナデ		ナデ	31－1
9	C－19	4次		SR－1	12b層		土師器	鉢	5.4	9.6		ヘラケズリ・ヘラミガキ		ヘラミガキ	30－10
10	C－20	4次		SR－1	12層	No.9	土師器	鉢	(6.0)	(15.4)	－	ヘラミガキ		ヘラミガキ	30－11
11	C－21	4次		SR－1	12層		土師器	鉢	9.4	(12.0)	3.6	ヘラミガキ		ヘラミガキ	30－12
12	C－25	4次		SR－1	12層		土師器	鉢				ハケメ・ヘラミガキ		ヘラミガキ	
13	C－26	4次		SR－1	12層		土師器	壺	(5.1)	9.1		ヘラミガキ		ヘラミガキ	31－9
14	C－29	4次		SR－1	12層	No.8	土師器	壺	9.2	9.0	3.7	ハケメ・ヘラミガキ		ヘラナデ・ヘラミガキ	31－6
15	C－27	4次		SR－1	12層	No.10	土師器	壺	6.4	－	1.5	ナデ		ナデ	31－5
16	C－28	4次		SR－1	12層	No.12	土師器	壺	7.5	－	4.0	ハケメ・ナデ		ヘラミガキ	31－4
17	C－31	4次		SR－1	12層	No.6	土師器	壺	15.5	12.2		ヘラミガキ		ヘラナデ・ナデ・ヘラミガキ	31－7
18	C－33	4次		SR－1	12層		土師器	壺	(4.7)	17.3		ヨコナデ・ヘラミガキ		ヘラミガキ	31－3
19	C－32	4次		SR－1	12層		土師器	壺	6.1	15.2		ヘラミガキ		ヘラミガキ	31－8
20	C－30	4次		SR－1	12層	No.3	土師器	壺				ヘラミガキ		ヘラミガキ	

第29図　第4次調査区河川跡12層出土遺物1



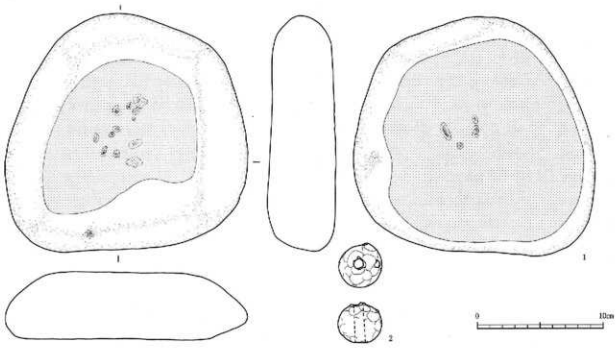
（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）　特　徴　（内　面）	写真図版
1	C－35	4次		SR　1	12層	No.7	土師器	甕	(16.3)	14.3		ナデ・ヘラケズリ　ナデ・ヘラナデ	31－10
2	C－37	4次		SR－1	12層	No.3	土師器	壺	(12.7)	14.0		ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ　ヨコナデ・ナデ	32－3
3	C－38	4次		SR－1	12層		土師器	甕	10.0	13.6		ヨコナデ・ハケメ　ハケメ・ヘラナデ	32－2
4	C－34	4次		SR－1	12層	No.2	土師器	甕	24.5	19.6	6.4	ハケメ　ハケメ・ヘラナデ	31－11
5	C－39	4次		SR－1	12層		土師器	壺	(15.5)	19.3		ヨコナデ・ハケメ　ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	32－1
6	C－36	4次		SR　1	12層	No.11	土師器	甕	12.3		7.0	ハケメ・ナデ　ハケメ・ナデ	32－4

第30図　第４次調査区河川跡12層出土遺物２

L－38は、片側の側面が直線的で、反対側の側面が緩やかな弧状を呈することから、曲柄二又鍬の片方の刺部破片と考えられる。現存長38.3cm・幅5.7cm・厚さ2.0cmを測る。同面に加工の痕跡があり、刃先側が薄くなるように削られている。軸部側の残存端部に軸部との切断のためと推察される加工痕がある。厚さや加工痕の状況から未製品の段階のものと推察される。

鍬膝柄L－34は、基部側を欠損する。曲柄鍬との装着面は上端側には加工が認められるが、下半部は割り面のままである。また上端部は、削って形を整えた形跡は認められるが、組掛の突起が作り出されていないことから、未製品であると理解される。残存長39cm・接合部長19.1cmを測る。



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特徴	写真図版
1	K－11	4次		SR－1	12層	石・No.1	石器・磨石	18.7	19.2	5.1	3540	両面中央に凹みあり、砂岩	33－6
2	P－1	4次		SR－1	12層	上錘		3.1	3.4		34.1	孔径８㎜、ナデ調整	33－8

第31図　第４次調査区河川跡12層出土遺物３

鎌柄Ｌ－40は、基部（握り部）の破片で、残存長17.9㎝を測る。芯無しの材を丸く加工して作られており、握り部分は刃の方向に曲がるように加工され、基端部は左右に肥厚している。

四脚盤Ｌ－41は、幅約74.8㎝・奥行き46.5㎝・高さ15.1㎝の大型の製品で、柾目の厚板を加工して製作している。盤上部の四周には、約２㎝の高さで縁が作り出されている。各脚部は、盤の幅の方向に長い長方体状に削り出され、幅方向の内側の下半部が弧状に削りとられている。

ヘラ状木製品Ｌ－37は、全長29.2㎝・身部幅5.6㎝の羽子板状を呈する製品である。柄部と身部の境は八字状になり緩やかな肩部が形成されている。厚さは柄部で８㎜・身部で４㎜と比較的薄手の製品である。

用途不明の木製品Ｌ－35は、残存長35.8㎝のヘラ状の製品で、身部の先端に短い３本の歯状の突起が作られている。基部は欠損しているが、長い柄が付いていた。ヘラ状の身部の幅は6.5㎝ほどあり、身部から柄部にかけては徐々に幅が狭くなり、柄部との境は不明瞭である。Ｌ－36は全長約54.3㎝の丸く削り出された芯無し材で、片側の端部は一度肥大して太くなってから先端に向かって槍先状に加工され、反対の端部はバットのグリップエンドのように肥大している。Ｌ－39は、全長36.1㎝・幅29.7㎝・厚さ3.6㎝の台形状の板材で、狭端と広端の差は少ない。側面には切断のための加工痕跡が残っている。何らかの未製品と思われる。背面側の中央付近には、直径９㎝前後の円形に焦げ跡がある。Ｌ－45は、長さ23.4㎝・直径３㎝前後の芯持ちの丸材で、両端はやや抉れた位置で斜めに切断されている。側面と片側の木口には、約12㎝の間隔で、直径1.2～1.5㎝の円筒状の穴が同一軸上に並んで存在する。

材には建築材（Ｌ－51）・角材９点（Ｌ－43・44・47・49・52・53・55・58・70）・柾目板２点（Ｌ－42・48）・板目板（Ｌ－59）・分割材２点（Ｌ－56・60）・半裁丸材（Ｌ－57）・丸材３点（Ｌ－46・50・54）がある（第34～36図）。建築材と考えられる材Ｌ－51は、残存長138㎝・幅24.5㎝・厚さ2.7㎝前後の柾目の板材である。残存する片側の木口部は、材の中央部と比べると両側面から抉くなるように加工され、さらに三角形の切り込みを入れることによって、板状の突起部と、この突起から反対側の側面に向かって広がるように加工されている。突起の基部には長さ5.2㎝・幅1.5㎝の長方形の孔があけられており、他の部材と組み合わされて機能したことを示している。

角材L－43は、現存長128cm・幅5.6cm・厚さ3.4cmのやや扁平な角材で、全面が割り面である。L－44は、現存長42.8cm・幅3.5cm・厚さ2.7cmの材で、片側の端部が焼けている。側面は割り面が大部分を占めているが、角の一部分が面取り状に加工されている。L－47は、残存長10.1cm・幅3.8cm・厚さ3.4cmの材で、断面形は隅丸方形を呈する。現存部の大部分が焼焦げているが、焼けていない部分は加工されており、木口部分には加工痕跡が残っている。L－49は、現存長59.0cm・幅5.9cm・厚さ3.5cmの材で、片側の端部付近は焼けている。幅の広い側面の片面には全面に加工痕が残っている。L－52は、現存長84.0cm・幅5.5cm・厚さ5.3cmの材で、3面が割り面・1面が樹皮を剥いだ面となっている。L－53は、現存長24.5cm・幅7.2cm・厚さ5.2cmの変則的な形状の材である。側面の一部に加工痕がある。残存する木口には、幅の広い側の両側面からに切断のための加工行われている。L－55は、全長20.0cm・幅8.4cm・厚さ6.4cmの短い材である。側面は隣合って加工された2面と割り面のままの2面がある。木口面は両端とも加工されており、片側は側面に対して直角に加工され、他方は狭い方の両側面から加工されて鋭角的に尖っている。L－58は、現存長26.4cm・幅2.5cm・厚さ2.3cmの細い角材で、側面は全面が割り面からなる。L－70は現存長8.5cm・幅5.5cm・厚さ3.5cmの角材の断片で、側面の1面から木口にかけて加工の痕跡がある。

柾目板L－42は、全長41.0cm・幅24.5cm・厚さ2.7cmの板材である。両面に樹皮が残り、厚さも不均一な材で、片方の木口は折れている。L－48は、残存長33.3cm・幅5.0cm・厚さ1.3cmの柾目板で、幅・厚さとも均一に加工されている。端部が残存する片側の木口は、弧状に湾曲して加工ないし切断されている。

板目板L－59は、現存長12.9cm・幅7.7cm・厚さ2.1cmの両面に加工痕跡のある板材である。側面は、割り面のままである。片方の木口は、端部付近が薄くなるように加工され、木口面は切断の痕跡がある。他方の木口は焼け焦げている。

分割材L－56は、現存長24.3cmの芯無しの分割材で、先端を5面から杭先状に加工してある。他方の木口は焼け焦げている。L－60は、現存長65.7cm・幅8.2・厚さ5.5cmのミカン割状の分割材で、側面は全面が割り面のままである。片側の木口には、切断痕跡と観察される加工痕が認められる。

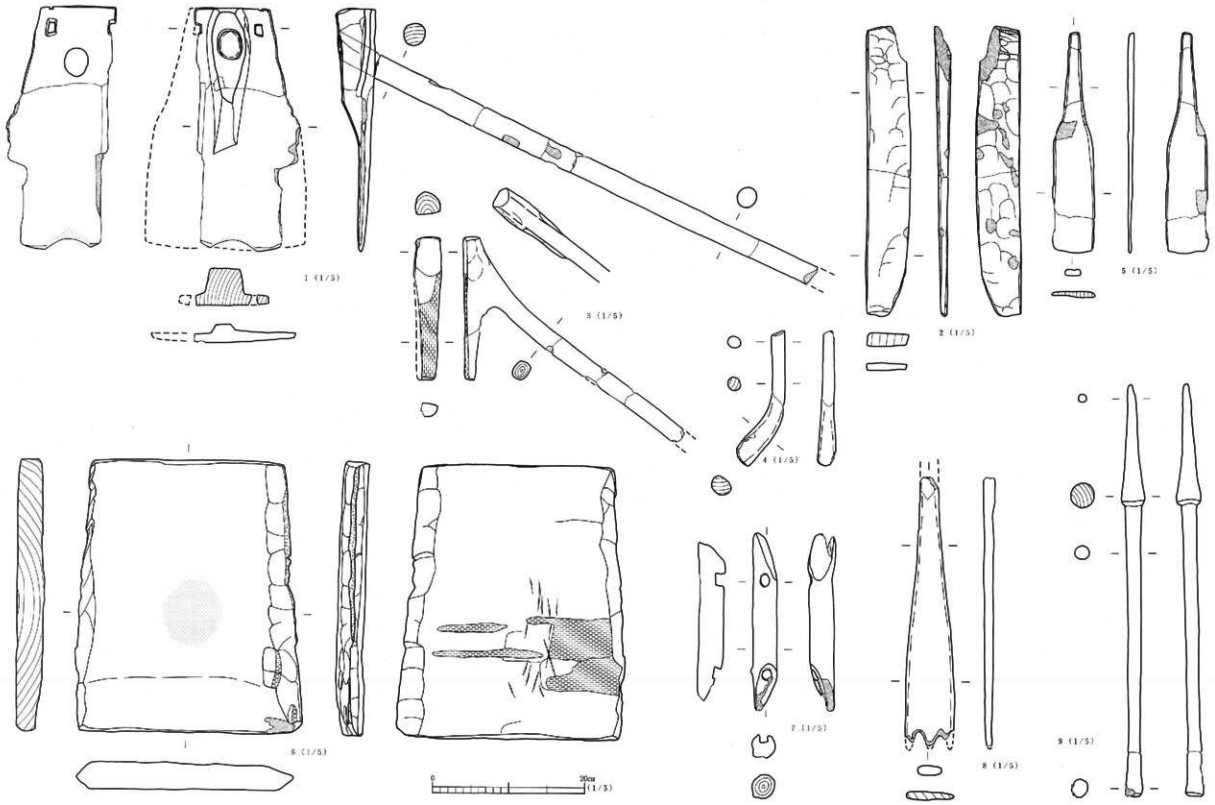
半裁丸材L－57は、全長17.8cm・直径5.7cmほどの丸材を縦に半分に割ったもので、両方の木口には切断痕跡のほか側面からの粗い加工がある。

丸材L－46は、直径3cm前後、長さ58.6cmの材で、片方の木口に1方向からの切断痕がある。他方の木口は焼け焦げている。L－50は、直径6cm前後・長さ約160cmの材で、両端に加工がある。片方の木口は、やや鈍い角度で杭先状に加工または切断されている。他方の端部は、直径の半分ほどを、長さ13.5cmに渡って欠き取って段差を作り出している。L－54は、直径4.5～5cm・長さ31.8cmの丸材で、片方の端部は鋭角的な杭先状の加工が施され、他方は丸みを持った鈍角に切断または加工されている。側面は焼け焦げが顕著である。

杭には、角杭4点（L－63・67・68・69）と丸杭4点（L－62・64・65・66）がある（第36・37図）。

角杭L－63は、現存長80.6cm・最大幅7.5cmの四角柱状の杭で、側面は全面が割り面である。先端は取り上げの際に崩壊したために欠損している。L－67は、現存長96.9cm・最大幅11.7cmの角材で、上下両端を欠損している。残存部の4面は、全てが割り面となっている。L－68は、現存長85.6cm・最大幅が10.7cmの角材を杭としている。側面は4面とも割面のままである。L－69は、長さ111.3cm以上・最大幅8cmの角柱状の杭である。上部側は次第に薄くなって、板状を呈している。側面は全面が割り面である。先端は欠損している。

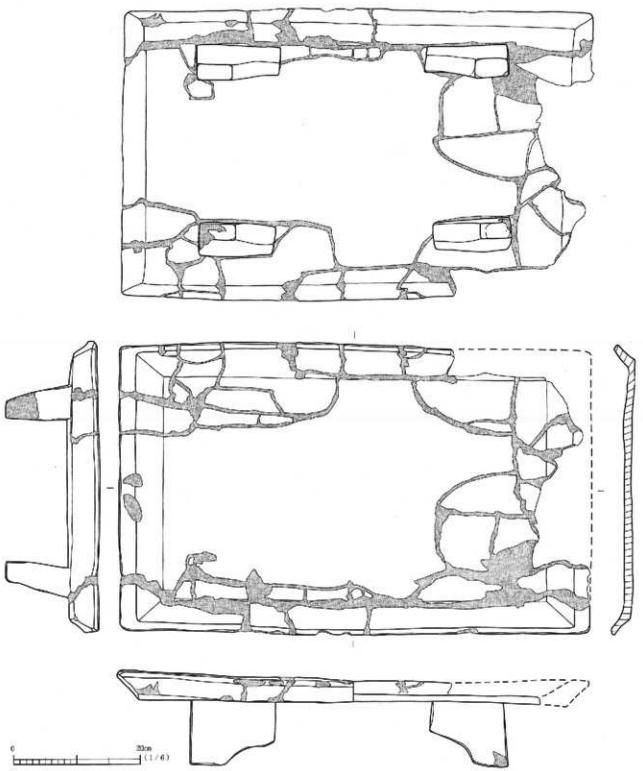
丸杭L－62は、現存長19.3cm・直径4cm前後の杭材で、先端に1方向からの切断痕跡がある。杭上部は欠損している。L－64は、現存長23.8cm・直径4～5.5cmの枝打ち痕のある杭材で、上部および中程を欠損している。焼け焦げて細くなった部分を先端としている。L－65は、全長85.7cm以上の直径5cm前後の杭材である。先端は多面から削られているが、削りの角度および深さが浅いため、鋭角的な杭先とはならず、本体よりやや細くなっている程度である。L－66は、直径4.5cm前後の杭で、98cmの長さで残存している。先端は前後2方向から鈍角に加工されて



番号	登録番号	出土区	基本坑	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－61	4次		SR－1	12層	材・№35	木・直柄平鍬	31.8	最大刃幅/最大厚/柄孔/柄孔/全長/柄部厚 12/19.4/13.7×23.1/70.3/2.9×2.5		肩幅部に方孔、柄端	カヤ?/クヌギ?/ケヤキ?	柾目/芯持丸	38－1
2	L－38	4次		SR－1	12層	木・№6	木・曲柄二又鍬	38.3	5.7	2.0	刃部破損、加工痕顕著	クヌギ?	柾目	38－5
3	L－34	4次		SR－1	12層	木・№1	木・鍬・横柄	39.1	茎/台部/台幅/台厚/柄部/柄厚/柄幅/刃部厚/刃幅 19.1/33/2.8/39.5/2.5×2.0/52/		未製品?、柄上板欠損	クリ		38－4
4	L－40	4次		SR－1	12層		木・鍬柄	17.9	無記載/柄/柄径 27/2.1			ケンポナシ属	芯無	38－3
5	L－37	4次		SR－1	12層	木・№4	木・ヘラ状木製品	29.2	5.6	0.8		クヌギ?	柾目	38－2

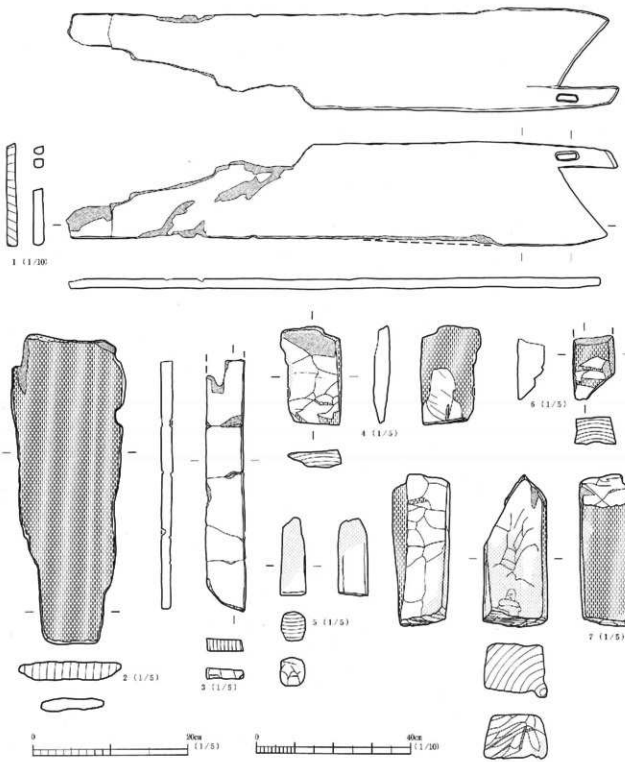
番号	登録番号	出土区	基本坑	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
6	L－39	4次		SR－1	12層	木・№7	木・不明	36.1	29.7	3.6	板状未製品	クリ	板目	40－4
7	L－45	4次		SR－1	12層	材・№13	木・不明	23.4	3.0	3.1	両端加工、両端に円穴有り	クリ	芯持丸	40－3
8	L－35	4次		SR－1	12層	木・№2	木・不明	35.8	6.4	1.5	片端三本歯、片端柄状	クリ	板目	40－2
9	L－36	4次		SR－1	12層	木・№3	木・不明	54.1	3.2	3.0	先端槍先状、基部肥大	クリ	芯無丸	40－1

第32図　第４次調査区河川跡12層出土製品類１



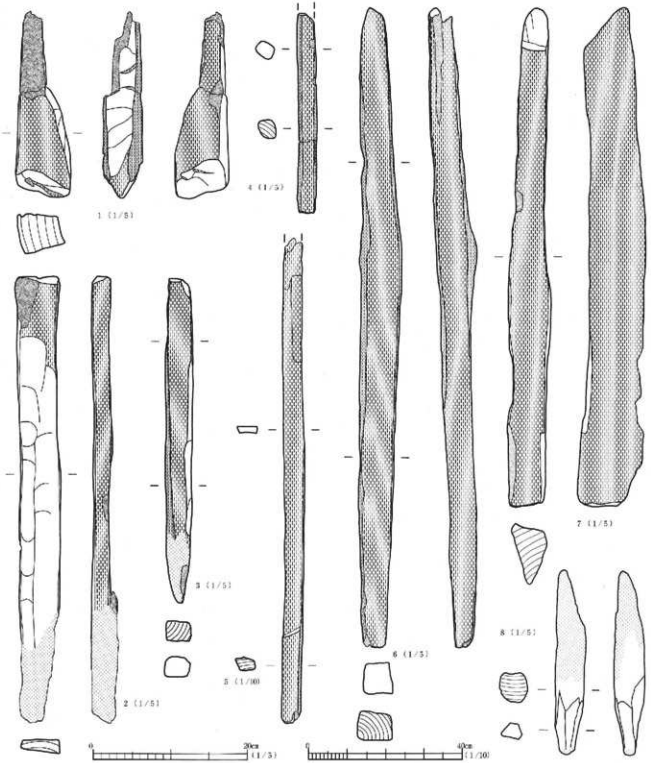
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	高さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－41	4次		SR－1	12層	木・№8	木・図柳箸	74.8	46.5	15.1	柳先端の内側に欠き取り	ケヤキ	柾目	39－1

第33図　第4次調査区河川跡12層出土木製品類2



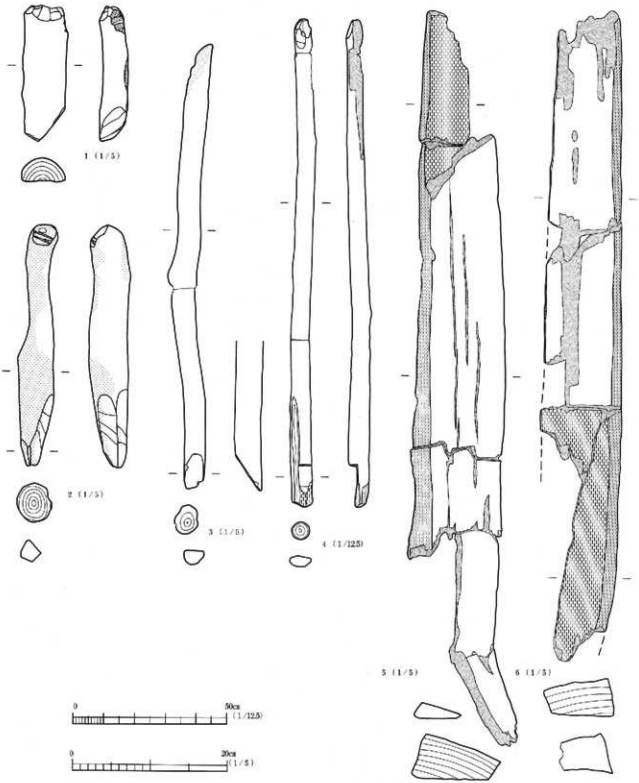
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴			樹種	木取り	写真図版
											孔長	孔幅	片端に欠き込み有り			
											5.2	1.5	方形孔有り			
1	L－51	4次		SR－1	12層	材・No.36	材・建築材？	138.0	24.5	2.7				クヌギ節	柾目	41－1
2	L－42	4次		SR－1	12層	材・No.10	材・板材	41.0	14.8	1.4					柾目	40－5
3	L－48	4次		SR－1	12層	材・No.29	材・板材	33.3	5.0	1.3	片端加工有り				柾目	41－2
4	L－59	4次		SR－1	12層	材・No.54	材・板材	12.9	7.7	2.1	ケズリ加工、焼痕有り				板目	41－3
5	L－47	4次		SR－1	12層	材・No.26	材・角材	10.1	3.8	3.4	断面隅丸方形				芯無角	41－5
6	L－70	4次		SR－1	12層		材・角材	8.5	5.5	3.5	端部加工有り				芯無角	41－4
7	L－55	4次		SR－1	12層	材・No.27	材・角材	20.0	8.4	6.4	両端加工				芯無角	41－6

第34図　第4次調査区河川跡12層出土木製品類3



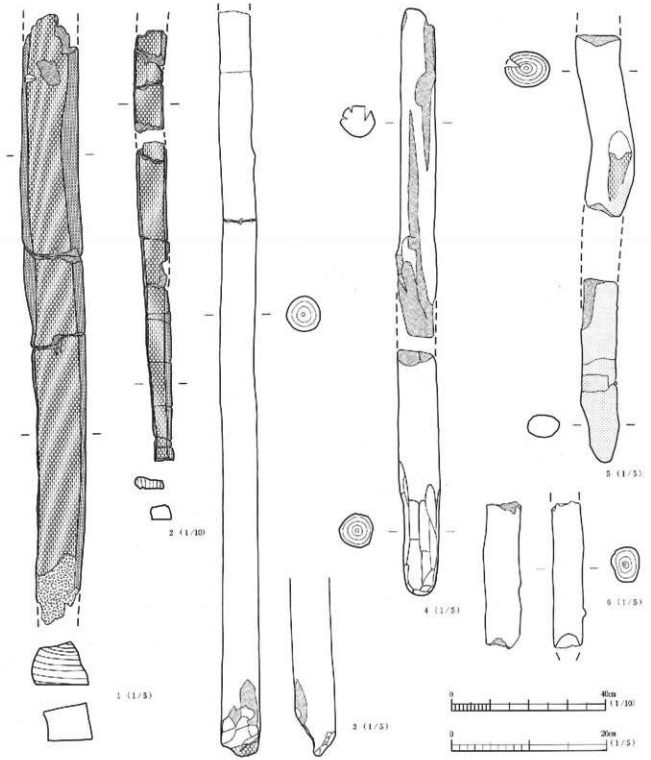
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・芸種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－53	4次		SR－1	12層	材・No.18	材・角材	24.5	7.2	5.2	加工有り		芯無角	41－7
2	L－49	4次		SR－1	12層	材・No.50	材・角材	50.0	5.9	3.5	側面に加工有り、片端焼痕		芯無角	42－1
3	L－44	4次		SR－1	12層	材・No.16	材・角材	42.8	3.5	2.7	片端楔痕		芯無角	42－5
4	L－58	4次		SR－1	12層	材・No.53	材・角材	26.4	2.5	2.3	ケズリ加工		芯無角	
5	L－43	4次		SR－1	12層	材・No.7	材・角材	128.0	5.6	3.4			芯無角	42－6
6	L－52	4次		SR－1	12層	材・No.38	材・角材	84.0	5.5	5.3	3面潰り		芯無角	42－2
7	L－60	4次		SR－1	12層	材・No.55	材・分割材	65.7	8.2	5.5	片端切断痕		芯無	42－7
8	L－56	4次		SR－1	12層	材・No.31	材・分割材	24.3	4.0	3.7	先端加工、多面一段？、片端焼痕		芯無	42－3

第35図　第4次調査区河川跡12層出土木製品類4



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－57	4次		SR－1	12層	材・№52	材・半裁丸材	17.8	5.7	3.0	片端1面多段、片端多面1段		芯持ち	42－4
2	L－54	4次		SR－1	12層	材・№23	材・丸材	31.8	5.0	4.7	先端加工、多面多段、槌痕有り		芯持丸	42－8
3	L－46	4次		SR－1	12層	材・№21	材・丸材	58.6	3.7	3.3	先端加工、1面1段？、片端喰痕		芯持丸	42－9
4	L－50	4次		SR－1	12層	材・№14	材・丸材	159.9	7.0	6.8	先端加工、多面1段、樹皮付着		芯持丸	42－10
5	L－67	4次		SR－1	12層	杭・№3	杭・角杭	96.9	11.7	5.8	先端加工無し		芯無角	43－1
6	L－68	4次		SR－1	12層	杭・№5	杭・角杭	85.6	10.7	5.0	先端加工不明		芯無角	43－2

第36図　第4次調査区河川跡12層出土木製品類5



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－63	4次		SR－1	12層	杭・No.7	杭・角杭	80.6	7.5	5.8	先端加工不明		芯無角	43－3
2	L－69	4次		SR－1	12層	杭・No.4	杭・角杭	113.3以上	8.0	3.9	先端加工不明		芯無角	43－4
3	L－66	4次		SR－1	12層	杭・No.6	杭・丸杭	98.1	5.2	4.9	先端加工、2面多段		芯持丸	43－5
4	L－65	4次		SR－1	12層	杭・No.2	杭・丸杭	86.2以上	5.2	4.5	先端加工、多面多段		芯持丸	43－6
5	L－64	4次		SR－1	12層	杭・No.8	杭・丸杭	160.3以上	6.0	4.7	先端焼痕		芯持丸	43－7
6	L－62	4次		SR－1	12層	杭・No.1	杭・丸杭	19.3	4.6	3.8	先端加工、1面？		芯持丸	43－8

第37図　第4次調査区河川跡12層出土木製品類6

いる。

土製品としては、土錘（Ｐ－１：第31図２）が１点出土している。Ｐ－１は、直径3.5cmほどのやや扁平な球形の土錘である。表面はナデによって簡単に調整され、中央に径７～８㎜の円孔があけられている。

10）13　層

13層は、河川跡堆積土の下半部の全体に分布している。調査部分での土質は、黒褐色の砂質粘土層で、ドングリやクルミの実を多量に含んでいる。北壁東部の北岸寄りでは、オリーブ黒色土と黒色土が交互に縞状に堆積している。層厚は、12ｃ層で検出された流木（倒木）の東側と西側で差があり、12ｃ層とは反対に東側で25cm前後と厚く、西側で10cm前後と薄くなっている。

13層は、上述のように層厚も厚く、堅果類などの自然遺物は多量に出土しているが、人口遺物は少なく、土師器片13点と弥生土器片２点が出土しているだけである。

11）14層と出土遺物

14層は、植物遺体を多く含む黒色粘土層で、層下部と15層の境には砂を多く含んでいる。河岸面の中程より下位に堆積している。層厚は、河岸面で厚く15～25cm、河川底面では薄くなり５～10cm程度である。

14層からの出土遺物は少ないが、弥生土器（第38図１）・木製品類（第39図）が出土している。

弥生土器Ｂ－８は、細い沈線により層波文（連弧文または連続山形文）の描かれた小型の鉢である。これ以外には甕または壺の破片が８点出土している。これらの弥生土器は、栄形圃式期に位置付けられると考えられる。

木製品としては、泥除（Ｌ－74）・打棒（Ｌ－73）・竪杵（Ｌ－71）・斧直柄状木製品（Ｌ－72）が出土している。Ｌ－74は、残存長9.9cm・残存幅13.0cm・厚さ1.0cmの梁材を横木取りした製品である。割れた後、火を受けて焼け焦げている。残存する角部は、木口側が直線的で側面側は丸みをもって広がっている。また板全体が腹面側に緩やかに湾曲している。この製品については、素材と木取りおよび形態から、泥除の下端部の破片と考えられる。

打棒Ｌ－73は、身部の上端から柄部の中ほどの破片で現存長は40.5cmである。柄の基部と身部のほとんどを欠損している。残存部も腐蝕が著しい。柄と身部の境は、肥大化していないが、両側面に明瞭な肩部が形成されて身部側の幅が広くなる。身部は上面側から削り込まれて薄くなっている。

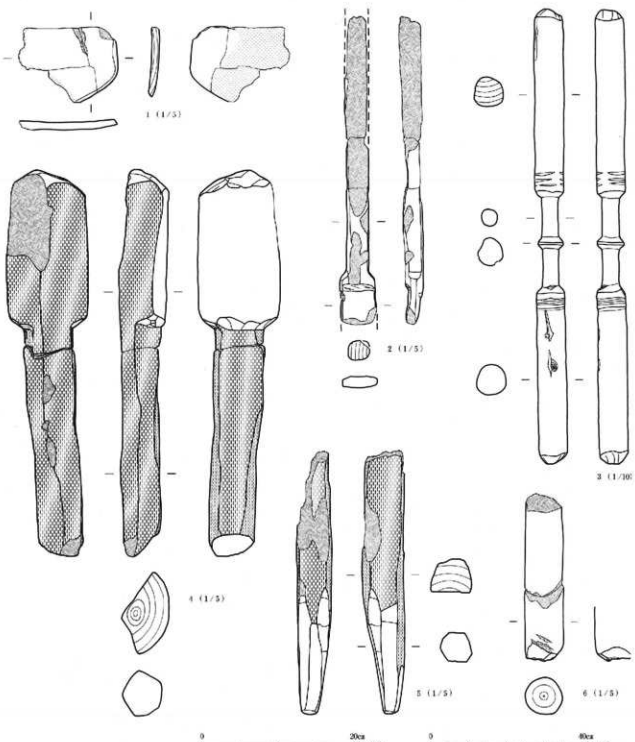
竪杵Ｌ－71は、ほぼ完全な状態で残っている。全長は118.7cmあり、搗き部の直径は7.5cm前後である。搗き部と握り部とは明瞭な段差が形成されており、握り部の中央には搗き部径より一回り小さな算盤玉状の隆帯が巡る。搗き部の長さは約46cmと49cmで、両方の握り部側の端部付近には、低い隆帯が２条巡っている。両先端は良く使い込まれてつるつるになっている。

斧直柄状木製品は、第１次調査で出土した石斧の直柄を細くしたような形態の漆塗り木製品（第１次調査Ⅱ区河川跡15層出土Ｌ－266）に付けた名称で、第１次調査ではのこのような形態の木製品の未製品（Ｌ－955・956・1091）

（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）特　徴　（内　面）	写真図版
1	Ｂ－８	４次		ＳＲ－１	14層		弥生土器	鉢	4.2	3.7	1.4	層波文	30－１
2	Ｂ－９	４次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	甕	4.1	6.0	3.3	羽状文，植物茎圧痕文	ヘラミガキ	30－２
3	Ｂ－10	４次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	高坏脚	(4.4)	5.9		層波文	ナデ	30－３
4	Ｂ－11	４次		ＳＲ－１	15層		弥生土器	壺				羽状ヘラミガキ，縄文(LR)	ヘラミガキ	30－４

第38図　第４次調査区河川跡14層～15層出土遺物



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－74	4次		SR－1	14層	木・Na 4	木・製塩	9.9	身部幅 3.0	身部厚 1.0	先端破片、焼痕有り	クリ	板目	44－1
2	L－73	4次		SR－1	14層	木・Na 3	木・打棒	40.5	身部長 6.9	身部幅 4.9	身部厚断面楕円形 1.5	身部基部断面楕円形 33.6	全体寸法 28×26	クヌギ節	柾目	44－4
3	L－71	4次		SR－1	14層	木・Na 1	木・竪杵	118.7	全体径（広） 46.5	全体径（狭） 40.7	全体径（広）断面形 円形	全体径（狭）断面形 楕円形	重心位置 下部寄り	クヌギ節	芯無丸	44－3
4	L－72	4次		SR－1	14層	木・Na 2	木・容器蓋状製品	31.0	重厚部 20.8	縁部幅 6.2	重厚部断面形 楕円形 10.7	30.2	66×51	ミズキ	芯持	44－2
5	L－75	4次		SR－1	14層	板・Na 1	板・角板	34.6	5.5	4.5	先端加工、多面多段、上縁からの打込み				芯無角	44－6
6	L－76	4次		SR－1	14層		板・丸板	22.1	5.1	4.9	先端加工、多面１段				芯持丸	44－3

第39図　第４次調査区河川跡14層出土木製品類

も出土している。斧直柄状木製品と斧直柄とは、形態の相違とともに素材の選択も異なり、斧直柄はクヌギ節が選択的に使用されているのに対して、斧直柄状木製品にはイヌガヤなど他の素材が使われている。L－72は、前回の調査で出土した斧直柄状木製品・未製品のさらに前段階の工程と考えられるものである。全長は51.0cmを測る。芯持ちの丸材を半割りし、さらに半割りによってできた角の片側の一部を割り取って断面形が菱形なるように加工している。さらにその後、柄となる部分を割り取って細くした段階のものである。柄部と頭部の境には、割りの進行が頭部に至るのを止めるための加工痕が残っている。

14層では杭は角杭1点（L－75）と丸杭1点（L－76）検出されている。杭L－75は芯無しの角杭で、側面全体が割面であるが、先端部は多面から加工されて尖っている。現存長は34.6cm ある。先端の加工痕跡は、角度が浅く平坦な長い面が多いことから、金属製の刃物で加工された可能性が高い。従ってこの杭は上層で打ち込まれたものが、この層で検出されたものと理解される。杭L－76は現存長22.1cmの芯持ちの丸杭で、先端が数カ所から加工されている。切断の角度は鈍角で、加工面は滑らかで、刃が途中で止まったことによるハガレの痕跡が認められないことから、金属器によるに可能性がある。従ってこの杭も14層に伴うものではなく、所属時期は不明である。

12）15層・15'層と出土遺物

15層は、樹枝片をはじめとする植物遺体を多量に含むオリーブ黒色の粘土層で、河川跡の底面部に堆積する。層厚は10～40cm あり、16層上面の高低により差が生じ、16層上面の高い部分では薄く、低い部分では厚く堆積している。河川跡底面では、15層と16層の境界は明瞭な層理面となっているが、河岸面下部の境界は、交互に楔状となっており、境界は不明瞭である。

河岸面上部付近では、オリーブ黒色砂質粘土からなる15'層が、10～15cmの厚さで堆積している。15'層は、15層と河岸面の16層などが交じり合って形成されたと考えられる。15'層と16層の境界は、凹凸が著しく不明瞭である。

15層からの出土遺物としては、弥生土器と木製品類があり、主に河川跡底面の15層上部から出土している。

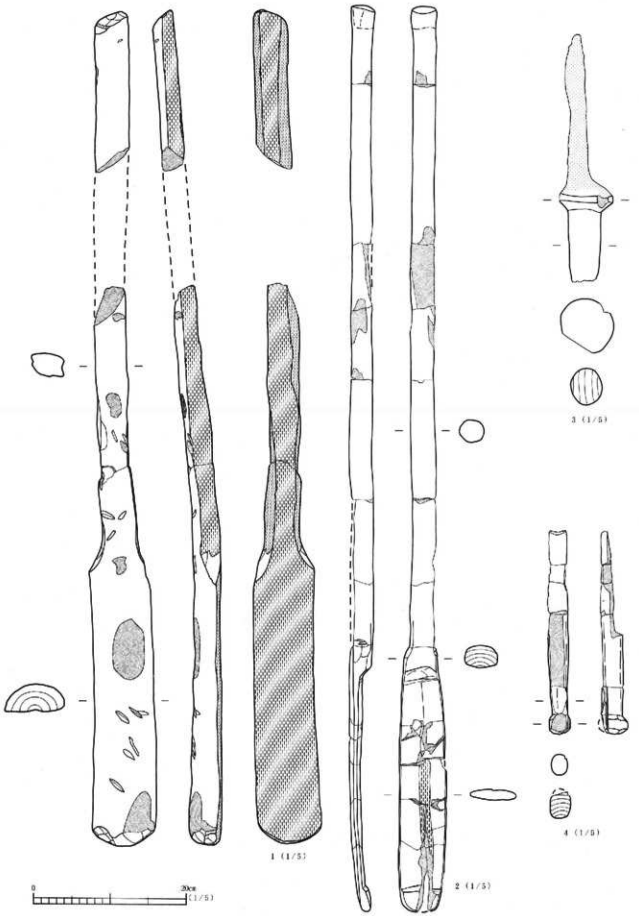
弥生土器は、第38図の3点（B－9・10・11）のほか、甕または壺の破片が11点出土している。B－9は甕の口縁部付近の破片で、頸部に列点文があり、体部と口骨部には植物茎回転文が施されている。B－10は、内面調整がナデのみによることから、高杯の脚部と考えられる破片で、磨り消し手法によって扇波文（波状文）が描かれている。B－11は、壺の肩部から体部上端の破片で、肩部はヘラミガキ調整、体部はLR縄文が地紋として施されている。

木製品類には農具をはじめとする各種木製品と材がある（第40～42）。

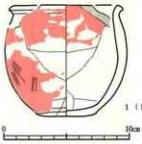
木製品には、打棒2点（L－77・L－84）・竪杵（L－79）・斧直柄（L－81）・斧直柄状木製品（L－80）・ヘラ状木製品（L－82）・漆器鉢（L－78）がある。打棒L－77は、折れているがほぼ完全な状態で出土した。全長119.5cm・柄部長84.5cm・身部長35.0cm・身部幅6.2cmを計る。柄の基部はバットのグリップエンド状に肥大している。柄と身部の境目は、特に肥厚していないが、身部幅のと同一方向に広がって、肩部が形成されている。身部の平面形は長楕円径を呈し、下面側に凸面がくるように反っている。身部は上面側から削られて柄の径よりも薄くなっている。身部の先端は、上面側に肥厚するように削り残されている。L－84は、打棒の未製品で、柄部の途中は側溝を掘削した際に失われた。直径8.5cm 前後の丸太材を縦に半割にした素材の、柄部と身部の境に剥止めの刻みをいれ、柄

第40図　観察表

番号	登録番号	出土区	基本坑	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴								樹種	木取り	写真図版
1	L－84	4次		SR－1	15層	No.4	木・打棒	94.6	身部上端 3.8	身部幅 8.3	身部厚 3.6	頭部上端 3.6	頭部幅 4.2	頭部厚 3.0	未製品、加工中の状況痕				クヌギ節	半截丸	45－1
2	L－77	4次		SR－1	15層	No.1	木・打棒	119.5	身部上端 3.0	身部幅 6.2	身部厚 6.2	頭部上端 5.2	頭部幅 5.3	頭部厚 3.0	先端幅 5.3	先端厚 1.7			クヌギ節	柾目	45－2
3	L－79	4次		SR－1	15層	No.3	木・竪杵	32.6	最大径 15.7×14.1		握部片								クヌギ節	芯無	45－4
4	L－81	4次		SR－1	15層	No.6	木・斧直柄	26.9	最大幅 2.7		握部片								クヌギ節	芯無	45－3



第40図　第4次調査区河川跡15層出土木製品類1



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	器高	口径	底径	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－78	4次		SR－1	15層	木・№2	木・鉢	8.9	9.0	4.8	内外面漆塗り	トチ	横	45－6

第41図　第４次調査区河川跡15層出土木製品類２

部の両側面から割を入れて原形を作った段階のものである。両方の木口には切断段階の鈍角の加工痕がある。また背側の表面には樹皮を剥いだ際の石器によるものと推察される工具痕跡が観察される。

竪杵Ｌ－79は、握り部の長さ32.6cmほどの破片で、直径約４cmの握り部の中央付近には直径約７cmの算盤玉状の隆帯が作り出されている。隆帯を挟んで片側の握り部は、焼け焦げて細く痩せている。

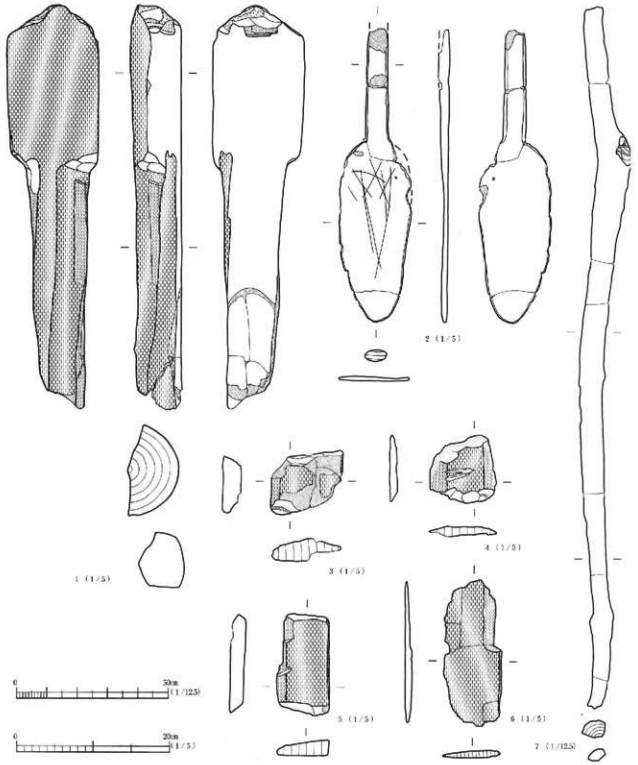
斧直柄Ｌ－81は、柄の基部の破片で、破損が著しい。基端部分はバットのグリップエンド状に肥大している。断面形は握り部分・基端部分とも楕円形を呈しており、握り部分で長径2.8cm・短径2.2cmを計る。

斧直柄状木製品Ｌ－80は、14層出土の斧直柄状木製品Ｌ－72と類似している原形段階の未製品で、芯持ちの丸材を半割し、さらに半割によってできた角の両側の一部を割取り、さらに柄となる部分を割取って細くした段階のものである。柄部と頭部の境には、割を止めるための加工痕が残っている。頭部側の木口には、切断の際の石斧によるものと思われる加工面の湾曲した加工痕が残っている。反対側の柄部の基端部分は欠損しているが、現存長は53.3cmである。

ヘラ状木製品Ｌ－82は、現存長が38.8cmあり、長さ約24cm・幅約9.5cmの木葉形の身部に、扁平な楕円形の柄がついている製品である。身部の縦断面を見ると、中央部分が上下両側よりやや薄く作られている。上下・左右方向に特に反りは認められない。木取りは板目で樹種はトチである。比較的柔らかい樹種で作られていることから、掘削具とは考えにくいので、櫂など別な用途の製品と推察される。なお、この製品の実測図左面（腹面側）には、細い沈線による線刻がある。線刻は、×形を長軸にそって左右対称に組み合わせたものに、弧線を１条足したようなものである。身部側面に沿って刻まれた左右の長い×線と、身部上側中央の×線の組み合わせだけをみると菱形呈し、舟の上面観を連想させる。この菱形は、身部上端側が広くなっているので舟の艫側と解釈すると、前記した２つの×線の交点付近から、左右両側の後方に交差する線は、櫂を示したとの理解も可能である。解釈が適当であるかどうかは別として、この線刻には規則性を認めることが出来るので、その性格の解釈については今後の課題である。

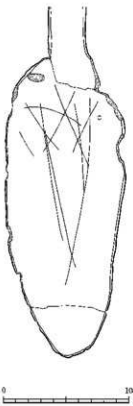
漆器鉢Ｌ－78は、器高8.7cm・口径12.7cmを計り、全体の１/３程度が残存する。器形は、丸みのある台状の底部から腰部が内湾気味に立ち上がり、体部は緩長の球形を呈する。口縁部は短く外反する。内外面ともに漆と見られる樹脂が塗られている。樹脂は、現在暗赤褐色を呈す。塗装された部分には、朱色の微細な物質が極く稀に点状に確認できる。

材としては、板材４点（Ｌ－83・86・87・88）と半裁丸材１点（Ｌ－85）が出土している。板材の４点は、すべて柾目材である。Ｌ－83は、長さ19.3cm・幅7.5cm・厚さ0.9cmの両面とも割り面だけの材で、製品加工の際の断片と推定される。Ｌ－86は長さ13.5cm・幅7.0cm・厚さ2.0cmの両面が割り面で、両木口面と側面の一部に加工のある材である。Ｌ－87は、長さ8.5cm・幅9.2cm・厚さ2.7cmの幅の割に短い材で、両木口面に加工の跡が残っている。両面は割り面である。Ｌ－88も、長さ8.7cm・幅8.8cm・厚さ1.3cmのＬ－87に類似した形態の材で、片側の面には石斧の刃



番号	登録番号	出土区	基本区	出土遺構	遺構切	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－80	4次		SR－1	15層	本・No.5	木・容器状木製品	53.3	底残長	最大径	底部径 最大径 口縁部径 器高	未製品	ミズキ	芯無	45－5
									22.1	6.7	12.1	21.2	12.1×6.1				
2	L－82	4次		SR－1	15層	本・No.7	木・ヘラ状木製品	38.8	身部長	身部厚	身部径 身部径 最大径	線刻有り	トチノキ	板目	46－1
									34.0	9.5	9.5	14.8	2.8×1.4				
3	L－87	4次		SR－1	15層		材・板材	8.5	9.2	2.7	加工痕有り			柾目	46－2
4	L－88	4次		SR－1	15層		材・板材	8.7	8.8	1.3	加工痕有り、焼痕有り			柾目	46－3
5	L－86	4次		SR－1	15層	材・No.5	材・板材	13.5	7.0	2.0	両端加工？			柾目	46－4
6	L－83	4次		SR－1	15層	材・No.3	材・板材	19.3	7.5	0.9	両面割り面			柾目	46－5
7	L－85	4次		SR－1	15層	材・No.4	材・半截丸材	293.0	11.5	5.5	枝打ち痕有り			半截丸	46－6

第42図　第４次調査区河川跡15層出土木製品類３



第43図　ヘラ状木製品Ｌ－82線刻実測図

形もある。

半截丸材Ｌ－85は、長さ約293cm・最大幅11.5cmの材で、ほぼ中央から2分割されている。両方の木口に切断痕は残っていないが、枝打ちの加工痕跡がある。

13）16　層

本調査区における16層は、河川跡底面では小礫を含む粗砂層である。河川跡底面の16層上面は水流の浸蝕によるものと理解される凹凸があり、南岸下端寄りの部分が、やや蛇行しながら僅かに低くなっている。河川跡壁面の16層は、灰色系の粘土ないし砂層からなっている。

第4章　押口遺跡第3次調査北区の概要

第1節　発見遺構の概要と基本層位

1　北区の位置

第3次調査の北区と南区は、押口遺跡の中央西部に位置する。区画整理前の標高は、水田となっていた南区で4.2m前後、畑地及び道路となっていた北区で4.7m前後である。両区とも第1次調査において検出された河川跡と重複するところにあたる。

押口遺跡で検出された河川跡（ＳＲ－1）は、北西方向から南方向へさらに南西方向へと緩やかに蛇行している。北区は、蛇行部分の攻撃斜面側となる北東側の岸部から河川跡中央近くにかかる調査区である。したがって、調査区内では、西側で河川跡が、東側の河岸部で各種遺構が検出された。

2　基本層位

第3次調査の北区と南区は、区画整理の際の盛土が40～120cm あり、その下に区画整理以前の耕作土層（1ａ～1ｄ層が厚いところで約70cm 存在する。耕作土層の最下層は、水田耕作上層（1ｄ層）であるが、その後盛土を何度か行って畑地に改変してきたようである。（第46図）

旧耕作土である1層の下は、河岸部分と河川跡部分（河川跡堆積土上部層）では基本層の状況が異なり、河岸部分では河川跡堆積土下部層群（16層）と基盤層（Ⅲ層）が現れ、この面で各種の遺構が検出されている。河川跡部分では、2層以下の黒色系の泥炭質土壌を主体とする堆積土層が検出されている。

調査区北壁際の深掘調査区での、河川跡堆積土下部層群（16層）と基盤層（Ⅲ層）の観察によると、16層は、砂質ないし粘土質土壌を主体とし、河川跡寄りでは、150cm 前後の厚さで、河川跡堆積土上部層（2～15層）とほぼ同じように傾斜して堆積している。ただし河岸上部付近では水平に近い傾斜となっている。基盤層であるⅢ層は、灰色系の粘土層・シルト質粘土層・砂層などがほぼ水平に堆積している。基盤層と16層との境界部分では、基盤層が20～30cm の厚さで、ブロック状に何回かにわたって崩落しているのが観察された（Ⅲ'層・Ⅲ"層）。

3　発見遺構の概要

1）溝　跡

溝跡は、調査区の東側で3条検出されている。

ＳＤ－1溝跡　調査区の東端で検出された。検出部の全長は4.5mで、方向はＮ－28°－Ｅである。上幅は90cm、深さは28cm である。断面形は舟底状を呈する。底面のレベルは北東部が南西部より10cm 高くなっている。堆積土はにぶい黄褐色砂、黒褐色粘土、灰黄褐色粘土の3層に分けられる。堆積土中にビニールが含まれていることから最近埋まったものと考えられる。また、この溝に架かる部分の簡易水道管が鉄パイプの中を通されていることや、溝跡の位置が、区画整理前の道路の側溝と一致していることから、区画整理以前の用水路跡と考えられる。遺物は、煙管（雁首Ｎ－1）・古銭（寛永通宝Ｎ－2）・指抜（Ｎ－3）が各1点（第49図）と、須恵器片1点、土師器片8点が出土している。

ＳＤ－2溝跡　調査区の中央部で検出された。検出部の全長は142cm で、方向はＮ－21°－Ｗである。上幅は18cm、深さは3cm である。断面形は舟底形を呈する。堆積土はオリーブ灰色細砂。出土遺物はない。

ＳＤ－3溝跡　調査区の中央部で検出された。検出部の全長は72cm で、方向はＮ－8°－Ｗである。上幅は26cm で、

深さは4cmである。断面形は舟底形を呈する。堆積土は緑灰色細砂。出土遺物はない。

2）土　坑

土坑は、調査区東側の河岸部で8基検出されている。

ＳＫ－１土坑　調査区の中央北端で検出された。攪乱坑により北半分を切られ、ＳＸ－１を切る。現状の平面形は東西軸153cmの半円形である。深さは40cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土はオリーブ黒色ないし黒色の粘土を主体とし、地山および黒色粘土のブロックを含む。堆積土の状況から人為的に埋められたと考えられる。後述する新しい時期の遺構と推定されるＳＸ－１を切っていることから、この遺構も新しい時期のものと考えられる。出土遺物はない。

ＳＫ－２土坑　調査区中央部で検出された。平面形は南北長軸68cm、東西短軸57cmの楕円形である。深さは17cmで、断面形は舟底形を呈する。堆積土は黒褐色シルト１層である。遺物は土師器片が１点出土している。

ＳＫ－３土坑　調査区中央部で検出された。平面形は南北長軸51cm、東西短軸44cmの略円形である。深さは９cmで、断面形は浅いＵ字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色粘土１層である。出土遺物はない。

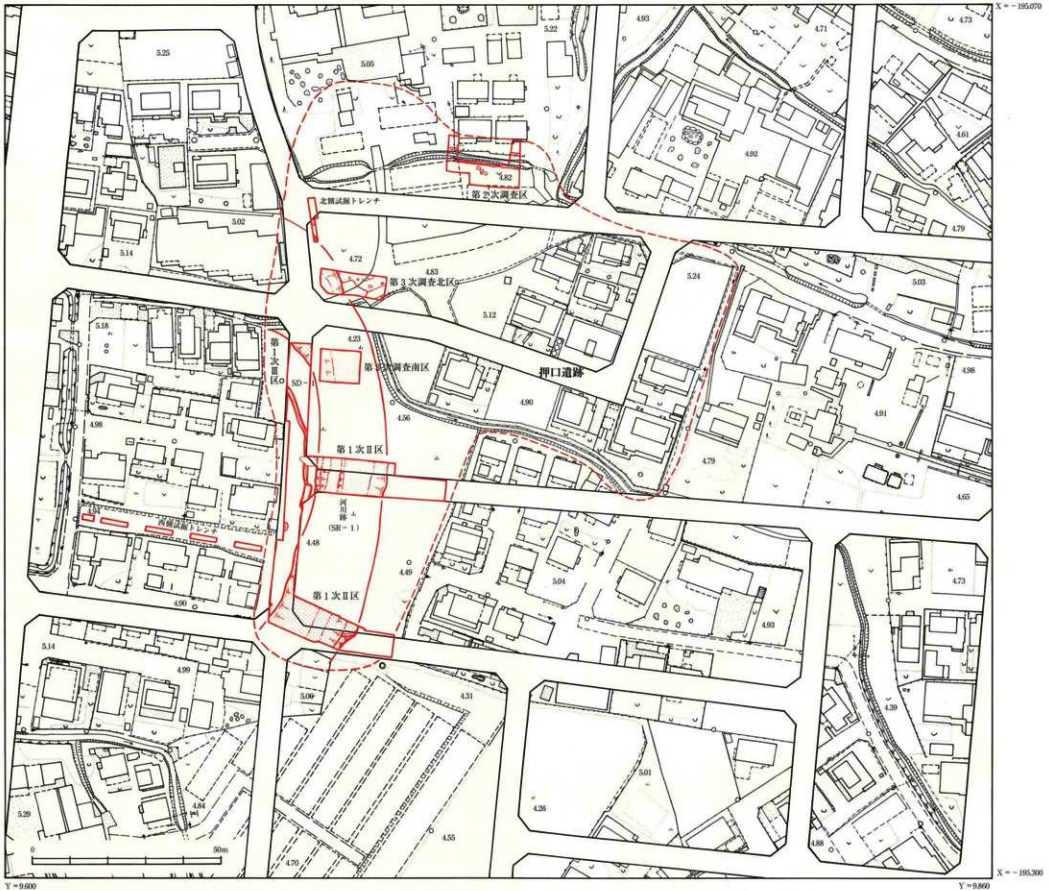
ＳＫ－４土坑　調査区の東部で検出された。平面形は南北長軸65cm、東西短軸60cmの略円形である。深さは30cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は黒褐色ないし灰黄褐色のシルト、灰色シルト質粘土の３層に分けられる。遺物は土師器片が10点出土している。

ＳＫ－５土坑　調査区の東部で検出された。平面形は東西長軸104cm、南北短軸72cmの隅丸方形である。深さは20cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は暗オリーブ色ないしオリーブ黒色の砂質シルト、暗緑灰色細砂に分けられる。１層は黒褐色シルトのブロックを含むことから人為的な堆積土と考えられる。２層は水の影響と観察される縞状の堆積が認められることから、自然堆積層と考えられる。遺物は土師器の甕が１個体と土師器片が20点出土している。土師器甕（Ｃ－１）は壊れてはいるが正立の状態で、土坑の中央から北西側にややよった位置の３層上面より出土した。破片の一部は個体内部及び３層上面付近に落下していた。Ｃ－１（第49図５）は、球形の体部に外反する口縁がつき、底部は台状である。外面は口縁部がハケメ後ヨコナデ、体部がハケメ調整。内面は底部がハケメ、体部がヘラナデ、口縁部がハケメ後ヨコナデ調整されている。器形や調整の特徴から塩釜式期のものと考えられる。外面体部には炭化物が付着している。

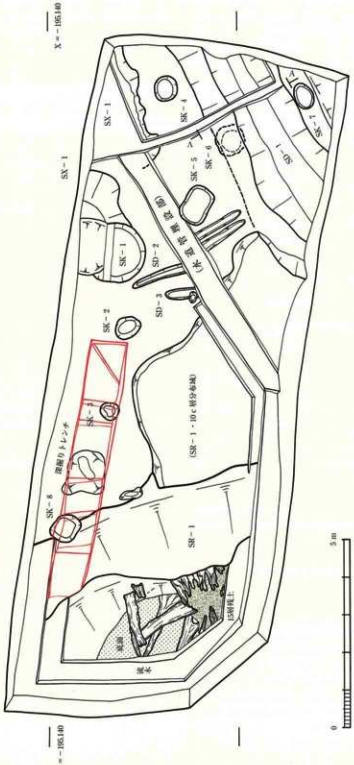
ＳＫ－６土坑　調査区の東部で検出された。南側の上部をＳＤ－１に切られている。平面形は東西長軸79cm、南北短軸75cmの不整円形である。深さは33cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は灰白色火山灰、黒色粘土質シルト、黒褐色粘土、黒褐色シルト質粘土の４層に分けられる。遺物は土師器片５点、ロクロ土師器片１点が出土している。

ＳＫ－７土坑　調査区の東端で検出され、北側の上部をＳＤ－１に切られている。平面形は東西長軸68cm、南北短軸52cmの楕円形である。深さは17cmで、断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトの１層である。遺物は土師器片が５点出土している。

ＳＫ－８土坑　河川跡を12層上面まで掘り下げた段階で河岸斜面上端から河岸面にかけてのところで検出された。平面形は東西長軸87cm、南北短軸65cmの不整方形である。深さは51cmで、断面形は不整な逆台形を呈する。堆積土は黒色ないし黒褐色のシルトを主体とし、にぶい黄褐色粘土のブロックを多く含む。人為的な埋土と考えられる。遺物は土師器鉢（Ｃ－２：第49図４）が１個体と土師器片が３点出土している。Ｃ－２は口縁の一部を欠損するがほぼ完形である。口縁部が南方を向いて倒れた状態で、土坑の中央より北西側にややよった位置から出土した。３層上面付近より出土したが意図的に埋められたものか埋土中に混入したものか判断できない。口縁部と体部の境がくびれ、口縁は外傾して大きく広がる。底部は台状となっている。外面は体部から口縁までハケメ調整。内面は体



第44図　押口遺跡と調査区配置図



第45図　押口遺跡第３次調査北区平面図

部がヘラナデ、口縁部がヨコナデ調整されている。外面には炭化物が付着している。全体にやや粗雑な作りではあるが、器形の特徴から塩釜式期のものと考えられる。

３）その他の遺構

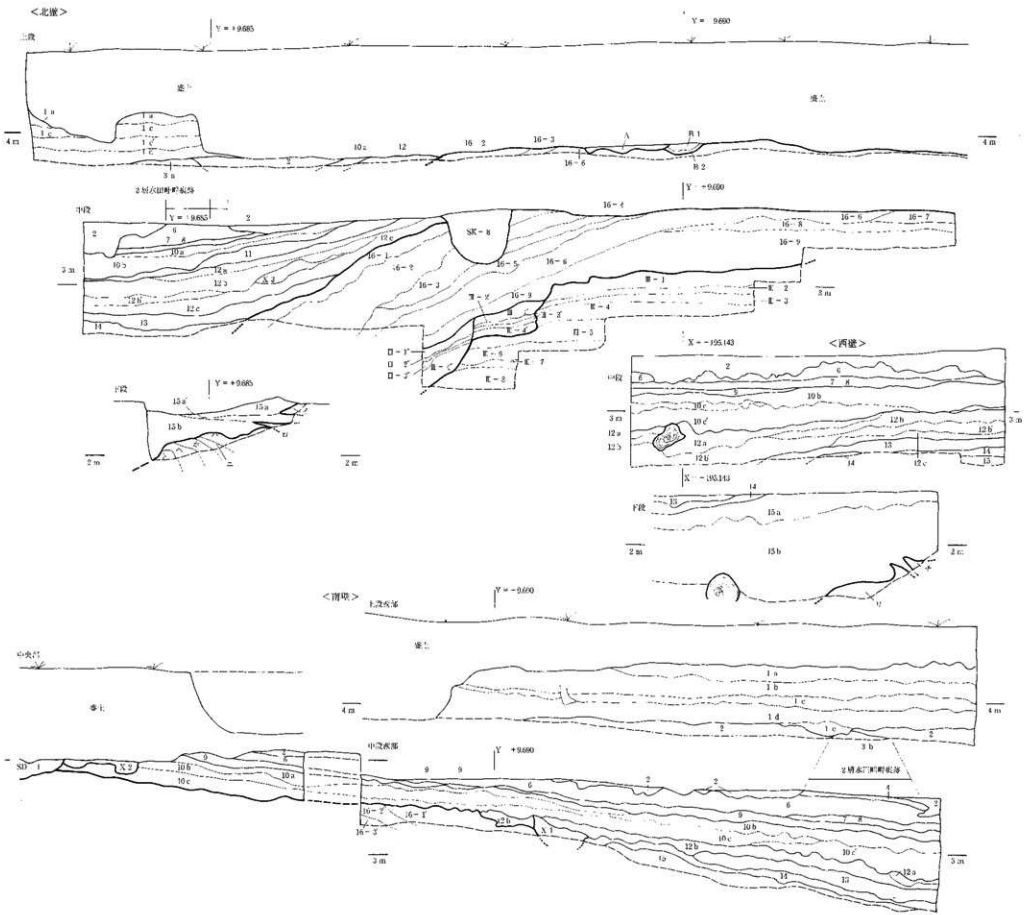
ＳＸ－１遺構　調査区東部の北端で検出され、北東部は調査区の外にのびている。東部は北東方向に延びる水道管

第46図土層注記

土層No	土色	土質	備考
盛土		砕石・残土	区画整理事業に伴う整地層
1a	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	ビーニル片・木炭片を含む、近年の畑耕作土
1b	10YR3/2 黒褐色	シルト	層中央に褐色粘土、下部に黒褐色粘土を帯状に含む
1c	10YR2/1 黒色	粘土	褐色土粒・褐灰色土粒をまばらに含む、耕作土（畑）
1c'	10YR2/3 にぶい黄褐色	粘土	褐灰色粘土のブロックを含む
1d	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑降状に含む、ゴム片を含む、水田耕作土
1e	10YR4/1 褐灰色	粘土	黒褐色土のブロックを含む
2	10YR2/2 黒褐色	粘土	4層（火山灰）及び6層（泥炭）のブロックを多く含む、水田耕作土
3a	10YR2/1 黒色	粘土	3b層・4層・6層のブロックを多く含む、水田耕作土
3b	10YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体を多く含む
4	2.5Y8/2 灰白色	火山灰	「灰白色火山灰」915年降下
6	7.5YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	未分解の植物遺体が層状に多量に堆積
7－8	7.5YR3/1 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
9	10YR2/1 黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含み、場所によっては泥炭質粘土化
10a	10YR2/2 黒褐色	粘土	北側では砂の混入が多くなり、砂質土壌に変化
10b	10YR3/2 黒褐色	粘土質砂	土師器片を多く含む、河川跡に広く分布、中央下部に灰オリーブ土を含む
10c	5G4/1 暗オリーブ灰色	砂	土師器片を多量に含む、河川跡西半部に分布、灰オリーブ土のブロックを含む
10c'	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂	土師器片を多く含む、河川跡中央に分布、灰オリーブ土のブロックを含む
11	7.5YR2/1 黒色	泥炭質粘土	河川跡北部に分布、河岸部では粘土に変化
12a	7.5YR3/1 黒褐色	泥炭質粘土	河岸部では粘土から砂質シルトへ変化
12b	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	浅黄色粘土を斑状に多量に含む、未分解の植物遺体を多く含む
12b'	10YR2/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む、褐色粘土を縞状・斑状に含む
12c	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	河岸部には暗褐色粘土を縞状に含む
13	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
14	10YR2/1 黒色	泥炭質粘土	部分的に層下部に砂を縞状に含む
15a	7.5YR3/2 オリーブ黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む
15a'	2.5Y4/2 暗灰黄色	泥炭質粘土	
15b	5Y4/2 灰オリーブ色	粘土	植物遺体（樹木の樹幹を含む）を多く含む

土層No	土色	土質	備考
16－1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土	下部はオリーブ灰色に変化
16－2	2.5Y5/2暗灰黄色	粘土	下部はオリーブ灰色の砂質粘土に変化
16－3	2.5Y5/1黄灰色	粘土	炭化物粒を含む
16－4	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質砂	
16－5	10YR4/2灰黄褐色	粘土	砂を含む、下部はオリーブ灰色に変化
16－6	10YR6/4にぶい黄橙色	砂	粘土を縞状に部分的に含む
16－7	10YR6/3にぶい黄橙色	砂質粘土	
16－8	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質粘土	炭化物をまばらに含む
16－9	5GY5/1オリーブ灰色	砂	粘土を塊状に部分的に含む、炭化物を部分的に含む
16－1'	2.5GY5/1オリーブ灰色	粘土	上部に暗緑灰色粘土が分布
16－2'	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土	
16－3'	2.5GY5/1オリーブ灰色	粘土質砂	
Ⅲ－1	10Y4/1灰色	粘土	
Ⅲ－2	7.5GY5/1緑灰色	シルト質粘土	
Ⅲ－3	7.5Y4/1灰色	砂質粘土	
Ⅲ－4	10Y5/1灰色	砂	
Ⅲ－5	7.5GY4/1暗緑灰色	シルト質粘土	
Ⅲ－6	5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土	
Ⅲ－7	7.5Y3/1オリーブ黒色	粘土	
Ⅲ－8	10Y5/1灰色	砂質粘土	
Ⅲ－1'	Ⅲ－1～Ⅲ－4層の崩落土		
Ⅲ－2'			
Ⅲ－3'			
Ⅲ－4'			
Ⅲ－1"	Ⅲ－1～Ⅲ－4層の崩落土		
Ⅲ－2"			
Ⅲ－3"			
Ⅲ－4"			

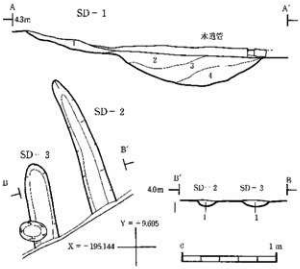
土層No	土色	土質	備考
X1	2.5Y2/1黒色	粘土	オリーブ灰色粘土のブロックを少量含む
X2	2.5Y3/1黒褐色	粘土	
X3	7.5GY5/1緑灰色	砂	調査区北部の河岸部にのみ分布
A	10YR4/1褐灰色	粘土	にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む
B－1	10YR2/1黒色	粘土	
B－2	10YR4/1褐灰色	粘土	にぶい黄褐色土のブロックを少量含む
イ	2.5GY5/1オリーブ灰色	粘土	
ロ	10Y5/1灰色	粘土	
ハ	10Y4/1灰色	粘土	
ニ	5GY5/1オリーブ灰色	砂質粘土	
ホ	2.5Y4/1黄灰色	砂質粘土	植物遺体を多量に含む
ヘ	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土	植物遺体を含む
ト	2.5GY3/1暗オリーブ灰色	粘土	植物遺体を含む
チ	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	粘土	植物遺体を含む
リ	10Y4/2オリーブ灰色	粘土	植物遺体を含む



第46図　押口遺跡第３次調査北区土層断面図

と北西方向に延びる簡易水道管の埋設により、西部は攪乱坑とＳＫ－１土坑により削平されている。検出部の全長は4.6m。深さは西部で80cm、東部では30cm あり壁面は緩やかに上がっている。堆積土は黒褐色ないし黒色のシルトと灰色と黒褐色の粘土に大別される。北壁断面では、堆積土が標高4.4m付近まで立ち上がり他の遺構に比べて浅い所から掘り込まれていることや、堆積土が１層に類似すること、堆積土の下部に未分解の籾殻が含まれていることなどから、新しい時期の遺構の可能性が高い。遺物は須恵器片１点、土師器片が20点出土している。

土層No.	土　色	土　質	備　考
SD－1・1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト質粘土	水道管掘り方埋め土
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂	灰黄褐色粘土を含む、カン・ビン・ビニール片を含む
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色の砂をまばらに含む
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
SD－2・1	10Y5/2 オリーブ灰色	細砂	黄褐色砂を霜降状に含む
SD－3・1	7.5GY5/1 緑灰色	細砂	黄褐色砂を霜降状に含む



第47図　溝跡実測図

第２節　河川跡の堆積土と出土遺物

１　河川跡の基本層位

押口遺跡３次調査北区では、調査区の西部で河川跡の北東岸上部から北東側の河川底面が検出された。幅約25mと推定される河川跡のうち、調査したのは北東側の岸から幅約4.5mの範囲である。底面が検出されたのは、河川跡の極一部で、調査の大部分は河岸斜面の堆積土層である。（第45図）

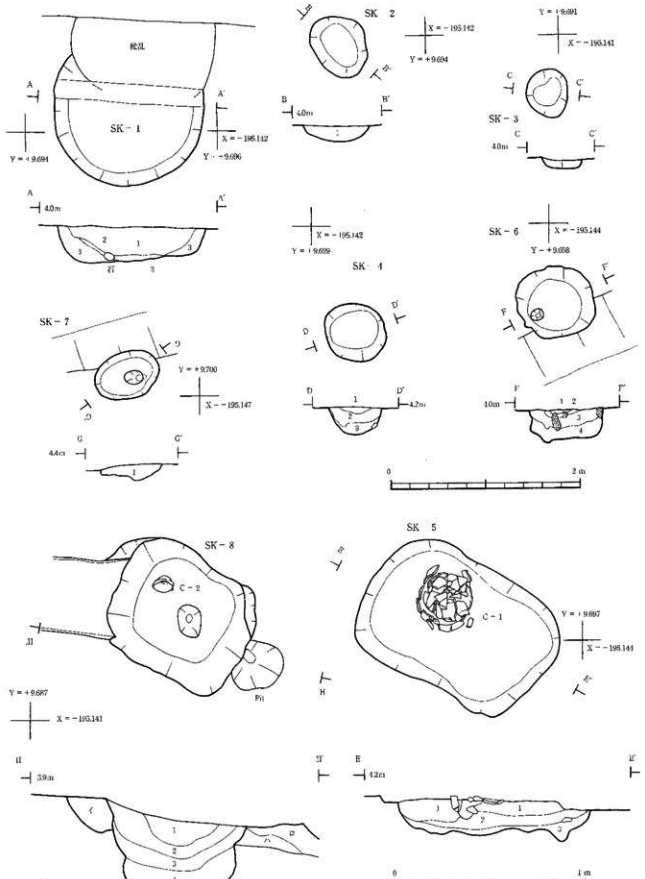
押口遺跡３次調査北区河川跡の基本層位は、中在家南遺跡第１・４次調査で検出された部分や、押口遺跡の１次調査で検出された河川跡の堆積土層の層序と基本的に一致し、２～15層に分けられる。ただし、次項で詳述するように、７層と８層に対応する層序にある堆積層の場合は、両者を区別をすることができなかった。また、10層に対応する堆積土は、この地区では他の地区に比べて砂を含む土砂の堆積が著しく、層がいくつかに細分された。

河川跡堆積土下部層（16層）については、先に記したように、150cm 前後の厚さで、河川跡堆積土上部層（２～15層）とほぼ同じような傾斜で堆積している。16層は、粘土層を主体としているが、砂または砂質土壌も存在する。層中には砂や粘土の薄層を層の傾斜方向に縞状に含んでいる。褐色ないし灰色系の土層からなり、黒色系の土層からなる河川堆積土上部層（２～15層）とは明瞭な差がある。（巻頭写真Ⅲ－３）

２　各層の堆積状況と出土遺物

１）２層と出土遺物

２層は、黒褐色の粘土からなる水田耕作土層で、層下部には４層（灰白色火山灰）及び黒色ないし黒褐色の泥炭のブロックを含んでいる。２層が河川跡の検出面となっている。２層上面では、検出部分の中央で河川の方向に一致して北西から南東方向にのびる２層水田跡に伴う畦畔痕跡が確認された。畦畔痕跡は、３ｂ層・４層・６層の混合層からなり、検出面では幅が60～95cm ある。検出された畦畔痕跡の南部には、水口が切られており、水口にも２層が堆積している。水口部分の２層を除去すると、西側の畦畔斜面部分に背面が弧状で先端がやや尖った形態の工具による掘削痕跡が明瞭に残っていた（図版16－３）。畦畔痕跡の両側は10～15cm の深さで２層が堆積している。


SK－1
SK－2
SK－3
SK－4
SK－5
SK－6
SK－7
SK－8
X＝－195.142
Y＝＋9.694
X＝－195.141
Y＝＋9.691
X＝－195.144
Y＝＋9.698
X＝－195.147
Y＝＋9.700
X＝－195.141
Y＝＋9.697
X＝－195.142
Y＝＋9.699
Y＝＋9.687
4.0m
4.2m
4.4cm
3.9m
0
2m
1m

第48図　土坑実測図

ＳＫ－１

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	5Y5/1オリーブ黒色	粘土	灰色砂及び黒色粘土のブロックを含む
2	N2/0黒色	砂・粘土	ブロック状の堆積
3	10Y3/1オリーブ黒色	粘土	灰色砂（地山）のブロックを多量に含む

ＳＫ－２

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	2.5Y3/1黒褐色	シルト	黒色粘土及び灰オリーブ砂を斑状に含む

ＳＫ－３

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3にぶい黄褐色	粘土	黒褐色砂及び灰色砂を斑状に含む

ＳＫ－４

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	7.5Y3/1黒褐色	シルト	にぶい黄色砂を斑状に含む
2	10YR4/2灰黄褐色	シルト	黒色シルト及びにぶい黄シルトがブロック状を呈して含む
3	5Y5/1灰色	シルト・粘土	灰オリーブ粘土のブロックを多く含む

ＳＫ－５

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	2.5Y4/3暗オリーブ色	砂質シルト	黒褐色シルトのブロック、オリーブ褐色の砂質シルトを少量含む
2	2.5Y5/1オリーブ黒色	砂質シルト	黒褐色シルト・灰オリーブ砂質シルトを斑状に含む
3	7.5G4/1暗緑灰色	細砂	暗オリーブ色砂質シルトを少量含む

ＳＫ－６

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	5YR3/2赤褐色	火山灰	風化変質火山灰層中に黒褐色シルトを多く含む
2	10YR2/1黒色	泥炭質シルト	未分解の植物遺体を少量含む
3	10YR2/2黒褐色	粘土	
4	10YR2/2黒褐色	シルト質粘土	植物遺体をわずかに含む

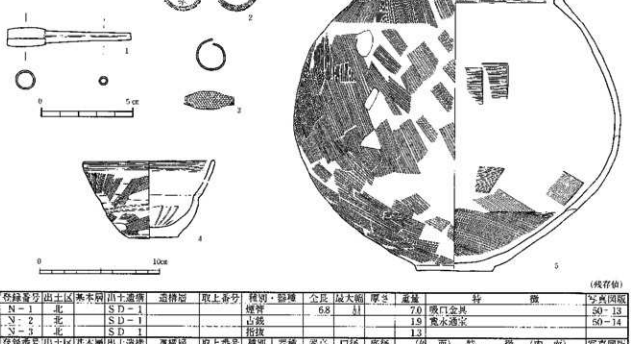
ＳＫ－７

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/1黒褐色	砂質シルト	オリーブ黄色土のブロックを含む、ピニール片を含む

ＳＫ－８

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR2/2黒褐色	シルト	暗褐色の砂質シルトのブロックを多く含む
2	10YR2/1黒色	粘土質シルト	にぶい黄橙色層その大きブロックを含む、層を斑状に含む
3	10YR2/1黒色	砂質シルト	にぶい黄橙色粘土の大きブロックを含む
4	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	灰オリーブ色粘土、にぶい黄橙色のブロックを少量含む
5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	にぶい黄橙の砂質シルトを斑状に含む、粒、遺物まで
ロ	10YR2/1黒色	礫・砂質シルト	礫・河川跡堆積土、12～14層に対応
ハ	10BG4/1にぶい青緑色	砂質シルト	河川跡堆積土、16層に対応

第48図土層注記



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	重量	特　徴	写真図版
1	N－1	北		SD－1			埋管	6.8	計	7.0	吸口金具		50－13
2	N－2	北		SD－1			山銅			1.9	寛永通宝		50－14
3	N－3	北		SD－1			指環			1.3			

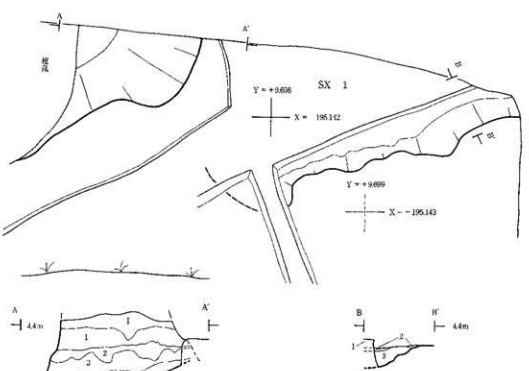
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器長	口径	底径	（外　面）特　徴	（内　面）	写真図版
4	C－2	北		SK－8		No.1	土師器	坏	6.5	11.2	4.8	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	49－12
5	C－1	北		SK－5			土師器	甕	25.7	19.4	6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	49－13

第49図　北区溝跡・土坑出土遺物

２層水田跡の掘削深度は、大部分は６層の中・下部に達しており、深いところでは10層にまで影響を及ぼしている。

２層からの出土遺物としては、土師器・須恵器・陶器・磁器・木製品が出土している。土師器・須恵器は多数出土しているが、いずれも摩滅した小破片である。須恵器の破片の中には、坏の体部下半に「永？冨」の墨書が横位の位置にある破片（第53図２：Ｅ－１）が存在する。

陶器には、相馬産と考えられる碗の小破片などが数点ある。磁器としては、摺り絵の碗の小片破片（Ｊ－１）が



A－A'

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒色	シルト	砂を含む。下部は灰黄褐色砂質シルトと、斑土
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	褐色土粒を多く含む。礫を含む
2	10YR2/1 黒色	シルト	褐灰粘粘土のブロックを多く含む
3	5Y4/1 灰色	粘土	
4	10YR3/1 黒褐色	粘土	上部に未分解のモミガラを含む
5	5Y4/1 灰色	シルト質粘土	炭化物粒を含む

B－B'

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を斑状に含む
2	10YR6/2 灰黄色	粘土	
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色砂のブロックを含む

第50図　その他の遺構実測図

1点出土している（図版49－16）。

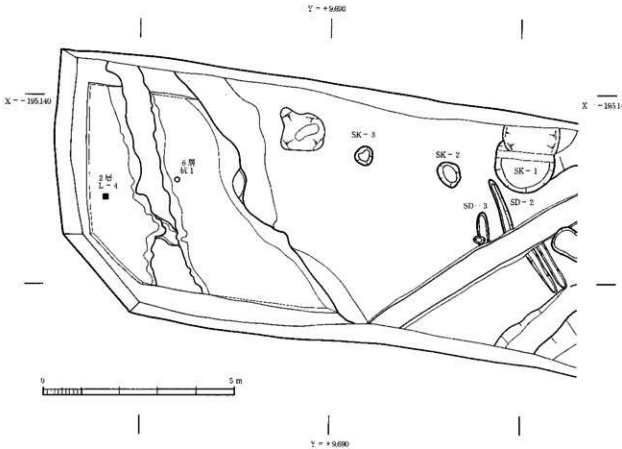
木製品類としては、ヘラ（L－3）・下駄（L－4）・角材（L－2）が出土している（第54図2～4）。木製品のヘラL－3は、幅1.2cmほどの竹材の先端を舌状に尖らせたものである。反対側の端部は欠損する。下駄L－4は、台部の平面形が隅丸長方形の差歯下駄で、台部の断面形は縦・横とも略台形を呈する。緒孔は前後とも円形で、前緒孔は台表から見て前方に傾斜してあけられている。前緒孔の位置は、台表からみて約5mmほど左側に寄っている。後緒孔の周の台裏には溝状の彫り込みがあり、鼻緒を結節していたと考えられる。歯の横断面形は上面と下面の差の少ない台形を呈し、下端が僅かに広くなっている。厚さは6mm前後である。

角材L－2は、一端が鈍角的に尖る楔状の材で、ほぼ全面が加工されている。断面形はほぼ方形である。尖った側の端部は磨れて光沢を帯びている。

2層の年代については、摺り絵の碗が出土したことから、下限が19世紀後半以降まで下がることが考えられ、これまで近世の中に位置付けてきた2層の年代を、明治期まで広げる必要があるものと考えられる。

2）3a層・3b層・4層・5層

3a層・3b層・4層は、2層の水田耕作に伴う掘削によりほとんどが失われ、2層水田の畦畔痕跡の部分にわ



第51図　河川跡２層検出畦畔痕跡

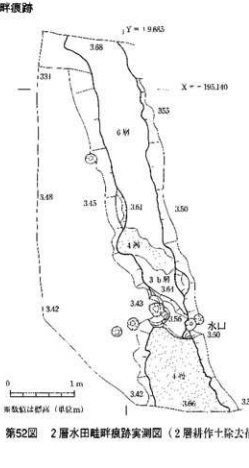
ずかに残っているだけである。残存部での３ａ層は、調査区北壁で観察したもので、黒色の粘土層からなり、３ｂ層・４層・６層をブロック状に含む水田耕作土層である。３ｂ層は、黒色の泥炭質粘土層で未分解の植物遺体を多く含んでいる。４層は、灰白色の火山灰層で５cm前後に堆積している。

本調査区では、５層と６層を区別することはできなかった。

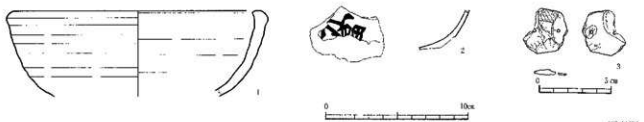
３）６層と出土遺物

北区の６層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、未分解の植物遺体が薄い縞状或なって堆積している。河川跡検出部の河岸部寄りの部分を除いて、全体的に検出されたが、２層水田跡の耕作に伴う掘削によって、上部がかなり失われている（３ａ層水田耕作段階に、すでに削平を受けていた可能性もある）。２層水田跡の畦畔のドとなっているために、保存状態の良好な部分では20cm前後の厚さがある。

遺物は、土師器・須恵器と石製模造品が出土したほか、杭が１本検出されている。土師器はロクロ使用前のものとロクロ使用後の小破片が混在している。須恵器は底部から口縁部にかけて丸み



第52図　２層水田畦畔痕跡実測図（２層耕作土除去後）



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺物	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）	特　徴	（内　面）	写真図版
1	I－1	北		SR－1	1		陶器	鉢	(6.1)	17.5	－	ナマコ釉		同・黒焼	49－15
2	E－1	北		SR－1	2		須恵器	坏	－	－	－	墨書「(水？)冨」			49－14
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺物	遺構層	取上番号	種別・器種		全長	最大幅	厚さ	重量	特　徴		写真図版
3	K－1	北		SR－1	6		石製模造品		3.2	2.7	0.4	3.6	円盤・2孔・黒色スレート		50－1

第53図　北区河川跡1層～6層出土遺物

をもって立ち上がる坏の破片がある。器形の特徴から回転糸切り底の可能性が高い。石製模造品K－1は、2孔のあけられた円盤形の製品で、一部を欠損している。縁辺は磨られているが角が残り、両面も平らな部分は研磨されているが、剥離面がそのまま残っている部分も多い。この製品については、類似品が多数出土している10層から浮いてきた可能性が考えられる。

6層の杭L－5は、河岸斜面で検出されたものである。長さ92.5cmの半截丸杭で、先端には4面からの加工がある。

4）7－8層

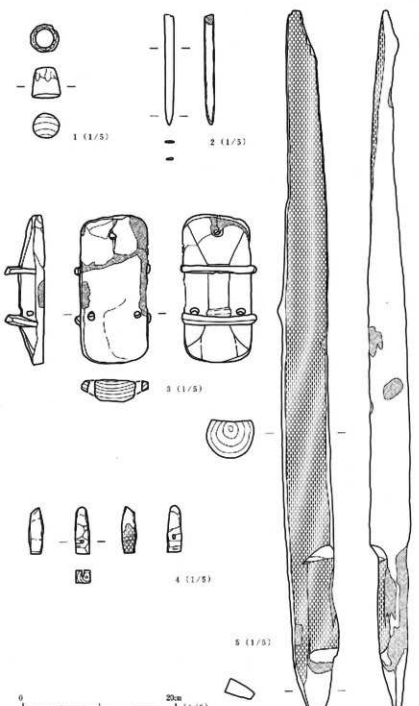
本調査区で、泥炭質土壌の6層と、黒色粘土を基準とする9層に挟まれた状態で分別された土層について、他調査区の7層および8層の堆積時期に堆積した地層と位置付けられると判断し、「7－8層」と呼んで調査を行った。7－8層は、未分解の植物遺体を含む黒褐色の粘土層で、河川跡の中央寄りに分布し、層厚は5～10cmほどである。他地域でも7層・8層からの出土遺物は少ないが、本調査区でも、7－8層として取り上げられた遺物はない。

5）9　　層

9層は、植物遺体を多く含む黒色粘土層で、調査区北部では河川跡の中央部にのみ分布しているが、南部に移行するにしたがって分布範囲が広がり、調査区の南壁側では河岸上面付近まで分布している。層厚は5～10cmほどである。9層から10層への変化は漸移的でどちらの層に所属するか明確に出来なかった遺物（K－2）や、それぞれ9層と10層として取り上げた土師器片が接合したもの（C－4・5・6・7）がある。これら、10層と区別できなかった遺物と、両層の遺物が接合したものについては、10層の項で説明を行う。

6）10層と出土遺物

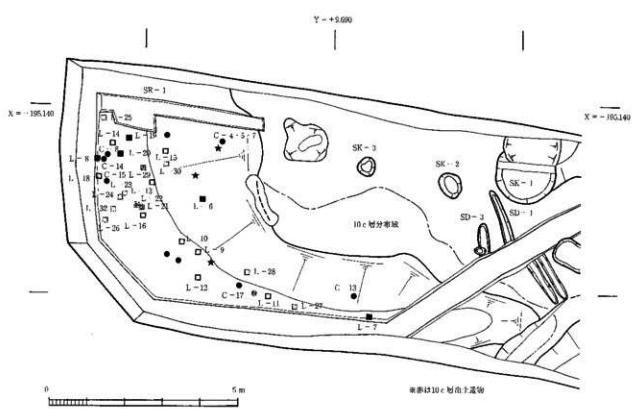
押口遺跡第3次調査北区の10層は、押口遺跡から中在家南遺跡にかけて検出された河川跡における10層対応層にあって、これまでの調査区と異なった堆積状況を呈している。他調査区の10層は、中在家南遺跡第1次調査Ⅷ・Ⅸ区で、黒褐色の上部の粘土層と下部の泥炭質の粘土層に分けられた以外は、ほぼ同質の、黒色粘土層（押口遺跡第1次調査Ⅰ・Ⅱ区）・黒色シルト質粘土層（中在家南遺跡第1次調査Ⅱ区）・黒褐色の粘土質泥炭層（中在家南遺跡第1次調査Ⅵ区）であり、総じて植物遺体を含む粘土質土壌が基本となっていた。これに対して、本調査区では、10層対応層の上部層には、黒褐色の砂質の粘土層からなる10a層・10b層（遺物取り上げ時の層位「10層」）が堆積し、その下部には暗オリーブ灰色の純粋な砂層からなる10c層・10c'層（遺物取り上げ時の層位「10c層」）が堆積しており、土質の違いが顕著である。このような相違の背景には、第55図の10c層分布範囲に示したとおり、10c層の堆積時期に、北区南部に河川跡に流れ込む小規模で浅い谷地形が形成され、この谷の上部から砂の供給があ



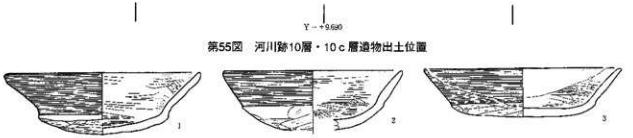
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴						樹種	木取り	写真図版
									最大幅	最小幅									
1	L－1	北区			1層		木・栓	4.0	3.7	2.4								芯無丸	51－1
2	L－3	北区		SR－1	2層		木・ヘラ	14.6	1.2	0.3	竹製								51－3
3	L－4	北区		SR－1	2層	木No.1	木・下駄	19.6	高さ	身部幅	身部厚	歯高	歯幅	歯厚	差し歯下駄	木体ホリ 前ブチ属	板目		51－4
									5.2	8.7	2.8	4.1	9.9	0.6					
4	L－2	北区		SR－1	2層		材・角材	6.2	1.8	1.4	全面加工　栓？							芯持角	51－2
5	L－5	北区		SR－1	6層	杭No.1	杭・半截丸杭	92.5	6.2	4.9	先端加工　4面多段							半截丸	51－5

第54図　北区河川跡1層～6層出土木製品類

り、10c層が形成されたと考えられる。その後砂の供給の減少があるにせよ、10a層・10b層堆積段階まで砂が流入したと考えられる。なお、北区に隣接している南区の10層には砂が含まれていないので、砂層の堆積範囲が狭かっ



第55図　河川跡10層・10ｃ層遺物出土位置



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）　特　徴	（内　面）	写真図版
1	C－4	北		SR－1	9、10層	(No.5)	土師器	坏	4.9	15.6	10.3	ヨコナデ・ヘラケズリ	黒色処理・ヘラミガキ	47－5
2	C－5	北		SR－1	9、10層	(No.5)	土師器	坏	(4.7)	14.2	11.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	黒色処理・ヘラミガキ	47－7
3	C－6	北		SR－1	9、10層		土師器	坏	3.8	15.6	11.3	ヨコナデ・ヘラケズリ	黒色処理・ヘラミガキ	47－6
4	C－7	北		SR－1	9、10層	(No.5)	土師器	坏	(3.6)	17.0	11.8	？	黒色処理・ヘラミガキ	47－8

第56図　北区河川跡９層～10層出土遺物

たか、河川の流れの方向が北に向かっていたことが推察される。

10層から出土した遺物には、土師器・石製品・木製品類があり、特に土師器は多量の破片が出土した。９層から10ｃ層にかけて出土した土師器は、出土層位によって上位から下位に分けると、先に記したように、A群＝9層と10ａ・ｂ層が接合したもの（第56図）、B群＝10ａ・ｂ層（遺物取り上げ時の層位「10層」）から出土したもの（第57図）、C群＝10ａ・ｂ層（遺物取り上げ時の層位「10層」）と10ｃ層が接合したもの（第58図）、D群＝10ｃ層から出土したもの（第59図）がある。

A群の図化した４点の土師器坏（C－4・5・6・7）は、丸底で底部と口縁部の境の内外面に明瞭な段がつい

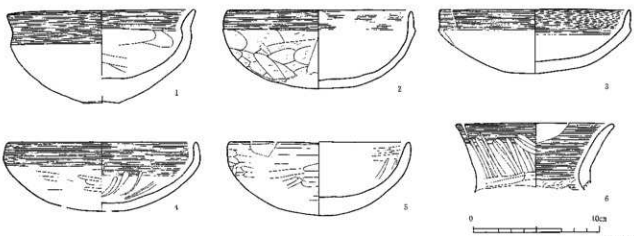
（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）特徴	（内面）特徴	写真図版
1	C－3	北		SR－1	10層		土師器	坏	6.4	11.5		口縁部：ヨコナデ・ヘラミガキ	黒色処理・ヘラミガキ	47－9
2	C－10	北		SR－1	10層		土師器	坏	6.0	13.0		ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ	47－10
3	C－11	北		SR－1	10層		土師器	坏	(5.7)	14.4		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ	47－11
4	C－8	北		SR－1	10層	No 1	土師器	坏	8.2	12.9		ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ	47－12
5	C－9	北		SR－1	10層		土師器	坏	9.3	10.4		ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラミガキ・ナデ	47－13
6	C－14	北		SR－1	10層	No 2	土師器	甕	9.0	11.5		ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	48－5
7	C－16	北		SR－1	10層		土師器	甕	7.3	－	5.4	ナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	
8	C－17	北		SR－1	10層	No 7	土師器	甕	(9.0)			ヘラケズリ	ヘラナデ・ヘラケズリ	48－8
9	C－15	北		SR－1	10層	No 3	土師器	甕	7.0		5.7	ヘラケズリ	ヘラナデ・ナデ	48－7
10	C－13	北		SR－1	10層	No 6	土師器	香炉	(6.4)			三方透し・ヘラミガキ	ヨコナデ	49－9
11	C－12	北		SR－1	10層		土師器	高坏	(7.2)	12.0		ハケメ・ヘラミガキ	ヘラナデ・ナデ	49－7
12	B－2	北		SR－1	10層		弥生器	鉢				口縁・沈線文		47－2
13	B－1	北		SR－1	10層		弥生器	鉢				口縁・沈線文		47－1
14	B－3	北		SR－1	10層		弥生器	鉢				口縁・沈線文		47－3

第57図　北区河川跡10層出土遺物

て強く屈曲し、口縁部は幅が広く外反している。外反する口縁の立ち上がりの角度は比較的急である。内面は全面がヘラミガキされた上で黒色処理されている。各個体とも丁寧な造りである。これら4点の坏は、仙台市累遺跡の10号住居跡（仙台市文化財調査報告書第14集・第43集）の坏と共通する特徴が認められ、住社式期に属するものと考えられる。

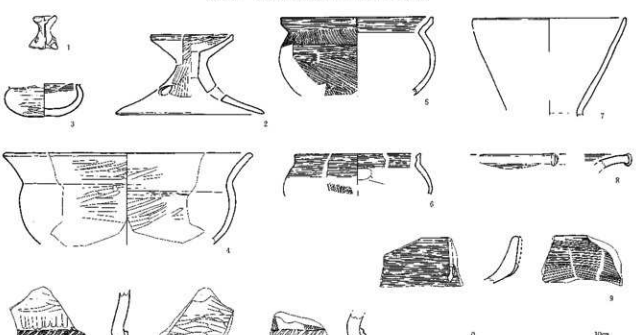
B群の土師器は、器種としては杯類と甕類がある。坏類は、いずれも丸底ないし丸底風平底である。内面は、黒色処理されたものと黒色処理されていないものがある。C－3は黒色処理された坏で、器高の1/2ほどの位置に底



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）　特	徴　（内　面）	写真図版
1	C－22	北		SR－1	10、10c層		土師器	坏	7.3	14.6	2.8	ヨコナデ		ヨコナデ・ナデ	48－1
2	C－18	北		SR－1	10、10c層		土師器	坏	6.2	14.4		ヨコナデ・ヘラケズリ		ヨコナデ	48－4
3	C－20	北		SR－1	10、10c層		土師器	坏	5.1	15.0		ヨコナデ		ヨコナデ	48－2
4	C－21	北		SR－1	10、10c層		土師器	坏	5.5	14.7		ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ		ヨコナデ・ヘラミガキ	48－5
5	C－19	北		SR－1	10、10c層		土師器	坏	5.8	14.2		ヘラミガキ		ヘラミガキ	48－3
6	C－25	北		SR－1	10、10c層		土師器	壺	(5.4)	12.4		ヨコナデ・ヘラミガキ		ヨコナデ	48－9

第58図　北区河川跡10層・10c層出土遺物



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）　特	徴　（内　面）	写真図版
1	C－34	北		SR－1	10c層		土師器	ミニチュア壺	(2.7)	1.9		陥台部、ナデ		49－8
2	C－23	北		SR－1	10層		土師器	脚台	6.3	(6.4)	(11.6)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	49－10
3	C－33	北		SR－1	10c層	No.1	土師器	小型鉢	(2.6)		2.5	ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	49－2
4	C－27	北		SR－1	10c層		土師器	鉢	(7.4)	(19.1)		ヘラミガキ	ヘラミガキ	49－1
5	C－26	北		SR－1	10c層		土師器	皿	(6.2)	12.0		ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ハケメ	48－11
6	C－28	北		SR－1	10c層		土師器	壺	(3.3)	9.7		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	48－10
7	C－24	北		SR－1	10c層		土師器	壺	(7.7)	11.9		不明	ヘラミガキ？	49－3
8	C－32	北		SR－1	10c層		土師器	皿				ヨコナデ・口縁部付文	ヨコナデ	49－4
9	C－29	北		SR－1	10層		土師器	皿				ヨコナデ・口縁部押文	ハケメ	
10	C－30	北		SR－1	10c層		土師器	皿				ヘラミガキ・頂部線書文	ヘラミガキ	49－6
11	C－31	北		SR－1	10c層		土師器	皿				ハケメ・頂部押書文	ヘラナデ	49－5

第59図　北区河川跡10c層出土遺物

部と口縁部の境があり、内外面に段ないし屈曲がある。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部が僅かに内湾している。器形および調整の特徴から伴社式期に属するものと考えられる。A群の坏C－4・5・6・7とは同期または

同型式にあっては古い段階の可能性がある。B群の黒色処理されていない杯類（C－8・9・10・11）は、口縁部にいくつかの形態がある。C－10は、半球形の底部から体部と口縁部との境の外面に僅かな段がつき、短い口縁部は内傾している。C－11は、半球形の底部から体部にかけて半球形に立ち上がり、短い口縁部が外傾して体部との境目の内面に強い稜を形成する。C－8は、半球形の底部から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、口縁部は軽く内傾する。C－9は、底部から体部にかけて球形に近く内湾しながら立ち上がり、体部上端がすぼまって、口縁部は直立する。これらの、非黒色処理の坏類は、いずれも中在家南遺跡第1次調査における10層・11層出土土師器坏に類例が求められ、広義の南小泉式期に位置付けられる（工藤哲司：1996「仙台市文化財調査報告書第213集中在家南遺跡他」第2分冊第8部6章）。甕類は、器形全体の復元できるものはない。C－14は、球形に近い体部に外反する厚手で幅広の口縁が付き、口縁端部は肥大している。C－15・16・17は体部下半の破片である。C－17は、長胴化した甕と観察される。これら3点の甕については、南小泉式の範疇として理解できる。

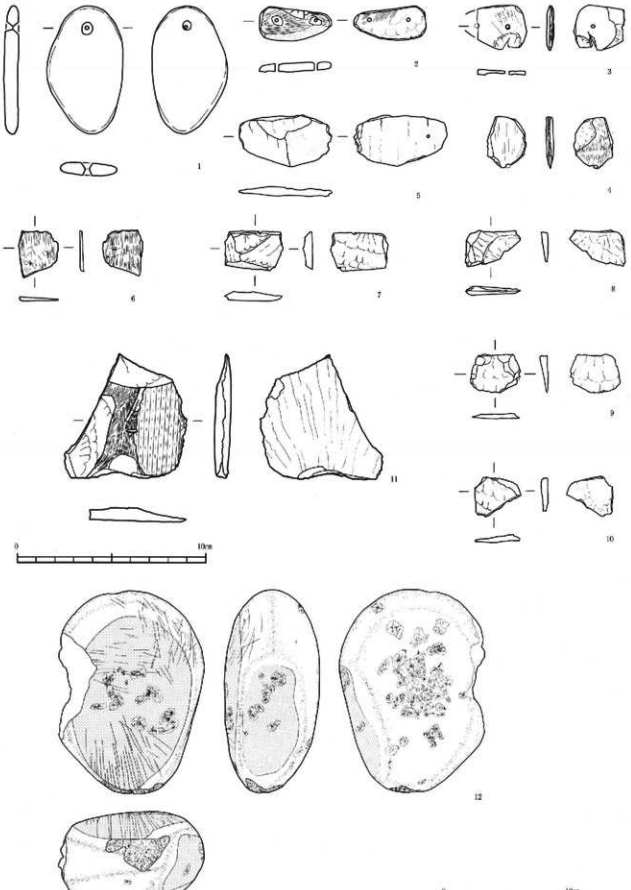
B群の土師器には、この他3方に透かし孔のある器台（C－13）と高杯（C－12）があり、この2点は塩釜式期のものと考えられる。また、桝形囲式期の弥生土器（B－1・2・3）も出土している。

C群の土器には土師器の坏（C－18・19・20・21・22）と壷（C－25）がある。坏は丸底ないし平底風丸底で、底部から体部にかけては半球形を呈し、短い口縁部が外傾して体部と口縁部の境の内面に稜の形成されるもの（C－22）、短い口縁部と体部の境の外面に段が形成されて口縁部が直立するもの（C－18・20）、短い口縁部と体部の境の外面に段が形成されず口縁部が直立するもの（C－21）、底部から口縁部まで半球形に立ち上がるもの（C－19）がある。これらの坏はB群坏の黒色処理されていないものや、中在家南遺跡第1次調査における10層・11層出土土師器坏に類例が求められ、南小泉式期に位置付けられる。壷C－25は、南小泉式または塩釜式に相当するものと考えられる。

D群の土師器には、器台のミニチュア土器（C－34）・鉢（C－27・33）・器台（C－23）・小型甕（C－26・28）・壷（C－29・30・31・32）の器種がある。ミニチュア土器C－34は、器台を模したもので、脚部には3方向からの透かしがあり、受け部から脚部に透る孔もあけられている。鉢C－27は、扁平な半球形の体部に強く外反する口縁がつく。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。鉢C－33は、扁平な球形の体部で、口縁部（頸部）との境目ですぼまり、外反する口縁または頸部にいたる。体部外面は、丁寧にヘラミガキ調整されている。器台C－23は、小型の器台で、脚部は裾部がやや広がる円錐形を呈し、三方透かし孔がある。受け部は小さく浅い皿形を呈し、端部は短く直立している。甕C－28は、体部の上部がすぼまって口縁部となり、口縁は略S字状に屈曲し、体部と口縁部との境の内面に明瞭な稜線が形成される。甕C－26は、口縁部が不明瞭ながらS字状に屈曲する扁平な甕で、体部外面は斜位にハケメ調整されているが肩部には横位のハケメ調整が巡っている。C－30・31は、壷の体部から頸部にかけての付近の破片で、境には隆帯が巡り、隆帯の上面には斜位の刻みが連続している。C－29・32は壷の口縁部の破片で、C－29には直立気味に立つ幅広の口縁部に、縦に長い棒状の浮文が貼付けられている。C－32は、強く外反する口縁部で、平らで側方をむく口唇部には、浮文が貼付けられている。

D群土師器については、器種や器形の特徴から、塩釜式期のものと考えられる。特に、頸部に装飾文のある壷の破片は、塩釜式期でも古い段階に位置付けられている仙台市戸ノ内遺跡の方形周溝墓出土土師器壷などに類例が求められる（辻：1994・1995。丹羽：1985）。

上記のように北区の9層から10c層にかけては、9層から10層＝住社式土師器・10層＝住社式土師器と南小泉式土師器・10層から10c層＝南小泉式土師器と塩釜式土師器・10c層＝塩釜式土師器というように、土器型式の新旧と層位の前後とが符合して出土している。10層（10a層・10b層）から9層への堆積層の変化の時期が、広義の南小泉式から住社式への変化の時期にあたり、坏の形態もバラエティーに富んだ丸底非内黒の短い口縁のものから、内黒の幅広口縁のものに変化している。また内黒の幅広口縁の坏は、口縁部の立ち上がりが急で直立に近いものか



第60図　北区河川跡９層～10ｃ層出土石器・石製品

第60図観察表

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器械	長さ	最大幅	厚さ	重量	特徴	写真図版
1	K－3	北		S R－1	10層		有孔礫製品	6.7	4.0	0.7	32.4	1孔・	50－10
2	K－5	北		S R－1	10層		石製模造品	1.8	3.8	0.4	4.4	有孔円盤・	50－2
3	K－2	北		S R－1	9、10層		石製模造品	2.3	2.5	0.4	2.1	有孔円盤・	50－3
4	K－8	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	2.7	2.0	0.4	2.7	円盤・	50－4
5	K－6	北		S R－1	10層		石製模造品	2.6	4.9	0.5	7.2	石製品、穿孔しようとした状跡あり・	50－5
6	K－12	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	2.4	2.0	0.1	1.5		50－6
7	K－9	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	2.0	3.1	0.5	4.3		50－7
8	K－10	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	1.8	2.8	0.3	2.0		50－8
9	K－11	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	2.0	2.6	0.4	2.0		50－9
10	K－13	北		S R－1	10ｃ層		石製模造品	2.0	2.4	0.4	1.9		
11	K－4	北		S R－1	10層	No 3	石器・不明	6.3	6.1	0.9	32.3	磨り面・	50－11
12	K－7	北		S R－1	10ｃ層		石器・剥ね	16.0	11.3	7.5	2040	粗く打ち欠いた剥片・主要剥離面および打面は自然面・	50－12

ら、立ち上がりのやや弱いものへの移行が窺われる。

しかし、10ｃ層の中からもＣ群のように南小泉式の土師器が出土しており、10層の下部については明確に川土土器の年代と堆積時期が一致するものではないものと考えられる。10ｃ層から10ａ層の堆積土は、基本的に南小泉式期に堆積したものであるが、その砂層の供給源に塩釜式期の遺構または包含層があったために、塩釜式期の土師器が混在して堆積したものと理解される。このことは、10ｃ層出土の当該期の土師器がいずれも小破片が多く、完全なものはミニチュアの器台だけであることや、次に記したとおり石製模造品が、10ｃ層から出土していることもこのことを裏付けている。

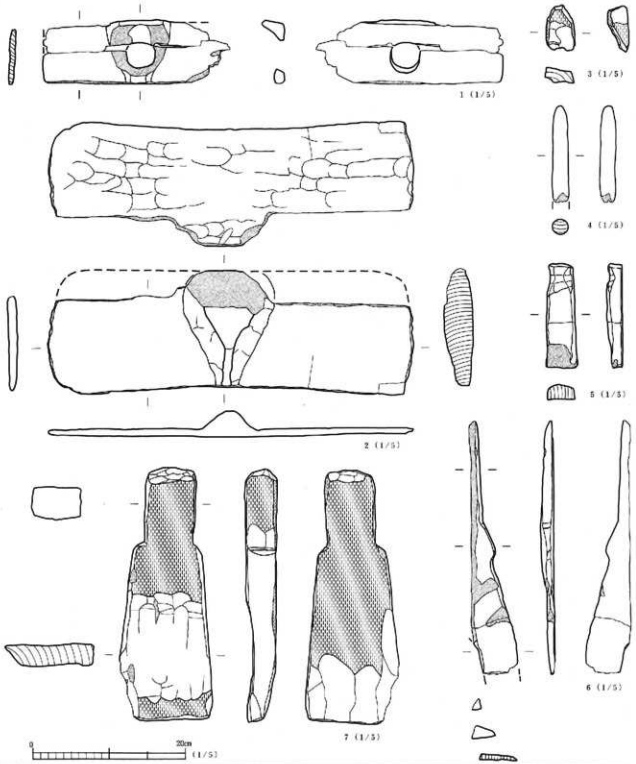
石製品としては、有孔礫製品（Ｋ－３）・石製模造品（Ｋ－２・５・６・８～13）・礫石器（Ｋ－７）・不明石製品（Ｋ－４）があり、土師器と同様に10層の細分各層から出土している（第60図）。有孔礫製品Ｋ－３は、長軸6.7cmの扁平な楕円形の自然礫に、両面から加工して円孔をあけたものである。孔の位置は、片端に寄っている。

石製模造品と考えられる石は、加工の状態および破片の状態によっていくつかに分けられる。Ｋ－５は、２孔の楕円盤である。両面や縁辺に擦痕が認められ、完成品と考えられるが、両面に自然面や剥離の痕跡をそのまま残している。Ｋ－２は、不正な楕円形を呈するもので、側辺に円孔が半分残っていることから完成後に壊れたものである。Ｋ－８は、側辺に円孔の痕跡があることから、完成後または製作中に壊れものを再加工したと考えられる。Ｋ－２・８とも一部に剥離面をそのまま残している。Ｋ－６は、両面とも剥離面のままであるが、片面の片端に寄った位置に穿孔を試みた痕がある。未製品または途中で廃棄された遺物と考えられる。Ｋ12は、両面に擦痕の観察される破片である。縁辺に磨り面が認められないことから、未製品ではなく、完成品の破片の可能性が高い。Ｋ－９・10・11・13の４点は、両面が剥離面および一部自然面からなる剥片である。大きさから見て素材となる剥片ではなく、石製模造品の製作過程で生じた剥片と考えられる。

礫石器Ｋ－７は、やや扁平な楕円形の礫を素材とする石器で、片面が凹面と磨り面で反対面に凹面が広がる。側面にも凹面と磨り面があり、やや尖ったほうの側面は叩石としても使用されている。

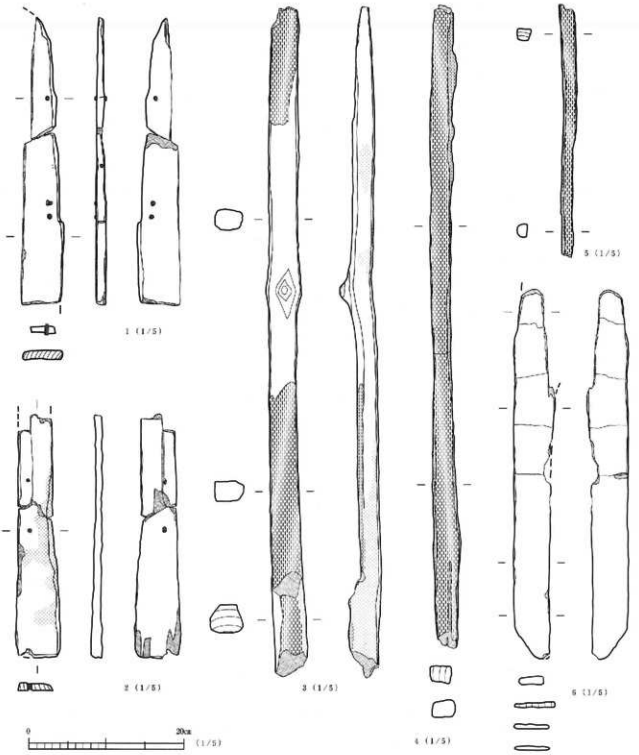
不明石製品Ｋ－４は、石製模造品と同一素材の大型の剥片である。片面の高い部分が研磨されているが、用途は不明である。

木製品類は、農耕具などの製品のほかに材類も多く出土している。木製品としては、横鍬２点（Ｌ－７・21）・ナスビ型二又鍬（Ｌ－８）・曲柄鍬（Ｌ－６）・楕円板（Ｌ－29）・丸棒（Ｌ－22）・その他不明品３点（Ｌ－19・20・23）がある（第61・62図）。横鍬Ｌ－７は、腐蝕が進み保存状態の悪い製品である。上端部は着柄隆起部分だけが残り、刃先にあたる下面は欠損している。木口面が髄面となり、後面から見て左側は大部分が残っているが、右側は欠落部分が多い。着柄隆起は基部を除いて欠落しているが、残存部から平面形は角が取れた逆二等辺三角形を呈するものと推定される。柄孔は略円形で、柄の角度は50°前後である。残存する髄面と柄孔の中心の長さが約13cm あ



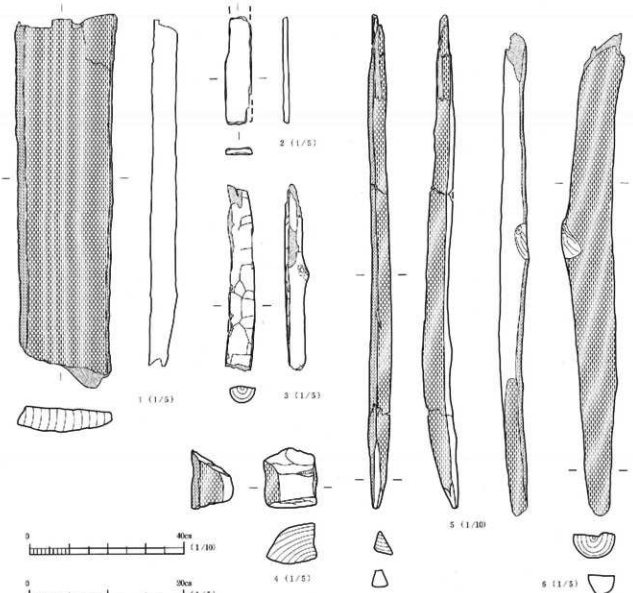
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺物層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－7	北区		SR－1	10層	木・No 3	木・横鍬	8.0	24.7	0.8	黒孔開 閉所 53×3.1 49.0 柄孔円形	クヌギ節	柾目	51－7
2	L－21	北区		SR－1	10c 層	木・No 1	木・横鍬	15.5	身部刃幅 身部中央幅 身部基部幅 厚さ 柄孔径 深さ 49.2 1.1 15.5 3.5		未製品（柄孔穿孔前）	クヌギ節	柾目	52－1
3	L－19	北区		SR－1	10層	材・No22	木・不明	6.0	3.8	1.8		アサダ	柾目	52－2
4	L－22	北区		SR－1	10c 層	木・No 2	木・丸棒	12.3	2.1	1.9	端部実測	モミ属	芯無丸	51－6
5	L－6	北区		SR－1	10層	木・No 2	木・曲柄鍬	13.7	4.1	1.9	柄部片	クヌギ節	柾目	52－3
6	L－8	北区		SR－1	10層	木・No 5	木・ナスビ型二又鍬	33.3	身部長 身部最大幅 身部中央幅 身部基部幅 柄孔径 柄孔深 15.3 4.7 0.8 18.6 3.1 1.7		半折・身部欠損	クヌギ節	柾目	52－4
7	L－20	北区		SR－1	10層	材・No24	木・不明	33.4	12.0	4.0		キハダ	柾目	52－5

第61図　北区河川跡10層出土木製品類1



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－29	北区		ＳＲ－１	10ｃ層	材・№11	材・楕円板？	37.8	5.4	1.3	縦横幅 0.4 円孔３ヶ所（樹皮製縦縫有り）	モミ属	ナナメ	53－１
2	L－23	北区		ＳＲ－１	10ｃ層	材・№２	木・不明	32.2	6.0	1.5	３孔有り、２孔に楔	モミ属	柾目	53－２
3	L－13	北区		ＳＲ－１	10層	材・№１	材・角材	88.4	4.3	3.7	焼痕有り		芯無角	53－３
4	L－10	北区		ＳＲ－１	10層	材・№４	材・角材	84.6	3.2	2.3			芯無角	53－４
5	L－11	北区		ＳＲ－１	10層	材・№７	材・角材	33.3	2.0	1.7			芯無角	53－５
6	L－９	北区		ＳＲ－１	10層	材・№３	材・板材	48.7	5.2	1.1	二叉鍬、刃部？	クヌギ目	柾目	53－６

第62図　北区河川跡10層出土木製品類２



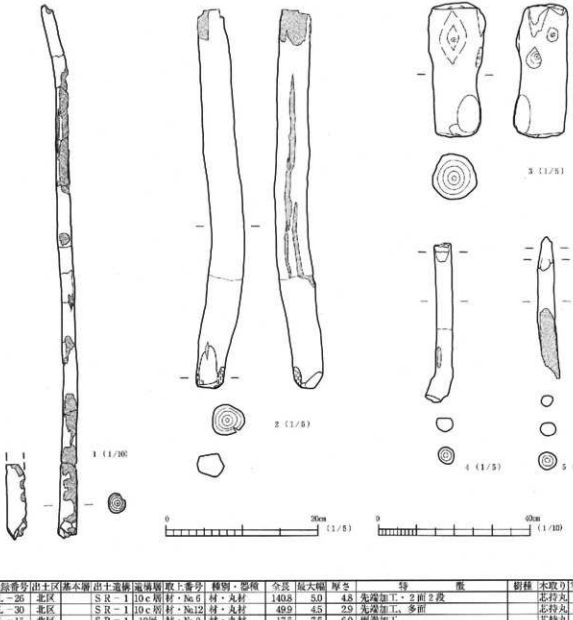
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－27	北区		SR－1	10c層	№10	材・板材	49.0	13.0	3.5			柾目	53－7
2	L－24	北区		SR－1	10c層	№4	材・板材	14.2	3.5	0.8	片側面に加工		板目	54－1
3	L－12	北区		SR－1	10層	№10	材・半裁丸材	24.5	3.5	2.1	半裁面加工		半裁丸	54－2
4	L－28	北区		SR－1	10c層	№9	材・分割材	8.0	6.6	4.9	両端切断		芯無	54－5
5	L－16	北区		SR－1	10層	№12	材・分割材	130.0	5.7	5.5	先端加工、多面多段？		芯無	54－3
6	L－14	北区		SR－1	10層	№16	材・半裁丸材	63.4	3.0	3.0	先端加工、一面？		半裁丸	54－4

第63図　北区河川跡10層出土木製品類3

ることから、横鍬の幅は約26cmほどと推定され、横鍬としては幅が狭い。

横鍬L－21は、完成品に近い調整段階の未製品である。前面側には木目方向に沿った加工痕跡が観察できる。着柄隆起部分を除いて、上端部を欠損する。着柄隆起は隅丸の逆二等辺三角形を呈し、隆起上面は平らになっている。柄孔はあけられていない。幅は48.2cmある。

ナスビ型二又鍬L－8は、中央から縦半分に割れた片側の破片で、歯部のほとんどと軸部の上端も欠損している。ナスビのヘタにあたる軸部側面の突起は、上部から八字状に広がるが、下端部は鈍角の斜面となっている。歯部の



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－26	北区		ＳＲ－１	10ｃ層	材・№６	材・丸材	140.8	5.0	4.8	先端加工・２面２段		芯持丸	54－６
2	L－30	北区		ＳＲ－１	10ｃ層	材・№12	材・丸材	49.9	4.5	2.9	先端加工、多面		芯持丸	54－８
3	L－15	北区		ＳＲ－１	10層	材・№９	材・丸材	17.5	7.5	6.0	両端加工		芯持丸	54－７
4	L－18	北区		ＳＲ－１	10層	材・№21	材・丸材	20.8	2.2	2.0	先端加工、１面多段		芯持丸	54－９
5	L－17	北区		ＳＲ－１	10層		材・丸材	18.6	2.2	2.0	先端加工、多面１段？		芯持丸	54－10

第64図　北区河川跡10層出土木製品類４

幅は上端部分で4.7cmである。

曲柄鍬Ｌ－６は、軸部上半部分の破片である。断面形はカマボコ形を呈し、上端付近の凸面には浅い紐掛かりの溝が彫られている。

楕円板Ｌ－29は、大型楕円板の側辺部分の破片である。残存長は37.8cmあるが、全長はこの倍以上あったものと推定される。側面近くには、３ヵ所に綴じ紐の残存する綴じ紐用の孔があけられている。孔に通された紐は、幅４㎜前後の樹皮製と観察され、孔が埋まるように複数回通されている。孔は接近した２ヵ所と離れて１ヵ所ある。接近してあけられた２孔の近くの側面には、高低差が４㎜ほどの段が形成されている。この段については、楕円板に取りつけられる側板の重複部分にあたり、楕円盤と側板が密着して隙間が生じないようにするためのものと推察される。２ヵ所と１ヵ所の綴じ紐用の孔の中ほどの側面には、木釘が打たれている。この木釘についても、側板の重

腹部の外側端部を留めるために打たれたものと考えられる。

丸棒L－22は、残存長12.3cm・直径2.0cmの芯無し削り出しの丸棒である。残存する片方の端部は、丸みを持って尖っている。

不明品L－19は、平面形が将棋の駒のような形態の破片で、何らかの製品あるいは未製品の破片と考えられる。側面の割れは、加工に伴うものと観察されるが、上下両面の割れは破損の痕跡の可能性が高い。不明品L－20は、刃子板状の平面形を呈する未製品で、厚さ4cm前後の柾目板を素材とする。両面には広く割り面が残り、部分的に削り加工が施された段階のものである。柄状部と身状部とに分かれ、境目には肩部が形成される。身状部は先端側が幅広となっており、片面の中央部分が削られて窪んでいる。反対面は先端側が削られて、窪んだ側に反り上がっている。掬い具またはヘラ状の製品の未製品と考えられる。不明品L－23は、幅6.0cm・厚さ1.5cm・残存長32.2cmの板材で、片側の側縁に寄って3ヵ所に孔があけられており、そのうち中央寄りの2ヶ所には樹皮製の紐と紐が残っている。孔の並びと反対側の側面は、広い範囲が焼け焦げている。

材は、角材3点（L－10・11・13）・柾目板2点（L－9・27）・板目板1点（L－24）・分割材2点（L－16・28）半裁丸材2点（L－12・14）・丸材5点（L－15・17・18・26・30）がある（第62～64図）。角材L－10・11・13は、大きさの別はあるが、いずれも芯無しの角材で、側面は割り面ないし樹皮を剥いだだけの自然面である。木口部分は欠損または折れている。

柾目板L－9は、残存長48.7cm・幅4.5～5.2cmの材で、片側の先端は片方の側面から斜めに切られて刀の刃先状に尖っている。反対の木口は欠損している。側面はほぼ平行しているが、欠損木口近くには緩やかな屈曲があり、片側が僅かに狭くなっている。厚さは、欠損木口側から残存木口側に向かって徐々に薄くなるように加工されている。形態的には二又鍬の歯と類似しており、その破片の可能性がある。柾目板L－27は、長さ49cm・幅13.0cmの柾目材で両木口は壊れている。両面および両側面は割り面のままである。

板目板L－24は、残存長14.2cm・幅3.5cm・厚さ8mmほどの板である。板の幅は、片側の側面からの削り込みがあるために、片側が狭くなっている。

分割材L－16は、全長約130cmのミカン割り材である。断面形は三角形を呈し、1面は自然面、他の2面は割り面となっている。片方の木口には杭先状の加工が施されて尖っている。他方の木口は、特に加工はないが、分割の結果細くなり、尖っている。分割材L－28は、両端に加工（切断）痕跡のある小さな材である。1／4程度に分割された後、表面に近い部分がさらに割られている。

半裁丸材L－12は、直径約3.5cmの芯持ち丸材を縦に半裁し、その割り面を丁寧に削っている。両端は欠損している。L－14は、直径5cm前後の芯持ち丸材を縦に半裁している。片側の端部には半裁面の側面にさらに割りを入れている。

丸材L－15は、長さ17.5cm・直径6～7.5cmの円筒形の芯持ち丸材で、両木口面は平坦になるように加工されている。L－17は、直径2cm前後の細い芯持ち丸材の先端を多面から加工して杭先状に尖らせている。L－18は、直径2cm前後の芯持ち丸木で、片方の木口に1面からの加工（切断）痕跡がある。L－26は、残存長140.8cm・直径約5cmの芯持ち丸木で、片方の木口に前後2面からの加工（切断）痕跡がある。L－30は、残存長49.9cm・直径4.5cm前後の芯持ち丸木で、片方の木口に多面からの加工痕跡がある。先端部分は、平らになるように加工されている。

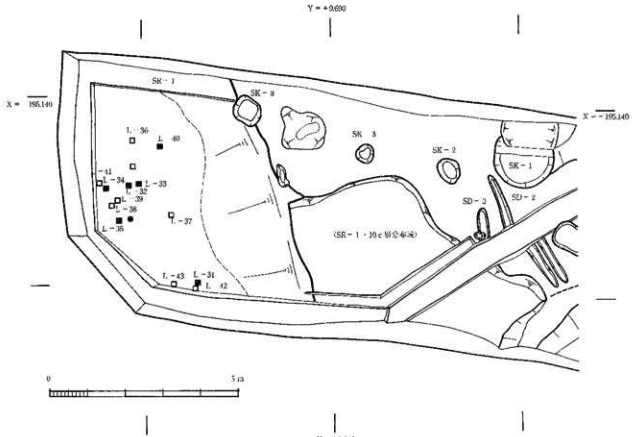
7）11層と出土遺物

11層は、黒色の泥炭質粘土層で、調査区北側にのみ分布する。分布範囲にあっては、河岸斜面の上部では15cmほどの厚さがあるが、斜面の下に移行するにしたがって薄くなる。11層の分布範囲の限定性と層厚の変化については、10c層の砂層堆積時に11層が流出したことが原因と推定される。

11層からの出土遺物は少なく、上師器片が11点出土しただけである。このため図化した遺物は1点だけである（第66図1）。上師器C－35は器台の脚上部から受け部にかけての破片である。脚部は八字状に広がり3方に透かし孔があく。受け部は小さく、受け部から脚部への貫通孔はあいていない。

8）12層と出土遺物

北区の12層は、黒褐色の粘土を基調とするが、土色・土質の差異によって12a層・12b層・12b'層・12c層の4層に細分された。12a層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、河岸斜面上部から底面まで分布しているが、河川跡南側の河岸斜面上部では検出されなかった。層厚は10～20cmである。河川跡南部では、11層と同様に10c層の流入の際に

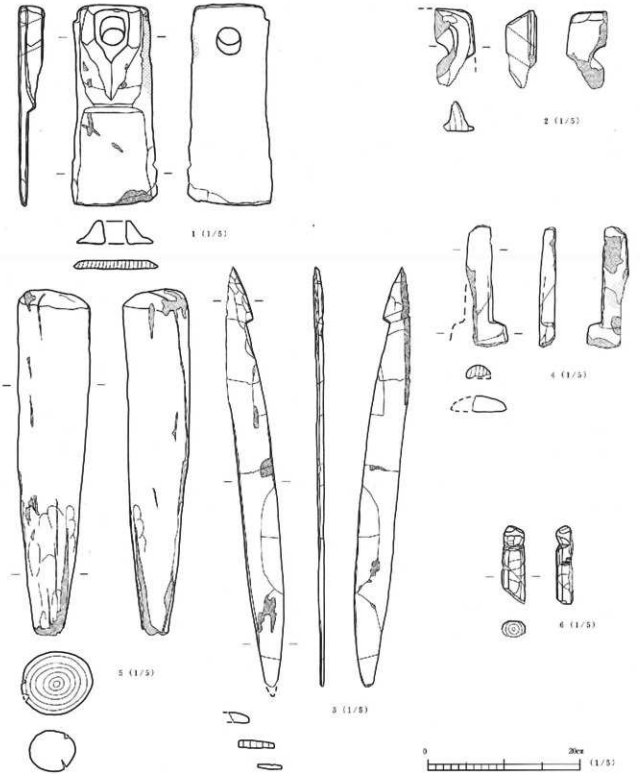


第65図　河川跡12層遺物出土位置図

（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構別	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）特徴	（内面）	写真図版
1	C－35	北		SR－1	11層		上師器	器台	(6.3)			ヘラミガキ		49－11
2	C－42	北		SR－1	12b層		土師器	鉢	(7.6)	17.0	－	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ	
3	B－4	北		SR－1	12b層		鉄手上石	鉄				熟糸文（ℓ）	後期天王山式？	47－4

第66図　北区河川跡11層～12層出土遺物



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅/厚さ			特徴		樹種	木取り	写真図版
									身部幅/身部厚	基部幅/基部厚	脚部幅/脚部厚					
1	L－35	北区		SR－1	12a 層	木・No.5	木・直柄平鍬	26.5	11.1	10.1	12.6	3.3	方孔2箇所・楕円形	コナラ節	柾目	55－1
2	L－34	北区		SR－1	12a 層	木・No.4	木・直柄平鍬	10.2	5.1		3.9	頭部片、楕孔円形		クヌギ節	柾目	55－2
3	L－33	北区		SR－1	12a 層	材・No.3	木・ナスビ型二又鍬	55.5	身部幅/厚さ 4.7		脚部厚 6	脚部片		クヌギ節	柾目	55－4
4	L－32	北区		SR－1	12a 層	木・No.2	木・膝柄鍬	16.0	身部幅/厚さ 4.5		脚部幅/厚さ 3.2	2.9	軸部片	クヌギ節	柾目	56－1
5	L－31	北区		SR－1	12層	木・No.1	木・竪杵	45.5	最大幅/厚さ 9.5×9.7					カエデ属	芯持丸	55－3
6	L－40	北区		SR－1	12b 層	木・No.6	木・有頭木製品	10.3	3.0		2.1	八角柱		ヤマグワ	芯持角	56－2

第67図　北区河川跡12層出土木製品類1

12a層が流された可能性がある。12b層は、浅黄色粘土を斑状に含む暗灰黄色の粘土層で、河川跡のほぼ全域に分布している。層厚は15cm前後である。12b'層は、褐色粘土を含む黒褐色の粘土層で、12層堆積段階の河川底面部分に堆積している。層厚は10～20cmである。12c層は、黒褐色の泥炭質粘土層で、河川跡北側の河岸斜面上位から底面近くまで分布している。層厚は10～15cmほどである。

12層からの出土遺物は、弥生土器及び土師器と木製品類がある。弥生土器は、3点出土しており、1点は鉢の体部の破片で、平行する2条の沈線の下に縄文が施されている。1点は壺の体部破片で、縄文（LR）が施されている。他の1点は、反りのない口縁部の破片である（B－4：第66図3）。口唇部は平坦で、口縁全体は僅かに波打つようになると観察される。内面は雑なナデ調整で、外面は粗い撚糸文（ℓ）が施されている。これに類似する土器は、宮沢遺跡から出土しており、弥生時代後期の大王山式に位置付けられている（太田：「1988仙台市文化財調査報告書第113集」p.241～248・工藤：「1999仙台市文化財調査報告書第235集」p.35～36）。

土師器は破片が数十点出土しているがいずれも小破片で、器形全体のわかるものはなく、図化したのは1点だけである。12層出土土師器C－42（第66図2）は、体部が扁平な球形を呈する甕で、口縁部はやや短く、強く外反する。器壁は薄く作られている。口縁部と体部の境の内面には明瞭な稜がつく。調整は体部外面が最終調整としてヘラケズリ調整されている。器形の特徴から、塩釜式期に属するものと考えられる。

木製品類は、土師器の出土量からすると多く、製品や材類が多数出土している。

木製品としては、直柄平鍬2点（L－34・35）・ナスビ型二又鍬（L－33）・膝柄鍬（L－32）・竪杵（L－31）・有頭木製品（L－40）がある（第67図）。L－34は、直柄平鍬の頭部の破片で、後面から見て右側の破片である。頭端部は平らである。側面は、刃先方向に移行するにしたがって僅かに広がっている。着柄隆起も残っており、残存部の状況から流線形ないし隅丸の逆三角形を呈すると推定される。柄孔は円形である。着柄隆起下端と頭部上面および側面との間は、5mm前後と狭く作られている。直柄平鍬L－35は、平面形が、刃先側の幅が僅かに広い長方形を呈す。着柄隆起は、ホームベース形の5角形を呈し、頂点が下方にのびる。隆起上端は、鍬の上端に接し、全長の約1/2の長さがある。隆起の先端には、鍬の後面中央を横断する隆帯が作り出されている。身部は全体的に1cm前後と厚い造りである。刃先は僅かに湾曲して中央部が張り出している。側面は、再加工されており、着柄隆起部を含めてもとの幅より狭く作り直されている。後面から見て左側面の上端には段差ある。この段差については、再加工以前に、中在家南遺跡第1次調査SI2河川跡12層出土直柄平鍬L－911（本書P.132掲図2）や第4次調査河川跡12層出土直柄平鍬L－61のように、鍬頭部の着柄隆起の両側にあけられた方形の孔の痕跡であると考えられる。

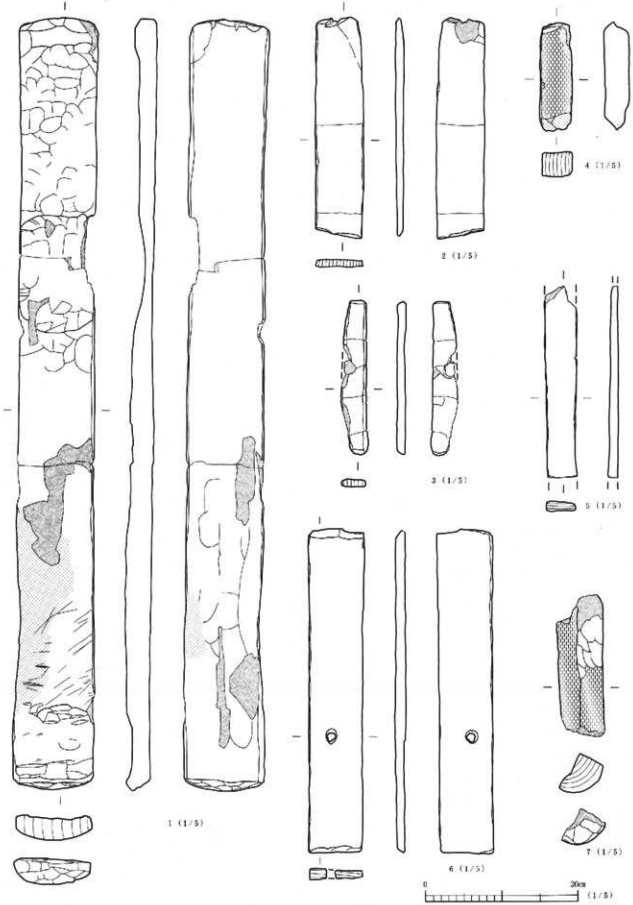
ナスビ型二又鍬L－33は、縦に半分に割れた破片で、軸部はなく、ナスビのヘタにあたる突起部から下が残っている。ヘタの部分は、突起状に削り出されたものではなく、弧状に湾曲する側面の上部を「形に削ってクランク状の段差を形成している。歯部の幅は5cm弱で、長さは段差から約49.5cm、又の部分から約38cmある。

膝柄鍬L－32は、軸部から身部上端にかけての破片である。軸部上端は欠損している。軸部の断面形はカマボコ形を呈する。軸部と身部の境は階段状となり、幅2cmほどの肩部が形成されている。

竪杵L－31は、握り部から半分ほどに折れた破片である。芯持ちの丸材が素材となっている。残存部の長さは45.5cmで、搗き部先端の直径は9.5cm前後である。搗き部の先端は扁平な球形を呈している。搗き部と握り部との境は不明瞭で、搗き部から握り部にかけて徐々に細くなっており、握り部付近には加工痕が残っている。

有頭木製品L－40は、幅3.0cm・厚さ2.1cmの芯持ちの素材で、残存する一方の端部に、扁平な略球状の頭部が作り出されている。頭部以外の棒状の部分は、断面形が扁平な8角形に面取りの加工がなされている。

材は、角材1点（L－42）、柾目板3点（L－36・39・41）、板目板2点（L－37・38）、分割材1点（L－43）などがある（第68図）。角材L－42は、長さ14.2cmの短い角材で、側面は割り面と焦げ面である。両木口面は、切断痕跡と観察される加工がある。



第68図　北区河川跡12層出土木製品類2

第68図観察表

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構第	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－39	北区		SR－1	12a層	材・No.4	材・板材	102.3	10.7	3.4	片面に溝み状の加工有り		柾目	56－7
2	L－36	北区		SR－1	12a層	材・No.1	材・板材	29.2	6.4	0.8～1.2	端部に加工		柾目	56－3
3	L－41	北区		SR－1	12b層	材・No.6	材・板材	20.3	3.2	1.1	両端加工？部材？		柾目	56－6
4	L－42	北区		SR－1	12b層	材・No.7	材・角材	14.3	4.2	3.3	両端加工		芯無角	56－4
5	L－38	北区		SR　1	12a層	材・No.3	材・板材	25.3	4.2	1.0			板目	
6	L－37	北区		SR－1	12a層	材・No.5	材・板材	42.8	7.0～7.5	1.0～1.5	両端加工、円孔有り		板目	56－5
7	L－43	北区		SR－1	12b層	材・No.8	材・分割材	18.8	6.2	5.2	両端加工		芯無	

柾目板L－36は、幅6.4cm・厚さ8～12mmに加工された板である。両端には切断痕があり、長さは28.9cmである。柾目板L－39は、長さ102.3cm・幅10cm前後に整形されたやや厚みのある板材で、断面形は扁平なカマボコ形を呈する。両面にはまだ粗い加工痕が残っている。断面が平坦な面の両端部は、木口面に沿って削り残されて帯状に高くなっている。また、全長の上から1／3くらいの部分と下端に近い部分は、浅く凹状に削り込まれている。何らかの製品を複数個連結して同時に加工した木製品の未製品、または部材の未製品と考えられる。柾目板L－41は、長さが20.3cmで、片方の側面が張り出しており、半面形が台状の6角形を呈している。また、実測図左側の面が右側より狭くなるように両側面および両木口面が加工されている。

板目板L－37は、全長42.8cm・幅約7～7.5cm・厚さ1～1.5cmの板で、両端には切断の加工痕がある。全長の三分の二くらいの位置に、中央よりやや片方の側面に寄って孔があけられている。板目板L－38は、幅4cm前後・厚さ約1cmの板材である。

分割材L－43は、片方の木口だけが残る材で、残存長は18.8cmである。断面形は菱形を呈し、芯はない。残存する木口には切断痕が残るほか、片側の割り面にも加工痕が観察される。

9）13　層

13層は、未分解の植物遺体を多く含む黒褐色の粘土層で、河川跡の下半部に分布している。層厚は10～20cmと比較的厚く堆積している。層厚が厚い割には、遺物は出土していない。

10）14　層

14層は、黒色の泥炭質粘土層で、層下部に砂の薄層を含む部分がある。層厚は10cm前後で、河岸斜面全体に分布する部分と、底面付近にだけ分布する部分がある。14層からも遺物は出土していない。

11）15　層

15層は、オリーブ黒色ないし灰オリーブ色の粘土層を基調とする。15a層・15a'層・15b層に細分され、15a'層は、泥炭質粘土層である。3層合わせた層厚は110cm以上ある。壁面は16層と互い違いに楔状に重なって堆積している。河川跡15層の南半部では、16層中から15層中にのびる倒木（流木）が多数検出されている（図版20－4）。調査を実施した部分の15層からの出土遺物はない。

第5章　押口遺跡第3次調査南区の概要

第1節　発見遺構の概要と基本層位

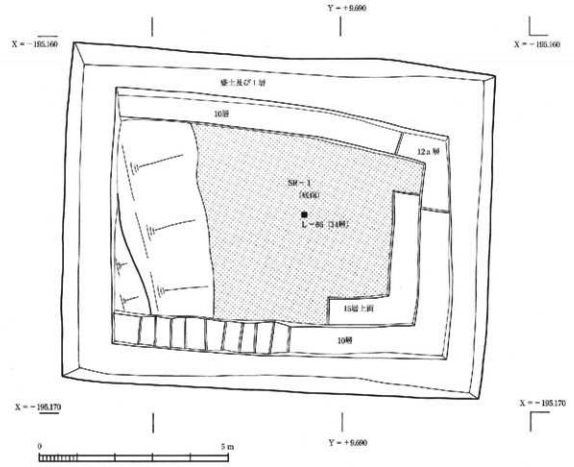
1　南区の位置

第3次調査南区は、土地区画整理事業実施以前には水田として土地利用されていた。南区は、北区の約15m南側にあたる。第1次調査のⅢ区北端部とは2m離れているだけである。調査区は、押口遺跡第1次調査と、その際の試掘調査によって発見された河川跡（SR－1）の推定流路のほぼ中央に位置する（第44図）。推定された流路は、押口遺跡付近で大きく蛇行しており、本調査区の東側が河川の攻撃斜面、西側が堆積斜面となっている。

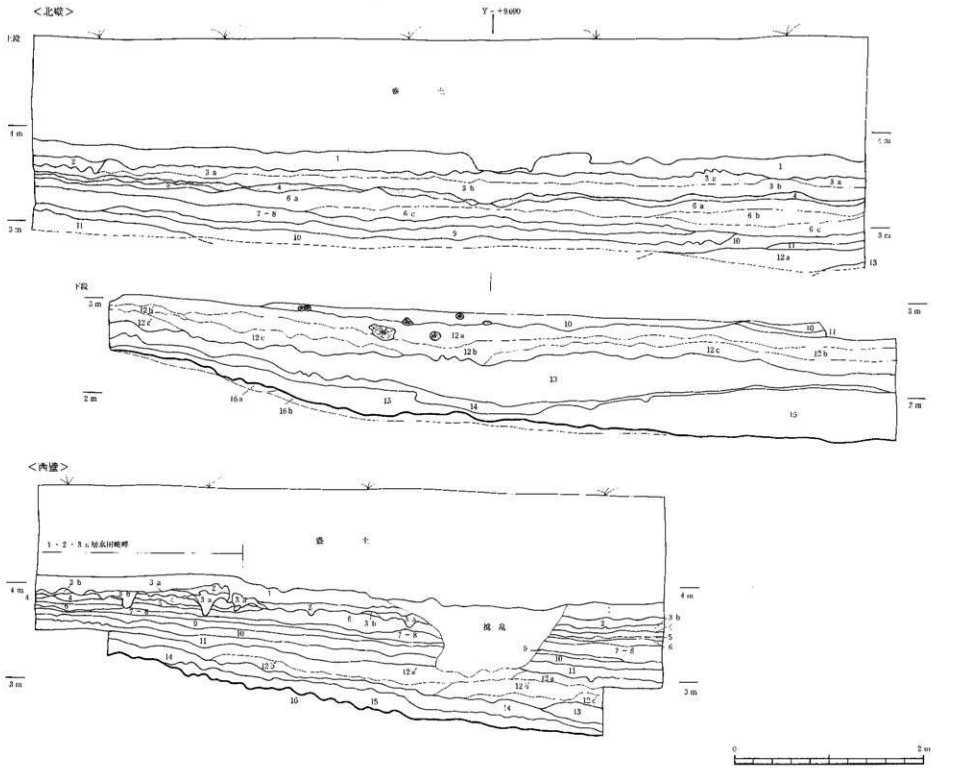
調査区は、東西約11m・南北9mの大きさで設定した。盛土が120cm 前後と厚いために、実際に調査を行ったのは東西約9m・南北約7mの範囲である。

2　発見遺構の概要

南区は先に記したように、河川跡の中央に設定された調査区であることから、盛土層と層厚が20～25cm 旧水田耕作土の1層、および近世から近代にかけての水田耕作土層である2層までを、重機を使用して除去した。この段階で、河川跡の自然堆積土層（3b層・4層）と、河川堆積土を水田耕作土層とする人為的堆積層（3a層・3a'層）が混在する面が検出された（第71図）。この面では、溝跡1条（SD－4溝跡）が発見された。また、大きな撹



第69図　押口遺跡第3次調査南区平面図



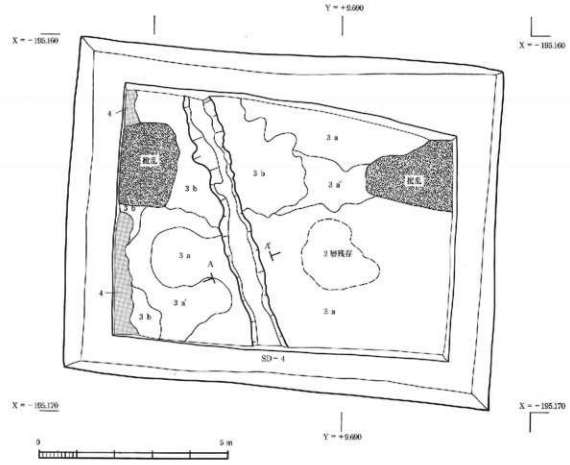
＜北壁＞

土層No.	土　色	土　質	備　考
盛土	5Y5/2灰オリーブ色	山砂	下部に褐色土・粘土のブロック状の盛土層あり
1	5Y4/1灰色	シルト質粘土	区画整理実施以前の水田耕作土
2	10YR2/2黒褐色	粘土	酸化鉄を部分的に斑状に含む、水田耕作土
3ａ	10YR2/1黒色	シルト質粘土	1ｃ層粒子の混入ブロックを多く含む、水田耕作土
3ｂ	10YR2/1黒色	泥炭	弥生後期の遺物を多く含む、東端で15cm前後堆積
4	10YR2/1黒色	火山灰	「K-Ah」火山灰（915年）層か
5	10YR2/1黒色	泥炭	洲状層（縞状）着生に珪藻、ヤブ直立茎を主としてなす
6ａ	10YR2/2黒褐色	泥炭	直径2cm程度の礫を含む、東端で10cm前後堆積
6ｂ	10YR3/2黒褐色	粘土質泥炭	多量のヒシの実と木片をわずかに含む
6ｃ	10YR3/2黒褐色	泥炭質粘土	少量のヒシの実を含む
7－8	25Y3/1黒褐色	粘土	多量のヒシの実を含む、土分質の植物遺体を多く含む
9	25Y2/1黒色	粘土	西岸部では黒色の泥炭層に変化する
10	10YR2/1黒褐色	粘土	オリーブ黒粘土を部分的に斑状に含む、植物片を多く含む
11	10YR1.7/1黒色	粘土質泥炭	河岸上部と河川中央部に分布
12ａ	10YR2/2黒褐色	粘土	炭質微ラミナの堆積を少量含む、小規模植物片を含む
12ｂ	10YR3/2黒褐色	粘土	灰オリーブ色の斑上を斑状に少量含む
12ｂ'	10YR3/2黒褐色	粘土	10cmオリーブ灰の粘土を斑状に多く含む
12ｃ	10YR2/2黒褐色	粘土	灰オリーブ色の粘土を斑状に多く含む
12ｃ'	10YR3/3黒褐色	泥炭質粘土	12ｃ層ほど灰オリーブ色斑上を含まない
13	5Y5/2灰オリーブ色	粘土	オリーブ黒色粘土を部分的にまだらに含む
14	5Y2/1黒色	粘土	植物遺体の多い層、ヘドロ状
15	5Y5/2灰オリーブ色	粘土	細ラミオリーブ色、植物遺体を多く含む
16ａ	5GY3/1緑黒色	粘土	土分質の植物遺体を少量含む
16ｂ	7.5GY4/1暗緑灰色	砂	細砂、腐植片及び径2～10mmの小礫を含む

＜西壁＞

土層No.	土　色	土　質	備　考
6	10YR3/1黒褐色	粘土	植物遺体を少量含む
7－8	10YR2/2黒褐色	粘土質泥炭	第4・5層に対応
12ａ'	10YR2/3黒褐色	泥炭質粘土	おおむね12ａ層に対応、12ｂ層に対応
12ｂ	10YR2/2黒褐色	泥炭質粘土	12ａ層よりやや粘土質、12ｂ層ほどではない

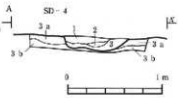
第70図　押口遺跡第３次調査南区断面図



第71図　３層検出状況

乱坑が、調査区北側の西壁と東壁にかかって２ヵ所で検出された。両撹乱坑は、１層の水田耕作土上面から掘られている。

ＳＤ－４溝跡　調査区の西寄りの３ａ層上面で検出された。方向はＮ－16°－Ｗで、上面幅は80cm前後、深さは15cm前後である。断面形は浅いＵ字形を呈す。堆積土は実測位置で３層に分けられた。１層は黒色のシルト質粘土で、２・３層は黒褐色の粘土層である。２層には未分解の植物遺体が含まれる。１・３層は均一な土壌で、水成堆積層と観察された。遺物は出土していない。この溝跡の時期については、遺構の検出された面は３ａ層上面であるが、溝跡堆積土の３層の上質が河川跡堆積土の２層の水田耕作層に類似していることから、２層水田の時期の遺構である可能性が高いと推察される。



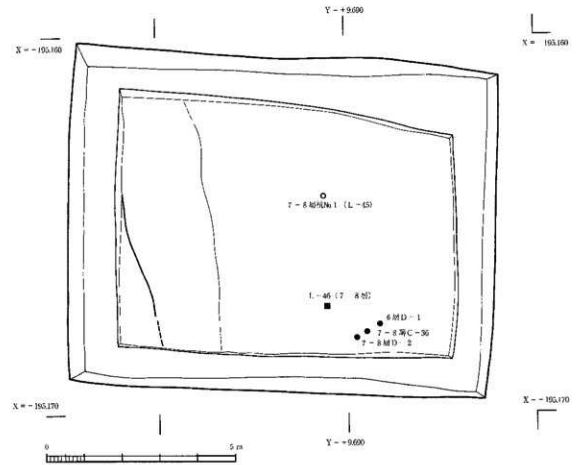
土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR2/1 黒色	シルト質粘土	
2	10YR3/1 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	

第72図　ＳＤ－４溝跡断面図

第２節　河川跡の堆積土と出土遺物

１　河川跡の基本層位

第３次調査南区の基本層位は、押口遺跡の他調査区の河川跡や中在家南遺跡の河川跡と同様に、15層に大別して層序を把握することができた。また、３層については、他調査区と同様に水田耕作土となっている３ａ層と、３ａ



第73図　河川跡６層・７－８層遺物出土位置

層の主な母材となっている自然堆積層の３ｂ層に分けられた。また、７層と８層は区分できず、両層に対応する層順の土層については、北区と同様に７－８層と呼称して調査を行った。

６層および12層については細分が可能で、６層は６ａ・６ｂ・６ｃ層の３層に分けられ、12層は12ａ・12ａ'・12ｂ・12ｂ'・12ｂ"・12ｃ・12ｃ'層の７層に細分された。河川跡堆積層の状況については次項で記述する。

河川跡（河川跡堆積土上部）の河岸面および底面は、河川跡堆積土下部堆積土層（16層群）からなる。16層は、掘り下げを実施しなかったが、河川跡の底面から壁面にかけては、大きく上下２層に分かれることが観察された。上層は、河岸面中位より上に堆積している土層で、緑灰色から褐色の粘土質の土壌（16ａ層）からなる。下層は、河岸面の下位から底面にかけての堆積層で、暗緑灰色の砂層（16ｂ層）を主体としている。

2　各層の状況と出土遺物

1）2　層

黒褐色の粘土からなる水田耕作土層で、近世から近代にかけて形成された土層である。１層の区画整理以前の水田耕作による削平を受けて西壁際など部分的に残存するだけである。残存部分の層厚は５～10cmである。遺物は、土師器・須恵器の細片が少量出土しているだけである。

２）３ａ層

３ａ層（第71図３ａ'層を含む）は、黒色のシルト質粘土からなる水田耕作土層で、３ｂ層が起源と考えられる泥炭質土壌のブロックを多く含んでいる。３ａ層は、２層または１層の耕作による削平を受けており、調査区の西壁際と北西部には残存していない。層厚は、北壁付近で10～15cm前後である。層の傾斜はほとんどなくほぼ水平に堆積している。遺物は、土師器・須恵器片が多数出土している。

３）３ｂ層

３ｂ層は、黒褐色の自然堆積の泥炭質土壌である。調査区の西壁際を除いて、調査区のほぼ全面で検出された。上面が３ａ層水田による削平を受けているが、全体的に層厚は５～15cmほど残り、部分的には20cm以上も残存しているところもある。遺物は土師器片が数点出土しているだけである。

４）４　層

４層は灰白色火山灰（十和田ａ火山灰）層で、調査区のほぼ全域に分布している。層厚は５cm前後である。層の傾斜は、僅かに西側より東側に下がっている。出土遺物はない。

４層は、３ａ層上面で調査区西壁際に南北方向の帯状にのびて検出されているが、この部分では１層が盛り上がっている。また、２層および３ａ層の水田耕作土層下面のレベルを延長した場合、４層は削平を受ける可能性の高い位置にありながら、４層が帯状に残存しているということは、３ａ層水田・２層水田・１層水田に共通する畦畔がこの位置に存在したことを示していると考えられる。

５）５　層

５層は、中在家南遺跡および押口遺跡で共通する基本層で、４層直下の黒色泥炭質土壌を指標とする。本調査区では、調査区西部の河岸斜面上部に分布する。層厚は５cm前後である。

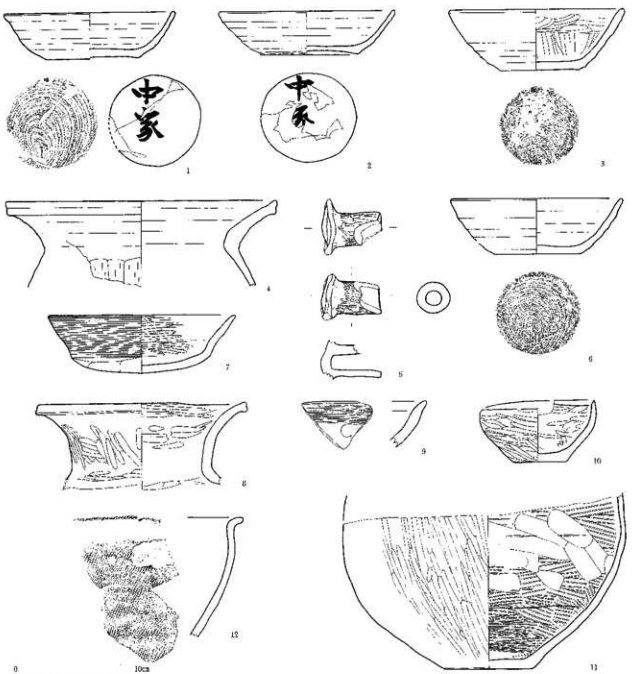
６）６層と出土遺物

６層は、黒褐色の泥炭層（６ａ層）を基本としているが、層下部には黒褐色の粘土質泥炭層（６ｂ層）や黒褐色の泥炭質粘土層（６ｃ層）が分布している。また、調査区西壁寄りの河岸斜面上部では黒褐色の粘土層に漸移的に変化する。６ｂ層・６ｃ層にはヒシの実が含まれている。３層を合わせた層厚は一定せず、場所によって10～30cm程度の変化がある。

出土遺物としては、土師器・須恵器・木製品類の材がある。土師器は、実測可能なものは１点だけである。Ｄ－１（第74図３）は、ロクロを使用した坏で、底部の切り離しは回転糸切りによる。内面は黒色処理されている。

須恵器は、多数の破片が出土し、実測した遺物は３点ある（第74図１・２・４）。Ｅ－２は甕の胴部から口縁部にかけての破片である。体部上端にもヘラケズリが行われている。頸部から口縁部にかけては外反し、口縁端部は上方につまみ出されて受け口状になっている。色調は褐色を呈し、焼きはやや軟質である。Ｅ－３・Ｅ－４は、類似した器形の坏で、ともに口径の割りの器高が低く、底径はやや大きい。色調も両個体とも褐色を呈し、須恵器甕Ｅ－２と類似している。また、両個体の底部外面には「中家」の墨書がある。

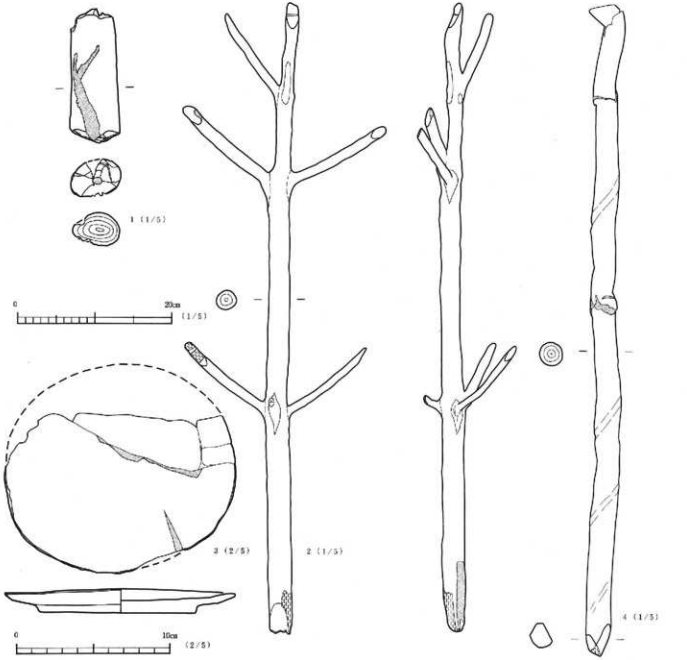
材は、全長83.3cmの丸材（Ｌ－87：第75図２）で、３段に12～15cmほどの長さだけ枝を残して切り出している。幹の基端部および先端にも切断痕がある。幹には、下段部分のように長さ３cmほどに短く切られた枝や、上段部分のように、完全に枝打ちされた痕跡も残存している。



（残存値）

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）	特徴	徴（内面）	写真図版
1	E－3	南		SR－1	6層上面		須恵器	坏	3.7	13.5	7.3	底部切糸切り、墨書「中家」		ロクロ	57－10
2	E－4	南		SR－1	6層		須恵器	坏	3.5	13.9	7.6	底部糸切り、墨書「中家」		ロクロ	57　11
3	D－1	南		SR－1	6層	№1	土師器	坏	4.8	13.6	6.2			黒色処理、ヘラミガキ	57－8
4	E－2	南		SR－1	6層		須恵器	壺	(6.8)	21.1				ロクロ	
5	C－36	南		SR－1	7－8層	№2	土師器	？						ヘラミガキ	（内面黒色）	57－2
6	D－2	南		SR－1	7－8層	№1	土師器	坏	4.4	13.6	6.6	未焼土器、底部回転糸切り		ロクロ	57－9
7	C－37	南		SR－1	9層、10層、11層、12層		土師器	坏	4.6	14.6				ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	57　3
8	C－39	南		SR－1	10層		土師器	盤	(6.5)	16.2				ヨコナデ・ハケ・ヘラミガキ	ハケ・ヘラミガキ・ヘラナデ	57－5
9	C－38	南		SR－1	10層		土師器	坏						ヨコナデ・ヘラケズリ	重減の為、不明	57－4
10	C－41	南		SR－1	12b層	№2	土師器	坏	4.9	8.9	4.2	ヘラミガキ		ヘラミガキ		57－6
11	C－40	南		SR　1	12a層	№3	土師器	甕	(13.9)	－	7.1	ヘラナデ・ハケメ		ヘラナデ・ハケメ		57－7
12	B　5	南		SR－1	14、15層		縄文土器	深鉢				縄文（LR）				57　1

第74図　南区河川跡6層～15層出土遺物



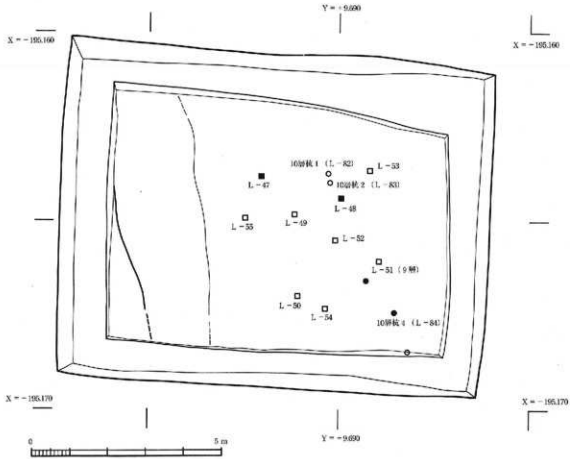
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－44	南区		SR－1			材・丸材	17.7	6.0	4.4	両端加工・出土層不明品		芯持丸	58－1
2	L－87	南区		SR－1	6層	材・№2	材・丸材	83.2	2.7	2.5	枝長 12.0～13.0 枝付・枝先切断痕		芯持丸	58－2
3	L－46	南区		SR－1	7－8層	木・№1	木・粗	口径 15.0	底径 10.0	器高 1.6	白木	ケヤキ	柾目	58－4
4	L－45	南区		SR－1	7－8層	枝・№1	枝・丸枝	85.6	3.1	3.0	先端加工、２面１段		芯持丸	58－3

第75図　南区河川跡１層～７－８層出土木製品類

7）７－８層

黒褐色の粘土質泥炭ないし粘土層で、多量のヒシの実や植物遺体を含む。河岸斜面から河川底面に向けて緩やかに傾斜して堆積している。層厚は５～20cmほどで、河川底面側が厚く、河岸斜面の上部に移行するにしたがって薄く堆積する傾向がある。

出土遺物には、土師器と木製品類がある。土師器Ｃ－36（第74図５）は、内外面とも黒色処理された土師器の突



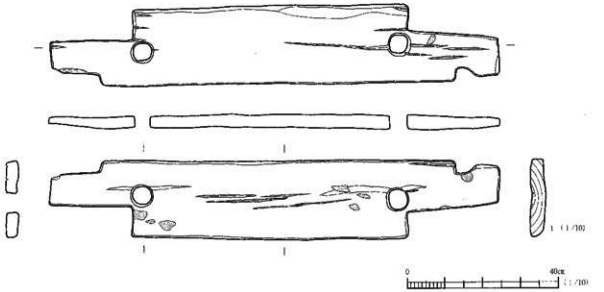
第76図　河川跡９層・10層遺物出土位置

起部分の破片である。突起部分は中空の円筒形で、外面は丁寧にヘラミガキ調整が行われている。器種は不明であるが、何らかの取っ手部分と考えられる。Ｄ－２（第74図６）は、ロクロを使用した坏で、底部の切り離しは回転糸切りによる。内面は黒褐色を呈するが、黒色処理がされたと認められる状態ではない。ヘラミガキ調整もなされておらず、いわゆる赤焼け土器の部類に含められる土師器である。このほか土師器の細片が数点出土している。

木製品類は木皿（Ｌ－46）と杭（Ｌ－45）がある（第75図３・４）。木皿Ｌ－46は、直径が15cm ほどの白木の浅い皿である。高台部は、高さはないが口径に比べて径が大きい。台の縁辺部分に削り出しはなく底面全体が平らに作られている。杭Ｌ－45は、残存長86.5cm・直径３cm 前後の芯持ち丸杭で、先端には２方向からの加工痕跡がある。

８）９層と出土遺物

河川跡の中央部分では、黒色の粘土層として堆積しているが、西壁際の河岸部分では泥炭層となっている。層厚は中央部分で10～15cm・河岸部分で５cm 前後である。出土遺物には、土師器・須恵器・木製品類がある。土師器は坏Ｃ－37のほか非ロクロ土師器の破片が数点出土している。坏Ｃ－37（第74図７）は、９層中からと10層上面から出土した破片が接合したものである。やや扁平な丸底で、底部と口縁部の境は内外面に明瞭な段がついて強く屈曲する。口縁部は、幅が広く外反し、立ち上がりの角度は比較的急である。内面は全面がヘラミガキのうえ黒色処理されている。また、内面には直径が１～５mm 程度の窪みが無数にあり、焼け爆ぜと考えられる。この土師器については、押口遺跡第３次調査北区の10層出土土師器杯のＡ群（９層と10層が接合したもの）と特徴が共通し、古墳時



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	層位別	取上番号	種別・器種	個数	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－51	南区		S R－1	9層	材・№28	材・厩放し	1	118.5	20.6	3.0～3.5	両木口22～24cm 両木口から22～24cm の長さが、8cm 前後の幅で コ形に大きく切り取られている。反対側面の端部付近も コ形または U字形に切り取られている。大きく切り取られた部分の角の近くには、材の中軸線上に直径約5cm の円孔がそれぞれにあけられている。孔の中心間の長さは約68cm・内側の長さは約61cm である。このような形態の板材については、2枚扉の両開き戸からなる出入口の下部を構成する「厩放し」と呼ばれる建築材と考えられる。この厩放しは、側面端部の大きな切り取りの角と扉軸穴との間隔が、1.5～2cm と接近しているが、これは扉板と辺付または柱を接近させ、その間の隙間を極力あけないようにし、方立を必要としないための工作と推察される。	円孔径 3.0×4.8	軸受け・二孔	クリ	板目	58	5

第77図　南区河川跡9層出土木製品類

代後期住社式に属するものと考えられる。

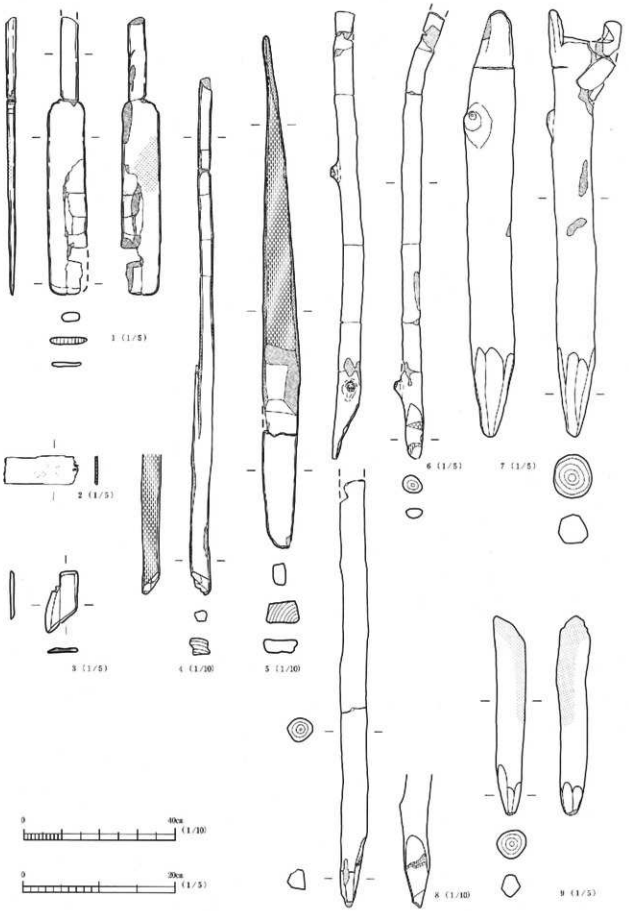
須恵器は甕の体部小破片が1点出土しているだけである。

木製品は材が1点（L－51：第77図1）出土している。L－51は、全長118.5cm・最大幅20.6cm・厚さ3～3.5cm の板目板を素材とし、横に木取りしている。側面の片側は、両木口から22～24cm の長さが、8cm 前後の幅で コ形に大きく切り取られている。反対側面の端部付近も コ形または U字形に切り取られている。大きく切り取られた部分の角の近くには、材の中軸線上に直径約5cm の円孔がそれぞれにあけられている。孔の中心間の長さは約68cm・内側の長さは約61cm である。このような形態の板材については、2枚扉の両開き戸からなる出入口の下部を構成する「厩放し」と呼ばれる建築材と考えられる。この厩放しは、側面端部の大きな切り取りの角と扉軸穴との間隔が、1.5～2cm と接近しているが、これは扉板と辺付または柱を接近させ、その間の隙間を極力あけないようにし、方立を必要としないための工作と推察される。

9）10層と出土遺物

10層は黒褐色の粘土層で、オリーブ黒色の粘土粒を部分的に含む。層厚は河川跡中央部で20cm 前後あるが、河岸部に移行するにしたがって徐々に薄くなる。北区のような砂の混入または砂層の形成はない。遺物は、土師器と木製品類および弥生土器と考えられる縄文の施文された土器片などが出土しているが、北区と比べると出土量は少ない。

土師器は、図化した2点（C－38・39：第74図8・9）のほか、破片が数十点出土している。C－38は、半球形の底部から体部に外反する口縁部が付いて、内面の口縁部と体部の境には、緩やかな稜を形成する坪である。他地区の河川跡10層から出土した資料に類似品があり、古墳時代中期の南小泉式期に位置付けられる。C－39は、壺の層部から口縁部にかけての破片で、頸部から口縁部はほぼ全体が残存する。頸部は直立気味に外頸して立ちあがったのち、口唇部にかけて強く外反する。口唇部は平らになでられている。調整は内外面とも細かなハケメ調整の後に粗いヘラミガキ調整が行われている。この土師器については、名取市清水遺跡の塩釜式期の壺に類例がある（丹



第78図　南区河川跡10層出土木製品類1

第78図観察表

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	本取り	写真図版
1	L－47	南区		SR－1	10層	木・No.6	木・掘り棒？	36.7	全長25.5	最大幅5.0	最大幅1.0	柄部長(17×12) 柄基部欠損	クヌギ節	柾目	58－6
2	L－48	南区		SR－1	10層	木・No.7	材・板材	9.8	3.8	0.3	曲物側板？		柾目	58－7
3	L－56	南区		SR－1	10層		材・板材	8.1	4.0	0.6	縁辺野耗		板目	
4	L－52	南区		SR－1	10層	材・No.34	材・角材	136.2	5.0	5.0	端部加工有り		芯無角	59－1
5	L－53	南区		SR－1	10層	材・No.32	材・角材	135.0	10.0	5.5	加工有り		芯無角	59－2
6	L－54	南区		SR－1	10層	材・No.30	材・丸材	59.0	2.5	2.3	先端加工、１面多段		芯持丸	59－3
7	L－49	南区		SR－1	10層	材・No.26	材・丸材	56.4	5.5	4.9	両端加工、片端多面多段		芯持丸	59－4
8	L－50	南区		SR－1	10層	材・No.29	材・丸材	113.0	6.5	6.1	先端加工、多面多段		芯持丸	59－6
9	L－55	南区		SR－1	10層	材・No.31	材・丸材	26.3	3.8	3.6	先端加工、多面段不明、片端焼痕		芯持丸	59－5

羽　茂・小野寺祥一郎・阿部博志：1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅴ宮城県文化財調査報告書第77集）。したがって、出土層とは別に、古墳時代前期のもが流入したと考えられる。

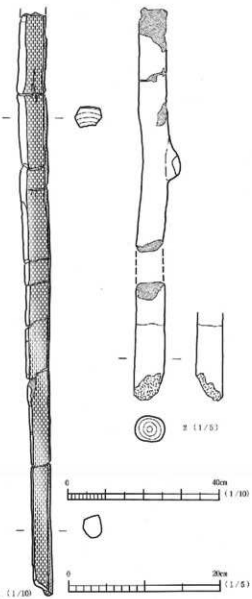
木製品類には製品と材・杭がある。木製品には掘り棒（L－47：第78図１）がある。掘り棒L－47は、柄の基部側を欠損する。残存長は36.7cm である。身部は隅丸長方形呈し、長さ約25.5cm・幅５cm 前後を測る。厚さは柄との接続部で１cm 前後あり、先端に向かって徐々に薄くなり、先は尖っている。残存する柄部は扁平で、基部に向かって厚くなっている。

材は、角材２点（L－52・53）、柾目板（L－48）、板目板（L－56）、丸材４点（L－49・50・54・55）がある（第78図２～９）。角材L－52は、全長136.2cm・最大幅と厚さが約５cm ある。側面は、１面は樹皮を剥いだ面で、他の３面は割面からなる。木口の一方は残存しているが、片側は破損している。残存する側の木口は樹皮側からの切断痕跡と考えられる加工が観察される。角材L－53は、全長135cm・最大幅10cm・厚さ5.5cm あり、両端が狭くなっている。幅が広い側の端部近くが加工されて３cm 前後の厚さになっている。

柾目板L－48は、残存長9.8cm・残存幅3.8cm・厚さ３mm の薄板で、部分的に焼痕が認められる。曲物の側板の破片と考えられる。

板目板L－56は、全長8.1cm・幅４cm・厚さ６mm ほどの不整形の板で、側面と木口面が背面側に傾斜面ができるように加工されている。

丸材L－49は、全長56.4cm・直径5.5cm 前後の芯持ちの丸材である。片方の木口部分は枝の張り出し部を利用して凹形に加工されている。他方の木口部は多方向から加工して鋭く尖らせている。これと類似する丸材は、中在家南遺跡第１次調査Ⅵ区10層からも出土している。（工藤哲司：1996「中在家南遺跡他」第１分冊本文編　仙台市



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	本取り	写真図版
1	L－84	南区		SR－1	10層	杭・No.4	杭・角杭	145.0	7.6	5.0	先端折れ面		芯無角	59－8
2	L－83	南区		SR－1	10層	杭・No.2	杭・丸杭	47以上	3.9	3.5	先端折れ面		芯持丸	59－7

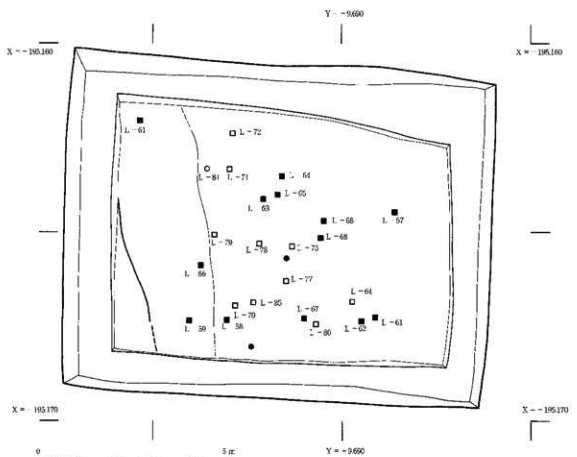
第79図　南区河川跡10層出土木製品類２

文化財調査報告書第213集）。丸材Ｌ－50は、残存長113cm・直径約6.5cmの芯持ち丸材で、片方の木口部は多面から数段の加工が行われて尖っている。丸材Ｌ－54は、現存長約59cm・直径2.5cm前後の芯持ち丸材で、片側の木口は１方向３段の加工がされて尖っている。丸材Ｌ－55は、現存長26.3cm・直径４cm前後の芯持ち丸材で、片方の木口は多方向から１段の加工がなされて尖っており、他方の木口は焼焦げている。

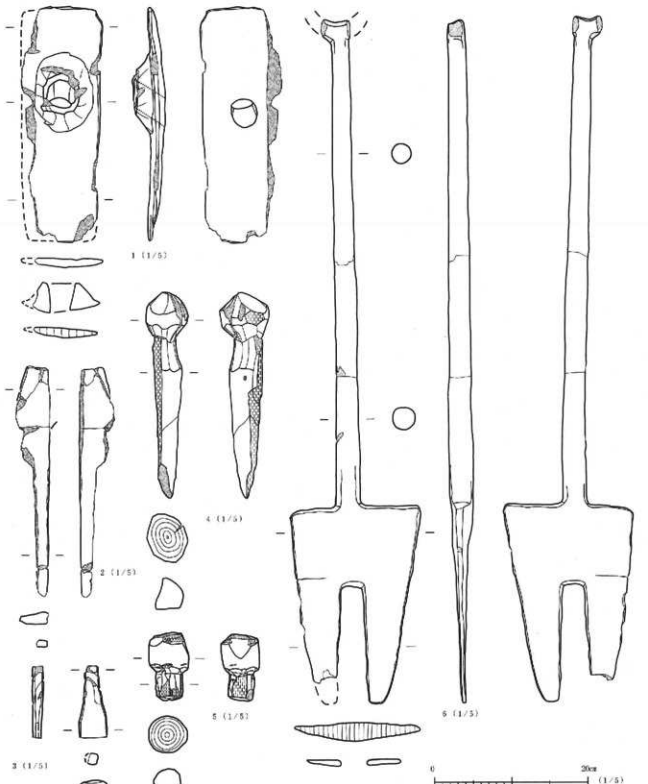
10層検出の杭は、３点あるが相互の関係は不明である。杭材は、角杭１点（Ｌ－84）と丸杭２点（Ｌ－82・83）がある（第79図）。角杭Ｌ－84は、現存長約145cm・最大幅7.6cm・厚さ５cm前後の杭で、断面形は６角形を呈し、側面は5面が割り面、１面が削り加工面となっている。先端は、１面からの加工があり、鈍角的な先端角となっているが、この加工については、切断裏の残存と考えられる。丸杭Ｌ－82は、芯持ちの丸杭で、先端の加工は不明である。取り上げの際に崩壊した。丸杭Ｌ－83は、全長が47cm以上・直径3.5cm前後の芯持ちの丸杭で、先端は折れ面となっている。

10）11　層

11層は、黒色の粘土質泥炭層で、河川中央部と河岸上部に分布している。層厚は５～15cmほどである。出土遺物はない。

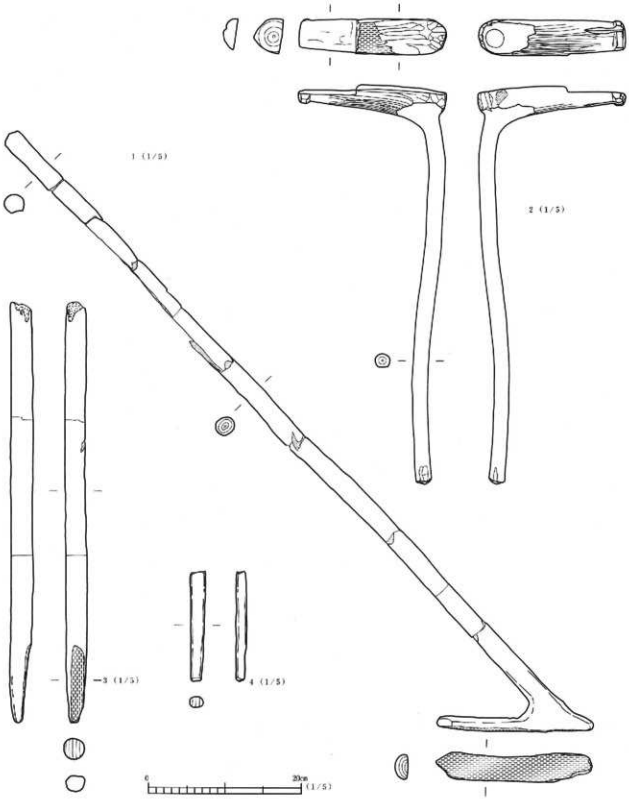


第80図　河川跡12層遺物出土位置



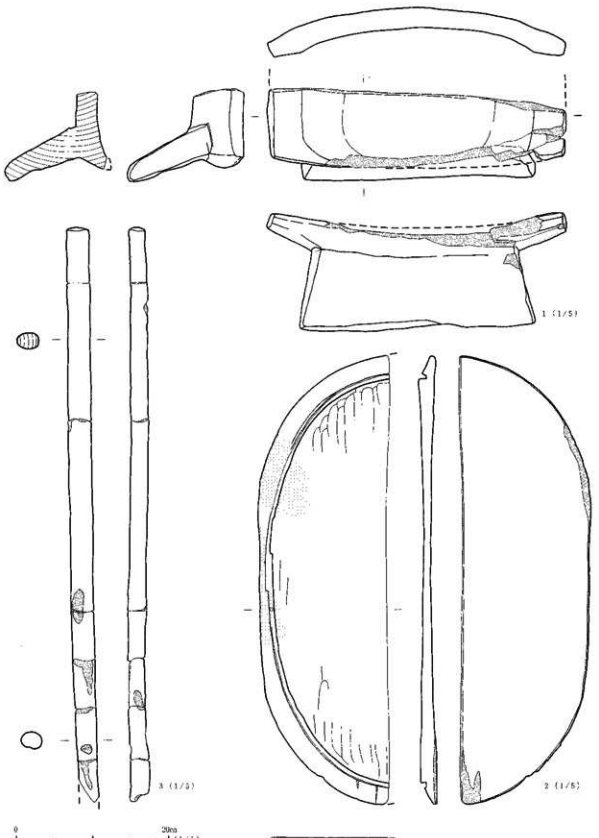
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴				樹種	木取り	写真図版
1	L－59	南区		SR－1	12b層	木・No.10	木・直柄平鍬	31.4	10.5	身部厚 12	身部厚 3.8	柄孔径 57×36	柄角 57°	隙起部・柄孔円形	クヌギ層	柾目	60－1
2	L－66	南区		SR－1	12b層	木・No.17	木・脇柄二又鍬	30.5	4.5	身部厚 16					クヌギ層	柾目	60－3
3	L－60	南区		SR－1	12a層		木・ヘラ状木製品	9.5	身部厚 3.7	身部厚 1.1	柄部径 1.7×1.4	握部・身部先端欠損			クヌギ層	板目	60－4
4	L－67	南区		SR－1	12b層	木・No.18	木・有頭木製品	27.2	頭部径 6.0×5.5	頭部厚 3.6	頭部厚 4.2				ヤシャブシ層	芯持丸	60－6
5	L－69	南区		SR－1	12a層	木・No.12	木・有頭木製品	8.9	頭部径 5.0×4.9	頭部厚 3.5	頭部厚 3.4				ニワトコ	芯持丸	60－5
6	L－57	南区		SR－1	12層	木・No.7	木・一木二又鍬	90.4	身部長 26.2	身部厚 17.1	柄部長 61.0	握部欠損			コナラ層	柾目	60－2

第81図　南区河川跡12層出土木製品類１



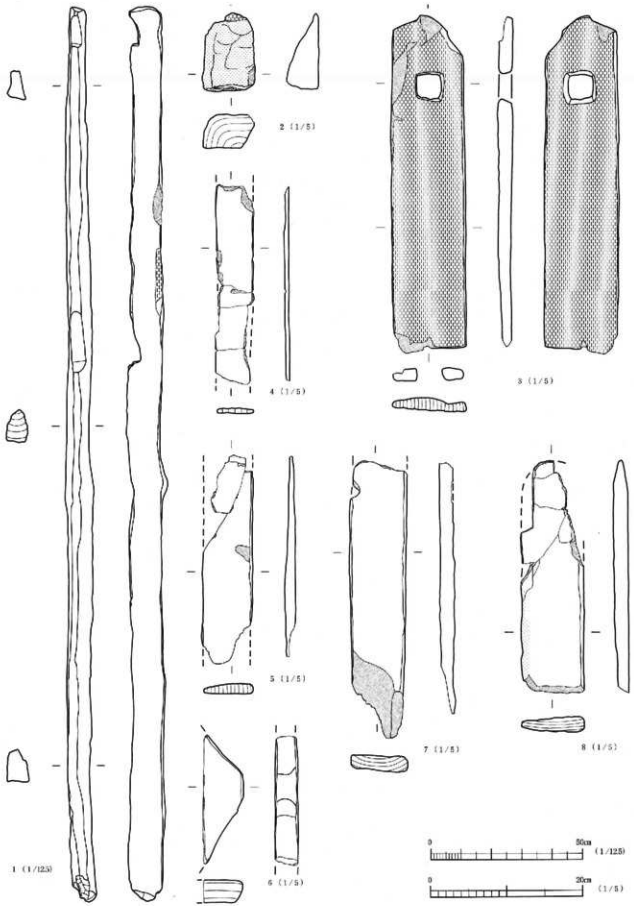
番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特	徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－65	南区		SR－1	12b層	木・№16	木・鍬膝柄	109.3	長部長	頭部厚	頭部型無形長	柄形状	柄角	未製品	クリ		61－2
									20.4	3.8	1.7	101.5	15×13	69°			
2	L－61	南区		SR－1	12b層	木・№8	木・斧膝柄	54.0	斧台長	斧台厚	斧台型無形長	柄形状	頭部長	頭角	樹皮及所端	カヤ		61－3
									19.3	4.5	3.6	48.5	19×18	7.5	110°	樹部有り		
3	L－62	南区		SR－1	12b層	木・№13	木・丸棒	55.7	2.8	2.7	片端尖頭・片端折れ				キハダ	芯無丸	61－1
4	L－63	南区		SR－1	12b層	木・№14	木・丸棒	14.4	2.0	1.4	ヘラ状木製品の軸部か？				クヌギ節	芯無丸	

第82図　南区河川跡12層出土木製品類2



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴			樹種	木取り	写真図版
								現行	尚人数	最大高	厚部厚	側部厚				
1	L－64	南区		SR　1	12b層	木・No.15	木・鍬掛	12.0	39.5	15.4	2.7	3.3	半折れ、焼痕有り	サクラ属		62－1
2	L－58	南区		SR－1	12a層	木・No.9	木・楕円板	58.8	16.8	厚さ 1.0～2.1	側板一部残存、焼痕			型は ヒノキ 図は 樹に	板目	61－4
3	L－68	南区		SR－1	12層	木・No.19	木・丸棒	75.7	3.0	2.0	農具柄？			カエデ属	芯無丸	

第83図　南区河川跡12層出土木製品類3



第84図　南区河川跡12層出土木製品類4

第84図観察表

番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構内	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特徴	樹種	木取り	写真掲載
1	L－85	南区		SR－1	12b層	材・№7	材・建築材？	294.2	14.0	7.0	欠き込み2ヶ所有り	コウヤ	芯無角	62－4
2	L－76	南区		SR－1	12b層	材・№15	材・角材	103	6.9	4.5	両端切断		芯無角	62－2
3	L－72	南区		SR－1	12a層	材・№26	材・板材	44.7	9.9	1.5	先端 1.4以上 3.5 3.4 方孔有り		柾目	62－7
4	L－80	南区		SR－1	12b層	材・№23	材・板材	26.1	5.0	0.5～0.6	部部欠損？		柾目	62　6
5	L－75	南区		SR－1	12b層	材・№12	材・板材	27.6	6.6	0.5～1.3			柾目	62－5
6	L－79	南区		SR－1	12b層	材・№19	材・板材	17.0	5.3	3.0	建築材？		板目	62－3
7	L－73	南区		SR－1	12a層	材・№9	材・板材	36.5	7.5	2.0			板目	
8	L－74	南区		SR－1	12a層		材・板材	30.5	8.3	2.0			板目	63－1

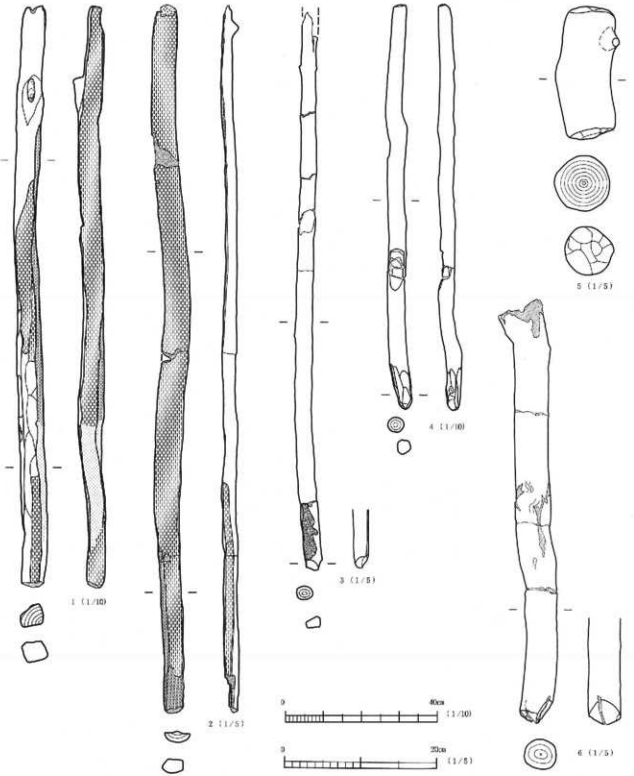
11）12層と出土遺物

南区の12層は、灰オリーブ粘土の混入の状態によって、3層に分けられた。12層上層（12a層）は、灰オリーブ粘土の細粒を少量含む黒褐色の粘土層で、樹木片などの植物遺体を多く含む。中層（12b層）は、灰オリーブ粘土を斑状ないし縞状に少量含む黒褐色の粘土層である。下層（12c層）は、灰オリーブ粘土を斑状に多く含む黒褐色の粘土層である。各層の厚さは5～20cm前後で、3層を合わせた層厚は30～40cmほどで、岸面上部に移行するにしたがって薄くなる。また、12a層・12b層・12c層の各調分層に堆積時期が対応すると考えられるが、土色や土質などが異なる層（12a'層・12b'層・12b''層・12c'層）が部分的に存在する（第70図）。

12層からの出土遺物は、一部を除き細分3層に分けて取り上げているが、これまでの調査成果で12層各層は古墳時代前期に位置付けられており、今回の調査でもこれを否定する資料が出土していないので、ここではほぼ同一時期の資料として一括して報告することとしたい。出土遺物の種別としては、土師器と木製品類がある。

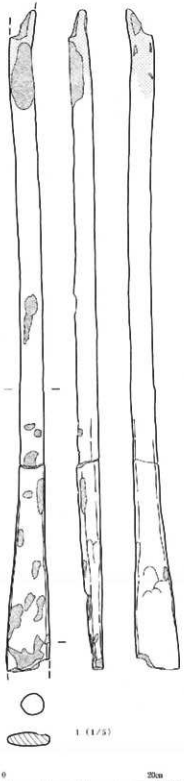
土師器は、実測したものには12a層から出土した壺（C－40）と12b層から出土した坏（C－41）がある（第74図10・11）。C－40は底部から体部上半ににかけての破片である。底部と体部との境は不明瞭で、体部はやや扁平な球形を呈している。体部の造りは比較的薄い。外面は、丁寧にヘラミガキ調整されており、このことから器種を壺と判断した。C－41は、底部は台状で、口縁部まで内湾して半球形に立ち上がる。器種としては坏として分類したが、鉢として分類したほうが適当かもしれない。口唇部の内側は、面取りされたように平坦な内傾面が形成されている。内外面は丁寧にヘラミガキ調整されている。2点の土師器の類例は、C－40については押口遺跡第1次調査1区12層検出SX－1遺構出土の一括資料のC－21に、C－41については中在家南遺跡第1次調査VI区12c層出土C－134に類例があり、ともに古墳時代前期塩釜式期の他の土師器と共伴して出土している（工藤哲司：1996「中在家南遺跡他」第1分冊本文編　仙台市文化財調査報告書第213集）ことから、これら2点の土師器も同期のものと考えられる。他の破片資料としては、薄ないし壺の破片が多数出土している。甕は一般的に薄手で、外面には細いハケメ調整された体部の破片である。壺は外面が丁寧にヘラミガキ調整された体部の破片である。これらの破片についても、当該期として矛盾のあるものではない。

木製品類としては、農工具をはじめとする多種多様な木製品と材類・杭がある。木製品には、直柄平鍬（L－59）・膝柄二又鍬（L－66）・一木二又鍬（L－57）・鍬膝柄（L－63）・斧膝柄（L－61）・ヘラ状木製品（L－60）・楕円板（L－58）・腰掛（L－64）・丸棒3点（L－62・63・68）・有頭木製品2点（L－67・69）がある（第81～83図）。直柄平鍬L－59は、全長31.4cm・幅10.5cm前後あり、平面形は隅丸長方形を呈する製品で、側面を部分的に欠損している。幅は頭部側より刃先側がわずかに狭くなっている。身部の縦断面形は真直ぐではなく、着柄隆起側が凹面となるようにわずかに湾曲している。着柄隆起は、やや縦に長い円形である。柄孔も円形で、孔径は着柄隆起側が僅かに大きい。身部の横断面形は、縦断面の凹面側は真直ぐで、凸面側はやはり膨らんで凸面となるように仕



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	特　徴	樹種	木取り	写真図版
1	L－88	南区		SR－1	12b層	材・№20	材・割材	152.6	6.5	6.0			芯持	63－2
2	L－77	南区		SR－1	12b層	材・№16	材・半裁丸材	93.6	3.0	1.6	側面に加工有り		半裁丸	63－3
3	L－78	南区		SR－1	12b層	材・№18	材・丸材	73.7	2.0	1.8	先端加工、3面1段、樹皮付着		芯持丸	63－5
4	L－70	南区		SR－1	12b層	材・№21	材・丸材	106.7	4.5	3.9	先端加工、欠き込み有り		芯持丸	63－4
5	L－71	南区		SR－1	12c層	材・№24	材・丸材	17.5	7.2	7.2	両端加工		芯持丸	63－6
6	L－81	南区		SR－1	12c層	杭・№1	杭・丸杭	56.1	4.3	3.9	先端加工、多面1段		芯持丸	63－7

第85図　南区河川跡12層出土木製品類5



上げられている。

Ｌ－66は、膝柄二又鍬の片側の身部が縦に割れた破片と考えられる柾目の木製品の断片である。残存長は30.5cm・残存幅4.5cm である。肩部付近と身部の内側の側面部が本来の形状を残している。

一木二又鍬Ｌ－57は、掘り部と片側の刃部の先端を欠損しているが、比較的保存状況は良好である。大きさは、現存長は90.4cm・身部長26.2cm・身部幅17.1cm・身部と掘り部間約61cm を測る。身部は全体として逆台形を呈し、二又の身部の間隔は2.5～４cm で、先端側が広くなっている。身部の肩幅は、柄との境から６cm と7.5cm となっており、柄部の中軸線に対して左右対称に造られてはいない。

鍬膝柄Ｌ－65は、全長が109.3cm あり、柄部が細かく割れているが、全体が残っている。柄部の直径は2.5cm 前後である。鍬との接合部分の長さは20.4cm・幅3.8cm である。柄部と接合部分の角度は約46°である。鍬との接合面が割面のままであること、接合部分上部に紐掛の段差（突起）が形成されていないことなどから、本品は未製品の状態であると判断される。

斧膝柄Ｌ－61は、全長は約54cm である。柄部は、直径２ cm・長さ約48.5cm で、基部端が丸く加工されているだけで、あとの部分は樹皮を剥いだだけで特に切削を伴う加工はない。ただし、側面から見ると、通常の樹枝のような単純な弓なりの湾曲ではなく、緩やかなＳ字状の湾曲を呈しているので、反りをもたせるための加工が施されている可能性がある。頭部は、長さ19.3cm・幅4.5cm 前後で、断面形は蒲鉾形を呈する。一部割面や自然面が残っているが、全体的に丁寧に細かく加工されている。頭部後面側は先端から7.5cm ほどが、一段低く加工され、段差は約７ mm である。段差部分が平坦に加工されていることから、板状鉄斧が装着されたと考えられる。頭部前面側の先端は、幅約1.5cm で帯状の突起が作り出されている。また頭部前面側の中央よりやや右に寄った部分には、先端から長さ約５cm に渡って溝状の浅い掘り込みがある。このような溝は、中在家南遺跡第１次調査Ⅱ区15層出土の弥生時代中期の斧膝柄（Ｌ－419）にも存在することが確認されている。溝の機能としては、鉄斧と斧柄を紐で緊縛した後に、この溝にそって楔状のものを差し込んで、結束具合を強化したものと理解される。

ヘラ状木製品Ｌ－60は、残存長9.5cm・身部幅3.7cm・柄部幅1.7cm の木製品で、現存部分は撥形を呈する。ヘラ状の木製品または掘り棒の一部と考えられる。

番号	登録番号	出土区	基本区	出土遺構	遺構期	取上番号	種別・器種	全長	最大幅	厚さ	軸	樹種	木取り	写真図版
									身部幅	身部厚	茎部径			
1	Ｌ－86	南区		ＳＲ－１	14層	木・№１	木・掘り棒	87.3	5.7	1.7～2.6	3.0×2.8	身部先端欠損	クヌギ節	柾目	63－８

第86図　南区河川跡14層出土木製品類

楕円板Ｌ－58は、残存部長58.8cm・残存幅16.8cm を測る板目板で、楕円形の板材が二分の一程度に割れたものと観察される。片面は平坦に加工され、反対面は縁辺部がやや高くなるように加工されている。さらに側辺から2.5cm前後内側には、幅５～７㎜程度の溝が掘り込まれている。溝は現存範囲の中央部分が、長さ５cm に渡って幅が１cm ほどに広く彫られており、溝の内側と外側に角がついている。溝の中には、一部分に材が残っていることから、この溝については側板を嵌め込むための加工と考えられる。先の溝の広がる部分については、側板の重なる部分と理解される。溝より内側の表面部分には、木目に沿って幅1.5cm 前後の加工痕跡が観察される。

腰掛Ｌ－64は、幅39.5cm・最大高15.4cm で、奥行の二分の一程度のところから縦に割れており、台の部分を含む現存の奥行は12cm である。座部の平面形は扁平な樽形を呈し、中央部分が窪んでいる。台は下肢の脚状に奥行の前後に２つ並ぶと考えられる。現存の台は、台形を呈し、下端の外側は座部よりも外側に張り出している。

丸棒Ｌ－62は、残存長55.7cm・直径2.7cm の削り出しの芯無し丸材である。残存する片方の木口は僅かに細くなりやや尖っている。丸棒Ｌ－63は、残存長14.4cm・幅2.0cm・厚さ1.4cm のやや扁平な削り出しの芯無し丸材である。残存する片方の木口の幅がやや細くなっている。丸棒Ｌ－68は、残存長75.7cm・長径３cm・短径２cm 前後の削り出しの丸材である。残存する片方の木口は丸く加工されている。農具の可能性が考えられる。

有頭木製品Ｌ－67は、コケシ状に球形の頭部が作り出された、芯持ちの丸材を素材とする木製品である。現存長は27.2cm で、頭部の直径は６cm 前後である。有頭木製品Ｌ－69は、全長8.9cm・頭部径５cm・軸部径3.5cm 前後のボルト形の木製品である。両端の木口には加工痕跡が残り、軸部には加工とこれに伴う割れ面が観察される。

材は、建築材（Ｌ－85）、角材（Ｌ－76）、柾目板３点（Ｌ－72・75・80）、板目板３点（Ｌ－73・74・79）、分割材（Ｌ－88）、半裁丸材（Ｌ－77）、丸材３点（Ｌ－70・71・78）、など多種多様な材が出土している（第84～85図）。建築材Ｌ－85は、全長294.2cm・幅11cm 前後・厚さ７cm 前後で断面形が台形の分割材を素材とするものである。片方の木口近くと中央付近に「 形の抉り込みの加工が施されている。他方の木口は切断に伴うと考えられる加工痕跡が観察される。

角材Ｌ－76は、長さ10.3cm・幅6.9cm・厚さ4.5cm で楔状に片側の木口が尖っている材である。広い側の木口は、木目の方向に対してほぼ直角に切断されている。

柾目板Ｌ－72は、現存長44.7cm・幅9.9cm・厚さ1.5cm 前後の板材で、両面及び両側面は割面のままである。残存部の片方の木口に寄った位置の中央には、１辺が3.5cm 前後の方形の孔があけられている。柾目板Ｌ－75は、現存長27.6cm・幅6.6cm・厚さ1.3～0.5cm 前後の板材で、片側の木口に向かって薄く加工されている。柾目板Ｌ－80は、現存長26.1cm・幅5.0cm・厚さ0.5～0.6cm の薄い板材である。曲物の側板の可能性が考えられる。

板目板Ｌ－73は、残存長36.5cm・幅7.5cm・厚さ２cm 前後に整形された板である。板目板Ｌ－74は、残存長30.5cm・幅8.3cm・厚さ２cm 前後の板で、片側の木口の一部が残っている。残存する木口部分は、丸く湾曲しており、さらに先端から３～４cm のところから先の両面を削って尖らせている。板目板Ｌ－79、残存長17.0cm・残存幅5.3cm・厚さ３cm 前後の比較的厚い板で、残存部の平面形は台形を呈している。木製品または建築材の破片の可能性がある。

分割材Ｌ－88は、現存長152.6cm・幅6.5cm・厚さ６cm 前後ある四分の一分割材で、断面形は扇形を呈する。全長の二分の一程度は部分的に方形の断面形に加工されている。

半裁丸材Ｌ－77は、現存長が93.6cm あり、直径３cm 前後の芯持ち丸材を縦に半裁したと考えられるものである。割り面以外特に加工の痕跡はない。

丸材Ｌ－70は、現存長106.7cm・直径4.5cm 前後の芯持ち丸材で、残存する片方の木口は多面から多段の加工が施されて尖っている。丸材Ｌ－71は、長さ17.5cm、直径７cm 前後の円筒状の芯持ち丸材である。両木口には加工痕跡が顕著に残存し、木口面は比較的平らになっている。丸材Ｌ－78は、残存長73.7cm・直径２cm 前後の芯持ち丸材で、

残存する片方の木口は3面から1段の加工が施されて尖っている。

杭は、河川西岸の下端付近から杭（L－81）が1点検出されている（第85図6）。杭L－81は、芯持ちの丸杭で、先端に多面1段の加工が存在する。

12）13　層

13層は、灰オリーブ色の粘土層で、オリーブ黒色粘土を部分的に斑状に含んでいる。河川中央部に分布し、河岸斜面上部には分布していない。層厚は厚いところでは50cmほどあり、平均でも30cm前後と厚く堆積している。層厚が厚いのにもかかわらず、出土遺物はない。

13）14層と出土遺物

14層は、黒色の粘土層で、樹枝片・ドングリ・クルミ・トチノミ等の植物遺体を多く含んでいる。層下面には同色の砂層が薄く分布している。層厚は、2～10cm程である。河川跡の中央部分は、14層が15層を抉るような状況で溝状に窪んで堆積しており、この部分に一段低い流路が形成されていたことが伺われる。（図版26－3）

14層からの出土遺物には弥生土器と木製品がある。弥生土器B－5（第74図12）は、甕の体部上半から口縁部にかけての破片で、15層から出土した破片と接合している。体部中程から上部にかけて直線的に開き、体部上端は僅かに内湾し、口縁部は強く外反している。体部外面及び口唇部は縄文（LR）が施されている。弥生土器は、このほかに口唇部に縄文の施された甕の口縁部片が1点あるだけである。

木製品は、掘り棒の破片と考えられる製品（L－86：第86図1）が、溝状の窪みから1点出土している。L－86は、残存長が87.3cmで、身部の先半部分と柄部の基端付近を欠損している。身部と柄部の境は無く、半面は柄部から身部にかけて徐々に幅が広がり、側面は柄部から身部にかけて徐々に薄くなっている。

14）15　層

15層は、黒褐色の泥炭質粘土を部分的に縞状に含む灰オリーブ色の粘土層で、大小の樹木片を多く含んでいる。層厚は、河川跡中央部で50cm前後あり、河岸部に移行するにしたがって薄くなる。層厚の割りには遺物は少なく、14層出土の弥生土器と接合関係にある弥生土器片のほか、細かな縄文（LR）の施された甕または壺の体部破片が3点出土しているに過ぎない。

15）16　層

本調査区における16層は、標高2m前後を境として大きくわけられる。標高2mより上部は、緑灰色からにぶい黄褐色の粘土層、下部は小礫を含む暗緑灰色の粗砂層となっている。砂層からは湧水がある。

第6章　自然科学的分析

第1節　仙台市中在家南遺跡・押口遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男（東北大・理・植物園）・能城修一（森林総合研究所）

仙台市の中在家遺跡群の中在家南遺跡および押口遺跡から出土した弥生時代中期から中世～近世の木製品69点の樹種をしらべた。時期別内訳は弥生時代が17点、古墳時代が44点、平安時代が4点、それに中世（～近世）が4点である。中在家遺跡群の遺跡からは弥生時代中期を中心として農具など多数の木製品が出土し、それらの樹種が調べられている（仙台市教育委員会1996）。今回の結果はこれらの既知の結果に新たなデータを付加することができた。

出土した木材にはMYG-4158～4195、4500～4520、4536～4545の樹種用試料番号を付し木材から剃刀刃を用いて横断面(C)、接線断面(T)、放射断面(R)の切片を作成し、光学顕微鏡で観察同定した。同定に用いたプレパラートは東北大学大学院理学研究科付属植物園に収蔵されている。

同定された樹種

1　カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc.　イチイ科

顕微鏡写真　図版1 a－c（MYG-4185）

保存性のよい出土材で、硬く、年輪がほとんど目立たない針葉樹材である。軸方向要素は仮道管のみからなり、仮道管の内壁には2－3本がまとまった顕著ならせん肥厚がある。放射組織は単列で1～8細胞高と背はあまり高くなく、柔組織のみからなり、細胞内に黒褐色の樹脂様物質の蓄積が認められない。分野には小型でスギ型の開孔部を持つ壁孔が2－4個ある。以上の形質からカヤの材と同定した。

カヤは宮城、山形県以南の本州、四国、九州の暖地に広く分布し、幹直径1m、樹高30mに達する。材は木理が通直で、硬く強靭で、しかも加工が容易で保存性に優れているので建築材、枘物などの器具材、彫刻材（仏像）などに良く使われる。本遺跡出土材は押口遺跡の古墳前期の斧の膝柄1点で、材質にかなった用材といえる。

2　モミ属　Abies　マツ科

顕微鏡写真　図版2 a－c（MYG-4169）

黒褐色を呈してスギによく似た針葉樹材で、年輪がよく目立つ。年輪は幅広く、早材部が広く、晩材部はやや狭いか狭い。早材から晩材への移行はやや急。放射組織は柔細胞のみからなり、単列でしばしば背がかなり高くなる。柔細胞の水平、垂直壁は厚く、多数の単壁孔を備えるモミ型壁孔となる。分野壁孔は小型のスギ型で1分野当たり2個ある。以上の形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には本州の東北中部以南の温帯～暖帯に広く分布するモミ、太平洋側の温帯に分布するウラジロモミ、亜高山帯に分布するシラベ、アオモリトドマツ、北海道にのみ分布するトドマツがあり、これらの個々の種類を材構造で識別するのは困難である。しかし、モミが平野部および近傍の丘陵部に普通に多産することから、本遺跡出土材はすべてモミであると考えられる。モミ Abies firma Siebold et Zuccarini は、岩手県および能登半島以南西の本州、四国、九州の暖帯上部から中部にかけて広く分布する常緑高木で、幹直径1m、樹高30m以上になる。木理通直で肌は粗く保存性低く軽軟であるが、加工が容易であり、また、かつては本州の平野部や丘陵部に大量に存在していたことから、良く利用されてきている。本遺跡出土材は押口遺跡の古墳中期の丸く削りだした棒、用途不明品

の木製品、曲物の底板と看做される楕円形の板、中在家南遺跡の平安時代の用途不明品の木製品の合計4点である。曲物底板への利用はヒノキあるいはスギの代用と見なせる。

3　スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科

顕微鏡写真　図版3 a－c（MYG-4504）

黒褐色を呈する針葉樹材で、年輪は一般に広く、広い早材部とやや広いか狭い晩材部からなり、年輪界は極めて明瞭である。早材部仮道管は断面が放射方向に長い長方形あるいは方形で直径が大きく薄壁であり、晩材部仮道管は接線方向に扁平な長方形で壁が大変厚く、早材から晩材への移行は緩やかか、樹齢を経た部分では年輪幅が狭いとともに移行がかなり急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在し、黒褐色の樹脂様物質があり、水平壁はほぼ平滑である。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、背はかなり高くなる。分野壁孔は大型で水平方向に長軸を持つ楕円形で、開孔部も大きいスギ型で、1分野当たり2個ある。以上の形質によりスギと同定した。

スギは青森県、岩手県以南の本州、四国、九州の温帯に分布する常緑高木で、最も良く植林、植栽される。材は辺材は白く、心材は奇麗な赤みを帯び、木理通直、肌は粗く、軽軟強靭で割裂性、加工性がよい。心材には独特の香がある。建築材、器具材、土木用材等ありとあらゆる用途がある。中在家南遺跡から弥生中期の削りだし丸棒と中世の火鑽臼の2点が出土している。これらの用材は他の遺跡同様である。

4　ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Sieb. et Zucc.　ヒノキ科

顕微鏡写真　図版4 a－c（MYG-4181）

年輪は一般に狭く、晩材部は極端に狭い針葉樹材で、出土材の内部構造の保存は余りよくない。早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞内にはスギ同様、黒褐色の樹脂様物質が含まれ、スギとは異なり、水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で背は低く、柔細胞のみからなる。分野壁孔は中型で輪郭丸く、開孔部は狭いトウヒ型－それより広いヒノキ型で開孔部の長軸は斜目であり、1分野当たり通常2個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東以西の本州、四国、九州の主に温帯に分布する常緑高木で、幹直径1 m、樹高30m以上になる。材は辺材淡黄白色、心材淡黄褐色で香があり、木理通直で肌目細かく、木目美しい。緻密でほど良い硬さを持ち強靭で、加工性、保存生に優れ、日本産の針葉樹材ではコウヤマキに次いで良質の材であり、建築材、各種器具材、彫刻材を始め、ありとあらゆる用途がある。遺跡出土材では特に巨大建築の柱、建具材、曲げ物、木簡などで出土例が多い。押口遺跡から古墳時代前期の曲物の底板と思われる楕円形の板が1点出土している。当時はヒノキは仙台市付近には生育していなかったことが考えられ、関東地方以西からの流通の可能性が考えられる。

5　ハンノキ属ヤシャブシ節　Alnus sect. Alnobetula　カバノキ科

顕微鏡写真　図版5 a－c（MYG-4191）

薄壁で多角形～楕円形の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管はほとんどが放射方向に2－3個程度複合し、道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、壁孔の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在し、特に晩材部で接線方向に短く並んで分布する。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。ハンノキやヤマハンノキなどのハンノキ節の材とは集合放射組織を欠くことで区別される。

東北地方ではヤシャブシ節の樹木は、福島県以南にヤシャブシ Alnus firma Sieb. et Zucc.、日本海側にヒメヤシャブシ Alnus pendula Matsumura、奥羽山脈などの亜高山帯、高山帯にミヤマハンノキ Alnus maximowiczii Call. が

あるが、いずれも木材としてはあまり用いられず、むしろタンニンの原料植物として知られる。押口遺跡から古墳時代前期の削りだしの有頭棒が1点出ている。

6　アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科

顕微鏡写真　図版6 a－c（MYG-4520）

単独あるいは数個が放射方向に複合した楕円形の道管が均一に分布する散孔材で、道管は年輪の前半で大きく又密度が高い傾向がある。単細胞幅の木部柔組織が接線方向に並んで晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に並び、内壁には微細ならせん肥厚がある。放射組織は1－3細胞幅の同性で、スマートな紡錘形をしており、時に単列の翼部が高くなる。これらの形質からアサダの材と同定した。

アサダは広く全国の温帯から暖帯上部にかけて分布する落葉高木で、山間の沢沿い斜面に多い。材は堅く、割裂、加工性は難しいが、きめが細かく、仕上がりが美しい。各種柄類、軸木、船の櫂などに用いられる。中在家南遺跡からは古墳前期の平鍬の直柄が、押口遺跡からは古墳中期の木材片が出土している。材は堅く粘りがあるので直柄への利用は材質にかなっているといえる。

7　クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

顕微鏡写真　図版7 a－c（MYG-4512）

年輪のはじめに円～楕円形、卵形の大道管が一列に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が道管状仮道管、周囲状仮道管、木部柔組織とともに火炎状の紋をなす環孔材で心材部は濃黒となり保存性が極めてよい。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状、やや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帯状で晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管－放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、横状にきちんと並ぶことはない。以上の形質からクリの材と同定した。

クリは北海道南部から本州、四国、九州の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹直径1m、樹高20mほどとなる。辺材は柔らかいが心材はやや堅く、割裂が容易で耐久力、保存性は大変よく、特に水湿に強い。大型建造物から一般の家屋の柱や土台回り、屋根葺き材、その他あらゆる部分に用いられるほか、家具、農具などあらゆる部分に用いられ、また土木用材、鉄道枕木、下駄、薪炭材などの特用があった。押口遺跡からは古墳前期の鍬の膝柄と鍛放の板材の2点、中在家南遺跡からは弥生中期の鍬の泥除けと梯子が各1点、古墳前期の鍬の膝柄、槍先状の木製品が各1点、それに用途不明の木製品が3点、合計9点である。泥除けへのクリ材の使用はこれまでも中在家遺跡群で顕著に認められていたもので、仙台平野の弥生～古墳時代の木材利用の大きな特徴となっている。

8　ブナ属　Fagus　ブナ科

顕微鏡写真　図版8 a－c（MYG-4160）

保存性の悪い出土材で、軟化により切片の作成が容易でない。材は薄壁で多角形の道管が密に均一に分布する散孔材で、年輪はじめの道管は比較的太く、年輪界に向かって順次小さくなる。道管の穿孔は単一のものと横棒が2～10本くらいと数の少ない階段状が混ざっており、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で晩材部で目立つ。放射組織は1－数細胞幅の狭くて背の低いものから10細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまで連続したサイズのものがあり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの温帯に広く分布するブナ Fagus crenata Blume と本州、四国、九

州の温帯下部から暖帯上部の太平洋側に分布するイヌブナ Fagus japonica Maxim. がある。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木であるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。仙台市付近では丘陵地帯にイヌブナとブナが分布し、山地に入るとブナのみが分布する。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられるが、漆器椀の木地などの特用がある。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途がある。押口遺跡からは中世～近世の下駄の歯が2点出土している。中世以降の付け歯式の下駄にはブナが大量に使われており、これもその例となる。

9　コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops　ブナ科

顕微鏡写真　図版9 a － c（MYG-4505）

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、狭い年輪の晩材部では中－小型で丸く壁の厚い道管が放射方向あるいは散在状に配列する環孔材で、出土材はしばしば茶褐色を帯びる。道管の穿孔は単 -、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状、散在状及び独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形で櫛状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には岩手県以南の暖帯の、特に二次林や農家周辺、低湿地に広く分布するクヌギ Quercus acutissima Carr. と関東以西、特に西日本の暖帯の山地丘陵の農家周辺や二次林に分布するアベマキ Quercus variabilis Blume の2種類があるが、材構造での区別は困難である。しかし、仙台市付近にはクヌギは普通にあるもののアベマキは分布しておらず、当遺跡出土材はクヌギであると判断される。クヌギは成長がよく幹が通直な落葉高木で、幹径50cm、樹高15mくらいになる。材質はやや堅く、木理通直で割裂性、特にミカン割りが容易であり、柾目の板を容易にとることができる。現在ではあまり用途はなく、柄梨、桶類、卓袖、下駄、薪炭材などで、椎茸のほだ木によく用いられる。

押口、中在家南の両遺跡から弥生中期～古墳中期の木材が14点ずつと最も多く出土している。横鍬、ナスビ型二又鍬、平鍬などの鍬類が15点、へら状の木器、竪杵、打棒がそれぞれ3点などとなっており、その用材は既報告（1996）とよく一致している。

10　コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus　ブナ科

顕微鏡写真　図版10 a － c（MYG-4180）

クリおよびクヌギ節によく似た環孔材だが、クヌギ節からは晩材部の道管が薄壁多角形で細く、クリ同様に周囲状仮道管、道管状仮道管などとともに火炎状の紋をなすことで区別され、クリからは巨大な複合放射組織を持つことで区別されることから、コナラ節の材と同定した。

コナラ節はいわゆるナラ類で、この仲間には北海道南部から九州までの温帯下部から暖帯の二次林に広く分布するコナラ Quercus serrata Thunb.、北海道から九州までの温帯から暖帯上部に広く分布するミズナラ Quercus Crispula Blume.、東北地方以南の温帯から暖帯に希に分布するナラガシワ Quercus aliena Blume、北海道から九州の温帯、暖帯に分布するカシワ Quercus dentata Thunb. などがあるが、材構造での区別は困難である。仙台市付近の平野丘陵にはコナラが普通に分布し、丘陵から山地にかけてはミズナラが普通に分布している。コナラは幹径50cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材、椎茸栽培のほだ木に用いられる。ミズナラは幹径1m、樹高30mになる落葉大高木で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。押口遺跡からは古墳前期の鍬が2点と建築材と思われるもの1点、

中在家南遺跡からは平安時代の不明木製品が2点出土した。ナラ類の鍬への使用はクヌギの代用と考えられる。

11　ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科

顕微鏡写真　図版11a－c（MYG-4177）

赤褐色～黒褐色を呈する遺跡出土材で、年輪はじめに大道管が通常1列に並び、孔圏外には薄壁多角形の小道管が傾まりとなって斜上した紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、師壁の壁孔はやや大振りの多角形で交互状に密にあり、小道管には顕著ならせん肥厚がある。放射組織の上下辺のには時々大きな細胞が混じり中に大きな結晶を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州から九州の温帯下部から暖帯に広く分布する落葉大高木で、しばしば幹径2m、樹高30mを超える。また農家の屋敷林、社寺境内によく植えられ巨木が多い。成長が早く、幹は通直で大材が得易く、材質は木理通直で光沢があって美しく、やや堅くて弾力があり、割裂容易で加工しやすく、極めて優秀である。寺院などの大型建造物の建築材、一般家屋の大黒柱、大板材、など建築のあらゆる部分を始め、家具調度品、ありとあらゆる器具、特に農具、臼、杵、太鼓、容器類、漆器木地など大変よく用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の平安時代の皿1点である。

12　ヤマグワ　Morus bombycis Koidz.　クワ科

顕微鏡写真　図版12a－c（MYG-4176）

しばしば鮮やかな赤褐色を呈する遺跡出土材で、やや大型で楕円形の道管が年輪はじめに1－3層くらい並び、そこから径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊状となったものが散在環孔材で、道管の穿孔は単一、師壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に分布し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状、放射組織は異性で3～5細胞幅、時に単列の翼部がのびる。これらの形質からヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは広く全国の温帯から暖帯にかけての沢沿いなどの適潤地に生える落葉高木で、成長が早く、材はやや堅く、靭性があり、光沢あって工作が容易な優秀な材である。耐水性に優れ、建築材、器具材などに用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の平安時代の有頭木製品1点である。

13　サクラ属　Prunus　バラ科

顕微鏡写真　図版13a－c（MYG-4188）

濃い赤褐色に着色して保存性のよい出土材で、道管内にはしばしば黒褐色の充填物がある。楕円形の小道管が単独あるいは2個複合して均一に分布する散孔材で、年輪界付近のものはやや小さくなる。道管の穿孔は単一、師壁の壁孔は小孔紋で交互状、内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は散在状、放射組織は1－4細胞幅くらいの背の高い紡錘形で、同性にやや近い異性である。これらの形質からサクラ属の材と同定した。

仙台市付近にはサクラ属のヤマザクラ Prunus jamasakura Sieb. ex Koidz.、カスミザクラ Prunus verecunda (Koidz.) Koehne、ウワミズザクラ Prunus grayana Maxim. などが普通に分布しているが出土材がこれらのいずれの種であるかは区別が困難である。ヤマザクラは宮城県以南の暖帯に普通に生える落葉高木で、幹径60cm、樹高15mくらいになる。材はやや緻密堅硬で割裂容易で耐久、保存性が高く、加工性もよい。建築材、家具、各種器具材、小細工ものなど、広い用途に用いられる。当遺跡出土材は押口遺跡の古墳時代前期の腰掛け1点である。

14　キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科

顕微鏡写真　図版14a－c（MYG-4186）

赤褐色状を呈して保存性がよい遺跡出土材で、道管内に黒褐色の物質が蓄積している。大きな楕円形の道管が年輪はじめに単独あるいは2個複合して配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状でやや間隔をあけて分布し、小道管の内腔には顕著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまりめだたない。放射組織は2－5細胞幅くらいの同性で、背は低く、輪郭が紡錘な紡錘形となる。これらの形質からキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工性も容易な優秀な材である。建築物の装飾的部分、家具、各種器具材などに用いられる。樹皮の内側部分がベルベリンを含んで黄色い「黄檗」で、薬用、染料とされる。押口遺跡から古墳時代前期の棍棒状丸木と中期の用途不明品の木製品が出土している。

15　カエデ属　Acer　カエデ科

顕微鏡写真　図版15a－c（MYG-4171）

丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは2ないし数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で年輪界は目立たない。道管密度は低く繊維組織の部分が多い。繊維組織は薄壁でやや直径の太い繊維の集まりと壁がやや厚く直径わずかに小さい繊維の集まった部分とがモザイク状になって縞紋状の文様を作る。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密にあり、顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は目立たないが年輪界にあるものはしばしば結晶を持つ。放射組織は1－5細胞幅くらいで同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には多数の種があり、材構造は互いに似ていて区別は困難である。多くは温帯から暖帯に分布している落葉小高木～高木である。材は多くは堅硬で強靭であり、各種器具材、建築材などに用いられ、こけし材などの特用がある。押口遺跡からは古墳時代前期の竪杵と削りだしの丸棒が出土しており、後者が柄物だとすると両方とも材質に見合った用材といえる。

16　トチノキ　Aesculus trubinata Blume　トチノキ科

顕微鏡写真　図版16a－c（MYG-4544）

薄壁で楕円形の小道管が単独あるいは放射方向に2－5個複合して均一に密に分布する散孔材で、年輪前半では道管の占める部分が大きいが後半では道管は小さくなり、繊維組織が目立つ。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はやや大きめの丸い小孔紋で交互状で密に分布し、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性でほとんどが10細胞高以下と低く、多くは階状に並ぶ。これらの形質からトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉大高木で、沢沿いの水湿地に多い。成長が早く、幹径1m以上、樹高20mになり、枝を大きく広げた樹形となる。材は柔らかく肌目が緻密で木理美しく加工がしやすいが、乾燥により狂いやすい。建築材、家具材を始め様々な用途があるが、特に漆器木地と大型の刳物に重用される。中位家南遺跡から弥生中期のへら状木製品1点が出土した。

17　ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科

顕微鏡写真　図版17a－c（MYG-4516）

大型で厚壁のまるい道管が、単独あるいは2－3個放射方向に複合して年輪界にそって1－3列配列し、晩材部では壁が厚く、外形は角張っているが内腔は丸い小道管が単独あるいはおもに放射方向に2－数個複合してまばら

に散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁には微細な孔紋が交互状に密に分布し、らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状で、晩材では翼状－連合翼状となる。放射組織は異性で1－5細胞幅の紡錘形で、1～3細胞高の単列部をもつ。こららの形質からケンポナシ属の材と同定した。

ケンポナシ属には北海道南部から九州までの温帯および暖帯に分布するケンポナシ Hovenia dulcis Thunb. と主に西日本に分布するケケンポナシ Hovenia tomentella (Makino) Nakai があるが材構造での区別は困難である。しかし分布から見て本遺跡出土材はケンポナシと見なせるだろう。ケンポナシは幹直径40cm、樹高15mになる落葉高木で、実が熟すると果柄の部分が肥大化して多肉となり、甘く梨に似た味となり食べられる。材は肌目は粗いが木理が美しく加工容易で、建築材・家具などの器具材に用いられる。中在家南遺跡から古墳時代前期の鎌の柄が1点出土した。

18　ミズキ　Swida controversa (Hemsl.) Sojak　ミズキ科

顕微鏡写真　図版18a－c（MYG-4542）

丸みを帯びた薄壁の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪の後半では直径はさらに小さくなる。道管の穿孔は横棒が20本以上ある階段状で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は1－5細胞幅くらいの典型的な異性放射組織で、両端のとがった紡錘形をしており、単列の異部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは全国の温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径50cm、樹高15mくらいになる。材はやや軽軟で肌目は緻密であり、農具の柄、把手類など各種器具材に用いられるが、「水木」の名にちなんで梁に用い、防火のモニュメントとする特用がある。中在家南遺跡から弥生中期の農具の柄が2点出土しており、材質に見合った木材利用といえる。

19　キリ　Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud.　ノウゼンカズラ科

顕微鏡写真　図版19a－c（MYG-4158）

薄壁でしばしばゆがんだ楕円形の大道管が年輪はじめに1－3層並び、順次径を減じて晩材部では単独あるいは2個複合した薄壁多角形の小道管がまばらに分布する環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は交互状、らせん肥厚はない。木部柔組織の量が多く、材の大きな部分を占め、周囲状で、晩材部では翼状となる。放射組織は1－3細胞幅で背の低い同性で小さく、輪郭は不整である。これらの形質からキリの材と同定した。

キリは成長の早い落葉小高木で、幹径40cm、樹高10mくらいになる。本州中部以西に分布するとされているが古くから東北地方でも植栽されており、天然分布は明らかでない。材は極めて軽軟で木目は非常に美しく加工性がよく、防音、防湿、断熱効果に優れている優秀な木材で、建築材、器具材、特に下駄、箱ものなどに広く用いられる。押口遺跡から中世～近世の下駄1点が出土している。この下駄は組み合わせ式で、本体がキリで、前および後ろの鼻はいずれもブナ属である。肌に触れる部分はキリを使って歯にはより硬くて減りの少ないブナを用いた経済的な下駄といえる。

20　ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara　スイカズラ科

顕微鏡写真　図版20a－c（MYG-4193）

薄壁多角形～楕円形の小道管が複合して波状の紋をなす散孔材で、特に晩材部で接線方向によくつながった文様を作る。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状である。放射組織は幅広く背がたいへん高く、ほぼ同性、構成細胞は大振りで組織が粗雑である。これらの形質からニワトコの材と同定した。

ニワトコは全国の温帯、暖帯に広く分布する落葉小高木で、幹径20cm、樹高８ｍくらいになる。材は軽軟で肌目は緻密だが脆い。小細工もの、寄せ木細工などに用いられる。押口遺跡から古墳時代前期の有頭棒１点が出土した。

中在家遺跡群の利用木材の樹種組成

樹種が調べられた68点のうち、17点が弥生時代、44点が古墳時代、４点が平安時代、４点が中世（～近世）のものであった（表２）。20の樹種が同定されたが、弥生時代ではクヌギ節が11点を占め、残りはクリ、ミズキ、スギ、トチノキである。クヌギ節のほとんどが鍬、竪杵などの農具類であることは中在家遺跡群からの出土木材の既往の結果（仙台市教育委員会1996）とよく一致する。

古墳時代の44点の内訳は、やはりクヌギ節が一番多く17点で、これは弥生時代同様農具が中心である。ついでクリが７点あり、ほかにコナラ節、モミ属（以上３点）、アサダ、カエデ属、キハダ（２点）のほか、カヤなど７樹種があり、調べられた資料の数に比して樹種組成が多彩であるといえる。これは農具の柄および柄の可能性も考えられる棒、それに有頭の棒状木製品などに雑多な樹種が使われていることによる。

一方、1996年の報告では鍬および鋤への使用樹種はほとんどクヌギ節に集中し、クヌギ節以外ではアサダの鋤が１点出土したのみであった。今回の出土品のうち、古墳時代前期の直柄平鍬と二又鍬の２点がコナラ節であり、前回調査された資料数に比べて今回の総資料数がわずかな数にも関わらず目立った結果となっている。クヌギ節の樹種がクヌギ、コナラ節がコナラだと見なして材質からこの違いを考えると、クヌギではミカン割りにすることにより鋤鍬の原材となる大きな柾目板が容易にとれるのに対し、コナラでは幹がそれほど太くはならず（50センチを越えることは少ない）、もしも太い幹のものがあったとしても太枝が幹の下方からでていたりして通直な大材を得るのは困難であることが考えられる。もっともこのコナラ節がミズナラである場合には大きな柾目板を得るのはクヌギ同様容易とも考えられる。ただ、中在家遺跡群が沖積平野の海岸にむしろ近い方にあり、ミズナラが生えていたと考えられる山地丘陵とは距離があることから該当しないといえる。いずれにしても類例が少ないのではっきりしたことは言えない。

表１　仙台市中在家南遺跡・押口遺跡から平成12年度に出土した木製品の樹種

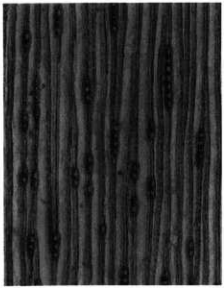
標本番号	樹　種	木番号	製　品　名	木取り	時　期	遺跡名
MYG-4158	キリ	L-4	下駄（本体）	板目	中世～近世	押口
MYG-4159	ブナ属	L-4	下駄（前歯）	板目	中世～近世	押口
MYG-4160	ブナ属	L-4	下駄（後歯）	板目	中世～近世	押口
MYG-4161	クヌギ節	L-6	曲柄鍬	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4162	クヌギ節	L-7	横鍬	柾目、横木取	古墳時代中期	押口
MYG-4163	クヌギ節	L-8	ナスビ型二又鍬	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4164	クヌギ節	L-9	板材（二又鍬）	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4165	アサダ	L-19	木製品（木材片-不明）		古墳時代中期	押口
MYG-4166	キハダ	L-20	木製品-不明	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4167	クヌギ節	L-21	横鍬	柾目、横木取	古墳時代中期	押口
MYG-4168	モミ属	L-22	丸棒	削り出し	古墳時代中期	押口
MYG-4169	モミ属	L-23	木製品-不明	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4170	モミ属	L-29	楕円板？曲物-底板	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4171	カエデ属	L-31	竪杵	芯持	古墳時代前期	押口

標本番号	樹　種	木番号	製　品　名	木取り	時　期	遺跡名
MYG-4172	クヌギ節	L-32	膝柄鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4173	クヌギ節	L-33	ナスビ型二又鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4174	クヌギ節	L-34	直柄平鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4175	コナラ節	L-35	直柄平鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4176	ヤマグワ	L-40	有頭木製品	芯持	古墳時代前期	押口
MYG-4177	ケヤキ	L-46	皿	柾目	平安時代	押口
MYG-4178	クヌギ節	L-47	掘り棒？・へら	柾目	古墳時代中期	押口
MYG-4179	クリ	L-51	鍬放し	板目	古墳時代後期	押口
MYG-4180	コナラ節	L-57	二又鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4181	ヒノキ	L-58	楕円板（底板）	板目	古墳時代前期	押口
MYG-4182	樹皮	L-58	楕円板（側板）		古墳時代前期	押口
MYG-4183	クヌギ節	L-59	直柄平鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4184	クヌギ節	L-60	へら状木製品	板目	古墳時代前期	押口
MYG-4185	カヤ	L-61	斧膝柄		古墳時代前期	押口
MYG-4186	キハダ	L-62	掘り棒状丸棒	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4187	クヌギ節	L-63	丸棒	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4188	サクラ属	L-64	腰掛け	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4189	クリ	L-65	鍬膝柄		古墳時代前期	押口
MYG-4190	クヌギ節	L-66	膝柄二又鍬	柾目	古墳時代前期	押口
MYG-4191	ヤシャブシ節	L-67	有頭木製品	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4192	カエデ属	L-68	丸棒	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4193	ニワトコ	L-69	有頭木製品	削り出し	古墳時代前期	押口
MYG-4194	コナラ節	L-85	建築材？	みかん割	古墳時代前期	押口
MYG-4195	クヌギ節	L-86	掘り棒	削り出し	弥生時代中期	押口
MYG-4500	スギ	L-5	火鑽臼	削り出し	中世	中在家南
MYG-4501	モミ属	L-11	木製品・不明	板目	平安時代	中在家南
MYG-4502	コナラ節	L-12	木製品・不明	割材	平安時代	中在家南
MYG-4503	コナラ節	L-12	木製品・不明	割材	平安時代	中在家南
MYG-4504	スギ	L-18	丸棒	削り出し	古墳時代中期	中在家南
MYG-4505	クヌギ節	L-20	横鍬？	柾目	古墳時代中期	中在家南
MYG-4506	クヌギ節	L-19	横鍬	柾目	古墳時代中期	中在家南
MYG-4507	クヌギ節	L-21	ナスビ型平鍬	柾目	古墳時代中期	中在家南
MYG-4508	クヌギ節	L-22	駆杵	削り出し	古墳時代中期	中在家南
MYG-4509	クリ	L-24	梯子		古墳時代中期	中在家南
MYG-4510	クリ	L-34	鍬膝柄	丸木	古墳時代前期	中在家南
MYG-4511	クリ	L-35	木製品・不明	柾目	古墳時代前期	中在家南
MYG-4512	クリ	L-36	鎗先状木製品	削り出し	古墳時代前期	中在家南
MYG-4513	クヌギ節	L-37	へら状木製品	柾目	古墳時代前期	中在家南
MYG-4514	クヌギ節	L-38	曲柄二又鍬	柾目	古墳時代前期	中在家南

標本番号	樹　種	木番号	製　品　名	木取り	時　　期	遺跡名
MYG-4515	クリ	L-39	木製品-不明	柾目	古墳時代前期	中在家南
MYG-4516	ケンポナシ属	L-40	鎌柄	削り出し	古墳時代前期	中在家南
MYG-4517	クリ	L-45	木製品-不明	丸木	古墳時代前期	中在家南
MYG-4518	クヌギ節	L-51	建築材？	板目	古墳時代前期	中在家南
MYG-4519	クヌギ節	L-61	直柄平鍬（刃）	柾目	古墳時代前期	中在家南
MYG-4520	アサダ	L-61	直柄平鍬（柄）	削り出し	古墳時代前期	中在家南
MYG-4536	クヌギ節	L-71	竪杵	削り出し	弥生時代中期	中在家南
MYG-4537	ミズキ	L-72	斧直柄状木製品	丸木	弥生時代中期	中在家南
MYG-4538	クヌギ節	L-73	打棒	柾目	弥生時代中期	中在家南
MYG-4539	クリ	L-74	泥除	板目	弥生時代中期	中在家南
MYG-4540	クヌギ節	L-77	打棒	削り出し	弥生時代中期	中在家南
MYG-4541	クヌギ節	L-79	竪杵	削り出し	弥生時代中期	中在家南
MYG-4542	ミズキ	L-80	斧直柄状木製品	丸木	弥生時代中期	中在家南
MYG-4543	クヌギ節	L-81	斧直柄	削り出し	弥生時代中期	中在家南
MYG-4544	トチノキ	L-82	へら状木製品	板目	弥生時代中期	中在家南
MYG-4545	クヌギ節	L-84	打棒		弥生時代中期	中在家南

表2　中在家・押口遺跡出土木材の時代別樹種組成

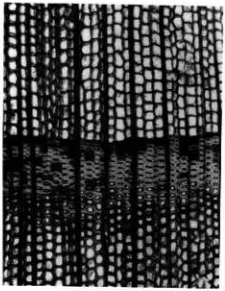
樹　種	時　期				総計
	弥生	古墳	平安	中世～	
クヌギ節	7	21			28
クリ	1	8			9
ミズキ	2				2
スギ		1		1	2
トチノキ	1				1
コナラ節		3	2		5
モミ属		3	1		4
アサダ		2			2
カエデ属		2			2
キハダ		2			2
カヤ		1			1
ケンポナシ属		1			1
サクラ属		1			1
ニワトコ		1			1
ヒノキ		1			1
ヤシャブシ節		1			1
ヤマグワ		1			1
ケヤキ			1		1
ブナ属				2	2
キリ				1	1
樹皮		1			1
総計	11	50	4	4	69



1a．カヤ　MYG- 4185　T×100

1b．同　R×200.

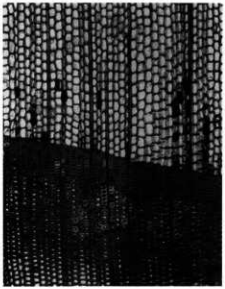
1c．同　R×500.



2a．モミ属　MYG- 4169　C×50.

2b．同　T×100.

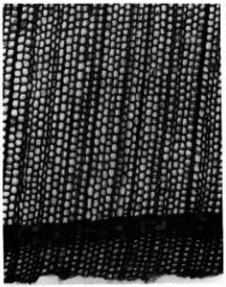
2c．同　R×500.



3a．スギ　MYG- 4504　C×50.

3b．同　T×100.

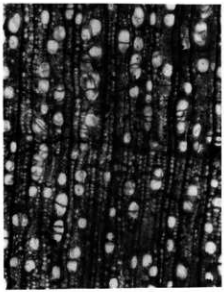
3c．同　R×500.



4a．ヒノキ　MYG- 4181　C×50.

4b．同　T×100.

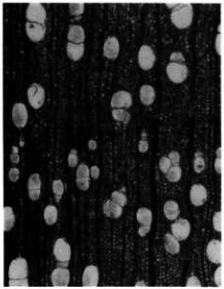
4c．同　R×500.



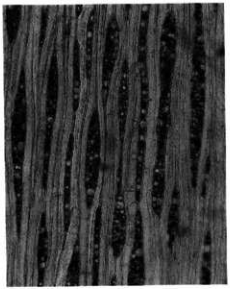
5a．ヤシャブシ節　MYG- 4191　C×50.

5b．同　T×100.

5c．同　R×200.

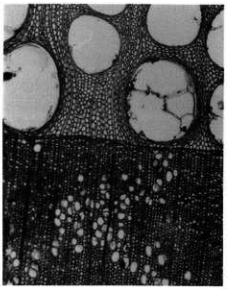


6a．アサダ　MYG- 4520　C×50.

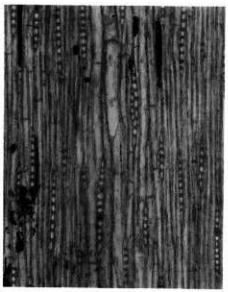


6b．同　T×100.

6c．同　R×200.

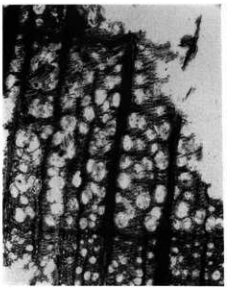


7a．クリ　MYG- 4112　C×50.



7b．同　T×100.

7c．同　R×200.

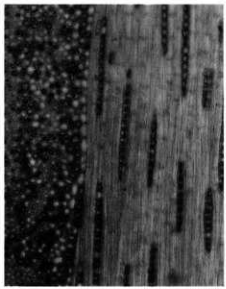


8a．ブナ属　MYG- 4160　C×50.

8b．同　T×100.

8c．同　R×200.

9a．クヌギ節　MYG- 4505　C×50.



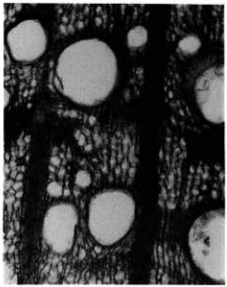
9b．同　T×100.

9c．同　R×200.

10a．コナラ節　MYG- 4180　C×50.

10b．同　T×100.

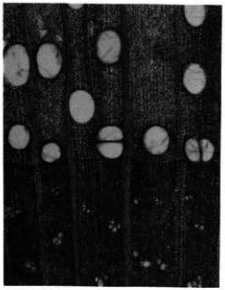
10c．同　R×200.



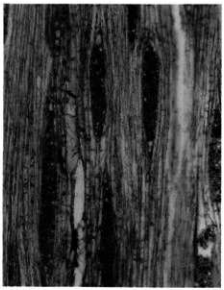
11a．ケヤキ　MYG- 4177　C×50.

11b．同　T×100.

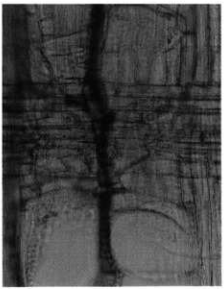
11c．同　R×200.



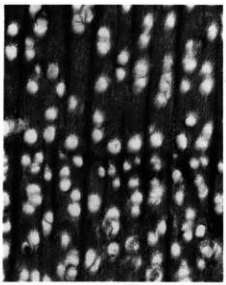
12a．ヤマグワ　MYG- 4176　C×50.



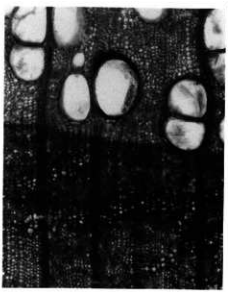
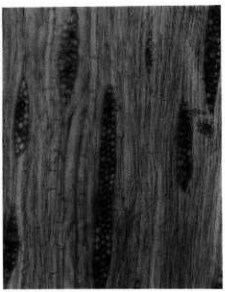
12b．同　T×100.



12c．同　R×200.

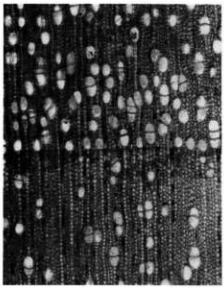


13a．サクラ属　MYG- 4188　C×50.　13b．同　T×100.　13c．同　R×200.

14a．キハダ　MYG- 4186　C×50.　14b．同　T×100.　14c．同　R×200.

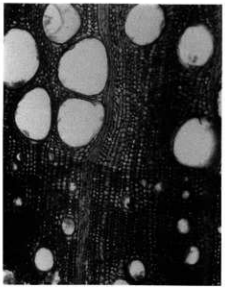
15a．カエデ属　MYG- 4171　C×50.　15b．同　T×100.　15c．同　R×200.



16a．トチノキ　MYG- 4544　C×50.

16b．同　T×100.

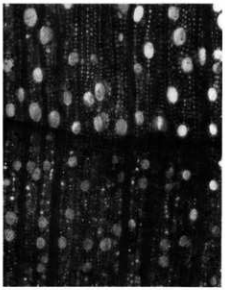
16c．同　R×200.



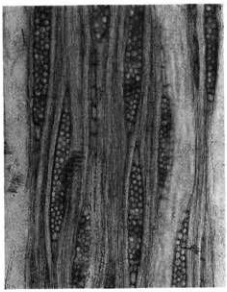
17a．ケンポナシ属　MYG- 4516　C×50.

17b．同　T×100.

17c．同　R×200.

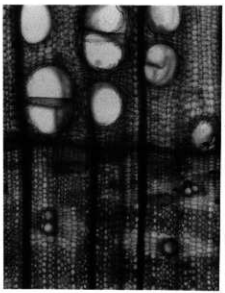


18a．ミズキ　MYG- 4542　C×50.

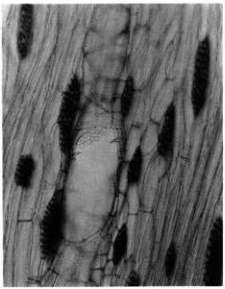


18b．同　T×100.

18c．同　R×200.

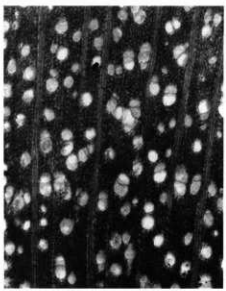


19a．キリ　MYG- 4158　C×50.



19b．同　T×100.

19c．同　R×200.



20a．ニワトコ　MYG- 4193　C×50.

20b．同　T×100.

20c．同　R×200.

第2節　弥生時代中期の漆器鉢の漆断面

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　試　料

試料は、中在家南遺跡出土の弥生時代中期の漆塗り鉢（L－78）で、内側と外側の両面に漆塗膜が観察される。

2　方　法

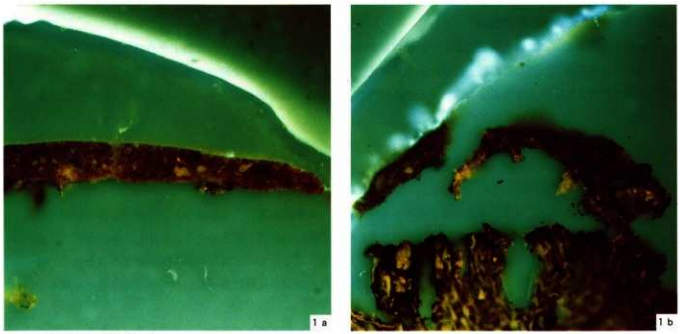
薄片を樹脂で包埋し、固化させる。ダイヤモンドカッターで、樹脂ごと漆片を切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着したのち、もう一方についても切断・研磨してプレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡、偏光顕微鏡、落射蛍光顕微鏡などを用いて観察する。

漆の観察には、岡田（1995）を参考にした。

3　結　果

漆塗り鉢は、外面が黒色を呈し、一部に光沢も見られる。漆膜の断面の特徴は、内側・外側とも一致する。粘土鉱物を大量に混ぜ、ほとんど漆の見られない層が木地の上に塗布されているのみで、漆層は認められない。粘土鉱物の他、赤鉄鉱と考えられる赤色粒子が散在するが、これが赤色顔料の混入によるものか否かは不明である。

図版　中在家南遺跡（第4次）の漆断面



1．漆断面（L－78漆塗り鉢）
a：内側、b：外側

第７章　調査成果のまとめ

１　中在家南遺跡・押口遺跡の調査遺構

１）　中在家南遺跡第３次調査区発見遺構

①　自然堤防上の遺構

・第３次調査区は、古代の竪穴住居跡が検出された第１次調査Ⅰ・Ⅱ区の東、Ⅲ区の西側の自然堤防上に位置する。

・第３次調査区では、掘立柱建物跡１基・溝跡３条・土坑４基・ピット11個が検出された。

・発見された遺構のうち、古代の遺構と考えられるのは、非ロクロ土師器の甕が潰れた状態で出土したＳＫ－４土坑だけであった。この遺構の年代は、出土土師器から古墳時代と位置付けられる。

・本調査区でＳＤ－２溝跡が検出されたことにより、〔第１次調査Ⅰ区ＳＤ－11〕→〔第３次調査区ＳＤ－２〕→〔第１次調査Ⅲ区ＳＤ－25〕→〔第１次調査試掘区ＳＤ－Ｋ・Ｃ・Ｉ・Ｈ〕→〔第１次調査Ⅳ区ＳＤ－29〕溝跡と連続していることを推定することが可能となった（附図１）。第１次調査の際には、Ⅲ区ＳＤ－25溝跡の年代を出土遺物から「平安時代以降」とし、Ⅲ区ＳＤ－25溝跡とⅣ区ＳＤ－29溝跡が連続することを推定したが、今回の調査で本文中に述べたように、第１次調査Ⅰ区ＳＤ－11溝跡から缶詰缶が出土していることから、第１次調査Ⅰ区ＳＤ－11から第１次調査Ⅳ区ＳＤ－29に連続する溝跡は近・現代のものであることが確認された。

②　河川跡

・第３次調査区では、第１次調査Ⅱ区からⅥ区にのびる河川跡の北岸の上部が検出された。

・第１次調査Ⅱ区とⅥ区の河岸上部では、河川に関わる祭祀に関連すると考えられる古墳時代中期の土師器及び石製模造品が検出されたが、その中間に位置する本調査区の河岸部でも、Ⅱ区・Ⅳ区の土師器と同期と考えられる土師器の甕が潰れた状態で出土した。

③　河川跡新旧堆積土層の境界

・自然堤防の断面及び平面の調査によって、現河川跡河岸上端線から約11mの自然堤防上で自然堤防を形成する主体となる基盤層と、河川跡堆積土古層（河川堆積土下部＝16層群）の境界を確認することができた。

・このことにより、中在家南遺跡で確認された河川跡は、北側の自然堤防から南方に徐々に移動していたことが再確認された。

２）中在家南遺跡第４次調査区の河川跡

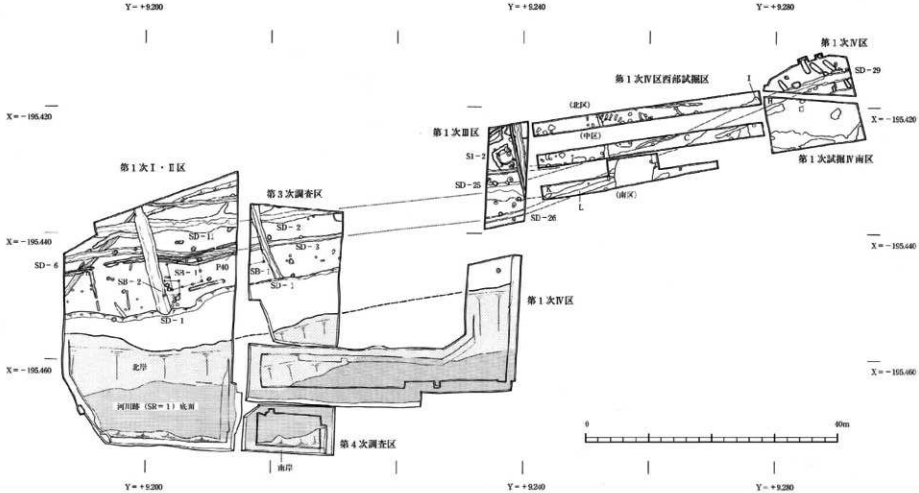
①　流路幅の認識の変更

・第１次調査Ⅳ区では、調査区南側の西半部が、北側に向かって傾斜していたことから、この部分を河川跡の南岸斜面の下端と位置付け、第１次調査Ⅱ区に比べて急に河川の底面幅が狭まると考えた。しかし、本調査区で、Ⅱ区検出の河川跡南岸から連続する南岸斜面の下端線が検出されたことから、河川の底面幅が狭まることなく、Ⅵ区東端に続くことが明らかになった。Ⅵ区西側の斜面は、河川底面の流路に沿った凹凸であったと考えられる。

②　南北両河岸面の状況

・中在家南遺跡検出の河川跡は、第１次調査Ⅷ・Ⅸ区からⅥ区に至るまで東西方向にのびており、これまでの調査では、北岸の上端から南岸の下端部までが調査され、南岸部はほとんど調査されていなかった。今回第４次調査において、南岸斜面をはじめて調査した。

・その結果、河川跡南側からも、弥生時代中期から古墳時代中期までを中心に、多くの遺物の出土を確認できた。出土遺物の量は、弥生時代（14・15層）についてみると、第１次調査Ⅱ区・Ⅵ区と大差はない。しかし、古墳時



附図１　中在家南遺跡－東半部調査区配置図

代前期（12層）についてみると、実測資料はそれほど多くないが、破片の出土量は非常に多く、古墳時代前期の集落が河川跡南側の自然堤防上に形成されていた可能性が高いと考えられる。反対に、古墳時代中期（10層）の資料は、本製品はいくらか出土しているが、土器類の出土は12層及び第1次調査VI区の河川跡北岸側と比較すると少なくなる。

・これまでの中在家南遺跡の調査状況を総合すると、弥生時代中期には、自然堤防の西側に遺物包含層が確認され、その南側の河川跡に食物残滓を含む多量の遺物が廃棄されていることから、西部自然堤防上に集落が存在し、東側の自然堤防上に土壙墓と土器棺墓が発見されていることから、東部自然堤防上に墓地が形成されていたと考えられる。古墳時代前期には、河川跡の南側の自然堤防に集落が形成され、北側の自然堤防の西半部で4基の方形周溝墓が発見されていることから、方形周溝墓群から成る墓地が形成されていたと考えられる。古墳時代中期は、集落も墓地も確定できないが、河川跡北側の自然堤防中央から東側にかけて当該期の遺物が多数出土していることや、第1次調査II区・VI区及び第3次調査区において、河川跡北岸上部から祭祀に関係する土師器や石製模造品が出土していることから、河川跡北側自然堤防上の東部に集落が存在した可能性が考えられる。

3）押口遺跡第3次調査区発見遺構

① 自然堤防上の遺構

・押口遺跡第3次調査区では、北区の自然堤防方で溝跡3条・土坑8基・その他の遺構1基と、南区の河川跡3a層上面で溝跡1条が検出された。このうち、北区の隅丸方形ないし隅丸長方形を呈する2基の土坑（SK－5・8）からは古墳時代前期の壺と鉢がそれぞれ出土しており、当該期の何らかの遺構と考えられる。他の遺構群については、SD－1溝跡が最近の用水路であることが分ったこと以外は詳細な時期と性格については不明である。

② 河川跡

・中在家南遺跡から連続すると考えられている河川跡が、第1次調査I・II区の北側で検出され、北区ではその東岸部分が、南区では西岸斜面から河川跡中央部分が検出された。

・河川跡からは、古墳時代前期（12層）と古墳時代中期（10層）を主体としての多数の遺物が出土した。弥生時代中期（14・15層）の遺物は、集落の形成されていたと考えられる中在家南遺跡から500mほど離れているためか、第1次調査I・II区同様に少なく、保存状態も悪いものであった。

2　中在家南遺跡・押口遺跡の出土遺物

1）土師器

① 中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層の土師器

・中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層から、古墳時代前期の土師器が多量に出土したことは前述したが、この中には、第30図3の甕（C－38）のように胴部に横方向のハケメ調整（他に押口遺跡北区10c層出土甕C－26：第59図5など）が認められ、東海地方の甕の調整技法からの影響の可能性が考えられる。

・また、第29図8の器台形土器（C－18）は、本文で述べたように脚部が内湾し、受け部が内側に折れ曲がり、頂部が孔のあいた凸面となる異形の製品である。このような土師器は、県内では仙台市南小泉遺跡（2点）・古川市青塚古墳（1点）・迫町佐沼城跡（1点）から出土しており、最近では、仙台市沼向遺跡の古墳時代前期の竪穴住居跡から3点がまとまって出土したことが公表されている。他の共伴する土師器から、古墳時代前期の土師器に属することは明らかになったが、他の器種に比べると出土例は極めて少なく、常時広範に使用された器種ではないようである。このような形態の土器は北関東地方に分布の中心があることが報告されており（鶴見：1993など）、

当該地方からの影響が何われる。

・古墳時代前期の土師器には、木製品と同様に東海地方や関東地方からの影響を、器種構成・形態。調整技法に認めることができる。

② 押口遺跡北区河川跡９～10層の土師器

・押口遺跡北区河川跡９層、10層（10ａ層・10ｂ層）、10ｃ層からは、古墳時代前期から後期にかけての土師器が、近接時期のものが混在しながら層位的な整合性を持って出土した。

・10ｃ層からは、古墳時代中期の土師器とともに前期の土師器が多数出土した。第１次調査Ⅰ区の12層ＳＸ－１遺構から出土した多数の前期の土師器と今回の前期土師器を合わせて考えると、この付近に古墳時代前期の集落が存在した可能性が高いものと推定される。

・10層から今回はじめて古墳時代後期の住社式期に位置付けられる土師器（第57図１：Ｃ－３）が出土したことから、10層の堆積時期が、古墳時代中期だけにおさまるものではなく、古墳時代後期にかかる可能性があることが明らかになった。

２）木製品

① 河川跡９層出土（古墳時代後期）の木製品

鍬放し：押口遺跡南区９層から出土した建物の出入口を構成する「鍬放し」は、弥生時代・古墳時代時代を通じて県内で初めて出土した。扉板の軸を挿入する穴の間隔は、内間で61cm と比較的狭いもので、どのような建物の部材であったのか今後の検討課題である。

② 河川跡10層出土（古墳時代中期）の木製品

横鍬：10層からは、中在家南４次調査区から２点・押口遺跡北区から２点の横鍬が出土した。これまで中在家南遺跡・押口遺跡から出土した古墳時代中期（10・11層出土）の横鍬は、中在家南第１次調査Ⅱ区11層から出土した柄付きのＬ－283だけであり、この横鍬は幅が比較的狭く、着柄隆起が前面側について、柄と身部の接続する角度が鈍角となるものであった。今回出土した４点の横鍬は、柄の残存するものはないが、着柄隆起を後面とした場合に、柄と身部の接続する角度が鋭角となるもの（中在家南遺跡第４次調査区10層Ｌ－19：第25図１・押口遺跡北区10層Ｌ－７：第61図１）が含まれている。４点の横鍬の出土によって、後面に短い流線型の着柄隆起がついて、柄と身部の接続角度が鋭角となる横鍬が、当該地方の古墳時代の木製農具を構成する器種のひとつであることが明らかになった。

ナスビ型鍬：ナスビ型鍬は、平鍬１点（中在家南遺跡第４次調査区10層Ｌ－21：第25図３）と二又鍬１点（押口遺跡北区10層Ｌ－８：第61図６）が新たに出土した。曲柄鍬については、中在家南遺跡及び押口遺跡の第１次調査においては、その出土状況から『古墳時代中期の木製農具は、（中略）広鍬とともに、「東海系曲柄鍬」である膝柄又鍬と膝柄三又鍬は消滅する。またナスビ型又鍬も消滅して又鍬の形態はなくなる。代わって、東海系の曲柄系の曲柄（膝柄）とナスビ型の柄を折衷したような軸部のナスビ型平鍬が出現する。』と考えた。中在家南遺跡第４次調査区10層出土のナスビ型平鍬Ｌ－21は、前回の調査状況と一致する。一方、押口遺跡北区10層出土のナスビ型二又鍬Ｌ－８は、前回の結論とは異なり、ナスビ型二又鍬が古墳時代中期にも残存することを示している可能性もある。ただし、押口遺跡北区10層は、古墳時代前期の土師器が多数流入する環境下であったことは、本文および前項に述べたとおりであり、堆積状況の良好な地点の調査または他遺跡での確実な資料の発見をまって結論付けるべきであろう。また、ナスビ型又鍬Ｌ－８について、身部が二又に分れる部分の内側が残存していると判断したが、この部分も壊れており、本来は平鍬であった可能性も完全には否定できない。いずれ、古墳時代中期に曲柄の二又鍬がある時期まで残ったとしても、これまでの曲柄鍬の出土状況を見ると、全体の傾向として

は前回の調査報告書での結論で大過ないものと考えられる。

竪杵：両遺跡にかかる河川跡からは、過去の調査においては、古墳時代中期の杵は出土していなかったが、中在家南遺跡第４次調査区10層から、芯去り材を素材とした竪杵（L－22：第25図４）が出土した。搗き部先端付近に最大径があり、中央の握り部にかけて徐々に細くなる形態のもので、古墳時代前期の竪杵と大きな変化は認められない。

梯子板：古墳時代中期の梯子板は、中在家南遺跡第１次調査Ⅵ区の資料についで２例目の出土となった。

③　河川跡12層出土（古墳時代前期）の木製品

直柄平鍬：中在家南遺跡・押口遺跡両遺跡における農具の変遷について、第1次調査の成果として、直柄広鍬は、弥生時代中期以降古墳時代前期まで存続し、古墳時代中期に曲柄平鍬の出現とともに消滅するものと考えられた。中在家南遺跡第４次調査・押口遺跡第３次調査の成果を合わせると、古墳時代前期の直柄平鍬が新たに３点出土した。両遺跡と比較的近い仙台市高田Ｂ遺跡出土資料を合わせて古墳時代前期の直柄平鍬をまとめたのが附図２である。直柄広鍬は平面形が台形を呈し、側辺上部が八字状を呈する。着柄隆起は流線型を呈し、後面に隆帯の無いものと、着柄隆起の先端に横方向の隆帯が作り出されたものの２種類がある。着柄隆起の上端付近の両側には、泥除を取付ける際に穿孔したと考えられる孔があけられている。横方向の隆帯の位置は、全長の先端側１／３くらいにあるもの（附図２－４）と中央付近にあるもの（附図２－５・６）がある。附図２－２は、身部上端が焼けており、残存部の形状から着柄隆起の上端付近の両側には、泥除装着孔はないように復元した。しかし、未製品以外の他の直柄広鍬には、再加工等によって痕跡だけを留めるものを含めて４点とも泥除装着孔があることから、附図２－２の頭部幅は、本来的には現状よりも広く、泥除装着孔が存在した可能性も考えられる。泥除装着孔のない直柄広鍬が確実に存在するかどうかの確定は今後の課題である。

古墳時代前期の直柄平鍬には、小型の鍬（附図２－７）も出土しているが、附図２－６のような再加工を経て、結果的に小型化した可能性があり、主要な農具として独立して生産されていたかどうか明らかでない。

附図２－８は、平面的には直柄狭鍬のような形態で、全長の上部から１／３くらいのところに円形の着柄隆起を持つ。側面からみると、着柄隆起側が凹面となるような緩い反りがあり、この反りを有効に活用するためには、

附図２　仙台市内の古墳時代前期の直柄平鍬

柄が省柄隆起個に伸びて、柄と身部の角度が鈍角に付いた可能性が考えられる。この形態の農具については類例の増加を待って再検討が必要である。

一木二又鍬：前回の調査では、中在家南遺跡Ⅱ区河川跡12層から出土した身部の先端側半分だけの残る鍬を（L－115）を一木二又鍬として復元したが、押口遺跡南区12層から出土した一木二又鍬（第81図6：L－57）は、身部がほぼ完全に残り、この器種が東北地方でも古墳時代前期の農耕具（掘削具）を構成する器種として存在していたことが確実になった。

板状鉄斧用膝柄：中在家南遺跡第1次調査の際に、Ⅲ区河川跡12層から袋状鉄斧が出土しているが、今回押口遺跡南区河川跡12層から板状鉄斧の柄（第82図2：L－61）が出土したことにより、両形態の斧が使用されていたことが明らかになった。

四脚盤：中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層から出土した四脚盤（第33図1：L－41）は、全長74.8cm・幅46.5cm・高さ15.1cmある大型の製品で、柾目の厚板を加工して作製している。このような製品については一般的な農民層が常用したものとは考え難く、特別な場所や行事または特定の階層あるいは人物が使用したものではないかと推定される。

腰掛：腰掛（第83図1：L－64）も、四脚盤同様に特定の階層あるいは人物が使用したものではないかと推定される。

曲物底板：底板（第83図2：L－58）は、楕円形を呈するもので、約半分ほどが残存する。長軸が58cmを超す大型の製品である。樹種は底板がヒノキで、僅かに残存する側板は樹皮と同定された。曲物の使用が東北地方でも古墳時代前期まではさかのぼることが明らかになった。

出土木材の樹種については、中在家南遺跡及び押口遺跡の第1次調査で1528点、今回の中在家南遺跡第4次及び押口遺跡第3次の調査で69点の樹種の同定を行ったが、ヒノキは、中在家南遺跡第1次調査Ⅱ区河川跡5層（平安時代）出土の木製品L－35：柾目円板（曲物底板？）とⅥ区河川跡6層（平安時代）出土の木製品L－580：柾目円板（曲物底板？）、Ⅱ区河川跡16層（弥生時代前期）出土の角材L－472の3点があるだけで、各時代を通しても出土数の少ない樹種である。

ヒノキは、分布が関東以西の本州・四国・九州とされていることから、中在家南遺跡・押口遺跡では出土点数が少ないものと解釈される。当地方にヒノキが自生していなかったとすれば、底板L－58は、関東以西の地域で製作されたものが中在家南遺跡に搬入されたものと考えられ、木製品にも広い流通があったことが推察される。

新発見の形態の木製品：中在家南遺跡第4次調査区河川跡12層出土の木製品L－35・36（第32図8・9）は、完成された木製品であるが、用途は不明である。類例の出土を待って用途の再検討が課題である。

④　河川跡14・15層出土（弥生時代中期）の木製品

竪杵：中在家南遺跡第4次調査区河川跡14層出土からほぼ完全な竪杵L－71（第39図3）が出土した。握り部の中央が算盤玉状に膨らみ、搗き部の握り部側の端部付近には低い隆帯が2条巡っている。このような搗き部の端部付近に隆帯が数条巡る形態及び装飾の竪杵は、これまでにも多数出土しており、弥生時代中期の当該地方の特徴となっている。

打棒：今回の調査でも打棒と名づけた脱穀具と考える木製品が、中在家南遺跡第4次調査区河川跡14層で1点（L－73：第39図2）15層で2点（L－77・84：第39図1・2）の3点が出土した。この形態の木製品が、農具として重要な役割を果たしていたことがあらためて確認された。

斧直柄状木製品：斧直柄状木製品は、斧の直柄のような形態であるが、斧直柄と比較すると小ぶりで、漆塗りの装飾が施される製品で、完成品は中在家南遺跡第1次調査Ⅱ区河川跡15層出土のL－266がある。斧直柄が、クヌギ節の樹木を素材とするのに対し、斧直柄状木製品はミズキなどの樹木を素材とし、素材も異なっている。この

ような木製品の未製品は、中在家南遺跡第１次調査Ⅷ・Ⅸ区河川跡15層から出土（Ｌ－955・956・1091）しているが、中在家南遺跡第4次調査区河川跡14・15層から出土したＬ－72（第39図４）・Ｌ－80(第42図１)は、Ｌ－955・956・1091よりも前段階の工程の未製品と考えられる。

漆器鉢：中在家南遺跡第４次調査区河川跡15層から出土した漆器鉢Ｌ－78（第41図１）は、赤色の顔料を混入した漆を内外面に塗った製品で、弥生時代中期の漆器としては東北地方ではじめての資料である。中在家南遺跡・押口遺跡での漆塗り製品としても、先の斧直柄状木製品（Ｌ－266）に次いで２例目である。また、両遺跡から出土する弥生時代の木製品は、農工具に比べて容器類の占める割合が極めて少ないことはすでに指摘したとおりであるが、少ないながらも漆塗りを含む容器も、必要に応じて製作されていたことが明らかになった。

線刻のあるヘラ状木製品：すでに記したように片面に線刻のある木製品Ｌ－82（第43図）が中在家南遺跡第４次調査区河川跡15層から出土した。線は、単なる傷ではなく、直線と弧線を一定の意図をもって×状に組合せて何物かを表現しようとしているように観察される。これを絵画とすればどのようなものを表現しようとしたのか、その解明は今後の課題である。

＜引用・参考文献＞

〔参考・引用文献〕

荒井　格　1992：「東北地方の木製農耕具」加藤稔先生還暦記念『東北文化論のための先史学歴史論集』

荒井　格他　2000：「高田Ｂ遺跡」『仙台市文化財調査報告書第242集』仙台市教育委員会

上原　真人　1993：「木器集成図録　近畿原始篇」『奈良国立文化財研究所史料第36冊』

氏家　和典　1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田　昭夫他　1981：「青塚古墳」『宮城県古川市文化財調査報告書第５集』古川市教育委員会

加藤　道男　1989：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編

工藤　哲司　1982：「梨遺跡」『仙台市文化財調査報告書第43集』仙台市教育委員会

工藤　哲司　1996：「中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類」『仙台市文化財調査報告書第213集　中在家南遺跡他　第２分冊　分析・考察編』仙台市教育委員会

黒崎　直　1985：「１．くわとすき」『弥生文化の研究　５道具と技術Ⅰ（６農具）』雄山閣

黒崎　直　1996：「古代の農具」『日本の美術２』No375　至文堂

佐久間光平・小村田達也　1995：「佐沼城跡」『迫町文化財調査報告書第２集』迫町教育委員会

白鳥　良一　1980：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

白鳥良一・加藤道男　1974：「⑸岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第35集

鈴木　三男他　1996：「仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種」仙台市文化財調査報告書第213集　中在家南遺跡他　第２分冊　分析・考察編」仙台市教育委員会

仙台市教育委員会　1996：「中在家南遺跡他」『仙台市文化財調査報告書第213集』

仙台市教育委員会　1997：「高屋敷遺跡ほか」『仙台市文化財調査報告書第223集』

仙台市教育委員会　2001：「沼向遺跡現地説明会資料」

辻　秀人　1995・1995：「東北南部における古墳出現期の土師器編年－その１会津盆地－・その２」『東北学院大学論集歴史学・地理学』第26・27号

鶴見　貞雄　1993：「租製器台の用途を考える」『研究ノート　３号』財団法人茨城県教育財団

丹羽　茂　1983：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』

丹羽　茂　1985：「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書第104集』

樋上　昇　1989：「木製農耕具の地域色とその変遷」『財団法人愛知埋蔵文化財センター年報昭和63年度』

樋上　昇　1993：「木製農耕具研究の一視点　－ナスビ形農耕具の出現から消滅まで－『考古学フォーラム』第３号　考古学フォーラム

樋上　昇　1994：「耕作のための道具」『季刊考古学第47号　特集先史時代の木工文化』雄山閣

藤沢　敦　1992：「引田式再論」『歴史』第79輯　東北史学会

宮城県史編纂委員会　1957：「第Ⅲ章　古墳時代」『宮城県史１』

写真図版

1　第３次調査区北半部全景（西から）

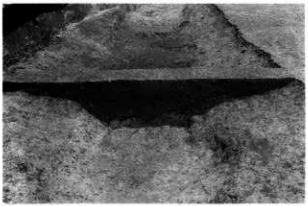
2　基盤層と河川跡16層との境界断面（北区東壁中央部）

3　河川跡16層断面（北区東壁南部）

4　SB－１掘立柱建物跡（南から）

5　SD－１溝跡土層断面（南から）

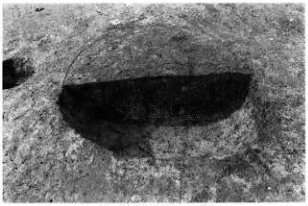
図版１　中在家南遺跡第３次調査区　北半部１（全景・土層断面・掘立柱建物跡・溝跡）



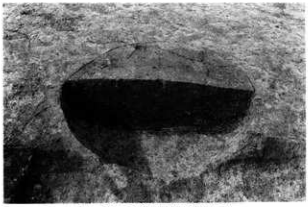
1　SD－２溝跡土層断面（西から）

2　SD－３溝跡土層断面（東から）

3　SK－１土坑（南から）



4　SK－２土坑（南から）



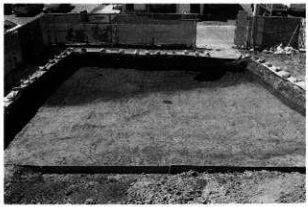
5　SK－３土坑土層断面（南から）

6　SK－３土坑完掘状況（南から）

7　SK－４土坑土師器C－６出土状況（東から）

8　SK－４土坑完掘状況（南から）

図版２　中在家南遺跡第３次調査区　北半部２（溝跡・土坑）



1　河川跡検出状況（北から）

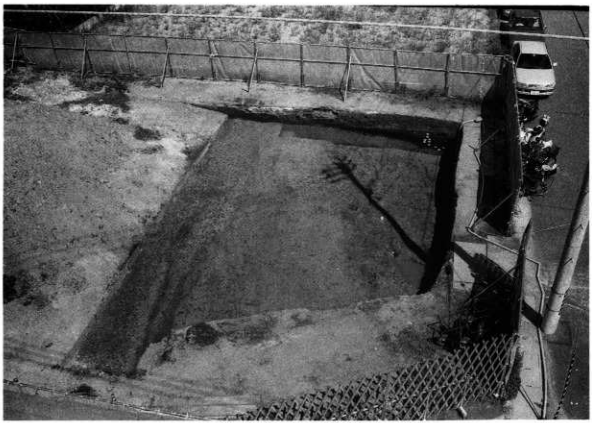
2　河川堆積土9層　土師器C－11出土状況（東から）

3　9～10層調査状況・河川跡断面（西から）

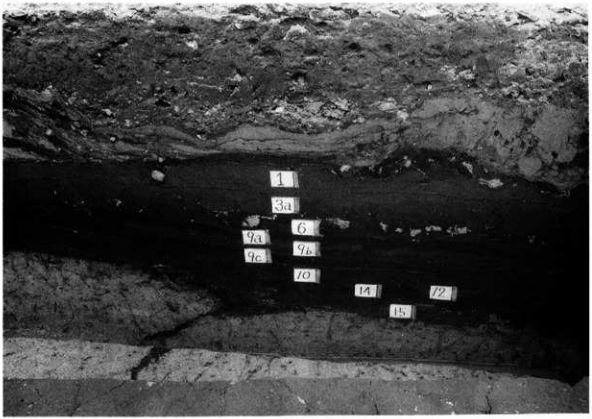
4　9層検出杭1（L－3）検出状況（西から）

5　16層検出杭1（L－1）検出状況（西から）

図版3　中在家南遺跡第3次調査区　南半部1



1　河川跡堆積土上部（1～15層）除去状況（西から）



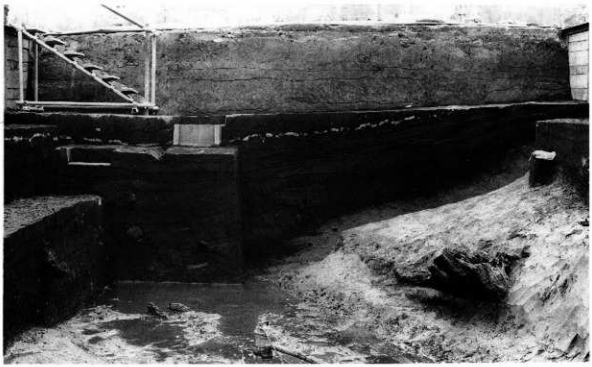
2　河川跡土層断面（南区東壁南部）

図版4　中在家南遺跡第3次調査区　南半部2

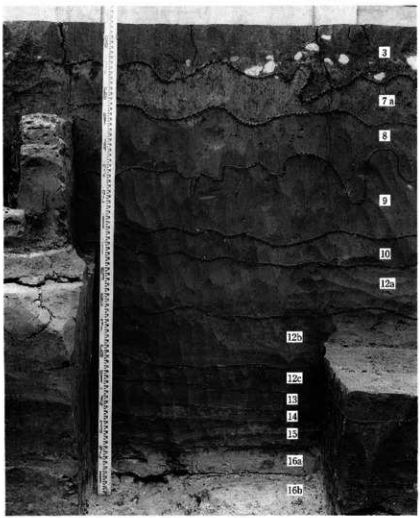
1　河川跡底面検出状況（東から）

2　河川跡底面検出状況（西から）

図版5　中在家南遺跡第4次調査区1（全景）



1　東壁断面



2　北壁中央部

図版 6　中在家南遺跡第 4 次調査区 2（土層断面）

1　河川跡（堆積土1～3a層）検出状況（南西から）

2　3a層水田跡畦畔（紐で表示）検出状況（東から）

3　3a層杭3（L－7）検出状況（南から）

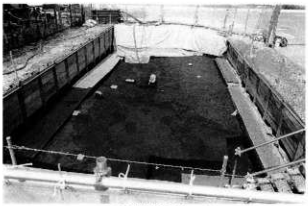
4　4層（灰白色火山灰層）上面検出状況（東から）

5　6層上面検出状況（東から）

6　6層不明木製品L－12出土状況（南から）

7　6層土師器杯D－3出土状況（南から）

図版7　中在家南遺跡第4次調査区3（1～6層）



1　7層検出状況（東から）

2　8・9・10層検出状況（東から）

3　10層上面検出状況（東から）

4　10層杭5（L−33）検出状況（南から）

5　10層杭6（L−32）検出状況（南西から）

6　10層土師器C−13出土状況（北から）

7　10層ナスビ型平鍬L−21出土状況（南から）

8　10層横鍬L−19出土状況（北東から）

9　10層竪杵L−22出土状況（南東から）

図版8　中在家南遺跡第4次調査区4（7〜10層）

1　12層遺物出土状況（西から）

2　12層遺物出土状況（東から）

図版９　中在家南遺跡第４次調査区５（12層全景）

1　12層土師器C－16・30・37（器台・壺・甕）出土状況（北から）

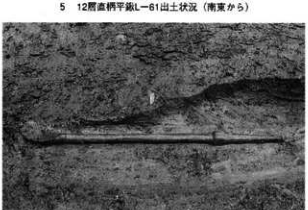
2　12層土師器C－34出土状況（西から）

3　12層土師器C－29出土状況（北から）

4　12層土師器C－17出土状況（南西から）

5　12層直柄平鍬L－61出土状況（南東から）

6　12層ヘラ状木製品L－37出土状況（南から）



7　12層槍先状木製品L－38出土状況（南から）

8　12層四脚盤L－41出土状況（南西から）

図版10　中在家南遺跡第４次調査区６（12層遺物出土状況）

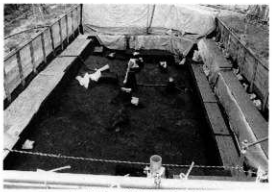
1　12層杭1（右）・3（L−62・67）検出状況（南から）

2　12層杭4（中央）・5（L−69・68）検出状況（南から）

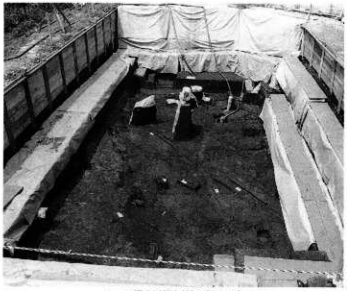
3　12層杭5（L−68）検出状況（西から）

4　12層杭29検出状況（東から）

図版11　中在家南遺跡第4次調査区7（12層検出杭）

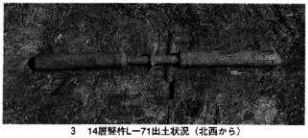


1　13層上面検出状況（東から）



2　15層上面検出状況（東から）

4　15層漆器鉢L－78出土状況（西から）



3　14層竪杵L－71出土状況（北西から）

5　15層打棒L－77出土状況（南から）

6　15層ヘラ状木製品L－82出土状況（北から）

7　14層斧直柄状木製品L－72出土状況（西から）

8　15層斧直柄状木製品L－80出土状況

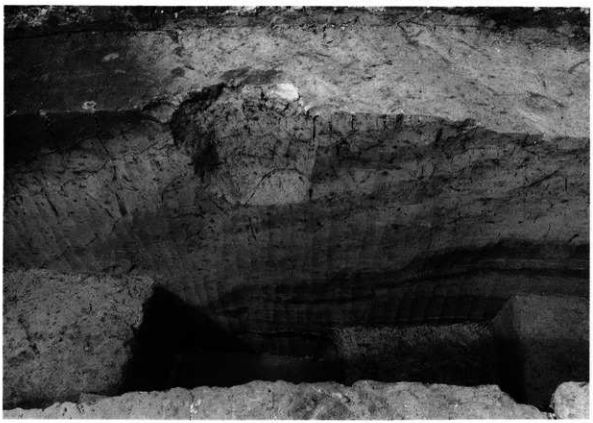
図版12　中在家南遺跡第４次調査区８（13～15層）

1　北区全景（東から）

2　北区全景（西から）

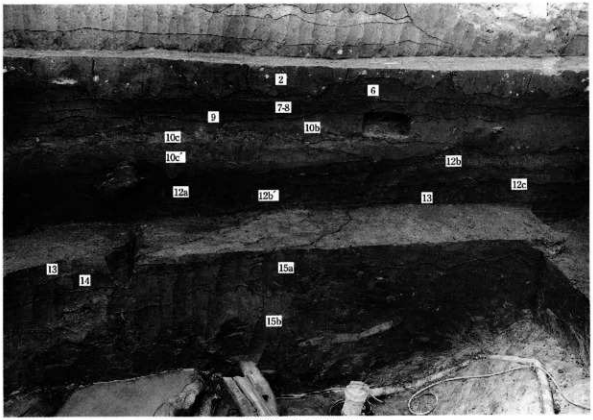
図版13　押口遺跡第３次調査　北区１（全景）

1　基本層断面：手前から河川堆積土上部（1～15層）・下部（16層）・基盤層（Ⅱ層）（北壁西部）

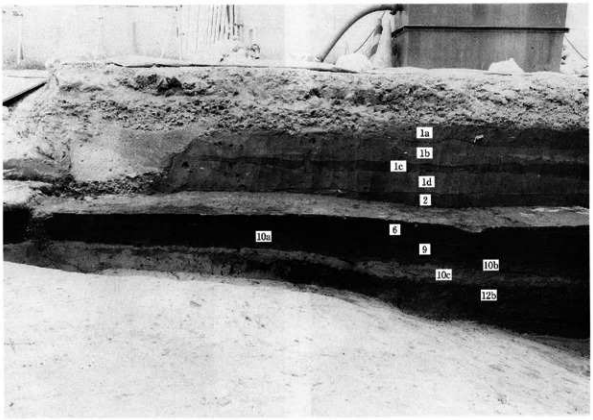


2　大別層の境界（北壁西部）

図版14　押口遺跡第3次調査　北区2（基本層断面）

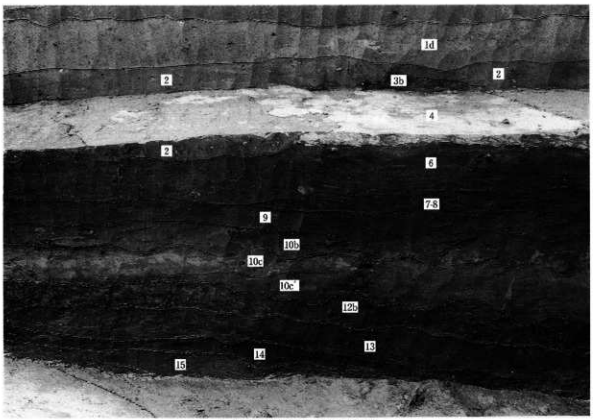


1　河川跡土層断面（調査区西壁）



2　河川跡土層断面（調査区南壁西部）

図版15　押口遺跡第３次調査　北区３（河川跡土層断面）



1　河川跡土層断面（調査区南壁西部）

2　2層水田跡畦畔痕跡（耕作土除去後：西から）

3　2層水田跡畦畔水口の掘削痕跡（西から）

4　6層杭1（L－5）検出状況（南から）

図版16　押口遺跡第3次調査　北区4（河川跡土層断面・2～6層）

1　河岸部遺構検出状況（東から）

2　SD－1溝跡土層断面（南西から）

3　SD－2・3溝跡（北西から）

4　SK－1土坑（南から）

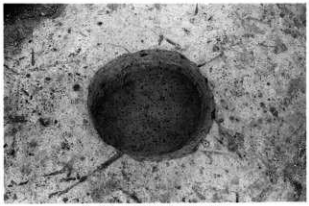
5　SK－2土坑土層断面（南西から）

6　SK－2土坑完掘状況（南から）

7　SK－3土坑完掘状況（南から）

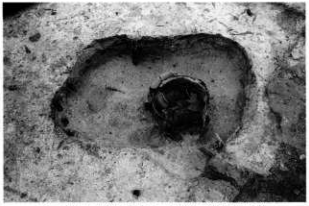
図版17　押口遺跡第3次調査　北区5（河岸部遺構）

1　SK－4土坑土層断面（南から）



2　SK－4土坑完掘状況（南から）

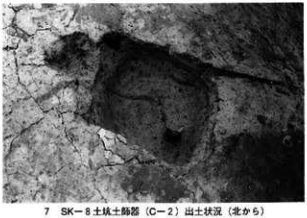
3　SK－5土坑土層断面（南から）



4　SK－5土坑土師器（C－1）出土状況（北から）

5　SK－6土坑完掘状況（南から）

6　SK－7土坑完掘状況（南東から）



7　SK－8土坑土師器（C－2）出土状況（北から）

8　SX－1遺構西部（南から）

図版18　押口遺跡第3次調査　北区6（河岸部遺構）

1　河川跡10層遺物出土状況（西から）

2　10c層横斑未製品L－21出土状況（南東から）

3　10層横斑L－7出土状況（北から）

4　10層除去、11・12層上面検出状況（南から）

5　12層堅杵L－31出土状況（北西から）

図版19　押口遺跡第３次調査　北区７（河川跡10～12層）

1　12a層ナスビ型二又銛L－33出土状況（南から）

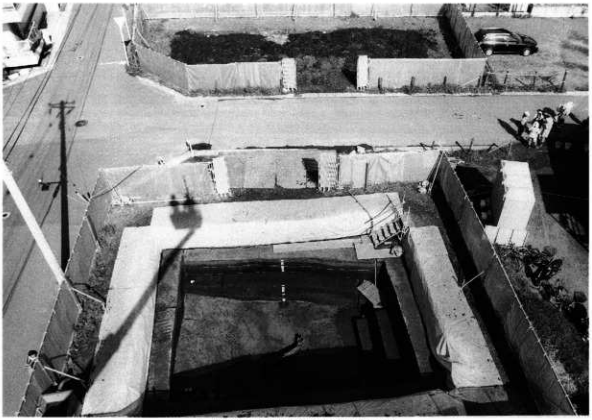
2　12a層直柄平銛L－35出土状況（北東から）

3　河川跡15層上面検出状況（南東から）

4　15層中からの倒木・流木出土状況（西から）

5　調査終了状況（西から）

図版20　押口遺跡第３次調査　北区８（河川跡12層～底面）

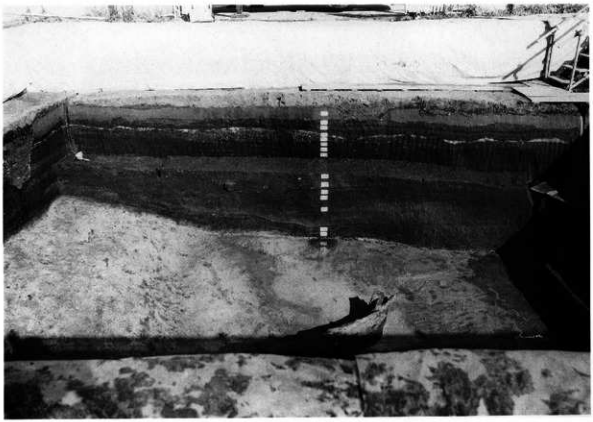


1　南区全景：写真上の空き地が北区（南から）

2　南区全景（北から）

図版21　押口遺跡第３次調査　南区１（全景）

1　調査区（河川跡）土層断面（調査区西壁）

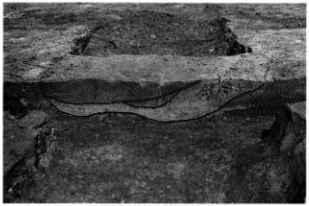


2　調査区（河川跡）土層断面（調査区北壁）

図版22　押口遺跡第３次調査　南区２（土層断面）

1　河川跡（2～3a層水田跡）検出状況（西から）

2　SD－2溝跡完掘状況（南から）



3　SD－2溝跡土層断面（南から）

4　4層（灰白色火山灰層）上面検出状況（西から）

5　6層上面検出状況（西から）

6　6層土師器杯D－1出土状況（南東より）

7　7層木皿L－46出土状況（南から）

8　7－8層杭1L－45検出状況（南東から）

図版23　押口遺跡第3次調査　南区3（河川跡2～8層）

1　9層土師器杯C－37（半分）出土状況（南から）

2　9層下面段放しL－51出土状況（西から）

3　段放し下部からの土師器杯C－37（半分）出土状況（南から）

4　10層上面検出状況（西から）

5　10層遺物出土状況（西から）

図版24　押口遺跡第３次調査　南区４（９～10層）

1　12層木製品類出土状況（東から）

2　12a層土師器壺C－40出土状況（東から）

3　12a層直柄鍬L－59出土状況（北西から）

4　12層二又鍬L－57出土状況（北東から）

5　12b層斧柄鍬L－61出土状況（東から）

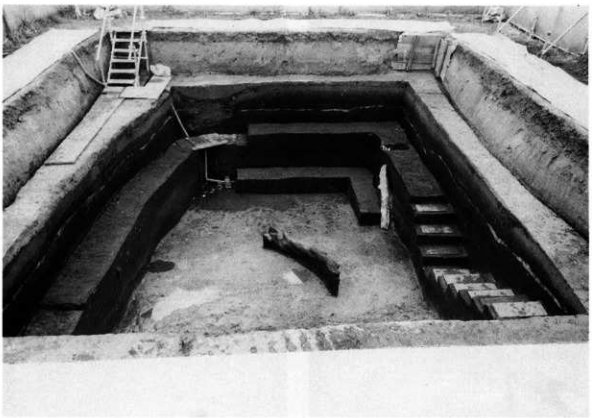
図版25　押口遺跡第３次調査　南区５（12層）

1　12b層腰掛L－64・鍬柄柄L－65出土状況（北から）

2　12a層横円板L－58出土状況（南から）

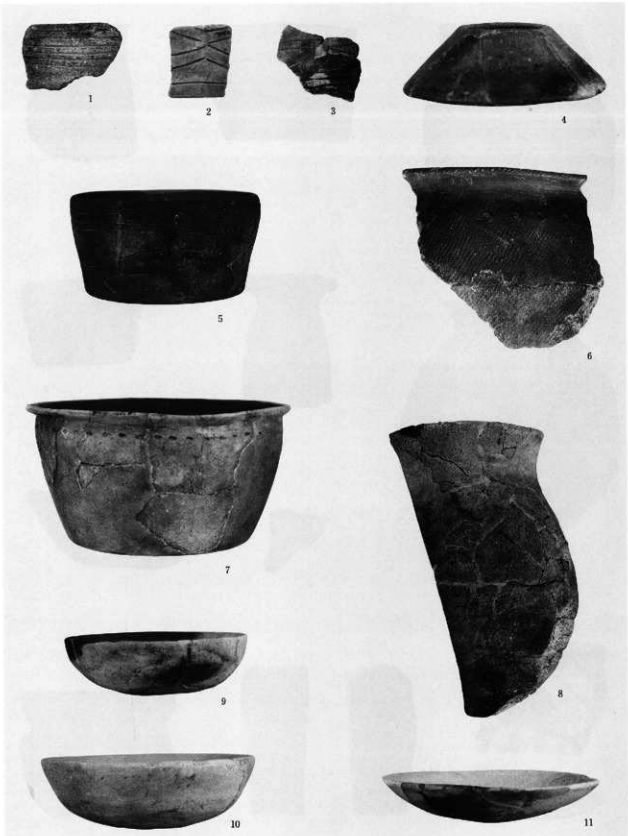
3　14層上面検出状況（西から）

4　15層上面検出状況（西から）



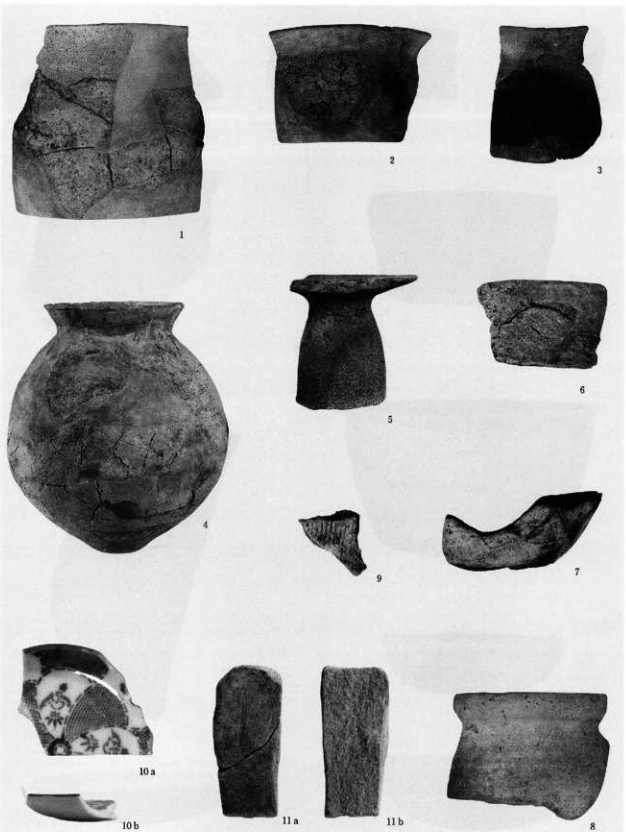
5　調査終了状況：16層・基盤層検出状況（西から）

図版26　押口遺跡第３次調査　南区６（12層～底面）



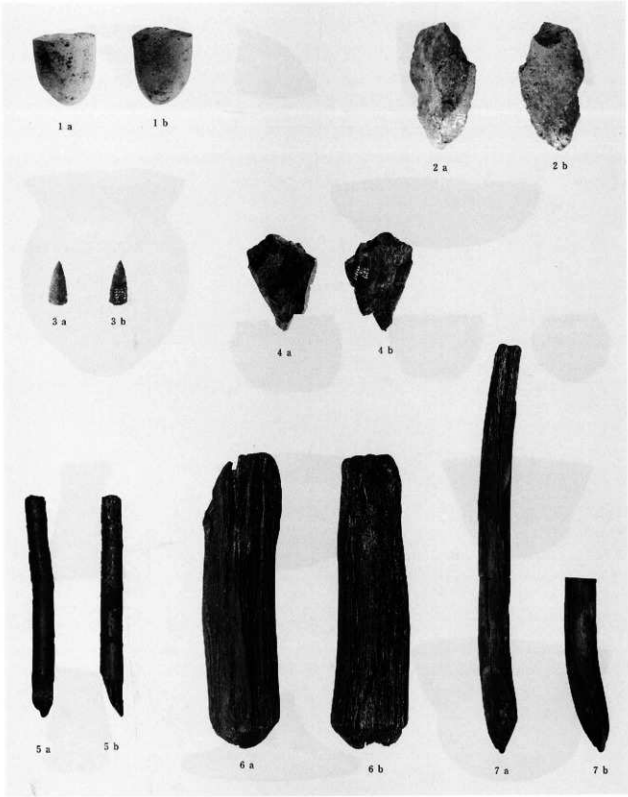
1　甕　B－1（SD－2　　堀土　第10図2）
2　高坏B－2（SD－1　　15層　第15図1）
3　鉢　B－5（SR－1　　15層　第15図2）
4　壺　B－4（SR－1　　15層　第15図3）
5　鉢B－3（SR－1　15層　第15図5）
6　甕B－6（SR－1　15層　第15図4）
7　壺B－7（SR－1　15層　第15図6）
8　甕C－6（SK－4　　第12図2）
9　坏C－2（SD－2　堀土中～下層　第10図6）
10　坏C－3（SD－2　堀土中～下層　第10図7）
11　坏C－4（SD－2　　堀土上層　第10図4）

図版27　中在家南遺跡第3次調査出土　弥生土器・土師器1



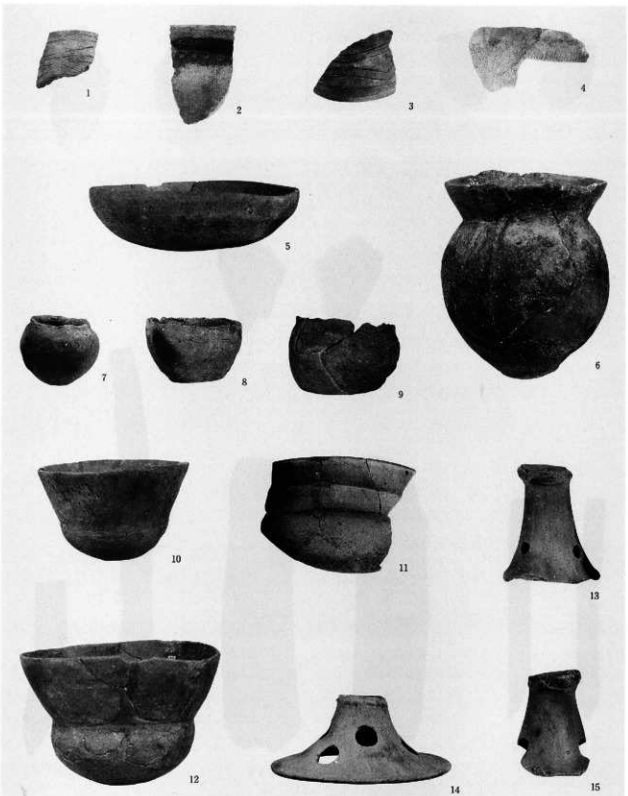
1　須C－5（SD－1　埋土　第10図1）
2　須C－7（SR－1　9層　第13図5）
3　須C－8（SR－1　9層　第13図6）
4　須C－11（SR－1　9層　第13図4）
5　高坏C－10（SR－1　9層　第13図2）
6　壺　C－9（SR－1　9層　第13図3）
7　坏　D－1（SD－2　埋土上部　第10図3）
8　甕　D－1（SR－1　埋土　第12図1）
9　平瓦G－1（SR－1　3層　第13図1）
10　皿　J－1（1層：旧水田）
11　砥石K－1（SD－2　埋土中～下層　第10図9）

図版28　中在家南遺跡第3次調査出土　土師器2・瓦・磁器・石器1



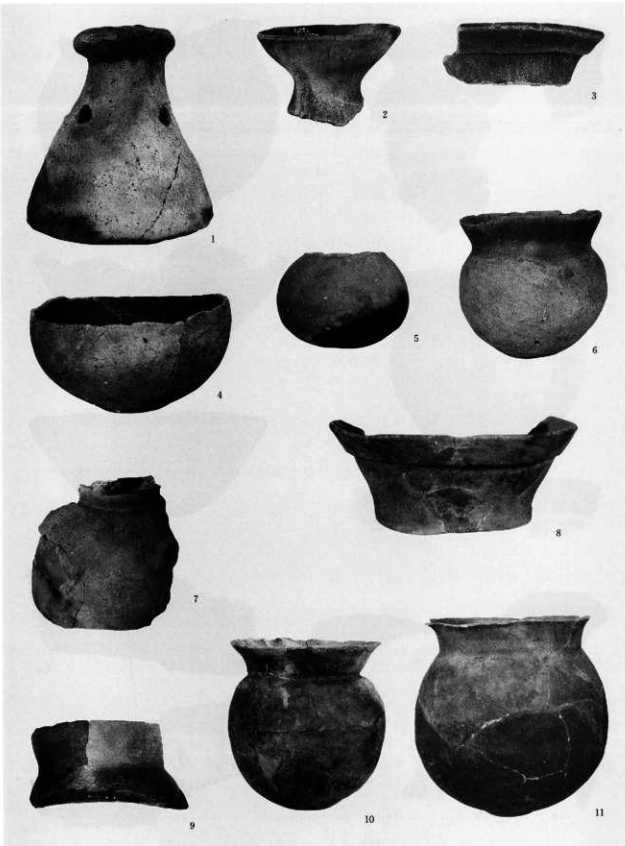
1　磨石？　K－2（SD－2　埋土　第10図8）
2　不定形石器K－4（SR－1　15層　第15図9）
3　石鏃　K－3（SR－1　15層　第15図7）
4　不定形石器K－5（SR－1　15層　第15図8）
5　丸杭L－1（SR－1　16層　第14図2）
6　丸杭L－2（SR－1　16層　第14図3）
7　丸杭L－3（SR－1　9層　第14図1）

図版29　中在家南遺跡第3次調査出土　石器2・杭



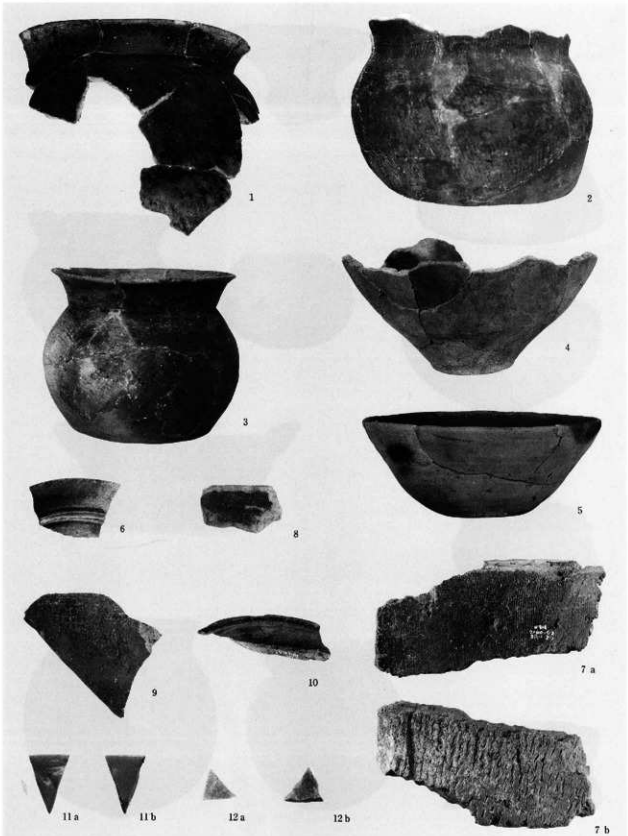
1 鉢 B－8 (SR－1 14層 第38図1)
2 甕 B－9 (SR－1 15層 第38図2)
3 高坏脚B－10 (SR－1 15層 第38図3)
4 壺 B－11 (SR－1 15層 第38図4)
5 坏 C－13 (SR－1 10層 第24図2)
6 甕 C－12 (SR－1 10層 第24図1)
7 小型土器C－14 (SR－1 12層 第29図1)
8 小型土器C－15 (SR－1 12層 第29図2)
9 小型土器C－24 (SR－1 12層 第29図3)
10 鉢 C－19 (SR－1 12層 第29図9)
11 鉢 C－20 (SR－1 12層 第29図10)
12 鉢 C－21 (SR－1 12層 第29図11)
13 器台C－22 (SR－1 12層 第29図7)
14 器台C－17 (SR－1 12層 第29図4)
15 器台C－23 (SR－1 12層 第29図6)

図版30 中在家南遺跡第4次調査出土 弥生土器・土師器1



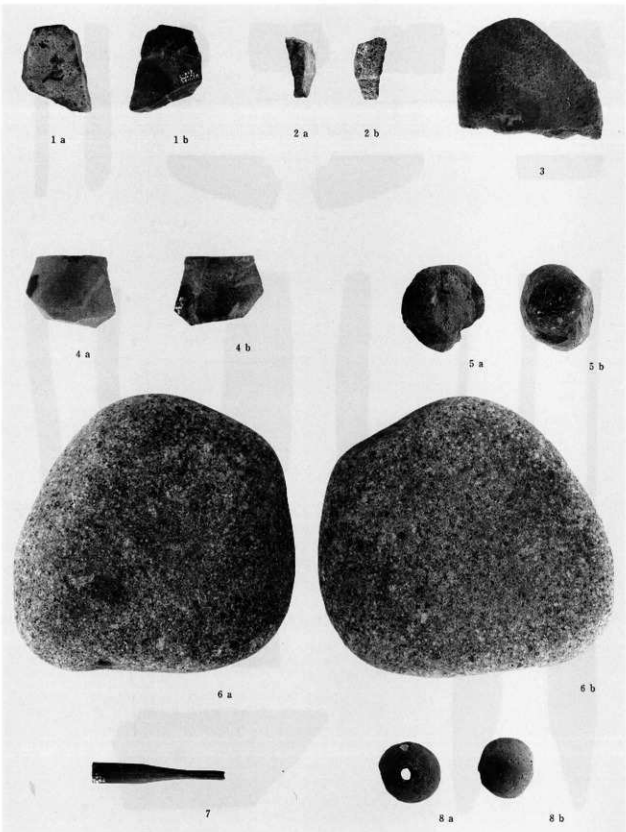
1　器台C－18（SR－1　12層　第29図8）
2　器台C－16（SR－1　12層　第29図5）
3　壺　C－33（SR－1　12層　第29図19）
4　壺　C－28（SR－1　12層　第29図16）
5　壺C－27（SR－1　12層　第29図15）
6　壺C－29（SR－1　12層　第29図14）
7　壺C－31（SR－1　12層　第29図17）
8　壺C－32（SR－1　12層　第29図18）
9　甕C－26（SR－1　12層　第29図13）
10　甕C－35（SR－1　12層　第30図1）
11　甕C－34（SR－1　12層　第30図4）

図版31　中在家南遺跡第4次調査出土　土師器2



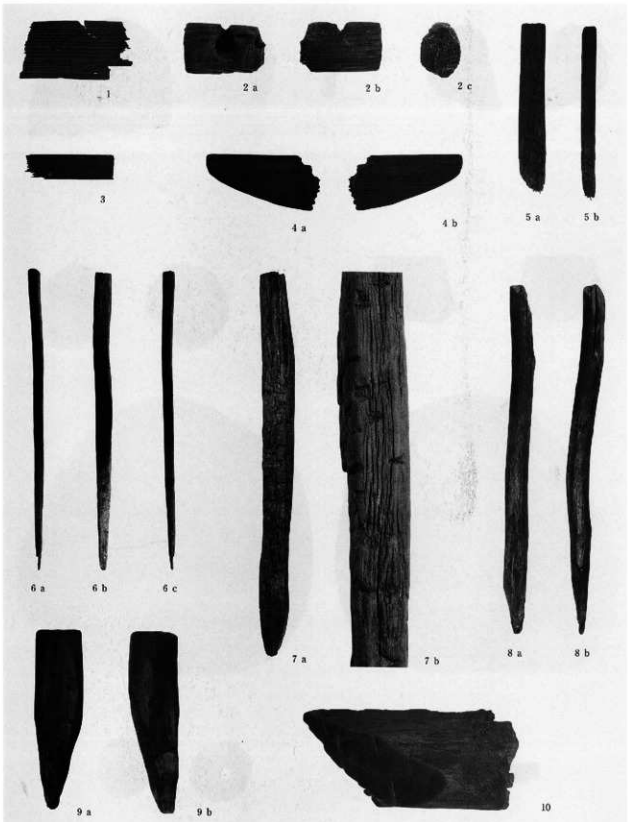
1	甕C－39	(SR－1 | 12層 | 第30図5)	5	杯	D－3	(SR－1 | 6層 | 第20図9)	9	壺I－2	(SR－1 | 3a層 | 第20図6)
2	甕C－38	(SR－1 | 12層 | 第30図3)	6	硯?	E－3	(SR－1 | 10層 | 第24図3)	10	壺I－3	(SR－1 | 3a層 | 第20図)
3	甕C－37	(SR－1 | 12層 | 第30図2)	7	平瓦	G－2	(SR－1 | 1層 | 第20図1)	11	鉢I－2	(SR－1 | 3a層 | 第20図)
4	甕C－36	(SR－1 | 12層 | 第30図6)	8	瓦質陶器I－1		(SR－1 | 2層 | 第20図5)	12	鉢I－4	(SR－1 | 3a層 | 第20図)

図版32　中在家南遺跡第4次調査出土　土師器3・須恵器・瓦・陶磁器



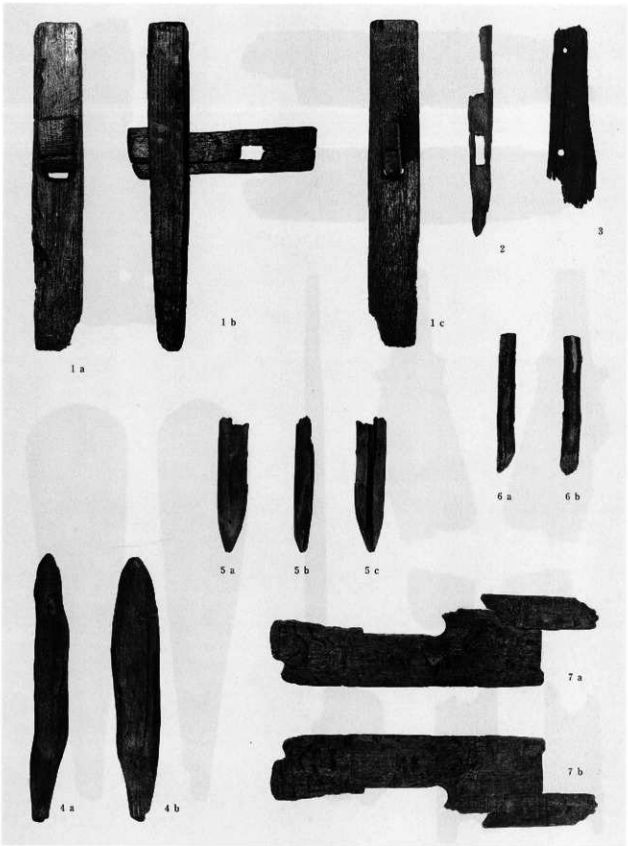
1　砥石K－6（SR－1　1層　第20図4）
2　砥石K－7（SR－1　1層　第20図2）
3　砥石K－8（SR－1　6層　第20図8）
4　石斧K－9（SR－1　8層　第20図10）
5　凹石K－10（SR－1　3a層　第20図7）
6　磨石K－11（SR－1　12層　第31図2）
7　連管N－1（SR－1　1層　第20図3）
8　土錘P－1（SR－1　12層　第31図2）

図版33　中在家南遺跡第4次調査出土　石器・石製品・金属製品・土製品



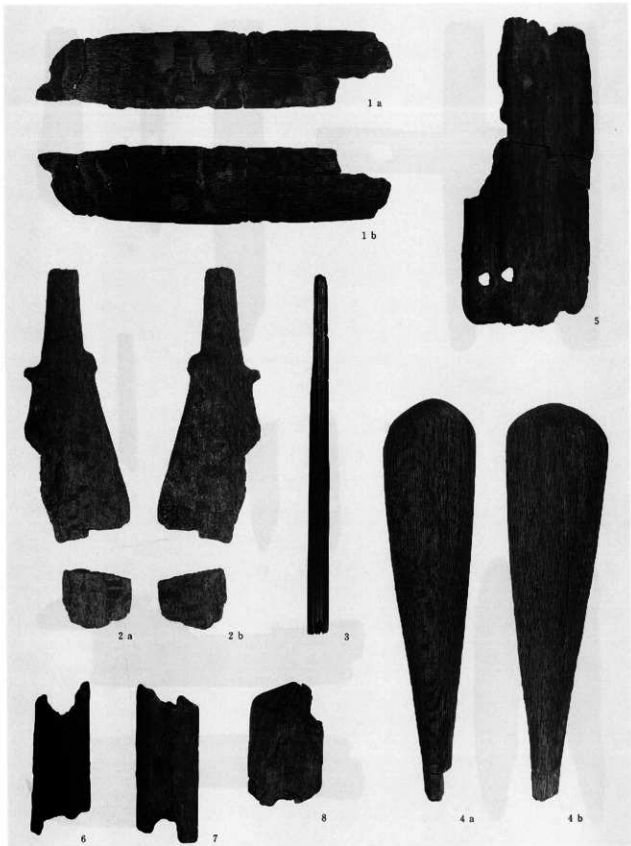
1　板材　L－4（SR－1　2層　第21図1）
2　火鑽臼L－5（SR－1　3a層　第21図2）
3　板材　L－9（SR－1　3a層　第21図4）
4　角材　L－11（SR－1　3a層　第21図3）
5　角材L－10（SR－1　3a層　第21図5）
6　角材L－6（SR－1　3a層　第21図6）
7　角材L－7（SR－1　3a層　第21図10）
8　丸材L－8（SR－1　3a層　第21図9）
9　丸杭L－90（SR－1　3層　第21図7）
10　割杭L－89（SR－1　3a層　第21図8）

図版34　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類1（2層～3a層）



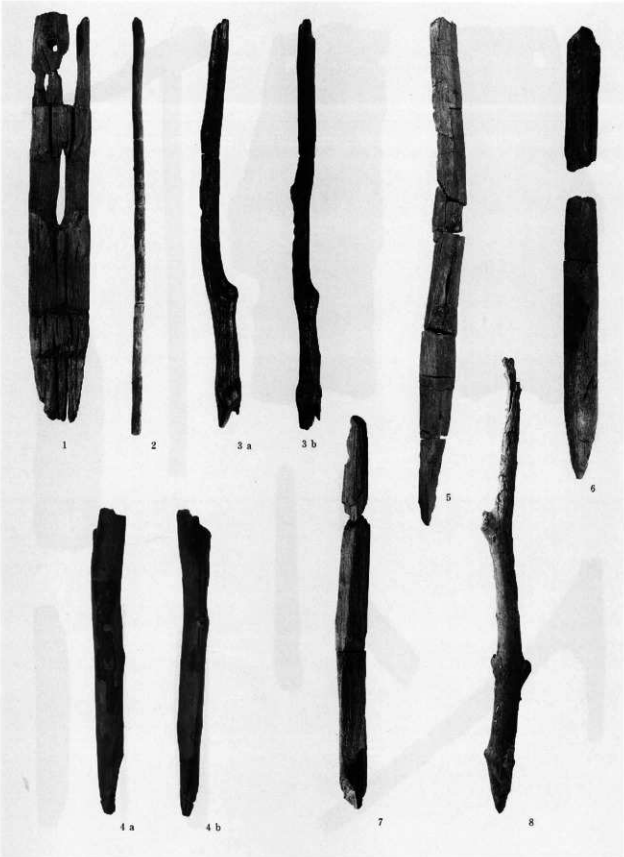
1　木製品・不明L－12（SR－1　6層　第22図1）
2　角材　L－13（SR－1　6層　第22図2）
3　板材　L－15（SR－1　6層　第22図3）
4　角材　L－14（SR－1　6層　第22図4）
5　半裁丸材L－17（SR－1　7b層　第22図5）
6　丸材　L－16（SR－1　7b層　第22図6）
7　横槌　L－19（SR－1　10層　第25図1）

図版35　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類2（6層～10層①）



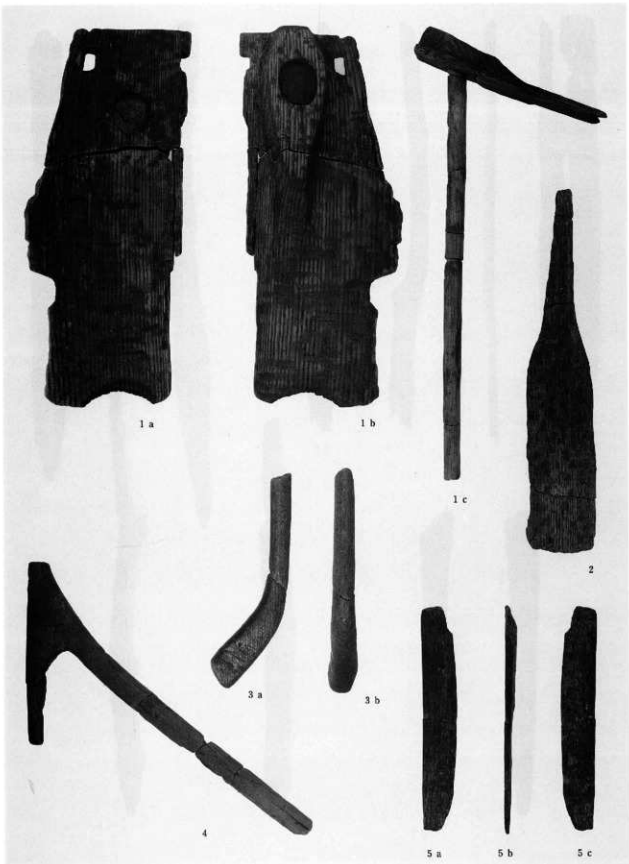
1　横鎌？　L－20（SR－1　10層　第25図2）
2　ナスビ型平鍬L－21（SR－1　10層　第25図3）
3　丸棒　L－18（SR－1　10層　第25図5）
4　擧杵　L－22（SR－1　10層　第25図4）
5　板材L－27（SR－1　10層　第25図5）
6　板材L－23（SR－1　10層　第26図2）
7　板材L－29（SR－1　10層　第26図3）
8　板材L－91（SR－1　10層　第26図4）

図版36　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類3（10層②）



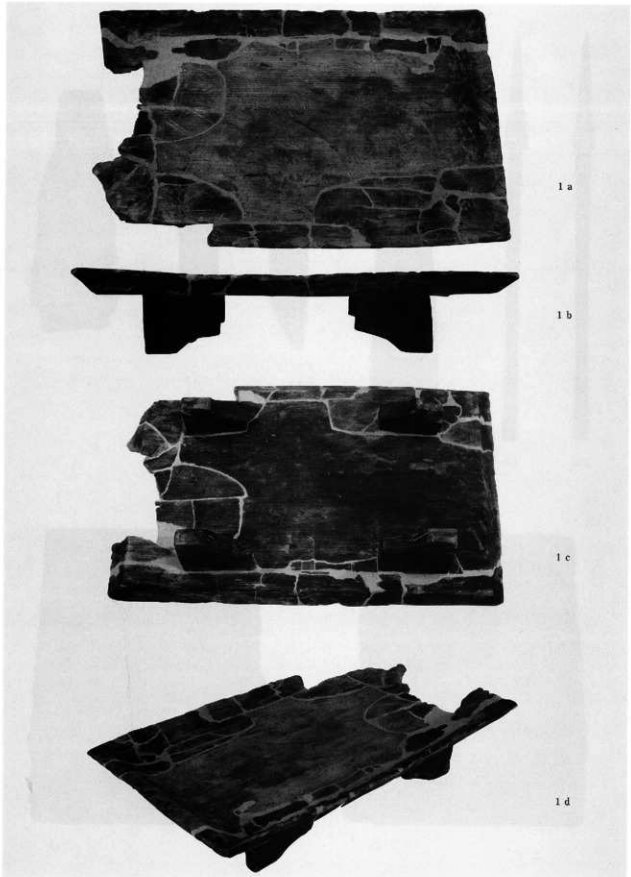
1　棒状L－24（SR－1　10層　第26図1）
2　丸材L－28（SR－1　10層　第26図6）
3　丸材L－25（SR－1　10層　第26図8）
4　丸材L－26（SR－1　10層　第26図7）
5　割材L－33（SR－1　10層　第27図3）
6　割材L－30（SR－1　10層　第27図1）
7　角材L－32（SR－1　10層　第27図2）
8　丸材L－31（SR－1　10層　第27図4）

図版37　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類4　（10層③）



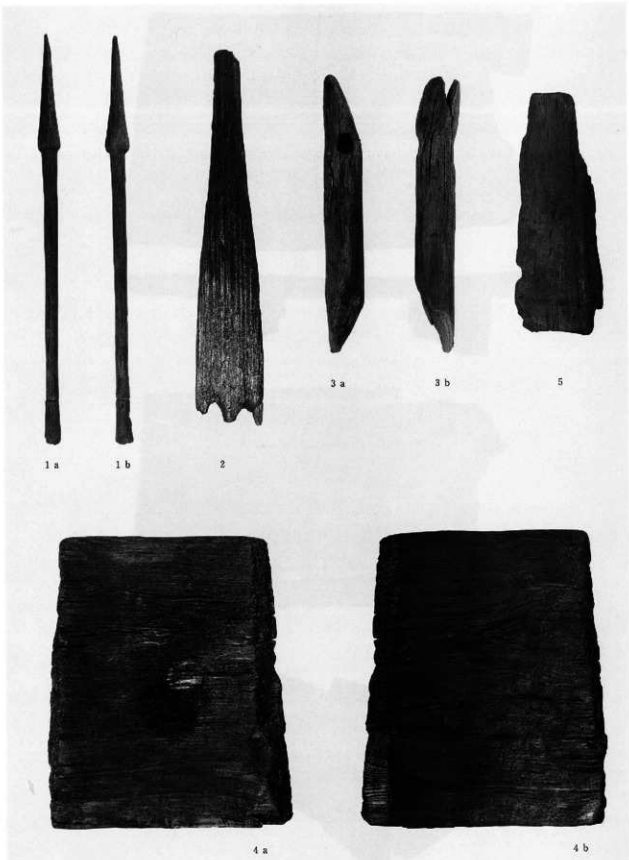
1　直柄平鍬　L－61（SR－1　12層　第32図1）
2　ヘラ状木製品L－37（SR－1　12層　第32図5）
3　鎌柄　L－40（SR－1　12層　第32図4）
4　鍬膝柄　L－34（SR－1　12層　第32図3）
5　曲柄二叉鍬L－38（SR－1　12層　第32図2）

図版38　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類5（12層①）



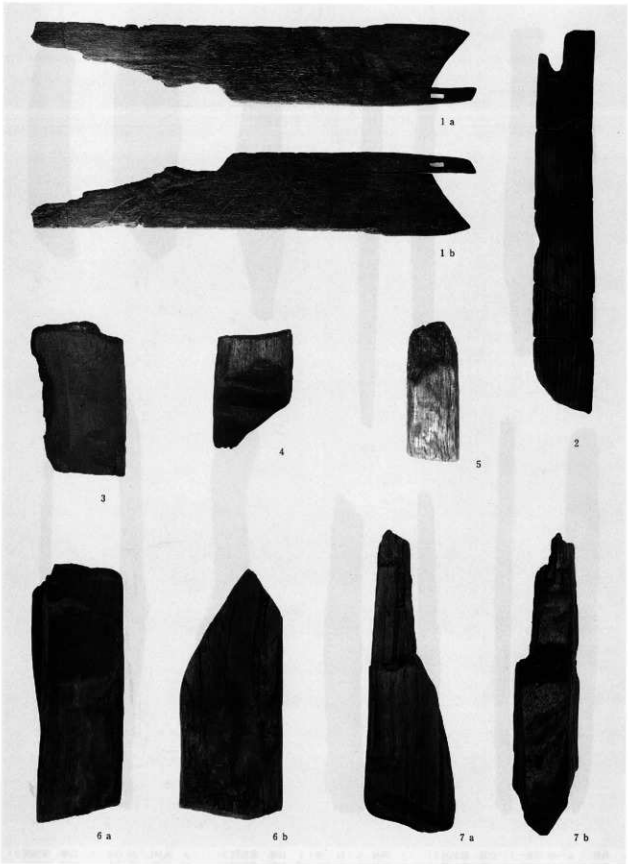
1　四脚盤L－41（SR－1　12層　第33図1）

図版39　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類6（12層②）



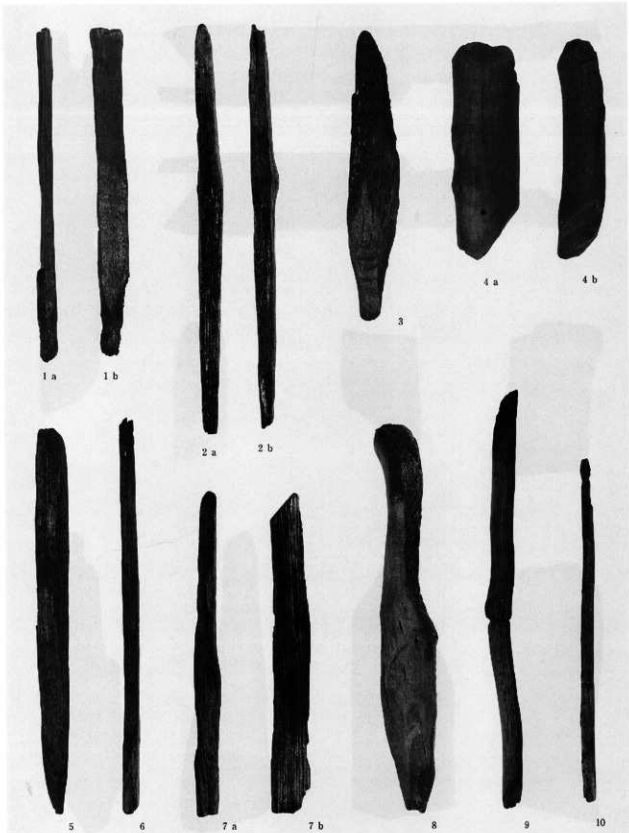
1　楊柔状木製品L－36（SR－1　12層　第32図9）
2　木製品・不明L－35（SR－1　12層　第32図8）
3　木製品・不明L－45（SR－1　12層　第32図7）
4　木製品・不明L－39（SR－1　12層　第32図6）
5　板材　L－42（SR－1　12層　第34図2）

図版40　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類7（12層③）



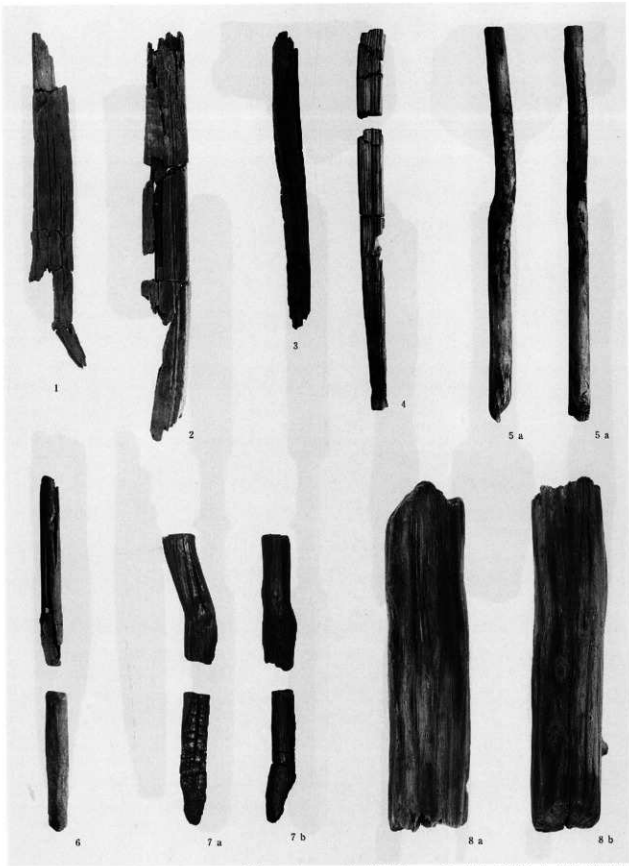
1　建築材L－51（SR－1　12層　第34図1）
2　板材　L－48（SR－1　12層　第34図3）
3　板材　L－59（SR－1　12層　第34図4）
4　角材　L－70（SR－1　12層　第34図6）
5　角材L－47（SR－1　12層　第34図5）
6　角材L－55（SR－1　12層　第34図7）
7　角材L－53（SR－1　12層　第35図1）

図版41　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類8（12層④）



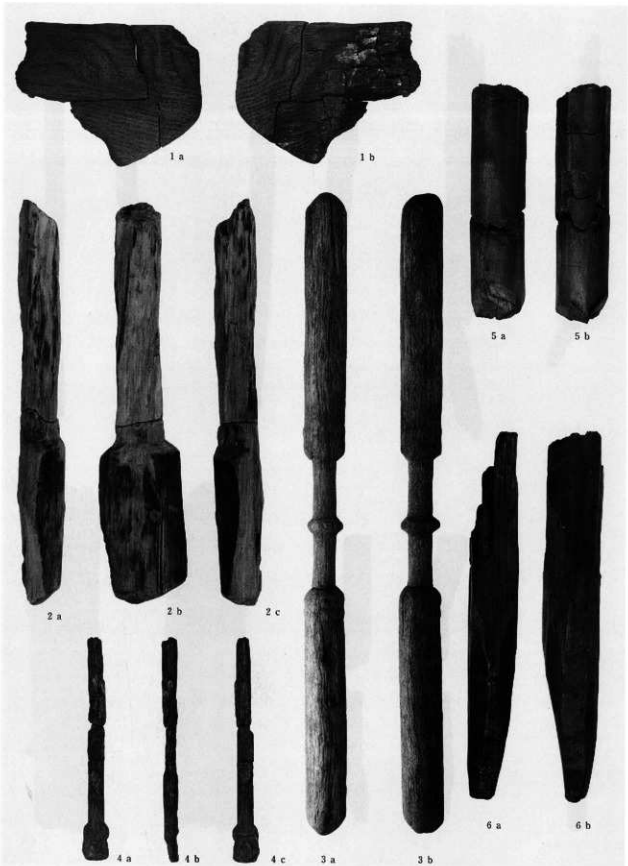
1　角材　L－49（SR－1　12層　第35図2）
2　角材　L－52（SR－1　12層　第35図6）
3　分割材　L－56（SR－1　12層　第35図8）
4　半裁丸材L－57（SR－1　12層　第36図1）
5　角材　L－44（SR－1　12層　第35図3）
6　角材　L－43（SR－1　12層　第35図5）
7　分割材L－60（SR－1　12層　第35図7）
8　丸材　L－54（SR－1　12層　第36図2）
9　丸材L－46（SR－1　12層　第36図3）
10　丸材L－50（SR－1　12層　第36図4）

図版42　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類9（12層⑤）



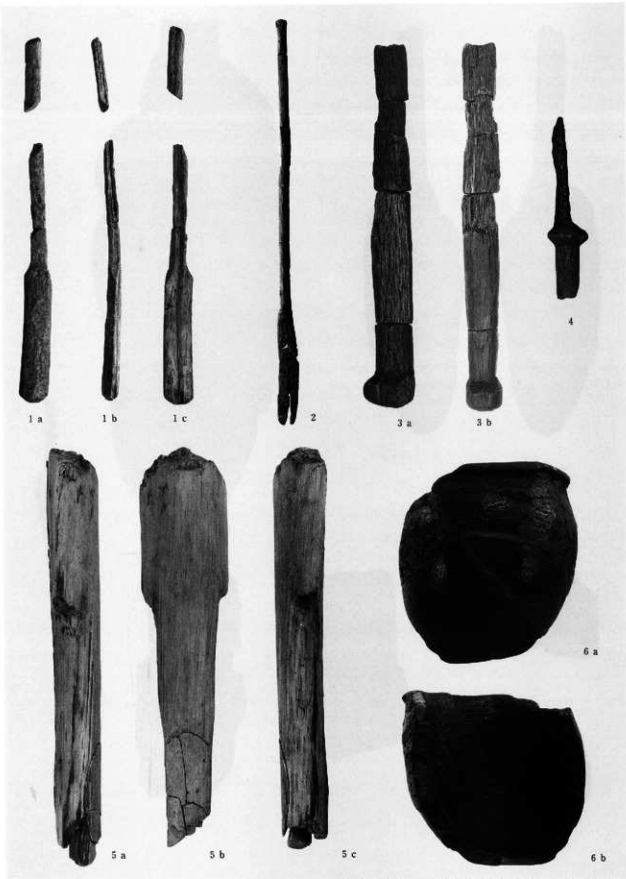
1　角杭L－67（SR－1　12層　第36図5）
2　角杭L－68（SR－1　12層　第36図6）
3　角杭L－63（SR－1　12層　第37図1）
4　角杭L－69（SR－1　12層　第37図2）
5　丸杭L－66（SR－1　12層　第37図3）
6　丸杭L－65（SR－1　12層　第37図4）
7　丸杭L－64（SR－1　12層　第37図5）
8　丸杭L－62（SR－1　12層　第37図6）

図版43　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類10（12層⑥）



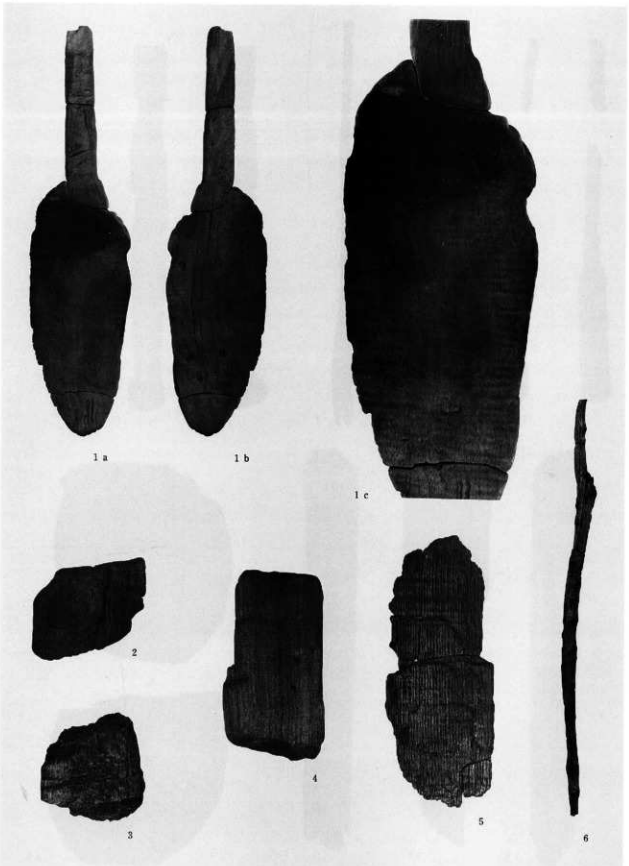
1　泥炭　L－74（SR－1　14層　第39図1）　3　竪杵L－71（SR－1　14層　第39図3）　5　丸杭L－76（SR－1　14層　第39図6）
2　斧直柄状木製品L－72（SR－1　14層　第39図4）　4　打棒L－73（SR－1　14層　第39図2）　6　角杭L－75（SR－1　14層　第39図5）

図版44　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類11（14層）



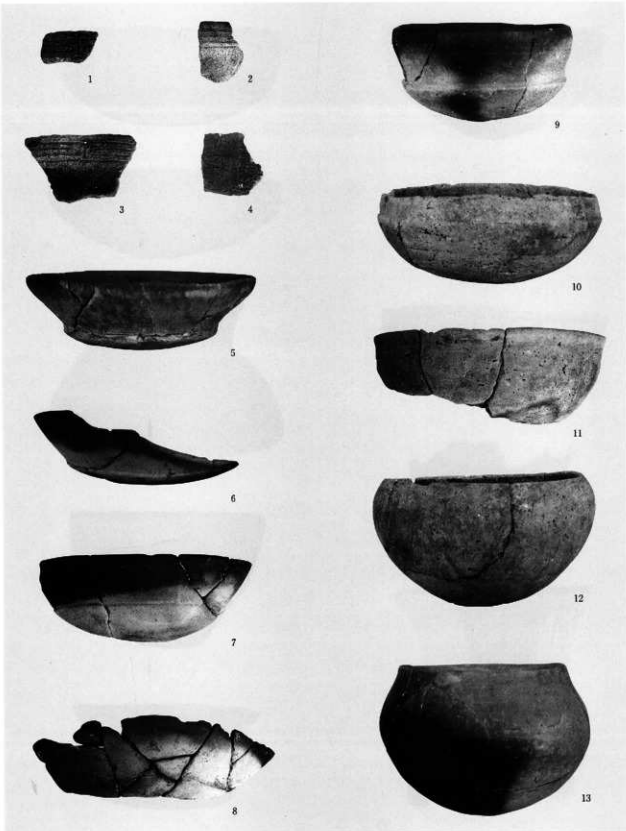
1　打棒L－84（SR－1　15層　第40図1）
2　打棒L－77（SR－1　15層　第40図2）
3　斧直柄L－81（SR－1　15層　第40図4）
4　竪杵　L－79（SR－1　15層　第40図3）
5　斧直柄状木製品L－80（SR－1　15層　第42図1）
6　鉢　　L－78（SR－1　15層　第41図1）

図版45　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類12（15層①）



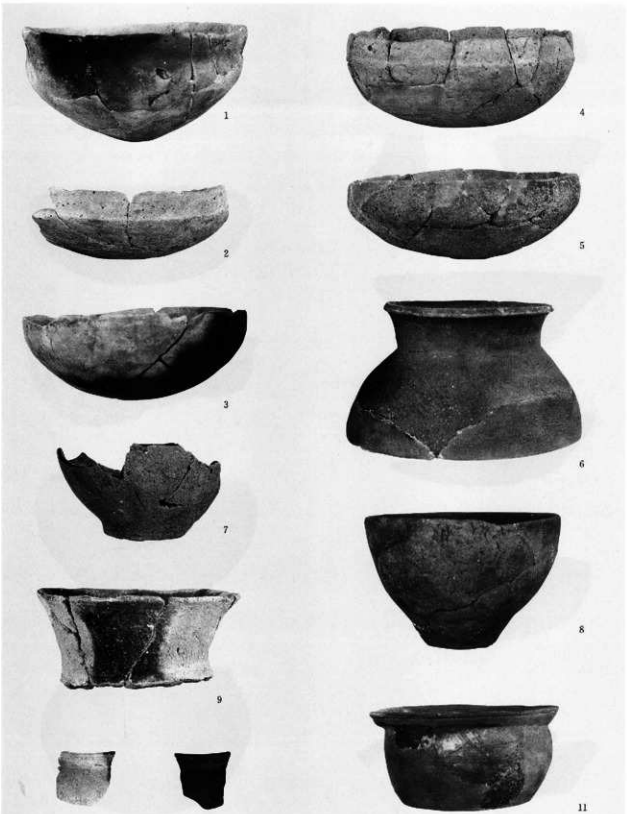
1　ヘラ状木製品L－82（SR－1　15層　第42図2）　3　板材L－88（SR－1　15層　第42図4）　5　板材　L－83（SR－1　15層　第42図6）
2　板材　L－87（SR－1　15層　第42図3）　4　板材L－86（SR－1　15層　第42図5）　6　平鍬丸材L－85（SR－1　15層　第42図7）

図版46　中在家南遺跡第4次調査出土　木製品類13（15層②）



1　鉢B－1（SR－1　10層　第57図13）
2　鉢B－2（SR－1　10層　第57図12）
3　鉢B－3（SR－1　10層　第57図14）
4　甕B－4（SR－1　12b層　第56図3）
5　坏C－4（SR－1　9、10層　第56図1）
6　坏C－6（SR－1　9、10層　第56図3）
7　坏C－5（SR－1　9、10層　第56図2）
8　坏C－7（SR－1　9、10層　第56図4）
9　坏C－3（SR－1　10層　第57図1）
10　坏C－10（SR－1　10層　第57図2）
11　坏C－11（SR－1　10層　第57図3）
12　坏C－8（SR－1　10層　第57図4）
13　坏C－9（SR－1　10層　第57図5）

図版47　押口遺跡北区出土　弥生土器・土師器1

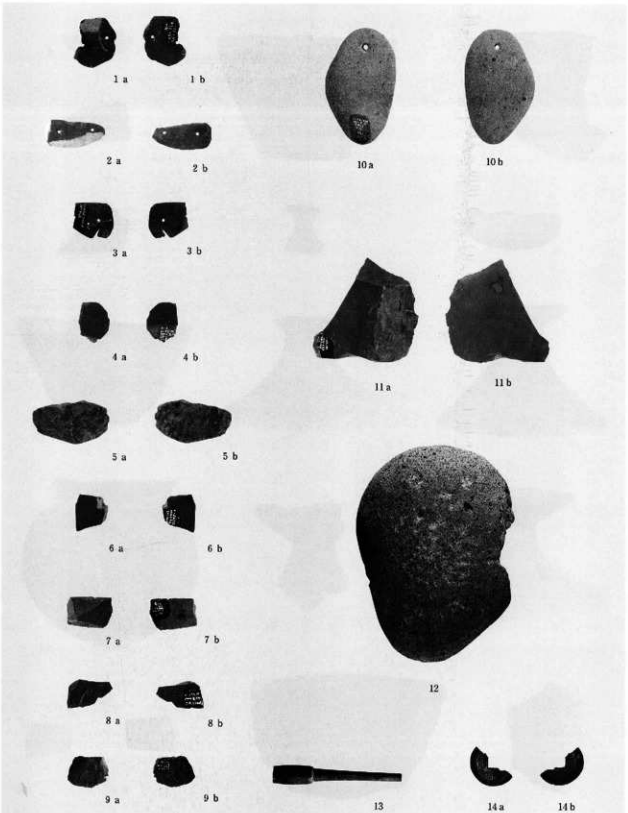


1　坏C－22（SR－1　10、10c層　第58図1）
2　坏C－20（SR－1　10、10c層　第58図3）
3　坏C－19（SR－1　10、10c層　第58図5）
4　坏C－18（SR－1　10、10c層　第58図2）
5　坏C－21（SR－1　10、10c層　第58図4）
6　甕C－14（SR－1　10層　第57図6）
7　甕C－15（SR－1　10層　第57図9）
8　甕C－17（SR－1　10層　第57図8）
9　壺C－25（SR－1　10、10c層　第58図6）
10　鉢C－28（SR－1　10c層　第59図6）
11　甕C－26（SR－1　10c層　第59図5）

図版48　押口遺跡北区出土　土師器2

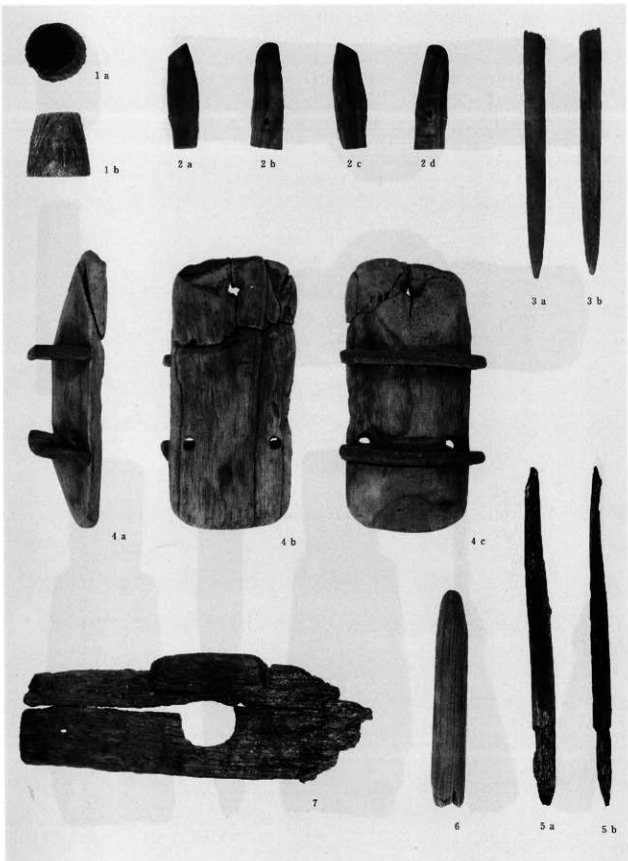
1　鉢　C－27（SR－1　10c層　第59図4）
2　小形鉢C－33（SR－1　10c層　第59図3）
3　壺　C－24（SR－1　10c層　第59図7）
4　壺　C－32（SR－1　10c層　第59図8）
5　壺　C－31（SR－1　10c層　第59図11）
6　壺　C－30（SR－1　10c層　第59図10）
7　高坏　C－12（SR－1　10層　第57図11）
8　ミニチュア土器C－34（SR－1　10c層　第59図1）
9　器台　C－13（SR－1　10層　第57図10）
10　器台　C－23（SR－1　10層　第59図2）
11　器台　C－35（SR－1　11層　第66図1）
12　鉢　C－2（SK－8　第49図4）
13　甕C－1（SK－5　第49図5）
14　坏E－1（SR－1　2層　第53図2）
15　鉢1－1（SR－1　1層　第53図1）
16　碗J－1（SR－1　2層）

図版49　押口遺跡北区出土　土師器3・須恵器・陶磁器



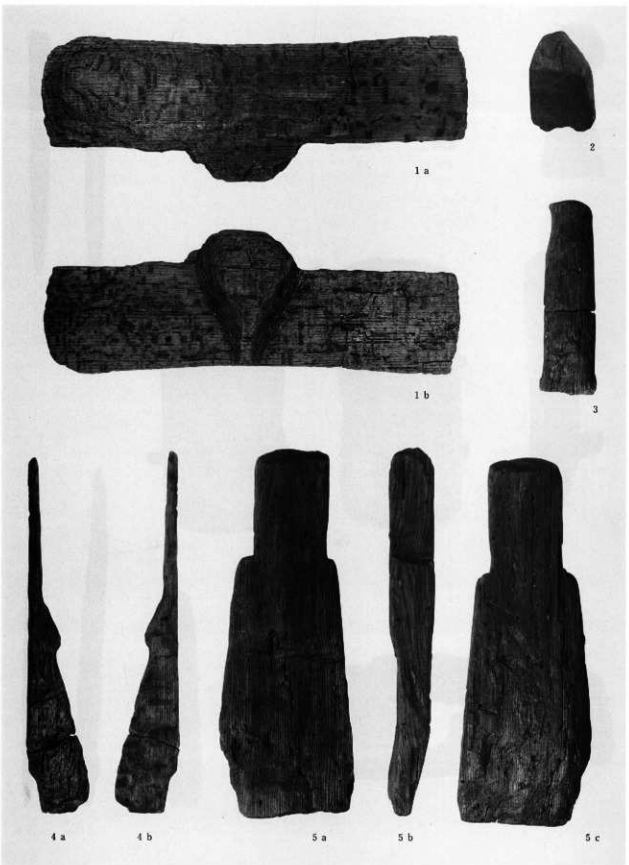
1	石製模造品K－1 (SR－1	6層	第53図3)	6	石製模造品K－12 (SR－1	10c層	第60図6)	11	不明K－4 (SR－1	10層	第60図11)
2	石製模造品K－5 (SR－1	10層	第60図2)	7	石製模造品K－9 (SR－1	10c層	第60図7)	12	凹石K－7 (SR－1	10c層	第60図12)
3	石製模造品K－2 (SR－1	9～10層	第60図3)	8	石製模造品K－10 (SR－1	10c層	第60図8)	13	鏃管N－1 (SD－1		第49図1)
4	石製模造品K－8 (SR－1	10c層	第60図4)	9	石製模造品K－11 (SR－1	10c層	第60図9)	14	古銭N－2 (SD－1		第49図2)
5	石製模造品K－6 (SR－1 | 10層 | 第60図5)	10	有孔礫製品K－3 (SR－1 | 10層 | 第60図1)				

図版50　押口遺跡北区出土　石製品・金属製品



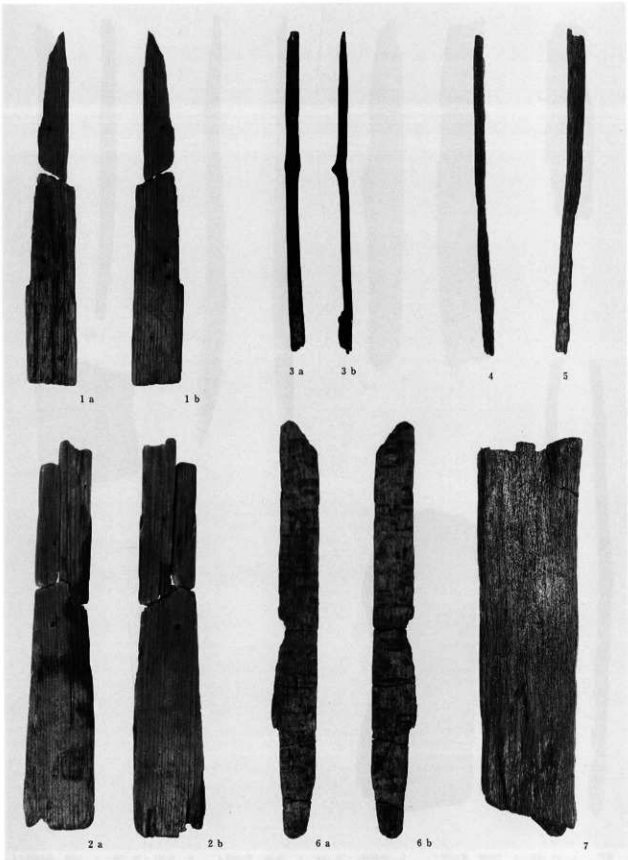
1　鍬　L－1（　　1層　第54図1）
2　角材L－2（SR－1　2層　第54図4）
3　ヘラL－3（SR－1　2層　第54図2）
4　下駄　L－4（SR－1　2層　第54図3）
5　半裁丸材L－5（SR－1　6層　第54図5）
6　丸鋤　L－22（SR－1　10c層　第61図4）
7　横鍬L－7（SR－1　10層　第61図1）

図版51　押口遺跡北区出土　木製品類1（2層～10層①）



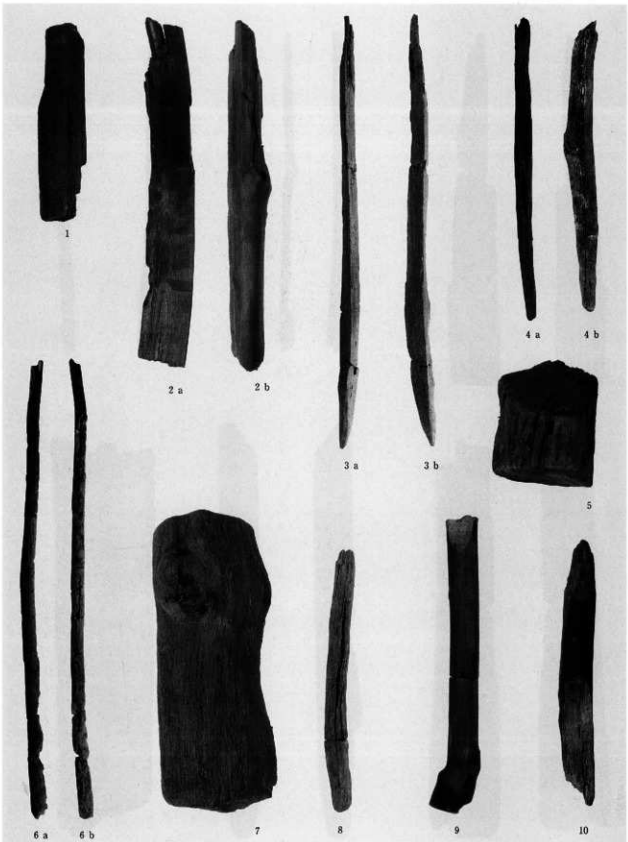
1　横鍬　L－21（SR－1　10c層　第61図2）　3　曲柄鍬　L－6（SR－1　10層　第61図5）　5　木製品・不明L－20（SR－1　10層　第61図7）
2　木製品・不明L－19（SR－1　10層　第61図3）　4　ナスビ型二又鍬L－8（SR－1　10層　第61図6）

図版52　押口遺跡北区出土　木製品類2（10層②）



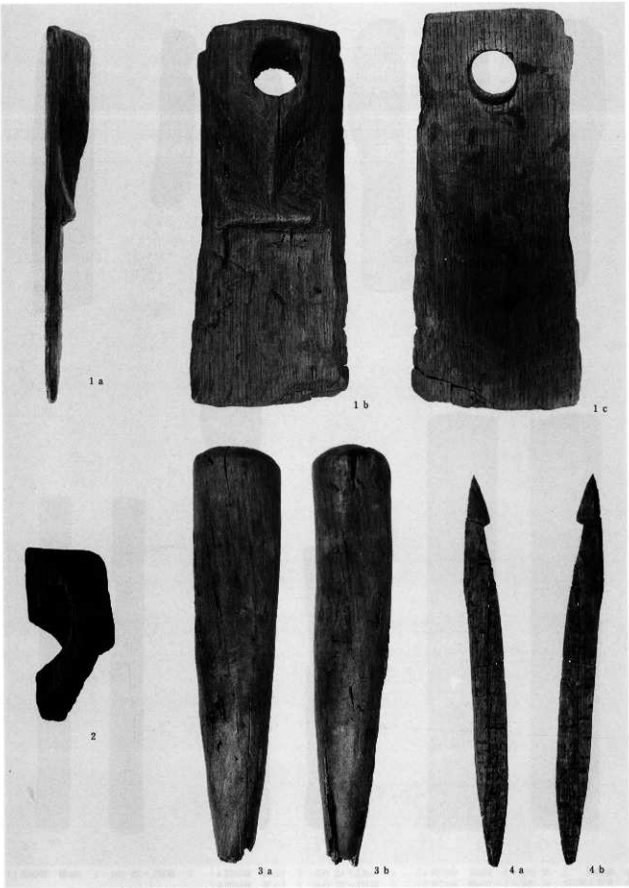
1　槽円板？　L－29（SR－1　10c層　第62図1）
2　木製品・不明L－23（SR－1　10c層　第62図2）
3　角材　L－13（SR－1　10層　第62図3）
4　角材L－10（SR－1　10層　第62図4）
5　角材L－11（SR－1　10層　第62図5）
6　板材L－9（SR－1　10層　第62図6）
7　板材L－27（SR－1　10c層　第63図1）

図版53　押口遺跡北区出土　木製品類3（10層③）



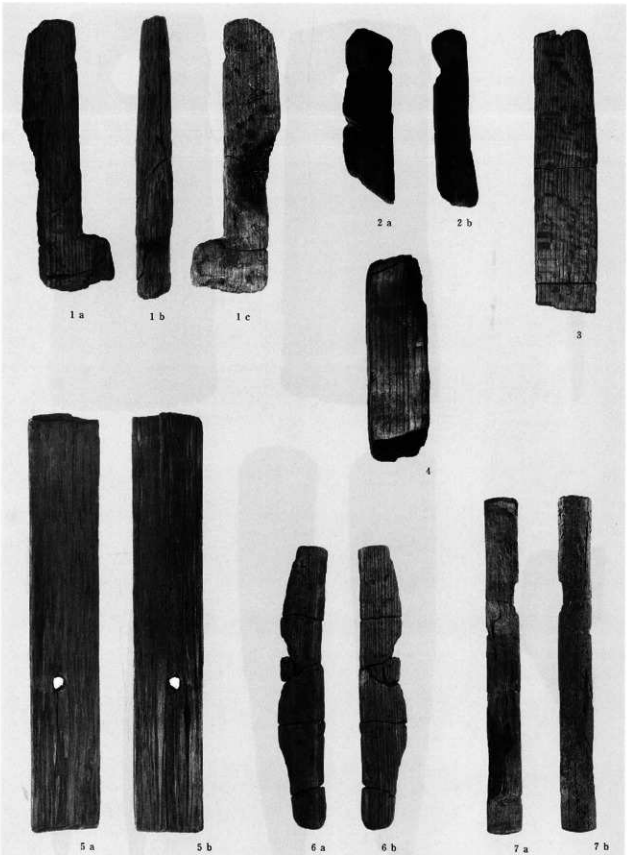
1　板材　L－24（SR－1　10c層　第63図2）
2　半裁丸材L－12（SR－1　10層　第63図3）
3　分割材　L－16（SR－1　10層　第63図5）
4　半裁丸材L－14（SR－1　10層　第63図6）
5　分割材L－28（SR－1　10c層　第63図4）
6　丸材　L－26（SR－1　10c層　第64図1）
7　丸材　L－15（SR－1　10層　第64図3）
8　丸材　L－30（SR－1　10c層　第64図2）
9　丸材L－18（SR－1　10層　第64図4）
10　丸材L－17（SR－1　10層　第64図5）

図版54　押口遺跡北区出土　木製品類4（10層④）



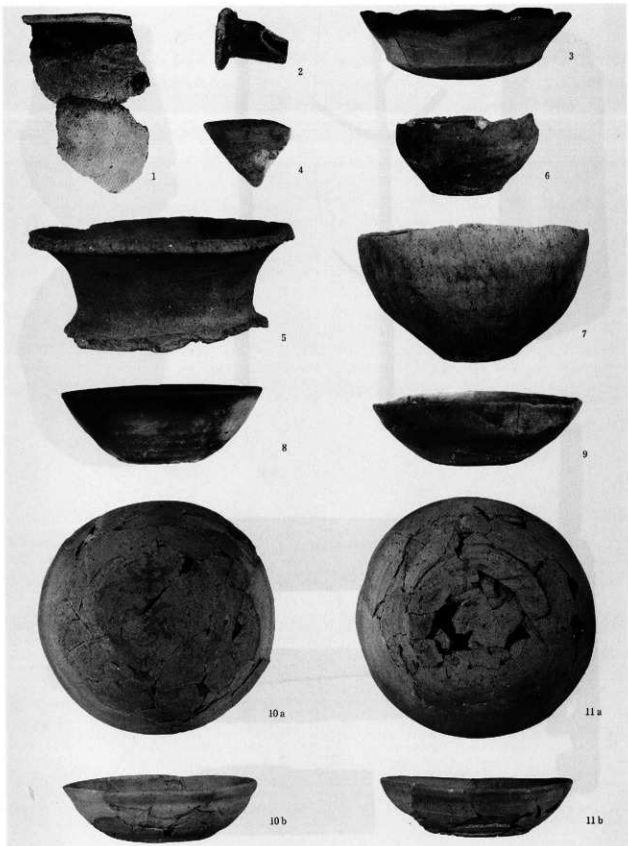
1　直柄平鍬L－35（SR－1　12a層　第67図1）　3　竪杵　L－31（SR－1　12層　第67図5）
2　直柄平鍬L－34（SR－1　12a層　第67図2）　4　ナスビ型二又鍬L－33（SR－1　12a層　第67図3）

図版55　押口遺跡北区出土　木製品類5（12層①）



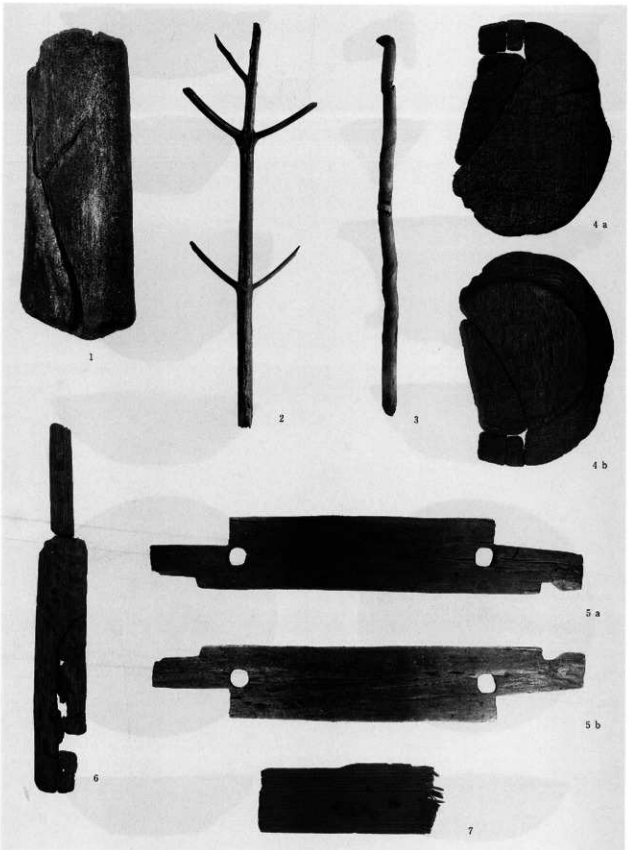
1　建築部材　L－32（SR－1　12a層　第67図4）
2　有頭木製品L－40（SR－1　12b層　第67図6）
3　板材　L－36（SR－1　12a層　第68図2）
4　角材L－42（SR－1　12b層　第68図4）
5　板材L－37（SR－1　12a層　第68図6）
6　板材L－41（SR－1　12b層　第68図3）
7　板材L－39（SR－1　12b層　第68図1）

図版56　押口遺跡北区出土　木製品類6（12層②）



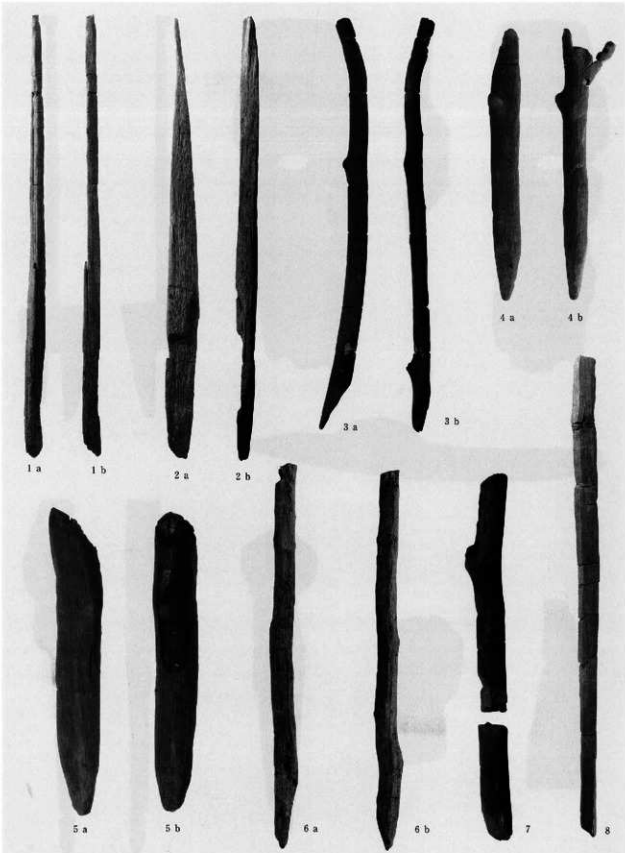
1　甕　B－5（SR－1　14、15層　第74図12）
2　不明C－36（SR－1　7層　第74図5）
3　坏　C－37（SR－1　9、10層　第74図7）
4　坏　C－38（SR－1　10層　第74図9）
5　壺C－39（SR－1　10層　第74図8）
6　坏C－41（SR－1　12b層　第74図10）
7　壺C－40（SR－1　12a層　第74図11）
8　坏D－1（SR－1　6層　第74図3）
9　坏D－2（SR－1　7層　第74図6）
10　坏E－3（SR－1　6層上面　第74図1）
11　坏E－4（SR－1　6層　第74図2）

図版57　押口遺跡南区出土　弥生土器・土師器・須恵器



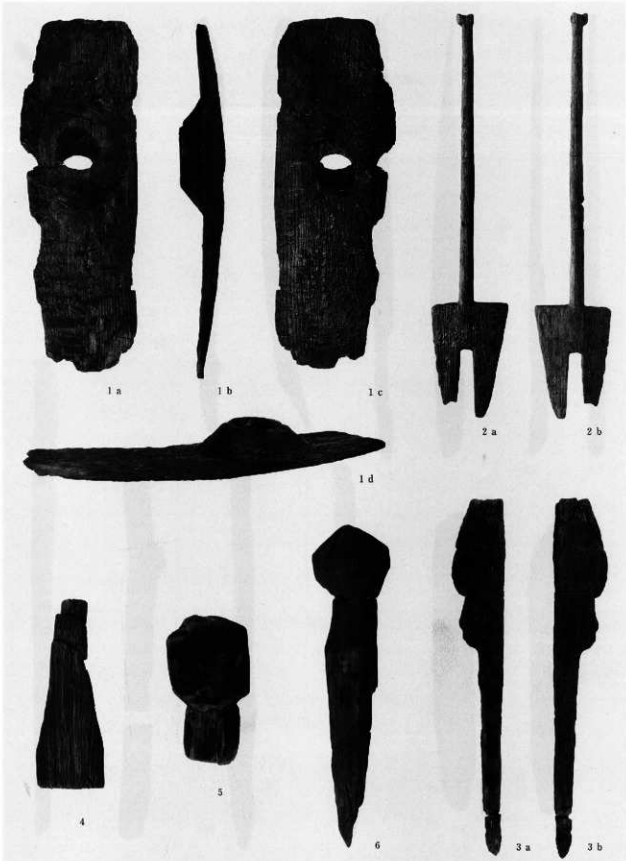
1　丸材L－44（SR－1　1層　第75図1）
2　丸材L－87（SR－1　6層　第75図2）
3　丸材L－45（SR－1　7～8層　第75図4）
4　皿　L－46（SR－1　7層　第75図3）
5　庇放し　L－51（SR－1　10層　第77図1）
6　割り棒？L－47（SR－1　10層　第78図1）
7　板材　L－48（SR－1　10層　第78図2）

図版58　押口遺跡南区出土　木製品類1（1層～10層①）



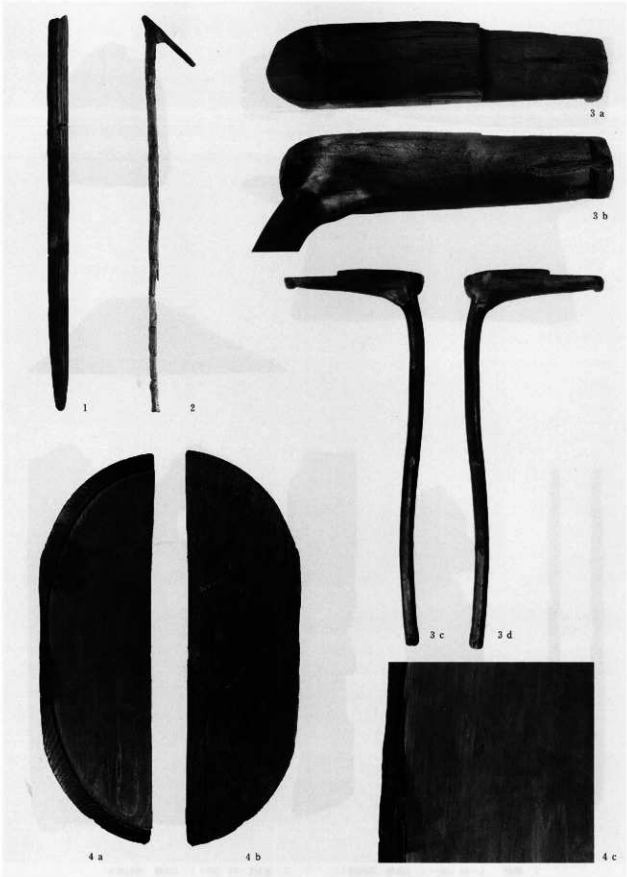
1　角材L－52（SR－1　10層　第78図4）
2　角材L－53（SR－1　10層　第78図5）
3　角材L－54（SR－1　10層　第78図6）
4　丸材L－49（SR－1　10層　第78図7）
5　丸材L－55（SR－1　10層　第78図9）
6　丸材L－50（SR－1　10層　第78図8）
7　丸材L－83（SR－1　10層　第79図2）
8　角杭L－84（SR－1　10層　第79図1）

図版59　押口遺跡南区出土　木製品類2（10層②）



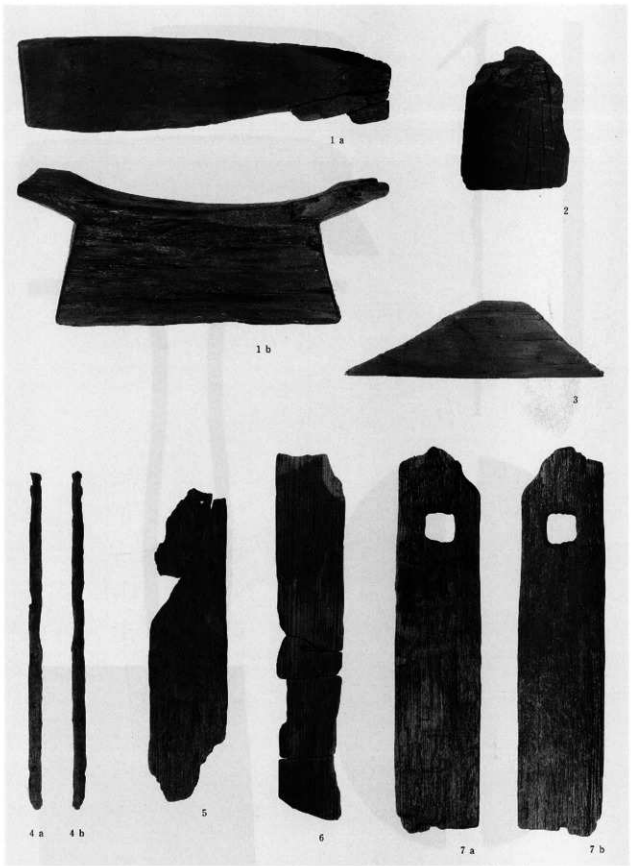
1　直柄平鍬L－59（SR－1　12b層　第81図1）　3　膨析二叉鍬　L－66（SR－1　12b層　第81図2）　5　有頭木製品L－69（SR－1　12a層　第81図5）
2　二又鍬　L－57（SR－1　12a層　第81図6）　4　ヘラ状木製品L－80（SR－1　12a層　第81図3）　6　有頭木製品L－67（SR－1　12b層　第81図4）

図版60　押口遺跡南区出土　木製品類3（12層①）



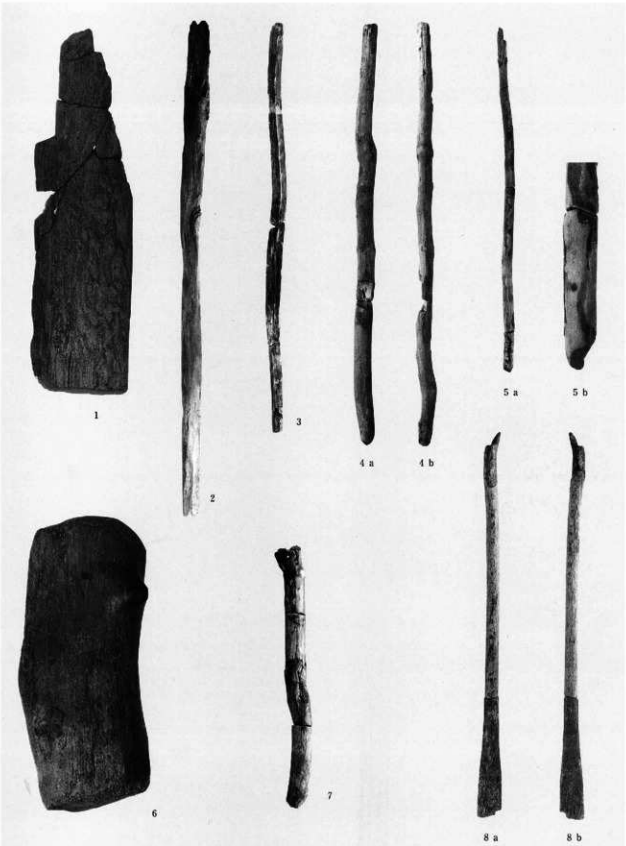
1　丸棒　L－62（SR－1　12b層　第82図3）
2　鍬膨柄L－57（SR－1　12層　第82図1）
3　斧膨柄L－61（SR－1　12b層　第82図2）
4　楕円板L－58（SR－1　12a層　第83図2）

図版61　押口遺跡南区出土　木製品類4（12層②）



1　腰掛　L－64（SR－1　12b層　第83図1）
2　角材　L－76（SR－1　12b層　第84図2）
3　板材　L－79（SR－1　12b層　第84図6）
4　建築材？L－85（SR－1　12b層　第84図1）
5　板材L－75（SR－1　12b層　第84図5）
6　板材L－80（SR－1　12b層　第84図4）
7　板材L－72（SR－1　12b層　第84図3）

図版62　押口遺跡南区出土　木製品類5（12層③）



1　板材　L－74（SR－1　12a層　第84図8）
2　割材　L－88（SR－1　12b層　第85図1）
3　半裁丸材L－77（SR－1　12b層　第85図2）
4　丸材L－70（SR－1　12b層　第85図4）
5　丸材L－78（SR－1　12b層　第85図3）
6　丸材L－71（SR－1　12c層　第85図5）
7　丸杭　L－81（SR－1　12c層　第85図6）
8　削り棒L－86（SR－1　14層　第86図1）

図版63　押口遺跡南区出土　木製品類6（12層④・14層）

報告書抄録

ふりがな	なかざいけみなみいせき　おさえぐちいせき
書名	中在家南遺跡(第3・4次)　押口遺跡(第3次) 発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第255集
編著者名	工藤哲司・鈴木三男
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　電話　022－214－8894
発行年月日	平成13年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中在家南 遺跡 (第3次)	仙台市若林区 荒井字中在家 23	04100	01427	38° 14′ 20″	140° 56′ 12″	19990708 ～ 19990823	300㎡	仙台市荒井 土地区画整 理事業
中在家南 遺跡 (第4次)	仙台市若林区 荒井字中在家 33・35	04100	01427	38° 14′ 20″	140° 56′ 12″	20000530 ～ 20000731	110㎡	仙台市荒井 土地区画整 理事業
押口 遺跡 (第3次)	仙台市若林区 荒井字押口 30・33・34・35	04100	01312	38° 14′ 29″	140° 56′ 38″	20000801 ～ 20001030	216㎡	仙台市荒井 土地区画整 理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中在家南遺跡 (第3次)	集落・墓地 河川跡	弥生～中世	掘立柱建物跡・溝跡 土坑	弥生土器・石器 土師器・須恵器	
中在家南遺跡 (第4次)	集落・墓地 河川跡	弥生～中世	河川跡・水田跡	土師器・須恵器 木製品・土製品	
押口遺跡 (第3次)	散布地 河川跡	弥生～中世	溝跡・土坑 河川跡・水田跡	土師器・須恵器 木製品	

仙台市文化財調査報告書第255集

中在家南遺跡(第3・4次)
押口遺跡(第3次)
発掘調査報告書

2002年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8893～4

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24 022(263)1166